
普通の人を送る日常

未吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通の人を送る日常

【Nコード】

N5693X

【作者名】

末吉

【あらすじ】

この話は、世界観がむちゃくちゃな所に住む主人公の日常である。とにかく、平和なお話である。

はじまり（前書き）

初投稿なので、なにぶん至らぬところがあると思いますが、よろしくお願いいたします。

はじまり

はじまるよ

注意。

これから始まるお話は、普段脇役みたいな人たちに焦点をあてたものです。あまりにもありふれているので、面白さを保証できません。それでも良いのでしたら、どうぞご覧下さい。あと、世界観がとんでもないことになっています。ご了承ください。

ついでに言いますと、読者たちの『普通』とは違う感覚の人たちなので、おかしいな? と思っても見逃してください。

それでは、『普通の人を送る日常』のはじまりはじまり。(パチパチパチ!)

はじまり（後書き）

感想をよろしくお願いいたします。

一 五月中旬のある日（前書き）

普通って、なんでしょう？

一 五月中旬のある日

『普通』という言葉の定義は『当たり前』。僕はこう思う。
なぜなら、俳優やタレント、お笑い芸人がテレビに出ていること。
これも普通。

僕みたいに何も個性らしいものが無い人の事。これも普通。
勝手に人の中心にいる人。これも、彼らにとっては普通だ。
まだほかにも事例をあげられるけど、これらを見ただけで「普通」
の利便性が分かる。

なぜこんなことを最初に述べたかというと、『普通』という言葉
がいかに汎用性に優れているのかを分かってもらうため。

でも僕は、この言葉が嫌いじゃない。
だって人によって意味に違いがあるのは当たり前だと思っているか
ら。

「……という訳なんだけど。二人ともどう思う？」

「そんな感じだよな。……っていうか、いきなりどうしたんだ？」

「……………それをテーマとして書けば、課題が終わる。」

僕が言ったことに対して、二人がそれぞれの反応を示した。

あ、僕の名前は池田連^{いけだれん}。今年で十五になる中学三年生だ。

自分の身体的特徴は何もない。いわゆる、普通だ。

身長は平均男子よりちょっと低いくらいで、体重は完全に平均。

髪型は特に何もしていない。

体つきも中肉中背。得意なものも苦手なものも何もないという、完
全に『特徴なし』。眼鏡をかけてるわけでもないから、本当に特徴
が無い。

……………毎度のことながら泣けて
くるね、これ。

気を取り直して。

次に、僕の話聴いていた二人の友達の紹介でもしようか。

僕の話にいち早く感想を言ってくれたのが、僕の友達の岡田庄一。おかだしょういち

僕と同じクラスで、三年間一緒だった腐れ縁。庄一の特徴を挙げるなら、彼もまた「普通」。

ただ、髪型が特徴的で、オールバックにしている。本人曰く『カッコよくね?』だって。

僕に訊かれても困るんだけど。

そして、もう一人が木村圭。きむらけい彼は二年生のクラス替えで同じクラスになり、友達となった。

彼も普通だけど、特徴的なものがいくつかある。

一つ目。まず無口。

彼は普段寡黙を貫いていて、答える時は必ず間が出来る。その上、無表情。

二つ目。情報がはやい。

どこで聴いてくるのか分からないけど、僕達はその話をする時には既に裏付けが終わっている。本当に、どこで聴いてくるんだろう? 他にもあるけど、そろそろ話を戻そうか。

「どうしてって、前に庄一が言ってたじゃん。『普通ってなんだろうな?』って。」

庄一が訊いてきたので、僕は答えた。

「そうだった?」

「……それは本当。」

庄一が首をひねると、圭がつぶやく感じで言った。ちなみに、今は昼食の時間で、僕達は自分たちが使っている教室で食べている。給食っていう制度があったらしいんだけど、今や完全に自分たちで持ってきて来いって感じになっている。

だから、僕達は弁当を持ってきて、席を移動して、集まって話しながら食べている。

先程の圭の発言で会話が止まり、食べることに集中した僕達は、廊下側が何やら騒がしいことに気付いた。

「ん?」「あれ?」「...?」

そう思って僕達は廊下側に視線を向けると、何やら言い争っている人達がいた。しかし、

「またあいつらか。本当に懲りねえな。」

「あれがあの人たちの『普通』だよ。」

「……あの二人は犬猿の仲。よって、その取り巻きの人達も同じ。」

僕達は騒がしい原因が分かったので、再び食べることに集中した。

ちなみに、言い争っているのは清水久実しみずくみさんと寺井堇てらいすみれさん。二人とも学校内で一、二を争う美少女だ。そして彼女らが喧嘩をする原因が……、

「大変だなあ、あいつ。」

「……リア充死ね。」

「怖いこと言わないでよ、圭。それと、庄一の言う事にも一理あるね。毎回大変だね、中島君。」

僕が言った中島君である。

彼の名前は中島元なかしまはじめ。このクラスでよくあの二人に絡まれる人。どうして絡まれるのかというと、彼に対する好意を二人とも持っているから。どうして二人が中島君に好意を持っているのかというと、圭曰く『色々あった。』んだって。詳細はまた今度ね。

あ、肝心なこと言うの忘れてた。

清水さんは超能力者、寺井さんは魔術師、中島君はそのどちらでもある、どちらでもない。

.....

その君。今『こいつの頭おかしくなったのか?』と思っただろ。

本当にいるんだよ。この世界には普通の人もたくさんいるけど、超能力者やロボット、魔術師なんかは当たり前。他のところだと幽霊が実体化してるところがあるんだって。結構シュールだよな。

閑話休題。

「……これもいつものこと。」

「そうだね。」「そうだな。」

僕達は、最初に見ただけであとは食事をすることにした。すると、庄一がふとこう言ってきた。

「なあ、お前ら。好きな人っているか？」

「は？」

「……………」

いきなり何を言い出すの庄一？と思って、

「何を言い出すの庄一？」

と僕は訊いた。すると庄一は、頭をかきながらこう言った。

「いやな、俺、好きな人ができたんだよ。」

「そうなの？」 「……振られるのがオチ。」

庄一が言ったことに対して、僕達の反応はバラバラだった。そして、
「圭。なんだと？」

圭の言葉で庄一がキレそうになった。

「落ち着いてよ。で？ 庄一、誰の事が好きになったの？」

それを僕が抑えて話を促す。これも普通だ。

庄一は言いにくそうに、

「と、隣のクラスの藤井さんだ。」

「ああ、あのおとなしそうな人か。可愛いといえば、可愛いかな？」

「……騙されるな。あいつは化粧であそこまで可愛く見せているだけだ。」

庄一の好きな人を聴いた僕達の反応は、またもバラバラだった。しかも、圭。君、とんでもないこと言わなかった？

圭が言ったことに庄一がまたもキレそうになった。

「なんだと！？ 証拠見せろや！」

「お、落ち着いてよ、庄一！！ みんな見てるから！！」

ちよっとみんなから注目を浴びたけど、特に何も言われなかった。良かった良かった。

と思っていたら、圭が一枚の写真を机に置いた。

「……………証拠。」

「これが、か？」

と言って、庄一はその写真を見た。

て言うか、圭。君はその写真をどこで撮ってきたんだい？

そんな僕の心の中のツツコミも知らず、圭は弁当を食べていた。僕も食べてるよ。

写真を見て圭に返した後、庄一は弁当を食べながらこう言った。

「女って、怖いな。」

一体どんな写真だったのだろう？と思ったけど、もうすぐ午後の授業が始まるので、話題に出さなかった。

一 五月中旬のある日（後書き）

続きます。

五月中旬のある日（2）

午後の授業が始まった。僕達の学校は中・高とエスカレーター式なので、受験が無い。

という事で、高校の授業をちょっと先取りするという事になる。でもそれは冬からなので、今は普通に中学三年の授業を聴いている。

この日の午後の最初の授業は、超能力を持っている人以外は自習。僕達の授業は、主に超能力者や魔術師に影響されている。つまり、一日で二回は自習があるという事。

ちなみに、中島君は何故か超能力の人達に連れて行かれた。これもいつものことだ。そして必ず寺井さんが荒れる。これもまたいつものこと。更に言うと、魔術師の時は魔術師に連れて行かれ、清水さんが荒れる。これもやはり日常。

それで僕らはというと、

「また荒れてんなあ、寺井さん。」

「……構うなら一人で逝って来い。俺を巻き込むな。」

「僕もちよつと……。」

「誰がそんなことするか。それと圭。行って来い、の字が違う気がしたんだが、気のせいかな？」

「……気のせい。」

現在大人しく自習しています。元々、僕達の席は近いので、こうして話しながら自習できるんだよ。僕達三人とも窓側ね。

自習をしながらも、僕達はおしゃべりを続けていた。

「なあ、久しぶりに連の家行こうぜ。」

「そうやって僕のところでご飯食べるんでしょう？」

「それはついでだって。お前のところの方が面白いだろ？」

「……毎度のことながら、連の両親は面白い。」

「息子に言う言葉じゃないよね？それ。」

「で、いいのか？」

「うゝん……別に問題はないよ。ただ」

「ただ？」

「昼時にピンポイントで来ないでよ？ つくるの大変なんだから。」

「……了解した。今度は昼前から行こう。」

「圭。食べるの前提だよね？」

「分かったよ。自分たちで昼食べてからにするよ。」

「それならいいよ。」

これで会話が終了してしまったので、僕達は勉強に集中していった。ちなみに、何故か僕の家で遊ぶときは二人が昼時に来る。しかも、材料を持ってきて。そして、その材料で僕が二人の昼食をつくる。どうして僕なのかというと、両親が家事や財産管理を一切やらないから。そのせいで、僕は家事全般が得意なんだ。

中でも、料理の腕が他の人曰く「超一流シェフと同じかそれ以上」なんだって。僕は本職の人に勝っていると思わないけどね。

五月中旬のある日(3)

家庭科の実習では、エプロンづくりや三角巾づくりを他の人より手早くかつ綺麗に仕上げてしまったので、先生は哑然としていた。

その上、一年の頃の調理実習では僕が進んで一人の班になって先生に「一人で大丈夫なの？」と心配されたけど、そんな心配をよそに僕は一人で料理を完成させた。どの班よりも早く。

それを見届けた先生やほかの生徒は驚き、僕が料理をしながら使わなくなった器具を片付けていたのを見て、さらに驚かれた。その後、僕が食べていたら先生が「味見しても良い？」と言って僕がつくった料理を食べて、数分硬直した後に「各自つくり終わった後は、食べてから片付けて教室に戻ってね！」と泣きながら走り去っていき、しばらく学校に來なかつた。

それからというもの、家庭科の調理実習の時は、先生が僕に味付けのポイントを熱心に訊きに來る。あとは……班になった人(一年の時は一人、二年の時は庄一と圭、三年も同じ予定。)以外の人が、たまに料理を食べに來る。そして、食べた後は何かに感動したような感じで戻っていく。どうしたのかな？

これは置いといて。今は自習だ、自習。

そう思って勉強していると、庄一が思い出したかのようにこう言つた。

「そういえばよ、お前らの好きな人って誰？」

その言葉に、僕達は一瞬固まつた。

「何をいい出すの？」

「……俺はいいない。」

そう言うと、庄一は真面目な顔をして、

「俺だけ言うのって、なんか不公平じゃね？」

と言つた。

「あれは君が自分で話題を振ってきたんだよね？僕達は別に言わな

くていいんじゃない？」

「…そうだ、そうだ。」

そう僕達が抗議すると、庄一は「うっ！そ、そうだったな。」と言
ってこの話題は終わった。

そうしていたら、授業が終わった。なので、自習に使っていたも
のを片付けて次の授業の準備をした。

五月中旬のある日(3) (後書き)

感想をよろしくお願いします。

五月中旬のある日（4）

放課後。僕達三人は部活にも何も入っていないので、一緒に帰った。ただ、それは校門前までで、校門を過ぎたらそれぞれ道が違う。

「今日も中島が修羅場ってたな。」

「大変そうだったね。」

「……爆ぜろ。」

圭へのツツコミはスルーして、

「また明日ね。」

「おう。」「…また。」

と言って三人ともバラバラに帰っていった。これもいつもだね。

ちなみに、件の中島君だけど、彼はあの二人のおかげ（せい？）

で放課後は三人で何かやっているんだって。圭が言うには『…悪党退治』だって。ま、この詳細も話せたら、という事で。

僕は、いつもの道を歩きながら冷蔵庫に何が残っているのか思い出していた。そして、残っていたもので夕飯の献立がつかれるか考えた。

何パターンか考えて、明日以降の食材がなくなるという結論が出たので、僕はダッシュで家に帰った。

「ただいま……。」

「連、お帰りー！！」「お帰りー！！」

ドアを開けて呼吸を整えていたら、両親がいつものように来た。

ここで僕の両親の紹介をしよう。

僕の両親の職業は普通の会社員で、家事を全くしない駄目夫婦だ。それでも、会社では個人業績一位、二位を二人で独占しているんだって。以上、両親の説明でした。

「それにしても、どうしたんだ？ 走って家に帰ってくるなんて。」

「そうね。何があったの？」

僕の表情を見て、両親はそう訊いてきた。僕は息を整え終えてから

言った。

「今日の夕飯で冷蔵庫の中身がなくなるから、明日以降の食材を買ってこないといけないから走って戻ってきたんだよ。」

その言葉で両親は「そ、それはマズイ!」「買ってこなきゃ!」と慌てていたけど、途端に落ち着いた。この後の台詞はもう覚えていたので、僕は先手を打った。

「二人とも、夕飯の前に買い物行くから荷物持ちお願いね。」

「「え〜」。」

「さっさとしないと夕飯遅れるよ!!」

「「イエッサー!!」」

相変らずノリはいいんだから。そう思いながら僕は、荷物を部屋に置いて財布を持って家を出た。

家を出てから。

「連。何買うんだ?」

「とりあえず、肉と野菜と魚と卵、後は調理済みの料理を何個かと、冷凍食品。」

「随分あるわね。」

「冷凍食品と卵以外は商店街で買えるから、先にスーパーに行こうか。」

という訳で、僕達はスーパーに行くことになった。

・・・・・・一般的には、僕が荷物持ちなんだけどね。

スーパー内にて。

僕が普段から買っている冷凍食品+これがあれば楽になりそうな冷凍食品を買って、卵のところに向かっていると、ぼったり中島君と出会った。

「あ、中島君。今日も大変だったね。」

「あ、君は池田君。どうしたんだい?」

「僕は明日の買い出し。君は?」

「僕はお使いだよ。まったく、うちの両親は人使いが荒いんだから。」

「うらやましいよ。家事やってくれるんでしょ？」

「そういえば、買い出しって言ってたけど、両親は？」

「お菓子コーナーにでもいるんじゃない？」

「え？」

中島君の間の抜けた返事が聴こえたので、僕は「また明日ね。」と言って卵が置いてあるところに向かった。

残された中島君はというと、

「そういえば、池田君って料理上手いんだった。食べたことないけど。家でも作っているからかな？ 董の料理の先生になって欲しいな。」

と呟きながら、本来の目的通りお使いをすることにした。

「二人とも、買い物終わったから荷物持つの手伝ってよ。」

僕は会計を終えた後、お菓子コーナーに向かったら、やっぱり僕の両親がいた。

両親は、僕の声で名残惜しそうにお菓子を見ていたけど、僕が持っていた荷物を持ってくれた。

「二人とも、商店街いくよ。」

「その代りなにか買っても良いか？」

「そうね。何か欲しいわね。」

貴方達は子供ですか？ と思って思わず口に出しそうになったけど、これはいつもの事なので、

「商店街でね。」

と言って僕達は、スーパーを後にした。

商店街にて。

「ヨォ連！！何買ってくる？ ステーキ用の肉か？」

「いやそれじゃなくて。いつものお肉が欲しいんだけど。」

「なんだよ。たまには奮発したらどうだ？」

「それやると両親がそれ以外食べなくなるから。」

「お前も大変なんだな。分かったよ。いつものだな。」

僕は肉屋で買い物をしていた。

ここは、僕が小学生のころから買い物をしている場所。スーパーが出来ても、ほとんどの主婦（夫）はここで買い物をしている。

あ、両親は二人で買い物してるよ。二人で千円なら何を買ってもいいという条件を出して商店街内に放置している。ま、何かあったら携帯電話に連絡してくれるように言ってるから大丈夫。

「毎度ありー！また来いよ！！」

「うん！」

と言って僕は、次の店へと向かった。

その後、八百屋と魚屋をまわってそれぞれで買い物を買って、両親に電話した。

『もしもし、連？こっちはまだ終わってないんだが。』

「どこ？」

『駄菓子屋。』

「そっち行くからそこで買い物しててね。」

『動く気はないから。』

と言われて電話が切れた。

これだから、息子の僕がしっかりしないといけないと思っちゃうんだよね。

年相応の悩み事したいなあ、と思いながら、僕は駄菓子屋さんに向かった。

「いらっしゃ・・・連か！久し振りだな！」

「相変わらず口調が男前だよ、ミネルバさん。」

「ははは！お前も相変わらず両親に苦労してんじゃない。……お前さんの両親ならあっち側にいるぜ。」

と言って指を指すミネルバさん。僕はお礼を言いながらそこへ向かった。

ここの店の名前は『藤井駄菓子店』。この商店街が出来た時からある古株で、改築、増築を経て、三階建てで一階一階のスペースが広い構造になった。なので、駄菓子の種類が凄多い。今は、千種類ぐらいあったような気がする。そのおかげで、結構色々な所からここに買い物へ来る人が多い。

ちなみに、ミネルバさんはこの店の一階の店員で、ロボットである。ここで働いている理由は、『こういうところで働きたかった』からだって。

そして向かった先にいたのは、案の定、僕の両親だった。しかも、かごの中には結構な量（しかも安い物ばかり）が入っていた。

「もういいんじゃないの？」

と僕が呆れていると、

「まだだ。あと四百円は使える。」

「そうね。正確に言うなら四百三十円ね。」

と商品の値段を見ながら答える両親。

これを食材の買い物の時に発揮してくれないかな。と僕は思った。

今更だけど、我が家の財産管理や家計簿も僕がやっている。

理由は、放って置くとあの両親が変な買い物をしてくる恐れがあるから。

なので、両親の小遣いも僕が渡している。僕？小遣いなんてないよ。家の事で一杯だから、余裕がないしね。

あ、それでもたまに自分の買い物をしたりするよ？その時は自分で貯めていたお金を使うから、文句は言われないしね。

このことを言うと、庄一たちに「お前、完全に主夫だな。」「…：納得。校内頼れそうな人一位。」と言われた。圭の最後の台詞が気になったけど。

話を戻そうか。

尚も悩み続けているので僕はこう言った。

「それぐらいいいでしょ？また今度買い物に来るときに、その四百円繰り越せば。」

その言葉にめざとく両親は反応し、

「「それはいい考えだ！」」

と言って二人でレジに向かった。……仲はいいんだけどね、あの二人。

そう思いながら、僕は後を追った。

帰り道。

「結構買ったな。」

「そうね。」

「約六百円でそれだけ買えたことに僕は驚いたよ。」

ニコニコ顔の両親と対照的に、僕は驚いていた。

まあ、これも我が家にとっては普通だから何も言わないけど。

そう思いながら僕は家に帰った。

「「「ただいまー。」」」

家に帰ってきてまずやること。それは食材を冷蔵庫に移すと同時に、使う食材を冷蔵庫から出すこと。僕は慣れた手つきでそれを行い、両親はテレビを見ていた。缶ビールを開けながら。

もう慣れたので、何も言わずに夕飯づくりに取り掛かった。

ここからの描写を簡略化すると、

夕飯をつくり終え、テーブルに並べ、両親と一緒に食べながら今日の話をし、風呂を沸かした後に食器を洗い、それが終わったら部屋に戻って、財布を戻したり明日の準備をしたりして、それが終わった後風呂に入って、最終的に今日の出費を家計簿に書いて僕は寝た。

これが僕の日常。そんな変わらないものが僕は好きだ。みんなもそうでしょ？

人物紹介 その一（前書き）

今回は、主人公たちの紹介です。

人物紹介 その一

池田連（15）・・・このお話の主人公。一言でいうなら、ものすごい苦勞人。容姿、成績ともに普通だが、家事スキルだけは一般人より上。特に、料理の腕は超一流の料理人をも凌ぐと言われている。そうなった理由は、単に両親がズボラなだけなわけだが。趣味は読書のみ。家事は特技。

岡田庄一（15）・・・連の友達。連とは中学一年のころからの腐れ縁で、とても仲が良い。彼も普通の人だが、髪型をオールバックにしている。とても友達思いで、義理堅い。ちなみに、身体能力がとても高い。

木村圭（15）・・・同じく連の友達。連と庄一とは中学二年のころに知り合い、それから仲良くしている。普段は無口、無表情である。話すときはほとんどが本音である。また、情報通でもあり、連たちが訊いてきたときにはその真偽がわかっている。

連の両親・・・彼らは普通のサラリーマンだが、社内業績は夫婦で首位を独占している。そのせいなのかどうか知らないが、家事を全くやらないし、基本的に変な買い物をしてくることが多い。ただし、最近はそんな買い物をしてこなくなったみたいだ。

中島元（15）・・・連のクラスメイト。彼も苦勞人。しかし、連には及ばない。とある事情から、警察に協力している。基本的に温厚であるが、友達を傷つけた者に対しては、自身の能力を使って報復をする。ちなみに、彼は鈍感ではあるが、それにはきちんとした理由がある。連たちとは違い能力者であるが、彼の能力は謎である。

清水久美（15）・・・同じく連のクラスメイト。彼女は元の幼馴染であり、彼のが好きである。熱心にアプローチをするが、当の本人は全く気が付いていない。また、彼と同じく警察に協力しており、自身の能力を持って犯人は捕まえている。超能力者で美人。

寺井堇（15）・・・同じく連のクラスメイト。とある事件をきっかけに元のが好きになり、清水とはライバル。また、自身が魔術師なのでそれもありまって、基本的に清水とは仲が悪い。大金持ちでおしとやか、さらには美人という欠点がなさそうな感じの彼女だが、とんでもない欠点が存在する。

人物紹介 その一（後書き）

人物紹介は、話が進むにつれて挿入していきます。

二 六月下旬のある日（前書き）

嫉妬って、人間が最も陥りやすい感情ですよね。

二 六月下旬のある日

朝。学校の教室にて。

「それにしてもよ、先週と先々週にあの三人いなかったけど、なにがあったんだ？」

いつものように授業が始まる前に僕達三人は喋っていたら、庄一がそう言った。

「しかも、それまで騒がれていたゾンビ騒ぎもなくなっちゃったしよ。」

「そうだよな。しかもこのクラスに何故か一人増えてるしね。」
僕は頷きながらチラリと廊下側を見た。

そこには、今日新しく転校してきた、レイジニア・ゼロという少女（レイシア人・ネクロマンサー）が早速中島君争奪戦に参加していた。ちなみに、結構美人で、最初の挨拶が『ハジメの嫁のレイジニア・ゼロよ。これからよろしくね。』と笑いながら言った時には、圭を含め複数の男子と寺井さん、清水さんが殺気立っていた。僕は本気で死ぬかと思った。

僕と同じように廊下側を見た圭が、ポツリと言った。

「……………羨ま…何でもない。毒殺したい。」

「いや。素直に羨ましいと言えればいいじゃん。それに、毒殺したいなんて冗談でも言うもんじゃないよ。」

と僕はツツコンでみたけど、圭にスルーされ、庄一は何も言うてくれなかった。

本気、じゃないよね？ね？

と、気まずい雰囲気の流れたところで圭が口を開いた。

「……………詳細が聴きたいなら、放課後にいつもの場所で。」
それを受けて僕達は、

「応。分かった。」「うん、いつもの場所だね。」

と言った。その時に、授業が始まったので僕は教壇に視線を向けた。

一校時目が終わり、僕は次の授業の準備をしながら話していた。「それにしても、レイジニアさんって頭いいね。」

「だよなあ。さっきの時間に指された時だって平然と答えてるもんなあ。しかも正解してたし。」

「そうだね。」

と言いながらレイジニアさんの席を見ると、人だかり（主に女子）が出来ていた。

「まあ、珍しいわな。転校生ってのは、いつだって。」

と庄一が言っていたら、今まで会話に参加していなかった圭が口を開いた。

「……いつ殺す？」

「ちょっと待って。誰を殺すのかは大体想像できるけど、そんなことしたら清水さん達に殺されちゃうよ。」

「分かっている。けどな、男にはやらなきゃいけない時があるんだ！僕が止めようとしたら、庄一まで話に加わった。そしたら、その話に反応したクラスの男子がこちらに集まって、

「だよなあ。」 「なんだお前ら、中島の事殺るのか？」 「だったら俺も混ぜろ。」 「俺もだ！」 「あいつだけってのは許せねえしな！」 「そうだそうだ！」

収拾がつかなくなっていた。

僕はもう諦めて、授業の準備をし終わったら寝ることにした。

そんな僕の事は放って置かれて、庄一と圭が中心となって話し合いが始まった。

「おい、いつやるんだ？」

「昼休みでいいだろ。」

「でもどうするんだ？中島に接触するにしても、結構大変だろ？」

「……そこは中島の性格を利用する。」

「あいつはお人好しだからな。」

「でもその後はどうする？接触した後は？」

「そこは即行連行して、人が来ない場所に連れていけばいいだろ。」

「その場所は？」

「俺、いい場所知ってるぜ。」

「よし！次の授業の休み時間は班分けと場所の確認だ。解散。」

庄一がそう言ったと同時に先生が来た。

先生は「早く席に着きなさい。」と庄一たちを注意して授業を始めた。

六月下旬のある日（2）

二校時目が終わった休み時間。僕は途中からしかノートを書いてなかったので、誰にノートを借りようか悩んでいた。本当は、圭か庄一に借りたかったんだけど、終わったと同時に何処かへ行ってしまった。次は魔術師の人たちの授業があるため、僕達は自習。それを利用してノートを書き写したかったんだけど男子はみんないなくなってるし、女子も魔術師の人はいないから、ここにいるのは超能力の女子たちと、レイジニアさん。それと、僕と同じで普通の女子。さてどうしたものかと悩んでいると、

「何か悩み事でも？」

と声をかけられた。

その声に顔を上げるとそこにいたのは

「レイジニアさん？」

そう、レイジニアさんだった。

「憶えてくれたの？やっぱり珍しいから？」

僕が名前を呼んだだけで、レイジニアさんはそう訊いてきた。確かに珍しいけど：

「最初の発言で忘れる人はいないんじゃない？」

「そう？」

そこで不思議がらないでよ。とツツコミたかったけど、僕は最初に言われた一言が気になった。

「ねえレイジニアさん。」

「なに？」

「どうして僕が悩んでると分かったの？」

そう僕が訊くと、レイジニアさんは笑い出した。

「ちよっとお、笑わないでくれる？」

「ご、ごめんなさい……………ちよ、ちよっと思い出しちゃって。」

「もう。」

何を思い出したのかはあえて訊かない。だって、藪をつついて変なものが出てほしくないから。

ひとしきり笑った後、レイジニアさんはこう言った。

「で？ 何に悩んでるの？」

僕の質問はスルーですか。と言いたかったけど、彼女はまたスルーするだろうと思ったので、言わなかった。そして改めて彼女の容姿を意識してしまった。

そのせいで、

「ちょ、ちよつとさっきの授業の事でね！」

最初と最後がおかしくなった。この気持ち、わからないかな？

すると、レイジニアさんはクスリと笑ってこう言った。綺麗だなあ。

「さっきの授業？ どこ分からない所でもあったのかしら？」

「いや、違うんだ。ノートを半分取り忘れてね。」

こうなったら正直に言うしかなかった。そしたら、

「そうなの？ それだったら貸してあげるわよ？」

と言って、レイジニアさんは自分の席に戻ってノートを取って来てくれた。

「はい。」

「あ、どうもありがとう。」

僕はレイジニアさんにお礼を言ってから、ふと気になることを訊いてみた。

「ねえレイジニアさん。」

「まだなにか？」

「どうしてこんなことしてくれるの？」

そう訊くと、レイジニアさんはちよつと考えてから、こう言った。

「ハジメのおかげかしら。」

「え？」

「ハジメが『人の気持ちは憎しみだけじゃない！！ 優しさだってあるんだ！！』って言うてくれたから。こうやって一人でも多くの人

と仲良くなろうとしてるの。」

中島君ってたまにいいこと言うよね。そう思って僕はこう言った。

「何があったか知らないけど、今は楽しいでしょ？」

僕が言ったことにレイジニアさんはちよつと驚いたけど、

「そうね。ハジメのおかげで楽しいわ。」

と言って自分の席へ戻っていった。

僕はというと、レイジニアさんから借りたノートを書き写すことにした。

授業が始まってから十分後、男子連中（魔術師以外）が戻ってきた。

でも、結局は誰も注意しなかった。面倒だから。僕はレイジニアさんのノートを書き写していたから。

レイジニアさんのノートはとても分かりやすかった。字もきれいだし、要領よくまとめられている。僕も一応「綺麗」にまとめているけど、彼女はそれより上だった。

そのおかげで、書き写すのにそう時間がかからなかった。

僕がノートを返そうとしていたら、庄一たちが席に着いたので、僕は自習道具の下にノートを置いて勉強してるふりをした。ノートを広げてるだけなんだけどね。

庄一と圭が席に着いてから、僕は訊いた。

「ずいぶん遅かったね。」

「ああ。色々決めなきゃいけなかったもんでな。」

「……いつでも決行可能。」

なんだかすごいことになったなあ、と思いながら僕は一応忠告することにした。

「二人とも、やる気はないの？成功しても失敗しても大変なことになるからね？」

「止めんじゃねえぞ。俺達はどうやるしかないんだ。」

「……男の敵の抹殺での死は本望。」

でも駄目だった。この二人はやる気満々だった。恐らく、このクラ

スの男子は僕を除いて全員が中島君を殺そうとするだろう（比喻でも揶揄でもなく）。

この後の男子の末路が想像できてしまったため、僕は暗澹たる思いだった。

六月下旬のある日(2) (後書き)

男子の暴走がひどすぎる (笑)

六月下旬のある日(3) (前書き)

男子の暴走って、FFF団に似てますよね。

六月下旬のある日(3)

三校時目が終わり、この後の授業が終われば昼だと思いながら僕はレイジニアさんの席へ向かった。ちなみに、他の男子は何処かへ行ってしまった。恐らく最終確認をしているのだろう。

「レイジニアさん。」

「なにかしら？えーっと、さっき話したのは分かってるけど、名前は覚えていないの。教えてくれない？」

そうだろうと僕は思っていたので、改めて自己紹介をした。

「池田連だよ。連でいいよ。」

「そう、レンね。もしかして、さっきのノート分かりづらかった？」
そう訊いてきたので、僕は必死に否定しながらこう言った。

「ち、違うよ！！とても上手にまとめられていたさ！終わったから返そうとしていただけだよ！」

「あ、そうなの？それならよかった。」

と、安心した様子のレイジニアさん。

いい人に見えるけどなあ、と思いながら僕は、レイジニアさんにノートを返した。

「ありがとう。」

「どういたしまして。」

用事が終わったので、僕は自分の席に戻って授業が始まるまで待つことにした。明日からの男子の立場がなくなるなあ、と思いながら。

男子が戻ってきたのは、始まる五分前だった。

中島君は、男子の行動にちょっと疑問に思ったみたいだけど、特に気にしていなかった。

僕は心の中で、中島君にごめん、と謝ってから授業に集中した。その間も、僕はどうしようか考えていた。クラスメイトの奇行（凶行）を、どうやって防ごうかという事を。

まず、女子に言う。これは男子の立場が危うくなるのと同義なの

で却下。

次、というかこれしかないんだけど、僕が何とかするしかない。一番手っ取り早いのは、狙われる本人に告げる事なんだけど、これをやっても結局最初の案と結果が変わらないので考えていない。

僕はノートを取りながらそのことを考えていると、

「池田！！これに答えてしろ！！」

僕が指名された。

あまりにも突然だったため、僕は思わず、

「ひゃ！はい！？」

と言ってしまった。

やっちゃったー！と僕は心の中で思った。辺りを見ると、みんながクスクスと笑っていた。

先生も苦笑しながらこう言った。

「池田。考え事でもしてたのか？それより授業に集中してほしいんだが。」

僕は恥ずかしい気持ちになりながらも、

「あ。すみません。」

と言った。

「まあいい。それで？この答えは？」

先生が指した問題を、僕は何とか答えて座った。これっていつも緊張するんだよね。

その時に、庄一と圭が僕に言ってきた。

「なんだよさっきの声はよ。」

「……女子みたい。」

僕は二人に呆れながら言った。

「そのことはいいよ、もう。ていうか、君たちのせいなんだけど。」
そう言うと、二人とも首をかしげながら先生に視線を戻した。

全くもう。そう思いながら、僕も黒板に視線を戻した。
どうやって奇行を阻止しようか考えながら。

六月下旬のある日(3) (後書き)

人の執着心って正直怖い。

六月下旬のある日（4）

そして、昼食の時間。

結局、いい案が出ないままこの時間が来てしまった。

もうなるようになれ、と僕は投げやりに思っただけを出した。

中島君を除いて、他の男子はどこかへ行ってしまった。きっと待ち伏せする気なのだろう。

その中島君はというと、清水さん、寺井さん、レイジニアさんに囲まれていた。

これなら心配いらないね。そう思って、僕は一人で弁当を食べようとした。

したんだけど………………………。

誰かが見てる気がしたので、僕は食べるのを中断して辺りを見渡した。

見ていた人はすぐに見つかった。

中島君が、こちらに助けを求めるように見ていたからだ。

目が合った。

その後の反応が凄かった。

中島君は僕の席の所まで机をよけながら急いできて、女子三人は中島君の行動に取り残されたみたいだった。そして、僕の席について早々中島君はこう言った。

「一緒に弁当食べない!？」

「へ？」

いきなりだった。僕はちょっと驚いたけど、女子三人の方が驚いていた。

でも、中島君の目が必死だった。

どうしてなのか疑問に思ったけど、一人で食べるのも味気ないと思ったので「いいよ。」と言った。

それを聴いた中島君はものすごいホッとした顔で、庄一が座って

いた席に座って、僕と対面する形で弁当を広げた。

僕はその弁当を見て思わず言った。

「結構入ってるね。」

その言葉を聴いた中島君は、ちよつと僕の弁当を見て、

「僕の両親が『たくさん食べて立派になりなさい。』って言うからね。そういう君だっておかずに沢山あるじゃないか。」

と言った。僕は苦笑しながら言った。

「これは単純に夕食と朝食の残り。両親の弁当にも同じものが入ってるよ。」

「そういえば池田君って自分で料理作ってるんだっけ？」

そう僕に訊いてくる中島君は、僕の事を尊敬のまなざしで見ているようだった。

僕は弁当を食べながら言った。

「そうだよ。君は両親がつくってくれるんでしょ？ いいね。」

「そうかな？」

そうやって話しながら弁当を食べていたら、

ダン！！×3

僕らは包囲されていた。

「元君？^{はじめ}どういうことですか？」

「ハジメ、言い訳を聴こうかしら？」

「元？^{はじめ}どういう事か説明してもらおうわよ。」

そう言った順は右から、寺井さん、レイジニアさん、清水さん。

どうやら、中島君の行動のせいで怒り心頭のようにだ。そして僕はトバッチリ。

中島君は必至に説明しようと頭を働かせるみたいだ。僕は被害者なので何食わぬ顔で昼食を食べていた。

そして、考えがまとまったのか中島君が言った。

「たまには男子同士で食べるのもいいかな、と思ったんだよ。ほら、いつもみんなと食べてるでしょ？」

その言葉に対して、

「私は今日が初めてなんだけど。」

レイジニアさんが言ったことによって、また考えざるを得なかった。仕方ないのかな？と僕は思いながら中島君を助けることにした。

「僕が誘ったんだよ。昨日スーパーで会ったときにね。」

その僕の言葉を受けて、女子三人は中島君に問い詰めるように迫り、中島君はコクコクと頷いていた。

それで女子三人は納得したみたいだ。でも、その後の行動には僕は驚いた。だって：

「ならお邪魔しても良い？」「お邪魔しても良いですか？」「邪魔するわよ。」

と言って僕達の周りの席に座った。って、確認の意味ないじゃん。そうしていたら、いつの間にか僕と中島君の周りに女子三人が囲んでいた。

つ、つらい・・・・・・。

そう思いながら僕は、昼食を再開した。そうしていたら、ふと信じられない光景が僕の目に映った。

「ねえ元^{はじめ}？これとそれ、交換しない？」

「いいよ。」

「じゃあ。私から行くわよ。はいあゝん。」

凄いね。中学三年生にもなると公衆の面前で「あゝん」ができるんだね。

あまりにもびっくりしたので、僕はマジマジと見てしまった。

それに気付いた中島君は、清水さんに慌ててこう言った。

「ちょっと久実！？池田君見てるから！いや、誰かが見て無くてもやめてほしいんだけど！？」

それを聴いた清水さんは不満顔で言った。

「いいじゃない。私達の愛が認められるんだから。」

「僕は認められて欲しくないんだけど！？」

中島君。大変だね。

僕は同情しながら自分の弁当を食べていた。そしたら、今まで黙

つっていた寺井さんが、

「は、元君！^{はじめ}私のも食べてくれませんか！？」

と言ったら、僕とレイジニアさん以外の箸が止まった。

？どうかしたのだろうか？

レイジニアさんもそう思ったようで、

「どうしたのよハジメ。どうしてスマレの発言で肩が震えているのかしら？」

と訊いていた。

あ、本当だ。よく視ると二人とも小刻みに震えてる。しかも、汗をかいてる。

寺井さんの弁当には何があるのだろうか？

ふと疑問に思ったけど、さわらぬ神になんとやら。僕は追及しなかった。

代わりに、レイジニアさんが中島君に訊いた。

「スマレの弁当は何かあるの？」

すると、中島君はパニクリながら言った。

「い、いや、べ、別に！？何もないよ！？」

それならどうしてさっきは震えていんだい？

簡単に追及出来るくらいのボロが出てきたけど、聴かなかったことにした。

これに業を煮やしたのか、寺井さんが中島君に迫って、

「いいから食べてください！！」

「フゴォ！？」

自分の弁当のおかずを、中島君の口に入れた。
すると、

「ゴファ！！」

という音と共に、中島君が机に倒れこんだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕とレイジニアさんは互いの顔を見た。清水さんは「うわっちゃあ……………」と言いながら天を仰いだ。

食べさせた寺井さんかというと、

「ど、どうですか？」

中島君の様子を気にせず味の感想を訊いていた。

これを見た僕とレイジニアさんは寺井さんに聴こえない様に清水さんを交えて話していた。

「(ちよつとクミ、スマイレの弁当でもしかして……)」

「(まずいの?)」

「(まずいもんじゃないわ。もはや兵器よ。ちなみに、あれは手作りよ。)」

「(……どうやってたらそんなものができるのかしら?)」

「(意図してつくれるものじゃないよ。)」

「(私に元をとられたくないからじゃない?)」
要するに嫉妬ですか。

それだけでよくあんなものが出来るね、と僕は他人事のように思った。

と、何とか意識が回復したらしい中島君が、

「う、うう。い、池田君。君のおかず欲しいんだけど……。」

何故か僕の弁当のおかずを要求してきた。

え?ここで?

その言葉に女子三人も驚いた。なので、

「「「どうしてこいつなの!」」」

見事にハモった。……これは泣きたくなるね。

そんな僕の気持ちを知らずに、中島君が言った。

「池田君の……料理は……おいしいんだ。久実と堇は知ってるよね?」
それにもかかわらず、

「え?」「そうなんですか?」

疑問で返された。

これが普通の反応だと思うんだけど……。

そう思っていたら、レイジニアさんがいきなり、
「レン。これ、もらうわよ?」

と言って僕のおかず（卵焼き）を一つ食べた。

モグモグモグ……………」

レイジニアさんが食べている間、清水さんと寺井さんはじっと見ていた。

僕はというと、

「大丈夫？中島君。」

「いつものことだから何とか……。」

中島君の心配をしていた。中島君の顔がまだ青かったから。

これを見て僕は何もできないと分かったので、大人しく食べようとしたら、レイジニアさんが食べ終わったみたいで、二人が感想を訊いていた。

中島君はというと、

「そういえば……二人は同じクラスになったことないんだっけ……。」

と言っていた。同じクラスになっても、多分僕の事は知られていないと思うよ。

「どうだったの？」

「どうなのですか？」

それを受けたレイジニアさんは、数秒沈黙してから口を開いてこう言った。

「……………おいしいわ。」

「「え？」」

「ね、いったでしょ？」

レイジニアさんが言った時に、何故か誇らしそうにする中島君。僕はというと、

「へえ。」

完全に他人事だった。

なので、そのまま食べていると、清水さんと寺井さんも僕のおかず（今度は唐揚げ）を一つずつ、勝手にとって食べた。僕のおかずがなくなっちゃうんだけど。

そして、食べた二人は、

「「おいしい!!」」

と、叫んでいた。その声で辺りはこっちを見たけど、それも一瞬の事で、すぐに集まっていた人たちの会話を再開させた。

そして、叫んだ二人はというと、

「あなた!どうやってたらこんなおいしいものがつくれるの!?!」

「よろしければ教えていただけませんか!?!」

「お、落ち着いてくれませんか!二人とも!!」

僕に詰め寄ってきたので、僕はこう言うしかなかった。

六月下旬のある日（4）（後書き）

主人公が一番苦勞します。

六月下旬のある日(5)

そうやっていたら、

ガラッ!

「くそっ! 結局来なかったぜ! どこにいったんだ? ……ん?」

「……………いつもならあそこに来ていた。……………何?」

「え?」

庄一と圭が他の男子と一緒に教室に戻ってきた。そして、僕と目が合った。

……………

「さらばだっ!」

と言って、僕はあらかじめ開けておいた窓(風通しを良くするため)から外に出て、ベランダを走っていった。

残された中島君たちは、僕の行動が理解できなかったのか固まってしまい、庄一たちは

「……………連を連れてこおおおい!」

「「「「おっしやーーーーー!」」」」

と言って同じく窓から出てきた。……………数人は。

残った人たちは、固まっていた中島君に気付いたみたいで、

「「「「標的発見!」」」」

「「ヤレ。」」

「「「「イエッサー!」」」」

というやりとりをして、中島君に襲い掛かっていたみたいだった。みたい、とは、僕がその現場を見ていなくて声だけだったわけで、どうしてかという、僕は逃げていたからで。それもどうしてかという、

あの状況を何も知らなければ勘違いされるよね。

そんなわけで、僕はベランダの端まで走ってから、跳んだ。文字通

り、ベランダから校庭へと。

「冒険するもんじゃないね――――！！」
ダン！！

「~~~~~ッ！！！！」

何とか着地できたけど、僕の両足にすごい衝撃が来た。……後の授業、保健室で過ごせそうなくらい痛かった。

僕を追ってきた男子は、まさか飛び降りとは思わなかったのか、その場で少しためらったけど、結局教室に戻っていった。

僕は、戻ったとしてこれからどうしようか考えながら教室に戻ろうとしたら、

「「「うああああ！！」」」

という声とともに男子が窓から出てきた。僕はその光景を見てこうつぶやいた。

「あゝあ。こうなっちゃったか。明日からどう合わせていこうかな？」

そして、よく視るとその中に圭と庄一がいた。というか、僕と中島君以外の男子が全員、宙に浮いていた。

僕は、その光景を見て『やっぱり僕は普通だな』と思いながら、まだ痛みが引かない足で教室に戻った。

教室に戻ると、未だに男子たちは宙に浮いていた。そして、自分の席に戻ると、中島君が訊いてきた。

「池田君、大丈夫？　ていうか、怪我しなかったの？」

「ベランダから飛び降りる、という発想に驚くのが普通だと思うんだけど。」

「そうかな？」

どうやら、僕が決死で飛び降りたのは中島君にとっては普通だったようだ。

つくづく住んでる世界が違ふと思ひながら、僕はさっさと弁当を

食べていった。その光景を見た中島君とレイジニアさんは、

「あ！もうすぐ授業だ！」

「ならさっさと食べないとね。その二人も男子にかまってないでさっさと食べなさい。」

と言って自分達の弁当を食べ始めた。その言葉で我に返ったのか、庄一たちをベランダに降ろしてから、二人も弁当を食べ始めた。

こうして、騒がしかった僕達の昼食は終わった。寺井さんの意外な一面と、男子の立場がなくなったことによって。

・・・・・・・・・・・・・・・・明日からどうしよう？

六月下旬のある日(5) (後書き)

男子が暴徒と化しました。

六月下旬のある日(6) (前書き)

ふとした疑問って、すぐに忘れるんですよね。

六月下旬のある日(6)

さて、午後の自習の時間。(要するに、超能力の人達専用の授業) 昼の行動のせいで、早くも男子の立場がなくなりつつある。さらに、清水さん達の警戒心が一層高まったことにより、うかつに中島君に近づけなくなった。

これからの行事でまともれるのかな？

ふとそんなことを考えてしまうこの頃。僕は自習中にもかかわらず、何もやっていなかった。

そしたら、

「連もそう思うだろ？」

「え？あ、ごめん。聴いてなかった。」

「だからよお、このままやられっぱなし、てのも癪じゃね？」

「もうやめた方がいいよ。これ以上やったら明日からの立場がなくなるよ。」

「……それでも、やらなきゃいけない時がある。」

すると、圭も会話に参加してきた。その気持ちを他の事に注げないだろうか？常々僕はそう思う。

そんなことを思っていたら、庄一が僕に訊いてきた。

「そーいやよ、お前どうして中島たちと昼食食べてたんだ？」

「……答えようによっては対象に入る。」

圭の言葉に、僕は反射的に「なんの？」と言いたくなったけど、きっと僕にとってうれしくないものだろう。

さてどう答えたものか。そう思って僕は、考えてからこう説明した。

「一人で食べようとしたら中島君が来たんだよ。一緒に食べない？って。」

ある程度の事実を言わないで、ありのままの事を言った。なんとなく、そうした方がいいと思ったから。

その説明で、二人は納得したみたいだ。

「昼の時はスマン。」

「……同じく。」

こうやって僕に謝ってくれたから。

「いいよ。それよりさ、気になることがあるんだけど。」

と、僕がそう言うと、

「気になること？中島なら二年の頃から同じクラスだろ？……あ、そうか。連は知らないんだっけ。あいつ、去年は引きこもってて学校にはほとんど来なかったんだ。しかも、来るときは必ずお前が休んでた時。当時の俺と圭はお前たちの関係を疑ってみただけだよ、全く見つからなかったから偶然だと思ったんだよな。」

「……（コクン）」

庄一が説明してくれた。あれ？そしたら……………、

「どうして中島君は僕が料理上手だって知っていたの？」

そう。僕と中島君が入れ違いで学校に来ていたのなら、僕が料理上手だってことは知らないはずだ。それなのに、どうして知っていたのだろう？

その疑問は、圭が教えてくれた。

「……当時、クラスの連中が連の話題で盛り上がった時があった。その時に、中島が来てその話を聴いていた。だから知っていてもおかしくはない。」

僕がいないときにどういう話をしていたんだろう？

そう疑問に思ったけど、触れて良い事はなさそうだったのでかわりに、

「どうして中島君は引きこもっていたの？」

中島君のことを訊くことにした。

これに答えたのは、もちろんというか、圭だった。

「…進級前に起こった、暴走事件を引き起こしたから。」

「ああ。あの事件か。当時本気で怖かったな。今は憎い標的ではないけどな。」

「諦めなつて。……そうなんだ。あそこまで立ち直れたのは色々な意味で凄いね。僕だったら自殺してるんじゃないかな？」

「……それは言える。」

「否定してくれない？」

「まあまあ。」

僕の冗談を本気で肯定した圭。それをなだめる庄一。

きっと、僕にとっての圭と庄一がそうであるように、中島君もまた清水さんと寺井さん（レイジニアさんはちょっと違うかな？）のことを大切な友人だと思っているんじゃないかと、僕は思う。

そうじゃなきゃ、今学校に来ていないだろうから。

六月下旬のある日（7）（前書き）

今回は、元たちが時系列でいう二週間前に遭遇した事件の、裏事情です。

六月下旬のある日（7）

放課後。僕達はいつもの場所に集合していた。

「久し振りだね。ここ。」

「そうだな。さっさと行こうぜ。」

「……周囲には誰もいない。」

圭が周囲の確認をしたので、僕達は学校の敷地内の隅にある、地下室へと続く道があるドアを開けて入っていった。

これを見つけたのは圭だった。

本人が言うには、ここに入った時には既にあることは知っていて、何度か使っていたんだって。僕と庄一は友達の証として教えてもらったんだ。

今では、僕達三人が誰にも聞かれない話（事件の裏事情など）をする時や、集まってなにかする時に使っているんだ（先生達にも知られていない。）。

地下室へと続く道を歩きながら、僕達は話した。（圭は懐中電灯を常備していて、圭を先頭に、僕、庄一の順である。）

「しかし、この地下室って何のためにつくられたんだ？いつも使ってる部屋だって、最初見た時は机と椅子だけだったろ？」

「そうだね。他にも部屋があるみたいだけど、なんか薄気味悪くて近寄れないよね。」

「……昔、ここは軍事基地だったらしい。」

「え？」 「マジかよ？」

「……………」

それっきり、圭は何も言わなかった。

しかし、軍事基地、か。僕はなんとなく納得できる気がした。恐らく庄一もそうだろう。

そして、

「……………ついた。」

「毎度のことながら、緊張感があるよな。」

「そうだね。」

と言って、僕達はいつも使っている部屋に入っていった。

その部屋は、僕達三人が入っても大丈夫なくらいの部屋の広さ。最初は腐った机と椅子だけだったけど、僕達が掃除や色々を持ち込んでいたために、一人暮らしの部屋と勘違いされてもおかしくない部屋になっていた。

僕達は、自分たちが使っている椅子に座った。ドアに近いのが、庄一。奥にいるのが圭。僕は二人の中間。そして、それぞれの荷物も椅子の近くに置いてある。

「庄一、掃除したら？」

「家に置いといたら、両親に何言われるか分からねえからここに置いてるんだよ。そういう連は……本当に少ないな。たまには何か買ったらどうだ？」

「僕の財布はそんなに余裕がないんだよ。しかも家計の事で大変なんだから。」

「……完全に主夫。」

「というより、執事か秘書、または使用人だろ。」

使用人は財産管理などしないんじゃない？……と僕は思う。

そんなことより、

「圭。今日の朝言ってたこと聴かせてよ。」

と僕は言った。圭は頷いてから、説明しだした。

「ん？」

「どうかしたのレイジニア？」

「何か言われそうな気がしたのだけれど……気のせいかしら？」

「そう？」

「……まあいいわ。それより、行くわよハジメ！」

「待ちなさいよ！！」「待って下さい！！」

ここからまた修羅場となる、なかじまはじめ中島元であった。

「…まず、先週まで騒がれていた、ゾンビの件。」

説明の初めに圭がそう言った。すると、庄一が、

「ああ、あれだろ？誰がやったのか分からない連続殺人。で、現場で目撃されたのはゾンビで話題になったやつ。」

と言ったことに圭は頷いて言った。

「…あの騒動の被害者は、みんな共通点があった。それは、七年前に起こった『レイシア地域連続殺人』の容疑者に挙げられ、結局証拠不十分で釈放された容疑者たちだった。」

レイシア地域連続殺人。これは子供だった僕でも知っていた。

この事件での死亡者は延べ百人超。この事件は特異性が三つある。まず、その死亡者の人数。次に、犯行手段。一人でやるにはだいぶ大がかりな方法だと言っていた。そして最後は、犯人達が特定されたにもかかわらず、証拠不十分で釈放されたことだ。

「でもどうしてそいつらが殺されたんだ？」

庄一は、圭に対して訊いてみた。それに対して圭は、

「……ここから先はオフレコ。」

と言って説明した。

「……七年前のあの事件で、目の前で両親が殺された少女がいた。

その名前は、レイジニア・ゼロ。」

「！？」

なおも説明は続いた。

「…その少女は警察に保護された。そして、犯人の特徴を覚えていた。それが」

「……犯人特定に至ったものか。」

圭の説明の途中で、庄一が口を挟んだ。その言葉に対して、圭は頷いた。心なしか、二人ともいつもより口調が暗い。

それは無理もないことだ、と僕は思った。いつものように事件の裏話を聴いていただけなのに、こんな悲しい過去を知るなんて。

それでも、圭は説明を続けた。まるで、最後まで説明するのがこ

の事件に対しての供養だというように。

「…しかし、それもむなくそいつらは釈放された。その時に、少女は絶望したのだろう。この世界に。だから……」

「自分で復讐することにした。」

「…そうだ。しかし、これには協力が必要だった。」

「七年もたつてりゃ、人は変わっちゃまうからな。」

「……そこで、彼女を誘った人物がいた。それが、クレス・光秀・ヒルハルト。」

ところどころ僕達は口を挟んでいたけど、圭は説明していき、知らない名前が挙がった。

「誰？」

「…表向きは俺達と同じなんの力もない青年。裏では、人を言葉巧みに操るペテン師。そして、裏社会では『罪をつくる者』クライム・メイカーと恐れられていた。さらにいうと、こいつが、七年前と今回の事件の首謀者。」

「「!？」」

僕達はまたしても驚いた。こんなにも早く今回の真犯人が出てくるとは思わなかったからだ。

「…クレスは、七年前の事件の後始末を彼女の復讐という形で済ませ、自分は高みの見物をしていた。」

こうやって、若干想像の部分が入るけど、圭の言っていることは正しいと思う。なんたって、情報の整理、収集、気持ちの推測が、圭の最も特徴的なことだから。

「…この騒動が始まったのは、三週間前。中島たちはその一週間後に情報収集と犯人の追跡をしていた。そして、彼女―レイジニア・ゼロと対決し、彼女を捕まえた。その時にクレスの卑劣な攻撃により、中島たちは彼女と引き離され、クレスは消えていった。その後、クレスのアジトを見つけて侵入し、レイジニアを人質にするもあえなく逮捕。現在クレスは刑務所におり、彼女は被害者という事により、学校で経過観察となっている。」

これで、この事件の説明は終わり。にもかかわらず、圭は何か言いたそうな顔をしていた。

「まだあるの？」

「……………今回、とても不思議な現象が起こったらしい。確証はとれていない。」

「珍しいな。お前が確証をとっていないなんて。」

「……………クレス曰く、『世界が崩れた景色を見た。』だそうだ。恐らく中島の力だろうが、全く不明。過去類のない話だと言っていた。」

中島君の力がなんなのか。それを調べてみたいと圭は思っているんだろうな、と僕は考えた。

これで、一つ目の話は終わった。

「なるほどな。いつもよりヘビーだったが、理解はできたぜ。……………中島の勇姿で惚れたんじゃないやあ、俺達が勝手に憎んでるだけだな。……………さて、いかにして説明しようか？」

感想としてこんな事を言う庄一。説明する対象は、クラスの男子。言う事は、「俺達の非を認める」こと。

「まあ、庄一ならできるよ。頑張れ。」

「……………クレス並みの話術。」

僕はそんな彼を応援するだけ。すると、庄一がこう言った。

「おいちよっと待て。連はいいとして、圭。お前も考えろ。お前も俺と同じなんだからな。」

言われた本人は、

「……………次の話をする。」

話題をそらした。

「次って？」

「……………レイシア地域連続殺人の件。」

「なんで今更？」

と庄一が訊いたら、圭はちよっとだけ笑った表情をつくりながらこう言った。

「いい質問。……………先も言った通り、今回の事件とこの事件はつなが

っていた。まず、真犯人。次が、そこに出てくる登場人物。最後に……人の心。」

「「は？」」

圭が最後に言った言葉に、僕達は揃ってクエスチョンマークを頭に浮かべた。

「どうということだ？」

そう庄一が訊いたら、

「…順を追って説明する。まず、レイシア地域集団殺人の概要から。この事件は、ある日その地域で同時に人が死亡するという事件が起こった。その日の死亡者は三人。次の日も同様に死亡者が現れる。その数は倍の六人。そうして日を追うごとに死亡者は増えたある日、一人の少女が保護され、犯人たちの特徴が分かり、逮捕した。これで、最初と次の説明は終わった。残るは…」

「最後の、人の心。これはどうして出てきたの？」

圭の説明が最後の方になったので、僕は訊いてみた。

「……その逮捕者で、一人だけ今回殺されなかったやつが居た。なぜなら、そいつは釈放された後に殺されたからだ。」

そう言った圭は、その人に対して尊敬の念を送っていたみたいだった。そして、話は続いた。

「……推測だが、そいつは釈放された後、日記か何かで自分の罪を認めることを書いて誰かに送ったのだろう。そして、自首しようとしたら……」

「仲間に殺された。」

僕がポツリと言った言葉に、圭は頷き進めた。

「それは人の心、罪の意識が存在して、なおかつ勇気のある行動をしようとした人がいた。それを中島達はレイジニアに伝えたのだろう。レイジニアはそれを知って抵抗をやめ、大人しく捕まることを選んだ。」

「なるほど。」

「だから人の心なんだ。」

僕達がそう言うのと、圭は「だからお前達とは仲良くできる。」と言
ってから話していった。

「二人の考え通り、彼女もまた罪の意識に、その時苛まれただろう。
だから、捕まるという行動にでた。これで、すべてのキーワードが
今回と七年前でつながった。」

最後に圭は、「……七年前の事件の動機は、『人が大量に死ぬこと
があったら世界はどうなるか』だったそうだ。」という言葉で締め
くくった。

六月下旬のある日（7）（後書き）

人の思いは強いですね。

六月下旬のある日（8）

僕はその言葉に怒りを覚え、庄一は壁に向かってパンチを繰り出した。

「くそっ！じゃあなんだ！？あいつの実験のせいであんなに人が死んだのか！？そのせいで殺しをする必要のない人が殺しをしたのか！？関係のない人が沢山死んだのか！？」

庄一はそう言いつつ、壁に向かってパンチを撃つのをやめなかった。そのうち、壁に血がついていった。

僕達は、それを止めずに見守っていた。ここで何か言っても無駄だと分かっていたから。

手から血がポタポタと流れ落ちていった時、庄一はようやく落ちて着いた。

「落ち着いた？」

「ああ。包帯かなんかないか？」

「……ここにある。」

そう言つて、圭は包帯を庄一に渡した。

その包帯を巻きながら、庄一は言った。

「…仕方ない。中島をやる計画は止めだ。明日は中島と寺井達に謝るか。」

その言葉を受けて僕達は、

「……庄一がそう言うなら。」「これで元通りになるのかな？」と言った。

それから僕達は、少し喋ってから家に帰った。

「ただいま。」

と言って、僕は家に入った。時刻は五時くらいだから、両親は帰ってきていない。あの人たちの帰ってくる時間はまちまちで、僕が普通に帰ってくるときにはいる時もあるし、十時くらいに帰ってくる

日もある。そういう時は連絡が来るから分かるんだけど。

「さくってと。自分の部屋に行ってからにしようっと。」

そう言っ僕は、階段を上がって二階にある自分の部屋に向かった。この家は二階建てで、二階は両親と僕の部屋がある。一階が日常生活をするための場所。

僕は自分の部屋のドアを開けて、中に入った。

「……と言っても、何かあるわけじゃないしね。」

僕の部屋にあるもの。それは、勉強机とベッドと本棚とタンス。

床には何も散らかってはなく、綺麗。

ベッドは、シーツの乱れなどなく、綺麗。

本棚には、料理本と小説。それと、家計簿として使ったノート（過去十年くらいでノート三十冊超）が綺麗に並べられている。

タンスには、自分で買った服が綺麗に畳まれて入っている。

そして勉強机は、机の上には何も置いてなく、収納できるところには教科書や書き終わったノートが収納されている。

僕は、鞆を机の上に置いて明日の準備をした。そうでもない夜にはできないからね。

それが終わってしまったので、僕はベッドで横になって天井を見ながら考えていた。

レイジニアさんの過去。今回の事件のこと。七年前の事件のこと。

中島君の力のこと。

そして、明日の男子はどうなってしまふのか、という事。

.....切実だ。

そんな考えが頭をよぎったので、僕は一階で夕飯の準備をすることにした。気分転換としてじゃないよ？もうすぐ夕飯の時刻だったからだよ？

夕飯の準備が終わった時、

ピンポン！！

玄関の方からチャイムの音がした。

僕は、宅配か何かかな？と思って、判子を持っておきながら「は

「いい。」と言って玄関へと向かった。

「どちらさまですか？」

そう言いながら僕は玄関のドアを開けた。そしたら、やはりいうか案の定、宅配便だった。

「こんばんは！コミレ宅急便です！！荷物をお届けに上がりましたので、判子をお願いします！」

その人は段ボールの箱を持ちながらそう言った。

僕はその宛先と送り主を確認してから、

「分かりました。」

と言って、判子を押して荷物を受け取った。

宅配人は、「確かにお届けしましたー！」と言ってトラックへ戻っていった。

それを確認した僕は家に入って、リビングへ荷物を持ってきてからそれを開けた。

「これは確か……ああ！やっぱり！僕が頼んだものだ！やっときた！」

その中身は、僕の好きな作家の新作小説だった。商店街にも本屋さんはあるけど、僕の好きな作家は、マイナーすぎて店に置かれていない。注文すればいいんだろうけど、そうするといつ届くか分かるまで本屋に行かなくちゃいけないになるので、やらないでネットで注文する。

そうすれば、指定した日時に届くし料金は先に払っておけば問題ない（自分で貯めたお金だよ）。

僕は段ボールの箱をいつもより早く片付け、早速読もうとしたけど夕飯を食べてからにしようと思い、本はテレビに近いテーブルの上（テーブルは二つあって、片方はテレビに近く、片方はキッチンに近い。）に置き、一人で夕食を食べた。

六月下旬のある日(9) (前書き)

池田家に訪問者が・・・・・・。

六月下旬のある日（9）

食器を片付け終わって、早速読もうとしたら、電話が鳴った。

電話が終わってから風呂沸かさないといけないとなあ、と僕は思いながら電話に出た。

「もしもし池田です。」

『あ、連？』

「父さん？何か用？」

『もうすぐ帰る。母さんも一緒。』

「分かったよ。風呂沸かして、料理温めて待ってるから。」

『助かるYO！』

そう言われた僕は戸惑ったけど、電話が切れたので言った通りの事をやった。

風呂を沸かして、つくった料理を温めた。ま、たいして時間は必要なかったけど。

それらが終わったので、僕はテレビに近いテーブルに置いてある本を読み始めた。

ちなみに、好きな作家は水蓮さん。この人が書く小説はとても面白いんだよ。認知度は低いけどね。

今までの作品でお気に入りなのは、『虚空の暮らし』。簡単に内容を説明すると、主人公が過ごしていく日常が、本当は誰かの夢の中だった、というお話。

これを読んだとき、僕はこの人のファンになった。

なぜなら、その本の世界観に引き込まれてしまったからだ。

どこからが現実で、どこからが夢なのか。それを考えさせられる本だった。

これを庄一たちに読ませたら、「途中でこんがらがった。」「…：凄い。」と、それぞれ感想を言った。ちなみに、圭も水蓮さんのファンになった。分かる人には判るんだね。

それで、今僕が読んでいるのがその人の新作『日常が変わった日』。圭が新作の情報を教えてくれたおかげで、僕は何度もネットをチェックすることもなく予約できた。そのせいで忘れてたんだけどね。もう一個付け加えると、圭は水蓮さんの情報を調べたけど、僕は教えてもらわなかった。

好きな作家の秘密なんて知りたくないでしょ？って思うのは僕だけ？

ま、それは置いといて。その小説の冒頭を読んでいたら、チャイムが鳴った。

僕は、しおりを挟んで玄関に向かった。

そして、玄関のドアを開けた後こう言った。

「おかえり。」

「「たっ、だいまー！」」

と言った後、両親がこう言った。

「ほらほら！！君も入りなさいって！！」

「そうよ！別に問題ないから！」

「え？も、もしかして『すんごい頼りになる息子』って……」

ん？お客さんかな？そう思ったけど、両親の後ろにいるのが誰だか分からなかった。

こんな時間に客を連れてくる方が間違ってるような気がするんだけど。そう僕は思ったけど、たまに庄一と圭が泊まりに来るので、何も言わなかった。

「さっさと家に入ってよ。料理冷めちゃうよ。」

こう僕が言うと、両親は自分で連れてきたお客さんのことなど忘れ、さっさと家に入っていった。それで、残されたお客さんを見て、僕は驚いた。

「え！？な、なんで、寺井さんが！？」

なんと、僕の目の前（両親が連れてきたと思われる）にいたのは寺井董さんだった。しかも、よく視ると荷物を持ってきた。

僕、最近疲れすぎたのかな？幻覚が見えてるみたいなんだけど。とかやっていたら、寺井さんが口を開いた。

「あ、い、池田君。えっと、その…こんばんは。」

「あ、こんばんは。」

寺井さんが挨拶をしてきたので、僕は反射的に挨拶をした。けれど、僕はそれで終わらせなかった。

「というか、こんな遅くに何の用？親が心配してるんじゃない？」
こう僕が言ったら、

「そうですけど…ちょっと頼みたいことがあったので…」
と、寺井さんが言った。

僕に頼みごとって。なんか今までもそうだけど、僕って苦労しかないのかな？とこれからの人生について悲観になりながら、僕は寺井さんに、

「それは家に入ってからにしてくれる？」

と言って家に入らせた。……………今度は僕が狙われそうだと、本気で思いながら。

六月下旬のある日(9) (後書き)

生きるってなんでしょう？

六月下旬のある日（10）

「お、お邪魔します・・・。」

そう言いながら、寺井さんは家に入ってきた。そして、僕はリビングに案内した。

案内してる時、僕は寺井さんに訊いてみた。どうして僕の所に来たのか、ということ。

「でもどうして僕の所？というか、良く場所が分かったね。」

対して、寺井さんはちよつと困った顔をしながら、

「住所は調べましたけど、ここの近くまで来て分からなくなりました。オロオロしてたらあなたの両親が『君、もしかして迷子？だったら家にくればいいさ。すごい頼りになる息子がいるから。』と言ってきて、私を案内してくれたんです。」

すごいね、僕の両親は。もしかすると犯罪者とも仲良くなれるんじゃないかと思う。いや、犯罪者だと知らないで仲良くなってそうだ。

そう思いながら、僕はリビングに着いた。すると、

「相変わらずおいしいなあ！」

「そうね！」

料理を食べている両親がいた。……ビールを片手に。

僕はその光景を無視して、寺井さんをテレビに近いテーブルにあるソファに座らせて話を聴くことにした。

「で？どうして僕の所に？」

「あ、それはですね……。」

寺井さんが話をしようとしたら、電話が鳴った。

「ちよつと待ってて。」

そう言って僕は電話に出た。

「もしもし池田です。」

『あ、池田君？僕だけど。』

「中島君？何か用？」

この時僕はどんな用か分かっていた。だってこんな時に中島君が電話してきたってことは…

『うん。ちよつとね。そこに董がいるんじゃないの？』

「あ。やっぱり？」

『やっぱり、って…そこにいるんだね？』

「うん。というか、よく僕のところだって分かったね？」

『帰りに董が「池田君に教えてもらおうかな…」？』って言ったから。』

「へえ。」

寺井さん、行動早すぎ。と、僕がそう思っていたら、

『董は決めたら行動するのが早いからね。』

と、中島君は言った。僕は訊いてみた。

「それで？これからは？」

『うーん……。ま、いるのが分かればいいよ。あとは僕が何とか言つとくから。』

「そう。……って、え？もしかして、寺井さんを泊めろって事？」

『そういうことになるね。』

「普通、判明したら連れ戻すんじゃない？」

『だって、僕の命がこれからも危うくなりそうじゃない。そんなことしたら。』

「……………」

分かってはいたんだけどね……………。

『頼むよ！これからの僕の命が懸かっているんだ！』

悪党退治より身近な脅威。僕はこの時どちらが危険なのかすぐに察知できた。

「……分かったよ。それだけでどうして僕の所に来たのか大体わかったから。」

『ありがとう！！』

「でも明日僕が大変な目に遭いそうなんだよね……。」

『あ………。それに関しては何とかするから。また明日。』

「うん。」

はあ。なんだか変なもの引き受けちゃったな。そう思いながら、僕はリビングに戻ったら、

「じゃあ堇ちゃんは、連とはクラスメイトなんだな！」

「はい、そうですけど……。」

「ねえねえ。すみちゃんって、好きな人いるの？」

「え!？そ、それは……。」

酔った勢いで質問してるだろう両親と、それに律儀に答える寺井さんの姿があった。

僕はこめかみに手を当てながら言った。

「何やってるの？二人とも？」

そしたら両親が、

「なについて、仲良くしたいから質問してるだけだが？」

「そうよ？」

と、ビールを片手に言った。

……明らかに酔っているね。

そう直感した僕は、二人を二階に強制的に移動させた。

六月下旬のある日(10) (後書き)

こんな両親どうですか？

六月下旬のある日（11）

「ごめんね、寺井さん。あんな両親で。」

「大丈夫ですよ。それに、楽しそうじゃないですか。」

両親を二階へと強制移動させた後、僕と寺井さんは改めて話をすることにした。

「ところで、誰が電話してきたのですか？」

「え？ ああ。中島君から。」

そう言うと、寺井さんの顔が曇った。

「でも大丈夫じゃないかな？ 中島君は「連れ戻す気はないから。」って言ってたから。」

僕がそう言うと、

「また迷惑をかけちゃいました……。」

寺井さんは落ち込んでいた。それを見た僕は、

「『落ち込むな。落ち込む暇があるなら進め。後ろではなく、前へ。気が重いかと思うな。進むとは過去を忘れることではない。過去から学んで前へと行くことだ。』」

「え？」

僕が言った言葉に、沈んでいた寺井さんは顔を上げた。

「これは僕の好きな小説の言葉だね。タイトルは『海の家』。僕が落ち込んだ時に読んだりするんだよ。」

「それ……作者の名前、水蓮というんじゃないですか？」

「え？」

寺井さんが作家の名前を当てたことに、僕は驚いた。

「どうして知ってるの？」

「私も読むですよ。それに、私の母ですから。書いてる人。」

にっこりと笑う寺井さん。笑ってる顔がきれいだなあとthinkながら、僕はさらっと言われた事実を聞き逃さなかった。

けど、

「その話をしたいけど、今は寺井さんが来た目的について話をしようか？ 寺井さんは料理を教えてもらいに来たんだよね？」

ようやく話を戻すと、寺井さんは驚いた。

「元君はじめから聴いたんですか？」

「いや。僕の所に来るんだったらそれ位しかないから。」

それくらい僕だって知ってるからね。

すると、寺井さんは僕に頭を下げた。

「お願いします！ 私に料理を教えてください！」

初めから引き受けるつもりだったので、

「いいよ。」

と、あっさり言った。そしたら、寺井さんが嬉しそうに、

「ありがとうございます！！」

と言って僕の手をつかんだ。

僕は女の子特有の空気と手を握られた感触のせいで、ものすごい焦った。そして、

「じゃ、じゃあ、お風呂に入ってからにしようか。」

そう言うしかできなかった。

寺井さんがお風呂に入っている間、僕は食器を片付けて、明日の下準備をする準備をして、二階に上がって今は使われていない部屋に寺井さんのための布団を敷いたりした。その後、僕は自分の部屋に戻り、今日届いた本を本棚に置いて風呂に入る準備をしてから一階に戻った。

一階に戻った時、寺井さんはお風呂から上がっていた。

「いいお湯でした。」

「そう？ 二階にある名前のない部屋が寺井さんの寝室だから。そこに荷物を置いてからにしてね？ 僕はお風呂に入ってくるから。」

「す、すみません。何から何まで……このお礼は必ずしますので。」

「そうやって寺井さんは二階に上がった。僕はそのまま風呂に入り」

行った。風呂に入る前に洗濯物をしながら。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あ、

両親の服どうしよう？

風呂から上がって、着替えてからリビングに戻った。

そしたら、寺井さんがいた。パジャマにエプロン姿という奇妙な姿で。

僕はツツコミをせずに、

「じゃあ、僕の手伝いで覚えてもらおうか。」

と言って、料理を始めた。

してしまったこと。

寺井さんは真面目にやればできる。

「これでいいですか？」

「ああ、うん。これで明日の朝の下準備は終わりだから、もう寝ようか。」

「はい。」

いいお嫁さんになるなあと思いながら、僕も二階に上がった。

六月下旬のある日（11）（後書き）

次回、主人公のちょっと変わった日常が出てくるかな？

六月下旬のある日（12）（前書き）

すみません。次の話で出てくることになりました。

六月下旬のある日（12）

次の日。

いつもの時間（午前五時半）に起きて、着替えないで下へ向かった。そして、リビングへ行って冷蔵庫を開けて、今日の朝食と昼食の弁当用のおかずを作り始めた。

それをやっていると、寺井さんが起きてきた。

「おはようございます。早いですね、池田君。」

「ああ、おはよう寺井さん。」

そう言って僕は料理を作っていた。そしたら、

「あれ？これにクエン酸とか入れないんですか？」

と寺井さんが訊いてきた。

……え？クエン酸？

「寺井さん。料理にクエン酸入れないからね。というか、化学薬品なんていれないからね？」

そう言うと、寺井さんが逆に驚いた。

「え！？料理に化学薬品入れないんですか！？」

「当たり前だよ！？」

もしかして味付けの意味を間違えてるんじゃないのかな？その時僕はそう思った。

僕の言葉で寺井さんはショックを受け、「そ、そうだったんですか：」と言った。

これで何とか中島君の命は救えるかな？と僕は思いながら、四人分の弁当と朝食をつくった。

いまだに落ち込んでいる寺井さんに、僕は弁当を渡しながら言った。

「はい寺井さん。これ君のお弁当。今度から薬品を入れずにつくればいいよ。そうすれば中島君も喜ぶだろうから。」

その言葉で、寺井さんは顔を上げて

「……ハイッ！」

と言った。ウンウン、やっぱり寺井さんは笑顔が似合うね。

その後、僕と寺井さんは朝食を食べ、寺井さんが食器を洗い、僕は洗濯物を干していた。

その時、両親が起きてきた。

「昨日はそのまま寝ちまった。……おはよう。」

「そうね。……って、会社に遅刻は出来ないわね。」

そう言っ、両親は朝食を食べてから洗面所に向かって行った。

僕は洗濯物を干し終えたのでリビングに戻ったら、寺井さんが食器を洗い終えて片付けまで終えていた。

その光景を見て、僕は泣きそうになった。

そんな僕を見て、寺井さんは驚いてこっちに来た。

「ど、どうしたんですか!？」

「い……いや……な、なんでも、ないよ。ただ」

「ただ？」

「こうやって手伝ってもらったのは、初めてだなあと思って。」

その言葉に寺井さんはさらに驚いた。

「そ、そうなんですか？」

「うん。両親は僕にまかせっきりだし、変なもの買ってきそうになるし、たまにまともな買い物したと思ってたら見事に裏切られるし……」

寺井さんが絶句してる中、僕はとりあえず言った。

「家の事が大変だから自分の事なんか考えられないし、どこか遠出しようにも両親が真面目にやれるか心配だし、間違っ、ヘンなもの持って来たらそれこそ大変だから。」

そう僕が言っ、寺井さんが泣きそうになっていた。

「す、すごい苦勞をなさっているんですね。」

そう言いながら、どこからか取り出したハンカチで涙をぬぐっていた。その光景を見て、僕はこう言っ。

「言いたいことは分かってるね？父さん、母さん。」

「え？」

寺井さんが僕の見ている方向を見ると、そこには両親が立っていた。

「そんな風に私達を見ていたのか……ちょっとだけショックだな。」

「そう思われても仕方ないんじゃない？」

「もうすぐ会社。」

僕がポツリと言うと、

「連！言い訳はしないが、とりあえず戸締りはしといてくれ！」

「あなた、弁当忘れているわよ！！」

「なに！？」

と両親は慌てて準備して、会社に行ってしまった。本当はまだ時間があるのに。

両親が言った後、僕はそんなことを思いながら笑った。

そして、ひとしきり笑った後、

「僕達も学校の準備しないかね。」

と言って二階に行った。

リビングにて。

「あれ？池田君、行かないんですか？」

僕が制服ではなく私服なのに、寺井さんは疑問に思ったようだ。

僕は詳しく言う必要はないと思っているので、

「今日は遅れていくと連絡はしてるから。」

と言ってはぐらかした。

なおも疑問に思っていたみたいだけど、寺井さんは「行ってきた。」と言って学校へ向かった。

僕は椅子に座って、チラシをじっくりと見て財布の中身の確認と、戦場へ向かう準備をしていた。

教室にて。

「董。どこいったの？あんたの両親から昨日、電話があったのよ？『董はどこに居るのか知らないのか？』って。」

「あ、ごめんね、久実。色々あって……」

「ま、いいけどね。」

と言って清水は自分の席へと戻っていった。しかし、

「あいつら、懲りないのかしら？」

昨日のメンバーが中島の下にいるのを見て、清水は寺井を連れてそっちに向かって行った。

「おい中島。」

「え！？ な、なに？ 岡田君？」

「……話がある。」

「木村君も？」

「俺もだよ。」 「俺もだ。」 「ていうか、昨日お前を襲おうとした奴ら全員だな。」

「みんな、どうしたの？」

「実はな……」

と庄一が言おうとしたら、
「ちよつと男子！！ あんた達、昨日の今日でまたやろうってわけじゃないわよね！？」

「そ、そうでしたら、ゆ、許しませんからね！」

清水と寺井が割って入ってきた。

「ちようどいい。清水に寺井も聴いてくれ。」

そう庄一が言ったので二人は

「は？」 「え？」

と、間の抜けた声を出した。

状況を飲み込めていない中島は、

「なに？ みんなどうしてそんな真剣な表情なの？」

庄一たちの表情が真剣なことに疑問を持った。

そこで庄一は中島達に頭を下げてから、こう言った。

「昨日の事、あれは俺達が悪かった。首謀者は俺と圭だ。煮るなり焼くなり好きにしてくれ。」

それに続いて圭が頭を下げ、他の男子の中には土下座をする奴もい

た。

そして、

「「「すみませんでした!!」「」「」」
と言った。

謝罪された本人たちといつの間にか話に加わっていたレイジニアは、

「どうするの? ハジメ。」

「うーん。僕には被害はなかったから、別にいいよ。昨日の事は。」

「相変わらず甘いよね、元^{はじめ}。」

「いいじゃないですか。でもこれに懲りたら二度とやらないでくださいね?」

そう結論付けたという。

「分かった。一応男だ。それならいい。」

「……約束する。」

その結論を受けて、男子全員は約束した。そして、先生が来る前に自分の席に戻った。

その時に、レイジニアと中島、清水は席が一つ空いてることに気付いたが、気にしなかった。

先生が出席確認をしてる時、

「あ。今日は池田の奴遅れるんだった。理由が『家庭の事情で』だそうだ。何か知ってる奴いるか?」

と言ったが、誰も答えなかった。庄一と圭はもちろん知っていたが、言う気はなかった。

一校時目が始まる前。

「許してもらえたな。」

「……連は今頃何してると思う?」

連がいない、という事は多々あるので、二人は特に気にしていない。二年の時間が一番ひどかったと庄一は思っている。

「さあな。そんなことよりあいつが来た時に、あいつがノートを写せるようにこれからの授業を受けようぜ。」

「……だいぶお世話になっているから、それくらいなら問題はない。」

そう言って、二人は授業を受け始めた。

六月下旬のある日(12) (後書き)

友達思いの二人・・・かな？

六月下旬のある日(13) (前書き)

な、長い・・・・・・。

六月下旬のある日（13）

「まだ開店時間には早いけど、そろそろ行こうかな。さっさとしないと負けそうだから。」

そう言って僕は、戸締りをして家を出た。

そして、ついた場所はおなじみのスーパー。開店前なので人が少なかったけど、何人かの主婦たちはもういた。

この人達も狙ってきてるのかな？と僕は思いながら、その集団に近づいた。

「おや？ 久し振りじゃないか、あんた。学校はどうしたんだい？」

「久し振りですね。今日はいつものようにサボってきましたよ。」

「堂々と言えるもんじゃないでしょうに、全く。」

「学校より、今はこっちの方が大切なんですよ。あ、久し振りなんでお手柔らかに。」

「手加減なんかしないよ。前にそれやって大分かさらわれたからね。」

「そうね。子供だと思って油断してたわ。悪いけど、前回の様にはいけないから。」

近くにいた主婦の人が知り合いだったので、僕は話しかけてみた。そしたら、その隣も知り合いだったので、僕は喧嘩腰になってしまった。

「そう言う貴方達こそ、前々回はものすごくおとなげなかったじゃないですか。」

「何言っているんだい。あれが普通なんだよ。」

「そうよ。あなただって、そう言いつつ結構な買い物してたじゃない。」

そうやって話していると、自然に何を買いに来たのかという話になった。

「今日は何を買いに？」

「あたしは醤油と油。それに鶏肉と卵かな。そっちは？」

「わたしは野菜を中心に鶏肉を買いに。あなたは？」

「僕ですか？僕はですね……牛肉と野菜、魚と卵、あと醤油も。」

「結局、あんたとはやるってことだな。」

「そうですね。負けませんわよ。小さな主夫さん。」

「僕も負けませんよ。」

そう言って、僕達は今か今かと待ちわびていた。

ちなみに、開店時間は九時。その三十分ぐらい前に来ている人数は僕を含めて十人弱。この人達の狙いは、開店直後に行われる不定期・非公式のタイムセール。だから僕も学校をサボってまで来ているという訳だ。

それを知っているのは、庄一と圭のみ。特に圭にはこのタイムセールの情報を教えてもらっている。本当にいい友達を持ったよ。

同時刻、教室。

庄一と圭は、黒板に書いてることをノートに書き写していた。

圭に至っては、先生の話で必要なことも書いていた。

その授業が終わり。

「いつになく集中したな。」

「……友のためだから。」

二人はそんなことを言っていた。なんだかんだいって、友達を大切に思っている二人である。

そんな二人に、近づいてくる人がいた。

「ねえ、レンってどこにいるの？遅くなるって言ってたけど、何かに巻き込まれてないかと思って。」

「ん？レイジニアか？連に何の用だ？」

「…連なら心配はいらない。」

近づいて来たのは、レイジニアだった。それに気付いた二人は、いつもの口調で言った。

そうしていたら中島も来て、レイジニアの援護をした。

「いや、心配するって。どこに居るのか教えてくれない？」

それに対して、庄一たちは頑固だった。

「去年も似たような感じで連はいなかったけど、誰も訊かなかったぜ？今更なんだ？ヒーロー面か？」

「……理由は分かるが、本当に今更。本人にも口止めをされているから、何も言えない。」

明らかに喧嘩するようにも取れる言葉だった。

それに対して、いつの間にか寺井と清水まで来ていた。

「そんな言い方は無いんじゃない！？」

「そうですよ！酷いじゃないですか！」

二人はそのままこの話に混ざった。しかし、

「あー、やめだ、やめ。こんな話しても時間の無駄だ。さっさと授業の準備しようぜ。」

「……あいわかった。」

「それはいつの時代のセリフだ？」

と言って、二人は授業の準備をしだした。

結局、残された四人はというと、

「まったく、なんなのかしら？あんな態度で答えるなんて。」

「先ほどの態度とは大違いですね。」

「そうね。レンが遅れてくる理由を訊かれた時のあの二人の態度が、朝とはだいぶ違っていたわね。……ハジメはどう思っているの？」

「……え？あ、うーん……。あのさ、このことはもうやめない？きつと訳があるんだよ。それに」

「それに？」

「二年の頃の僕は、ほとんど何もしてなかったのと同じなのは、事実なんだからさ。これ以上は何も訊かない。これで良いという事にしようよ。」

「元が言うなら……。」「分かりました……。」「

と言って二人は引いたが、

「でも、どうして二人はあんなに攻撃的になったのかしら？」

レイジニアは疑問に思った。

それに答えたのは、話を聴いていた庄一だった。

「ああ？お前ら、友達のプライベートを細かく知ってなきや駄目なのかよ？そんな奴と友達になりたいなんて、どうかしてるんじゃないのか？」

その言葉で清水と寺井はまた怒りそうになったが、中島が

「そうだよな。詳しい事なんて知らなくても友達になれるもんね。」
と言ったため、二人は閉口した。そのかわり、

「よくわかってるじゃねえか。」

「……仲良くできそうだ。」

庄一と圭は中島の事を褒めた。

なんとなく面白くない二人はレイジニアの方を向いたが、彼女は彼女で「確かにそうね…」と言っていたので、さらに二人は面白くなかった。

それから、まあお約束というか二時間目の授業が始まりそうになったので、各々の席に着いた。

こんなやりとりがあつたことをもちろん知るはずのない連は、ただいま

「だらっしゃ——！！」

タイムセールスという名の戦場を絶賛駆け巡っていた。

『次はー、卵だ！なんと一パック三十円！！一パック三十円だよ！
一人一パック限定だ！早い者勝ちだ！』

というアナウンスを全部聞く前に、僕はその売場までダッシュしていた。

ここまでの取りこぼしはゼロ。あとはこの卵と最後の醤油のみ。

僕、これ終わったら家に帰ってゆっくり寝るんだと思ったけど、学校があるので寝ることもできないし、そんな考えしてる暇があるならとにかく卵のパックをとらないといけない。

そう考えながら、僕は卵のパックが二つ残っているのが見えたので、手を伸ばしてひとつをとった。もう一つは、開店前に話をしていた人がとった。

感慨に浸る間もなく僕は卵を買い物かごに入れて、すぐさま醤油のタイムセールスが行われる場所へ向かった。

この場所で鍛えられたおかげで、基礎体力はもちろん、走りがはやくなったし、状況判断を素早く、的確にできるようになった。

そのおかげでだいぶ体育の成績が良くなったけどね。ま、『2』が『3』になったただけなんだけどね。

話を戻そう。

今は醤油の売り場へ向かっている。ただし、僕の後ろには何十人もの主婦たちが走ってきている。正直怖い。これで体力が持たないと完全に終わってしまう。

そして、もうすぐ売り場に着くという時に、

『最後は醤油だ！一リットルの醤油一本百円だ！お一人様二本まで！もってけ泥棒！！』

というアナウンスがした。

その言葉と同時に、僕達はラストスパートをかけた。一歩抜きんでているからって、最後まで気を抜くことは許されない。その上、レジまで行かなくや買い物が終了したとは言えない。おまけに、家まで帰るのにも体力が必要だからそれにも残さなくやいけない。

だけど、僕にそんな余裕なんてあるわけもなく。真っ先に売り場につき、そのまま二本かごに入れ、僕はそのままレジに向かった。今度は走らずに、歩いて。

「ありがとうございますー！！」

僕はレジを出て、レジ袋に買った物を入れて、スーパーから出ようとした。すると、

「やっぱり手加減なんか不要じゃないか。店が開く前に言った物、全部買ってたじゃないか。」「そうですね。でも、私達も本気でやってましたよね。」

「あ、二人も終わったんですか？」

開店前に話していた二人と出会った。どうやら、二人も会計を終わらせて帰るところらしい。

「まあな。何とか全部買えたぜ。」

「私もなんとか。」

と言って、戦利品の入ったレジ袋を見せてきた。僕はそれを見て、「やっぱりすごいですね。僕もまだまだですね。」

と言うしかなかった。そんな僕を見て、

「何言っているんだい。中三でこの戦場を平然と駆け回った上に、自分で宣言した食材を全部買うなんてよ。」

「将来は立派な主夫になりますよ。それか、執事にもなれますね。どちらにせよ、あなたとはこれからも仲良くして損はなさそうですね。」

「そうだな。あたし達の太鼓判じゃ貧弱かもしれないが、誇れよ。将来が楽しみだ。」

二人は僕の事を褒めてくれた。

褒められてうれしくないとは思わなかった。何事でも褒められると嬉しいよね。

「ありがとうございます。これからもよろしくお願いします。二人とも。」

「そうだな。これからよろしくな。」

「よろしく。」

そう言って、そのまま僕達は帰っていった。

時刻は十一時。もうすぐ昼だ。弁当を家で食べてから行こうかな？

その頃庄一たちは。

「まだ三校時目か……。二校時目は自習だったから楽だったな。連は五校時目からか？」

「……今頃は終わっているはず。ただし、来るまでの準備などにより、昼休み以降から登校するのが傾向。」

「そうなるよ、まだノートは取り続けなきゃいけないな。」

「……普段お世話になっている。テスト前のノートとか、家に行くたびに料理を作ってもらったりとか、他にもいろいろ。」

「そうだなあ……じゃ、集中しますか！」

「コラ岡田！ 静かにしろ！！」

「やべっ！……すみません！」

「よし。ついでだ、この問題を答えろ。」

庄一が頑張っていた。

六月下旬のある日(13) (後書き)

やっぱり、変わってますよね。

六月下旬のある日（14）

「ただいまー。……あー、疲れた。今度はどうやって攻略しよう？」
対象はもちろん、タイムセール。

僕は、家に帰ってきたので考えようとしたけど、

「また今度でいいか。」

と呟きながら、買ってきたものを冷蔵庫へ入れ、学校へ行く準備を
しだした。といっても、制服に着替えるだけなんだけどね。

着替え終わって。

この後はいつも通り普通に登校するだけなんだけど、タイミング
があるんだよね。

どうしよう？と思ったけど、構わず学校へ行くことにした。いつも
昼ごろに学校へ行ってるから庄一たちに迷惑をかけてるんだよね。

僕は、疲れがたまっていると自覚しながら学校へ向かった。

弁当はちゃんと持ってきてるよ？

三校時目が終わり、四校時目が始まった。

「あいつ、こんな時に限って学校へ来そうなのがするな。」

「……同感。」

そして、それが現実になった。

最初に見つけたのは、庄一だった。

「ん？」

「……どうした？」

男子は校庭で行っていたので、校門がよく見える。なので、校門前
に人がいることも分かる。

「連が来た。」

「……何？」

庄一のセリフに、圭も校門を見た。

ちなみに、今回の体育はソフトボール。庄一と圭は同じチーム。

守備も外野。なので、それなりに校門の方へ目を向けられる。

「……本当だ。」

「あいつ、無理して来てそうだな。」

圭が確認したので、庄一は心配そうにした。そんなことをやっている、

「岡田！ いったぞ！」

という声とともに、ボールが飛んできた。フライの形で。

庄一には特に何も力はない。だが、

「あらよつと。」

簡単にボールをキャッチした。そして、

「ほら一塁！」

と言って、一塁へと直接投げた。ちなみに、庄一はライト、圭はセンターを守っている。一塁を守っていた人は、その球を取りこぼさずにキャッチした。しかし、球威が強過ぎたのか、キャッチしてアウトにした後、手が痛くなったとかで保健室へ行くことになった。

「……加減は？」

「したさ。やっぱり、連かお前じゃないと本気で投げねえよ。」

「……それは俺達に死ねと？」

「そうじゃねえよ。」

と言っていたら、校門を開けてトコトコと歩いてくる人がいた。それが連だった。

連は、体育の授業中だというのに自然体で歩いていた。たまに球が飛んでくるのにもかかわらず、ちよつと足を速めただけで簡単に避けられた。

すでに始まっているので、先生が連の所へ行き、「お前、さっさと着替えてこいよ、って言いたいが、大丈夫か？ 昨日までは元気だったのに何があったんだ？」と訊いて、連が「疲れがたまっていたのか寝坊しまして。ついさっき起きたばかりなのでそう見えるんでしょうね。」と言って先生から離れて校舎の中へ入っていった。それを見ていた庄一は、

「庄一！お前、一塁守れー！」
という声を聴いていなかった。

四校時目の体育の授業中に来た僕は、最初に職員室へ行って担任の先生に報告して（丁度空いてる時間だった）、自分の教室へ行き、もうすぐ終わりそうだと時計を見て思ったので、そのまま教室に残ることにした。

さて、残ったのはいいけど………

「なにしよう？」

勝手に庄一たちの机を漁るのは悪いからノート写せないし、誰もいないから何もできない。

こうなったら………

「本でも読もう。」

昨日買った水蓮さんの新作『日常が変わった日』。これを学校へ持ってきていたので僕は読むことにした。

数分後。

結局、ちよつとしか読めないで授業が終わった。まだ冒頭なのに。

僕はおとなしく弁当の準備をして自分の席で待っていた。

そうしていたら、ぞろぞろと女子が来てしまった。それを見た僕は、

（ちよつとお—————！！！！）

と思って、反射的にベランダに出た。そしたら、そのまま意識を失った。……って、あれ？さっきので体力切れ？そう思うことなく、ベランダで倒れてしまった。

連が教室にいることを知らない女子は、教室の前に来た。その時に教室から物音がしたので、全員ドアの前で止まった。

「だれかいるのかしら……？」

「もしかして、不審者かしら？」

「開けてみませんか？」

寺井の提案で、清水はドアを開けた。しかし、窓が一つ空いている

だけで、そこには誰もいなかった。

「逃げた・・・？」

「だとしたら物凄い手練れじゃないかしら？」

「みなさん、何かとられてるものが無いか確認してください。」

レイジニアと清水は教室にいた人間がどこに行ったのか疑問に思っ
て、寺井は何か盗まれたものが無いかを女子のみんなに呼びかけた。
女子全員が自分の荷物を確認していると、男子が戻ってきた。

「そういうや、結局連のやつ授業に出なかったな。・・・ん？」

「・・・無理もない。授業時間が少なかった。・・・何かあったのか？」
庄一と圭が先頭になっていたので、まず二人がその状況を見た。そ
して、残りの男子も次々と教室の状況を確認した。そして中島が清
水に訊いた。

「ねえ久実。何があったの？」

すると清水は、

「私達が教室に戻って来た時に、物音がしたから誰かいるのかと思
ってドアを開けたら誰もいなくて、何か盗まれているものが無い
か確認してるところよ。」

と状況の説明をした。

その説明で中島は悩み、庄一と圭はピンときた。

「圭、ひよっとすると・・・」

「・・・多分、それで合ってる。」

二人は誰にも気づかれないように話してから、そのまま自分たちの
席、つまり窓が開いていた席の近くまでいった。

その光景を見た中島達は疑問に思いつつもついてきた。なぜだ
か、この二人についていった方がいい、と思ったからだ。

窓まで近づいた庄一は、いきなり窓の外、ベランダを覗き込んだ。
そして、

「圭、どうする？保健室まで連れてくか？」

と圭に確認し、圭は、

「・・・起きなければ連れて行くしかない。」

と、ベランダを見ないで言った。

訳が分からない四人は、中島が代表して訊いた。

「誰かいたの？もしかして、久実が言っていた人？」

対して、庄一は歯切れが悪そうに言った。

「あゝ、不審者でもなんでもないから心配するな。ただ単純に力尽きただけだろう。」

その後、誰が起こすかでジャンケンをして圭が負け、圭がベランダに行ったのを見て清水が質問してきた。

「誰がいたのよ？」

その質問にも歯切れが悪そうに答えた。

「あゝ、うゝ、答えなきゃ駄目か？」

「当たり前でしょ？」

そうしていたら、

「……起きろ。両親がタヌキの置物を買ってきてるぞ。」

「……起きない。庄一、保健室。」

「……起きない。庄一、保健室。」

「やっぱりか。面倒なことしやがって。」

そう言って、清水の質問には答えずにベランダへ向かった。清水は怒りそうになったが、中島が何とか制し、収まった。

そして、庄一たちがベランダから戻って来た時にクラス全員が理解した。この騒動の犯人を。

「分かったか？という訳で、こいつを保健室へ連れてくから。圭、弁当持ってきてくれ。」

「……連のは？」

「……一応持ってきてくれ。起きるかどうかわからねえけどな。」
そんなやりとりを行った後、庄一は連をおんぶして、圭は三人分の弁当を持って、教室を後にした。

残された全員はしばらく呆けていたが、はっとして全員弁当を開きだした。

しかし、中島達はというと、

「でも、どうして池田君が倒れていたの？」

「体育の途中に来たけど、池田君、とても疲れてたように見えたよ。なにかあったのかな？」

「それに、遅れてきた理由も分かりません。」

「ここは訊くしかないのでしょうか……朝の件もあるから訊きづらいわね。」

「とりあえず、どうしようか？」

この件について考えていた。

六月下旬のある日（14）（後書き）

疲れた体に鞭打つて、人間としてはやっちゃいけないですよね。

六月下旬のある日（15）

保健室に着いた庄一たちは。

「過労による軽い貧血ね。一応魔法をかけといたから、六校時目には間に合うんじゃないかしら？」

「ありがとうございます。美沙紀先生。」

「いいのよ。保健室を担当してるから、当然よ。……それにしても、中学三年生の疲れ方じゃないわね。一体何をすればこんなに疲れるのかしら？ 疲労と心労が、どっちも同じような感じになるなんて。」

「……そこまでは分かりません。」

圭がそう言うと、美沙紀は笑って「そうかもしれないわね。」と言った。

そして、そこで二人は弁当を食べ始めた。

「教室で食べてほしいのだけど、仕方ないわ。」

それを見た美沙紀は苦笑して自分の弁当を食べ始めた。

ここの保健室の先生は藤原美沙紀。魔術師である。といっても、彼女の得意魔法は『回復』。だからこの職業に就いたみたいだ。年齢は二十代前半。保健室の先生とは思えないぐらいスタイル抜群なので、彼女見たさで保健室へ来る生徒も多く、また、先生に告白先生も多い。

しかし、彼女はそれをことごとく断っている。理由は『ピンとこないから。』。

庄一たちがテーブルで弁当を食べ、美沙紀は自分で使っている机で弁当を食べていた。連はベッドで寝ている。

時々、庄一たちが美沙紀に目を向けたりすると、美沙紀もそれに気付きにつこりと笑う。その笑顔に二人は赤くなり、弁当を食べるスピードが速くなった。

そうしていたら、

「……ん？ 保健室？ ということは、寝ちゃってたの、僕？」

連が起きて、状況を確認していた。そのことに先生は驚き、庄一と圭は弁当を食べるとを止め、連がいるベッドの所へ行った。

「少しは休んで来いよ、連。」

「……倒れるなら家で休んでからでいい。」

「二人ともありがとう。……それにしても、なんだか体が軽いんだけど、なにかした？」

庄一と圭が、連にそう言うと、連は先程の疲れがなくなっていると感じ、何をしたのか訊いてきた。それに答えたのは美沙紀だった。

「無理しちゃだめよ。疲労回復の魔法をかけただけだから。疲れがとれたとしても、六校時目までは安静にしてね。」

それに対して、連は上半身を起こして三人にお礼を言った。

「ありがとうございます。」

それを見た庄一と圭は一安心して弁当を食べ始め、その時に連の弁当を本人に渡した。

連はそれを受け取った後、庄一たちのいるテーブルへ行き、自分の弁当を食べ始めた。

「仲がいいわねえ。」

と、美沙紀先生が、僕達と一緒に食べている姿を見ていった。

それに対して、僕達は笑っただけで何も言わなかった。というか、先生なのに際どい服装ですね。

そうこうして食べていたら、保健室にまた人が来たみたいだった。それを見て先生は、

「今日はいつもより少ないわね。」

と言って僕たちを驚かせた。いつもはどのくらいの人数が来てるんだろう？と疑問に思ったけど、面倒なので考えなかった。

そして入ってきた人たちを見て、僕達は驚いた。

「中島達か。さっきの件か？」

「……朝と同じことを訊くなら、黙秘と強硬手段に出る。」

「朝？さっきの？二人とも、何言っているの？」

庄一と圭の言うことに、僕は全く覚えがなかった。さっきって、僕が倒れたことと関係があるのは確かだろうけど、さ。

それを受けて清水さんはこう言った。

「……さっきの件の真相が分かったわ。池田君。あなたは学校へ遅れて、そのまま教室にいたところで私達が来て窓から逃げた。その時に疲れてたのか、そのまま倒れた。そうでしょう？」

「うん。そうだよ。」

僕がそう答えたら、清水さんが謝った。

「ごめんなさい。」

「え？」

「私の早とちりのせいで、あなたの印象が悪くなったみたいだから。」

「そうなの？」

と僕が訊くと、二人とも首をかしげた。それを見て何が気に入らなかったのか清水さんは、

「そう！だから謝るわ。ごめん。」

と言った。頭を下げられるのには慣れていないので、

「別にいいから！頭を下げなくて！」

と僕は言った。それで許してもらえたと思ったのだろう。さっきとは打って変わってこう言ってきた。

「そう？ならここでお弁当食べてもいいかしら？私達も。」

僕に訊かないで美沙紀先生に訊いてよ。と言いたくて先生を見たけど、無視された。

ここの管理はあなたがしてるんですよね？とすぐさ思った。

僕が何も言わないのを肯定ととったのか、中島君たちも座らせて、このメンバーで昼食を食べることとなった。

席順は、僕から時計回りに行くと、レイジニアさん、清水さん、中島君、寺井さん、圭、庄一の順。庄一は何やら不満顔だったけど、それを気にせず食べ始めた。

黙々と食べていると、中島君が僕に訊いてきた。

「遅刻の理由って、寝坊？」

「時間があって二度寝したらもう十一時半くらい。そのまま慌てて準備してって感じだね。」

「あれ？でも先生には『家庭の事情で』って言ってたんだよね？」

「ああ、あれね？いろいろあるんだよ、僕の家はね。」

そう言ったら、中島君は何も訊かなくなった。

再び沈黙。

すると、寺井さんの表情が気になったのか清水さんがこう言った。

「葦。なにやら晴れ晴れとした顔だけど、どうかしたの？」

「え！？な、なんでもないですよ！？」

寺井さんって隠し事苦手なのかなあと思いながら、僕に飛び火しなければいいなあと思って食べ続けた。

寺井さんの態度が気になったのか、レイジニアさんも会話に加わった。

「思えば、朝から態度はおかしかったわね。それに、昨日家にいなかったんでしょ？どこにいたのかしら？」

それに対して寺井さんを援護したのは、中島君だった。

「僕の家だよ！」

中島君……君は男だね。みてよほら、寺井さんは顔を真っ赤にしてるし、レイジニアさんと清水さんは完全に怒ってる。僕達はどうと、

「ま、いつものことだな。」

「あれ？便乗しないの？」

「……今朝の約束。」

傍観を決め込んだ。

だって、あの中に入る時点で自殺行為だからね？そして、それが分からないほど僕達は馬鹿じゃない。なので、おとなしく観てることにした。

口論はヒートアップしていった。

「嘘よ！昨日、元^{はじめ}に電話した時『家には来てないよ。』って言って

たじゃない!!」

「そりゃそうだよ! 堇が『誰にも言わないで。』って言ってたんだから!」

と、ここで、レイジニアさんがあることに気付いたみたいだった。

「ねえ、スマレ。」

「なんですか?」

「あなたの弁当とレンの弁当、ところどころ同じような気がするのだけれど……気のせいかしら?」

おおっと! これはマズイ!! そう思ったけど、うかつに口を挟むと自爆しそうなので、我慢した。そしたら、清水さんが冷静になった。

「そうね。よく見たら池田君のお弁当と堇のお弁当が似てるわね。」その言葉で寺井さんはオロオロしだし、中島君は緊張した面持ちで、僕は気にせずお弁当を食べていた。今までの授業のノートを写さないといけないからね。

そして、

「ねえ堇。そのお弁当のおかず、食べていい?」

と清水さんが言った。対して、寺井さんはどうしようか悩んだみたいだけど意を決したらしく、

「駄目です。」

ときっぱり断った。それには清水さんも驚いたみたいだけど、何も追及しようとはしなかった。

そろそろみんな食べ終わる頃に、圭が思い出したかのようにこう言った。

「……そういえば」

「どうかしたの?」

「…連。昨日あの小説、届いた?」

「うん。まだちょっとしか読んでいないけどね。」

「お前ら好きだなあ。」

「あの小説って?」

僕達が小説の話題で話していると、レイジニアさんが訊いてきた。

「……題名は『日常が変わる日』。作者は水蓮。それほどメジャーではないが、売り上げは合計二十万部突破。一部熱狂的ファンの間だと、デビュー作品である『虚空の暮らし』の初版は一冊四十万くらいで取引される。……何でもない。」

圭の詳細な説明はいつもの事だから僕達は慣れたけど、中島君たちは驚いていた。

「アウトだ。」

だったら言わなくていいんじゃない？と言いたかったけど、済んだことだから気にしない。

そうこうしてる内に五校時目が始まりそうになったので、

「先生、ありがとうございました！」

「失礼した。」

僕達が保健室を出る時に、美沙紀先生からありがたい言葉が。

その後の授業は、自習の時に一校時目と三校時目のノートを写し、授業の時は普通に受けた。

放課後は、寄り道もせずに家に帰り、洗濯物を畳み、夕飯を作り、寺井さんの荷物は中島君と一緒に寺井さんが回収しに来た。夕飯を食べた後は、風呂を沸かし、家計簿をつけ、両親が帰ってきて夕飯を食べ、食器を洗い、風呂に入って、寝た。

110

てよかったと思いつつながら。

六月下旬のある日（15）（後書き）

今回で、六月下旬のある日の話は終わりです。次は、ちょっとした閑話でもありますか。

閑話 とある休日 池田連編その1 (前書き)

これからちよくちよく入れます。

閑話 とある休日 池田連編その1

休日。僕にとってそれは安らぎの時間。だけど、必ず体が休まるということではない。

僕の朝は休みだろうと関係なく午前五時半に起きる。

「ふぁゝあ。今日は休みなのになぁ。でも両親は仕事だからなぁ……」

そう呟きながら、僕は着替えて一階に下りる。

一階に下りたあと、まずリビングに行き、僕は冷蔵庫から昨日の夜に下準備した両親の昼食用の料理を作り始めた。それが終わると、朝食を作っていた。

昼食は弁当箱に入れ、朝食はキッチンに近いテーブルに並べていった。いつものことだ。

この時午前六時。僕は次に洗濯物を干しに行った。干している最中、両親が起きてきた。

「おはよう、連。」

「今日も早いわね。」

二人ともパジャマ姿で起きてきた。髪が寝癖でひどいことになっているのを見て、会社ではすごい人なのになぁ、と僕は思った。

洗濯物を干し終えて、三人で朝食を食べた。本当はもう一人いるのだけれど、どこかへ行ったきり家に戻ってきていない。無事だっことはわかってるんだけどね。

朝食を食べ終え、僕は調理に使った器具と一緒に食器を洗い、両親は顔を洗いに行った。

「「行ってきました。」」

そう言いながら、両親は家を出た。

両親を見送った後、僕は家の部屋を掃除することにした。これか

らのことを考えながら。

「えーっと、今日は買い物以外は特に予定ってなかったはずだから・
・・・・。お？もしかして、久しぶりにのんびりできる時間が発
生した！？やった！」

僕は掃除をしながらそんなことを言った。それと同時に、そうい
った時間っていつからなかったんだろうと記憶を探ってみた。

そしたら何とびっくり！中学一年の夏休み以来、そういった時間
が一切なかった！

その事実泣きそうになりながらも、僕は掃除していった。

「あゝ終わった、終わった。これでゆっくりできる。」

掃除し終えた僕は、ソファに寝転がりながらそうつぶやいた。

こうやってだらけるって幸せだなあ、と絶対ほかの人が見たら驚
く格好で寝転がっていたら、急に電話が鳴った。

チッ。誰だよこんな時に。そう思いながら、僕は電話に出た。

「もしもし？」

『よお、連・・・・・って、こわっ！不機嫌オーラが電話越し
に感じるぜ。』

「それがわかってるなら用件を言ってくれないかな、庄一。」

『わ、わかった。圭が新しいゲームソフトを体験した感想を言っ
てくれて。報酬は出すそうさ。』

「ベータテストだね？だったら圭の家で・・・・・って、駄目
か。圭は内緒にしてるんだっけ。」

『そう。で、俺の家はゲームなんて買っといたら怒られるんだよ。
頼む！お前の家でやらしてくれないか！？』

「・・・・・ハア。いいよ、まったく。そのかわり、昼食は
何も作らないからね。」

『助かる！じゃ、今から圭に電話してお前の家に集合させる！じゃ
！』

そういって、庄一は電話を切った。

閑話 とある休日 池田連編その2

庄一が電話を切った十分後、インターホンが鳴った。誰だか見当はついていただけど、

「はーい。どちら様〜？」

と、わざとらしく玄関に向けていった。そしたら、

「来たぞ〜。」

「・・・開けてくれ。」

庄一と圭の声がした。

ま、分かってたけどね。そう思いながら、僕は玄関のドアを開けることにした。

「お邪魔しま〜す。」「・・・邪魔する。」

玄関を開けたら、二人が入ってきた。僕は若干不機嫌な気持ちを隠せないまま、上がるよう促した。

リビングにて。

「連、悪かったって。だから機嫌直せって。」

「・・・このゲームをやれば、ストレス解消になると思う。」

「たまの休みなんだから、ゆっくりしたいんだけどなあ。それと、基本的に僕ゲームやらないんだけど。」

「・・・だから、連にやってもらう。このゲームは、ストレスがたまっている人向けのゲームだって言ってた。」

「ふ〜ん。」

そう言って圭が僕に見せたゲームのタイトルは、『鬱憤晴らし』。その名のとおりに、ストレス発散させるためのゲームらしい。

その言葉を聞いた庄一は、

「あれ？そしたらどうして俺は呼ばれたんだ？」

そう言って首をかしげた。すると、圭がもう一本のソフトを取り出した。

「これは？」

「・・・新作『地獄めぐり』。」

圭曰く、間違っただけで地獄に落ちた主人公が、門番たちや地獄に落ちたものたちと戦いながら、現実へと脱出する話。

「俺はこれをやれと？」

「・・・そう。」

そのやり取りを聴きながら、僕は圭が持ってきたソフトをゲーム機に入れた。どんなゲームができるのか、ちょっと楽しみだった。

閑話 とある休日 池田連編その2 (後書き)

まだ続きます。

閑話 とある休日 池田連編その3

数十分後。

「どりゃあー!!ぶっとべー!!」

「連って、普段どれだけストレスたまってるんだろうな?」

「・・・ここまでとは思わなかった。」

すっかりはまった僕を見て、庄一と圭はそうつぶやいていた。

いやゝ、すっきりするねゝ。こんなゲームでないかなゝ?

などと思っていたら、どうやら試作品が終わってしまったらしい。

これで終了します、という字幕が出てしまった。

せっかく調子乗ってきたのになあ。

残念に思いながら、僕はソフトを取り出した。

「・・・感想は?」

「すっかりはまったよ。完成したらやりたいね。ただ、ちょっとゲームの内容が物足りなかったかな?」

「・・・それは参考にしとく。」

そう言っ、圭はソフトを受け取り、僕は封筒を受け取った。

「よーし。次は俺だな。」

そう言っ、庄一は『地獄めぐり』のソフトをゲーム機に入れた。

それからのことは、あまり思い出さたくない。唯一いえる事は、やり終わった庄一がそのソフトを壊そうとするのを、僕たちが必死に止めに入っったということぐらいかな。

そして、お昼。僕はあらかじめ昼は作らないといったので、庄一と圭はコンビニで買っってきたみたいだった。僕は、冷凍食品を解凍して食べることにした。

「手抜きだな。久しぶりに見た気がする。」

「・・・いつもは客がいると作っってくれる。余程のんびりしたいと見る。」

そりゃそうだよ。たまの休みなんだからね。僕だっ、てゆっくりした

いんだ。

そう思いながら、僕は昼食を食べていった。庄一と圭も食べていった。

昼食を食べ終え、これからどうするか話し合うことにした。

「これからどうする？」

「・・・帰る？」

「そうしてくれるとうれしいんだけど。」

「何かあるのか？」

「買い物ぐらいで何もないよ。ただのんびりしたいだけだよ。」

「・・・本音がダダ漏れ。」

圭にだけは言われたくないんだけど。

そう思ったけど、僕は何も言わずに先に進めることにした。

「で、どうするの？」

「・・・俺は帰ってから報告する。」

「じゃあ俺は、家まで散歩するか。」

ということで、二人は帰っていった。

二人を見送った後、僕は三時まで寝ていた。というか、気づいたら三時になっていた。

僕は買い物に行かないとやばいと思い、財布を持ってスーパーに向かった。

閑話 とある休日 池田連編その3 (後書き)

まだ続きます。

閑話 とある休日 池田連編その4

スーパー店内にて。

僕は中島君とぼったり会った。

「やあ、池田君。どうしたの？ 買い物？」

「そういう中島君は、またおつかい？」

「そうなんだよ。全く、すっかりで買い忘れたものを息子に買いに行かせないでほしいんだけど。」

そう言いながらため息をつく中島君。

「それぐらいならいいさ。それじゃ。」

「え？ あ、うん。じゃ。」

僕の言葉に疑問を感じたのか中島君は首をかしげたけど、僕はそんなことを気にせず、買い物が続けていった。

スーパーで買うものを買ったので、店を出た。そして、次に商店街へ向かった。スーパーが家から遠く商店街が家から近いので、スーパーから商店街へ行くと帰り道が楽になる。

「へいらっしやい！ どれにする？ 連！！」

商店街について真っ先に向かった店が、八百屋。こっちのほう野菜が安いから、僕はここを利用している。たしか・・・小学一年生からここで買い物をしていた気がする。食材を買いに。

僕は並んだ野菜を見ながら、今日と明日に使う野菜を選んでいった。

「まいどあり！」

ちよつと涙目になりながらも、八百屋のおじさんは笑顔を絶やさなかった。

ちよつと値切りすぎたかなと罪悪感を覚えながらも、僕は次の店へ向かった。

買い物を終えて僕は家へと帰ろうとしたら、ミネルバさんがと誰かが喧嘩してるのが見えた。

まだ人だかりはそんなにできていないから問題はないけど、これから人だかりができそうな予感がしたので、僕は止めることにした。「ミネルバさん、どうかしたの？」

「あ、連じゃないか。いやな、こいつが私に訳の分からないことを言ってくるから反論したら聴く耳持たない、って感じで突っかかってくるんだよ。どうにかしてくれないか？」

そう言って指差した先にいたのは、

「あ、レン！こいつに近づいてはダメよ！すごい邪悪なアンドロイドなんだから！」

「レイジニアさん？どうしてここに？」

そう、レイジニアさんだった。しかも、ちょっと臨戦態勢な状態で。「そんなことは関係ないわよ！こいつは—————」

「レイジニアさん。ちょっと落ち着いて。ミネルバさんはこの駄菓子屋で働いてるだけだから。前に似たようなものを見たのかな？」僕がそう言うと、レイジニアさんは二の句が継げなくなった状態で、ミネルバさんを見た。確認をする意味合いが強みたいだ。

その視線に気づいたミネルバさんはこう言った。

「あたしに似た奴が居たっていうのは本当だろうな。なんたって、百体くらい作られたからな。」

「そ、そうだったの。……ごめんなさい、人違いであんなこと言っただけ。」

ミネルバさんの言葉を受けて、レイジニアさんは素直に謝った。それを聞いたミネルバさんは、

「いいってことよ。あたしは気にしてないから。」

そう言って快活に笑った。

ミネルバさんは大人だなあと思いながら、僕は「これで終わったことだし、帰るね。」と言って帰ろうとしたら、

「ちょっと待ってくれないかしら？」

レイジニアさんにつかまった。

「なに？レイジニアさん？」

「ちょ、ちょっと頼みがあるんだけど。」
そう言ってレイジニアさんは僕を引っ張っていった。

閑話 とある休日 池田連編その4 (後書き)

もうしばらく辛抱してください。

閑話 とある休日 池田連編その5

「どうしたの？ 一体？」

レイジニアさんに引ッ張られて裏路地に連れてかれた僕は、当然の疑問を口にした。

そしたら、レイジニアさんがちょっと恥ずかしそうに言った。

「そ、その、ちょっと買い物に付き合ってもらえないかしら？」

「え？ どうして？」

そう僕が訊くと、恥を捨てたのかレイジニアさんがこう言った。

「食料がなくなったからよ。」

その言葉があまりにも堂々としていたので、僕はちょっとだじろいでそんなになる前に食料買えよと素直に思った。レイジニアさんの言葉はまだ続き、

「だから、ちょっと手伝ってもらえないかしら？ 連って、料理うまいから。」

そう締めくくった。

僕は、深く考えないで「うん、いいよ。」と言って手伝うことにした。

「まず何から買うの？」

「まずは……やっぱり肉かしら？」

そうレイジニアさんが言ったので、僕は精肉屋に案内した。

「いらっしゃ……って、連と……彼女か!？」

「違うよ!？ 同じクラスのレイジニアさん。買い物を手伝ってるだけなんだよ。」

「ちえ。面白くねえな。……まあいい。で、嬢ちゃん。何がいい？」

精肉屋のおじちゃんがレイジニアさんにそう訊くと、彼女は何種類の肉を買っていった。ちなみに、どこで覚えたのか知らないけど、レイジニアさんは値切りができるようだった。

そんなことを各店で行った結果。

「結構安いわね、ここ。」

「結構大量に買ったね。」

レイジニアさんは買い物上手でした。これって僕の手伝い必要ないんじゃない……？

そう思っていたら、

「ありがとうね、レン。」

「え？」

レイジニアさんにお礼を言われた。

「どうして？」

「だって、あなたのおかげでスムーズに買い物できたもの。それに、あなたとの買い物、楽しかったわ。」

そう言いながらレイジニアさんは笑った。その笑顔がとても魅力的だったので、ちょっと心臓の鼓動が早まった。

「あら？顔が赤いわよ、レン？」

「あ、赤くなってないよ！」

僕がそう反論しても、レイジニアさんは笑って何も言ってくれなかった。

結局、僕の弁解を聞かずにレイジニアさんは帰っていった。まったく。

家に帰って冷蔵庫に食材を入れ、夕食を作り出した。（洗濯物はスーパーへ行く前に込んだ）夕食を作り終えたら、自室へ戻って家計簿を持ってきた。そして、家計簿を書き始めた。使ったお金はチキンと書かないとね。

家計簿を書き終えたら、ちょうど両親が帰ってきた。

「「ただいま。」」

「お帰り。」

僕が弁当を洗っている間、両親はいつものようにビール片手に夕食を食べていた。そして、僕が風呂を沸かしに行って戻ったら、両親

は酒盛りをしていた。その中で、僕は夕食を食べていった。

両親が風呂に入ってる間、僕は食器を洗って片づけたあとに朝食と昼食の下準備をしていった。

それが終わったら、僕も風呂に入って寝た。

今日はいつもよりゆっくりできてよかったなと思いつつながら

閑話 とある休日 池田連編その5 (後書き)

次から三章、夏休み編です。

三 夏休み（七月下旬～八月末日）

夏休み。僕達がとても待ち望むもの。この夏に彼女つくるぜー！
と言っていたクラスの男子がいるほど、浮かれる人が多いもの。

そんな中、僕達はどうと………。

「あっちい。本当にここに来る必要があるのか？圭。」

「……必要。毎年ここに来てから。」

「それにしてもさ、圭が誘うなんて初めてじゃない？」

圭に誘われて、デンタツというところに来ていた。

名前ぐらひは聴いたことはあるんだ。確か……………。

「……デンタツ。俺達が住んでるところから新幹線で二時間の場所。ここは情報が飛び交う地域。電子機器を取り扱う店が数多くある。それはこの世界の中では一番の数。さらに、近くには海があるので、貿易地域としても名が高い。ちなみに、泳ぐことが可能なので、観光欲が泳いで帰ることが多い。美人も多い。」

「マジで!？」

「無駄に細かい説明ありがとうね、圭。」

「…無駄じゃない。」

失礼。細かい説明ありがとう、だった。

「それにしても、こんなところに何の用なんだ？」

もつともなことを庄一が訊いた。

ちなみに、僕達の服装は半そで半ズボンで帽子をかぶっているという、普通の服装。目立ちたいと思わないからね。

あ、両親は仕事のはず……だけど、心配だな。なんたって泊りがけで来てるんだから。僕がいなくてちゃんとできるのかな？と思ったりする。

泊りがけって言うのは、圭が誘ってきたときに言ったこと。ただで何泊も泊まれるから行かないかと圭から提案された時はどうしよ

うか悩んだけど、庄一に「たまには羽を伸ばすのも悪くはねえだろ？」と言われ、行くことにした。両親には言っている、何とか自分たちでやってもらいたい。

「……定例会。」

庄一が訊いたことに圭が答えたのは、簡単なものだった。

「定例会？という事は圭だけだよ？参加するのは。」

「……そう。だけど、今年はあっちから『友達も連れて来ていい。』と言ってきた。」

「だから俺達を誘ったんだな？」

庄一の言葉に、圭は頷いた。

「それにしても、どうして僕達呼ばれたんだろ？」

「さあな。でもただで泊まれるんだ。行っても損はないだろ。」

「交通費は自腹だよ。」

「そうだけどな。」

とやっていたら、

「……ついてこい。」

と圭が僕達を促し、僕達はおとなしく従った。

三 夏休み（七月下旬～八月末日）（後書き）

感想をお待ちしております。

夏休み（七月下旬～八月末日）（2）

「ついたわね。」

「いい天気ね。」

「そうですね。」

「なんで僕がみんなの荷物持たなきゃいけないの……？」

連たちがデンタツに着いた後、中島達も同じく到着した。

「久しぶりの休みなんだからつべこべ言わない！！」

「でもハジメの言う事はもっともね。じゃあ、私の荷物返してくれない？」

「はい、レイジニア。」

「あ。私のも……」

「はい、堇。」

「……………」

一人だけ荷物を持たせている罪悪感か、それとも優しくない女だと思われるのが嫌なのか——絶対に後者だろうが——清水は、

「やっぱり自分で持つわよ！！」

と言って、自分の荷物をひったくった。

「どうしたの、久実？いきなり。」

「いいじゃない！あんたに持たせたら盗まれそうだから自分で持つことにしたの！」

恥ずかしさを誤魔化すように、清水はそっぽを向いて言った。

急に態度が変わった清水を見て不思議に思ったが、中島は考えることをしなかった。

「じゃ、行こうか。」

中島の言葉で、みんながついていった。

このあと、ひと騒動起きることを知らずに。

「……着いた。」

「だいぶ歩いたが、目の前にあるビルは何階建てだ？」

「……四十階。」

「この名前、何？『ヒューマニステーション』って。」

「……この名前。基は貿易会社だったが、今では本社を別の所へ置き、ここはホテルとして活用されている。交流の場でもあり、会場でもある。俺の名でここを使うと、何重もの本人鑑定が行われる。」

「へえ。」

「って、庄一。危うく流そうとしてたけど、結構凄い事だからね？」

「……入る。」

と言って、圭が先に入ってしまったので、僕達も後に続いた。

「「「いらっしゃいませ。」」」

僕達が入ったら、スタッフの人たちが出迎えてくれた。そして、圭の顔を見たら血相を変えてみんな散り散りとなった。

「……あれ？」

ちょっとみなさん。置いてかれると困るんですけど。

そう思っていたら、フロントの方から一人の壮年の男が出てきてこっちに来て僕達の前に来た。その人が圭に向かってこう言った。

「久しぶりだ、圭君。本当に友達を連れてきたのかい？」

「……一年振り。そっちがいいと言った。それに、前々から一緒に来させようと思っていた。」

圭との会話を聴いてると、どうやらこの人は圭の知り合いで、定例会に出る人みたいだ。

その人が僕達に気付いたみたいで、自己紹介してくれた。

「初めまして。池田連君に岡田庄一君。私の名前は黒曜甚平。このホテルのしがない雇われ店長で、圭とは知り合いみたいなものだ。よろしく。」

「よろしくお願いします。」

「よろしく。」

僕達の名前は、おそらく圭が話したか、自分たちで調べたのかのどちらかだろう。だから、僕達は自己紹介をしなかった。

黒曜さんは、「とりあえず、場所を移そう。」と言って、圭が普段使っている部屋へと案内してくれた。使っているというよりは、割り当てられている部屋と言った方がいい、と圭は言っていたけど。部屋に案内される間、僕達は黒曜さんと話した。話した内容は他愛もない世間話だけど、友達同士の噂話というよりは、どれも裏付け、確証がある話だった。

圭はどんな人達とつるんでいるのか、僕は興味を持ったけど、知らなくても良いと思ったので本人に訊かなかった。

「着いた。ここが圭君の使っている部屋だ。」

と言って黒曜さんが案内してきた部屋は、中学三年生が絶対に使わないという以前に、大人になっても使う機会がないんじゃないかと思う部屋だった。

なんと三十五階の一室、しかもかなり広い、いわゆるVIP用の部屋。三十五階以降は、こういう部屋しかなく、しかも一階に部屋が二つしかない。一泊するのに何百万もかかるんじゃないかと思ったら、急に膝が震えだした。高所恐怖症でもないのに。

庄一を見ると、同じく膝が震えていた。恐らく、圭が毎年こんな部屋を使っているのに驚きすぎたのだろうね。

一方圭は、「……毎年毎年、ここで一人だったから凄いい暇だった。」と言っていた。あと、「……慣れると真新しさがなくなって、つまらなくなった。」とも。

黒曜さんはお辞儀をしてから、

「では圭君。定例会はいつも通りに。他のお二人は、ここにいるかホテル内を出てください。」

と言って去っていった。

僕達、ここに来たのは初めてなんだけど……。

そう言いたかったけど、何も言ってくれないだろうから言わなかった。

夏休み（七月下旬～八月末日）（2）（後書き）

友人の知らない一面を知った時、あなたはどうしますか？

夏休み（七月下旬～八月末日）（3）

黒曜さんが部屋を出て。

僕達は、この後どうするか話し合うことにした。

「このあとどうする？」

「…道案内する？」

「それでも良いと思うよ。」

「定例会はいつから始まるんだ？」

「…午後七時から一時間。それを二十七日間。」

「長いね。」

「…そのうち、全員が集まるのは十日間。」

「なんだか面倒だな。その間はここにいて事だろ？」

「…そう。だから一年でここが詳しくなる。」

「結局、どうしよう？」

それで悩む僕達三人。すると、面倒になったのか庄一が、

「だ——！！こうなったら海行くぞ、海——！！」

と言い出した。僕達はどうと、

「もう昼だよ？」 「…昼食べてから？」

バラバラだった。しかし、これで決定したようで、

「昼食ったら海——！用意していくぞ！」

と庄一が言った。

ヤレヤレ。

昼食は、圭曰く「穴場」と言われる場所で食べた。場所はホテルのすぐ近く。外食なんて久し振り、その上友達なんて初めてだったけど、とてもおいしかった。この味を忘れたくなかったので、手帳を取り出してメモしてたら、店長らしき人が僕のメモを見て驚いていた。なんで驚いていたのか訊いてみたところ、「使っている材料、隠し味を全部言い当てられた。」からだって。手順は教えても

らったよ。いくら何でも手順が分からないと駄目だからね。

その店を後にして、僕達は海へと向かった。といっても、ホテルがもともと海に近かったんだけどね。

そんなわけで、

「海だ————！！！」

「落ち着きなよ、庄一。」

「…定番。」

水着に着替えて砂浜にいた。

ま、男三人の水着姿なんて簡単な描写だよ。

僕以外が自前。僕だけ学校指定。買う余裕なんてなかったからね。

「なんでお前、学校の物なんだ？」

「仕方ないじゃん。今の僕の財布には、水着を買うなんて選択肢なんてないんだから。それに、今まで買う必要を感じなかったから。」

「……節約ここに極まり。」

「ん？じゃあお前、ここに来るまでの金とかは？」

「僕が貯めてたお金。まだあるけど、帰りの分とかお土産とかで一
文無しになりそうだ。」

「あくまで家の金は使わねえんだな。ある意味尊敬するぜ。」

「……苦労人。それでこそ、池田連。」

「帰ったらどうしよう？」

「それより、泳ごうぜ。」

「…賛成。」

「そうだね。」

そんな会話をして、僕達は海へ向かって砂浜をかけていった。

夏休み（七月下旬～八月末日）（4）

「しまったな……パラソルでも持ってくるんだった。」

「……日よけが無い。」

「本当だね。」

海で泳ぐのに飽きた僕達（ちなみに、上に服を着ています）は、砂浜で休むことにしたんだけど……パラソルを持つてくることを忘れたため、休もうにも日差しのせいで休んでる気がしない。

「どうする？」

「借りたいけどお金が……。」

「……海の家でも行く？」

僕達が悩んでいると、圭が建物を指して言った。僕達もそれを見てみると、百メートルくらい先に「海の家」と書かれた看板が建物に立てかけられていた。

「なら行くか。あそこの方が外にいるより涼しいだろうし。」

「そうだね。」

「……同感。」

話がまとまったので、僕達は海の家へ行くこととなった。

海の家に着いた僕達。でも、結構な人だかりが出来ていた。

「何かあったのか？」

「……訊いてみるか？」

「そうだね。誰が行く？」

そう言って三人でジャンケンをしたら、僕が負けた。弱いなあ、僕。

「空いてたら席取ってこいよ。」

「……頑張れ。」

分かってるよ、まったく。そう思いながら、僕は人だかりの中へ行くことにした。

人混みを分けて移動するのならバーゲンセールなどで習得済みなので、それを使って先頭まで行った。行く間に、「あの子たち、結

構レベル高いな。」「ここじゃ見たことないな?」とか聴こえたけど、気にせず進んだ。

ぽっかり空いてる空間があったので、もうすぐだと思って人を押しつけていった。

そしてその空間を見ると、

「いらっしやいませー!海の家へようこそ!」

「ど、どうぞよろしくお願いします!」

「入らないなら他の人の邪魔よ。何処かへ行つて。」

見覚えのある三人が店の前にいた。え?あの三人つてもしかして……。

「清水さんに寺井さん、レイジニアさんだよね?どうしてここに?いや、その前に。あの三人がいるってことは中島君もいるってことだね。これは……入りづらいなあ。」

どうしてこうも接触率が高いんだろう?僕達、圭の付添なのに。そう思っていたら、電話が鳴った。

「もしもし。」

『どうした?店入れたか?』

「いやあ、中島君たちが海の家で働いてるんだよ。」

『マジで!?なら入ろうぜ!驚く顔が見たいから!』

「え!?それ本当!」

『じゃ、俺達もそっち行くから。頑張つて席取つとけよ!』

「ちよつと!……切られた。もう行くしかないのかな。」

庄一に強引に決められたので、僕は勇気をもって行くことにした。

「いらっしやいま……って、ええ!?どうしてここに!」

「どうして池田君が!」

「私たちの事、つけてたの?」

「まさかあ。できるわけないじゃん、そんなこと。偶然だよ、偶

然。それよりさ、店に入りたいんだけど、いい？」

「え、ええ。いいわよ。何名様で？」

「三人。」

「ではこちらへどうぞ。」

と言って、清水さんは僕の事を案内してくれた。なんだか緊張するなあ。

「こちらでお待ちください。」

と言って、清水さんは戻っていった。僕はというと、案内された席で、一人ポツンと座っていた。

さりげなくお店を見渡してみたけど、そんなに人が入っていない。僕を含めて五人くらいしかいない。

さっさと来ないかな、二人とも。そう思いながら待っていたら、水をテーブルに置かれた。

「どうぞ。」

「あ、どう」

も。と言おうとして顔を上げたら、

「中島君だ。」

「……人違いです。」

何も隠していないのに、人違いだと言われた。

もうツツコム気が無いので、僕はおとなしくスルーした。そして、まだかなあ、と思いながら水を飲んでいたら、

「しっかし、なんだかい気分だな。こう案内されると。」

「……同意。」

「あんたたちはどうしてここに来たのよ？」

そんなやりとりをしながら、庄一と圭が清水さんに案内されてきた。他の人達はどうやら気おくれしてるみたいで、店に入ろうとしなかった。

「よっ。」

「…待たせた。」

「僕が一番苦労した気がするんだけど。」

合流した僕達が交わす言葉。

夏休み（七月下旬～八月末日）（4）（後書き）

いろいろとヤバイ気がします。そこは無視して結構です。

夏休み（七月下旬～八月末日）（5）

それを見た清水さんは、

「あんたたちは何しに来たの？」

と訊いてきた。僕は、

「旅行。」「…秘密。」「三人で観光。」

結構バラバラなことを言った。

「親と一緒にじゃないの？」

「お前らはどうだよ？」

清水さんの質問に、庄一が質問で返した。お互いに譲らないって、この事かな？

そうしていたら中島君が来て、

「久実。どうするの？お客さんが入ってこないよ？」

と言ってきた。それに興味を示したのは、庄一だった。

「どういう意味だ？」

中島君は余程切羽詰まっていたのか、事情を説明しだした。ま、要約すると……………

デントツに来て、ホテルにチェックインした四人は、海へ遊んでいた。

そして荷物を置いた場所へ戻ると、お金だけ盗まれていた。

困った四人は海の家を見つけ、働かせてほしいと頼んでOKを貰った。

だけど、人が来ないのでいろいろ試してみたけど、効果が無かった。と、言う訳だって。

その話を聞いた庄一は、

「よっしゃあ！！手伝うぜ！」

一人張り切っていた。それを聞いた僕は、

「また勝手に決めて……。」

「…これが岡田庄一。困った人は見逃せない。俺達も同類。」

「そうだけどね。」

呆れながらもやる気満々だった。それを聴いた中島君は、

「助かるよ!!」

と思いつき喜んでいた。清水さんは「やれやれ・・・」と首を振っていた。

「よっしゃ!これから役割分担行うぞ!!」

決めたことを率先してやるのが庄一の特徴なので、仕切るのはもちろん、まとめるのもうまい。

「調理はもちろん連!店の人と一緒にやってくれ!」

「分かったよ。」

「店内はウェイトレス!女子三人はこっちでやってもらう!」

「勝手に決めないで欲しいんだけど。」

「俺と中島は外で声掛け!圭はレジ!以上!」

「:了解した。」「分かったよ。」

清水さん以外は賛成して、『海の家再興作戦』（僕命名）が始まった。

「おい。今日はあの店、いつもと違うんだってよ。」

「どういうことだ?」

「普段は爺さんと婆さんが経営してるだろ?」

「ああ。」

「今日はここらじゃ見ない中学生が手伝っているんだってよ。」

「マジで!?!」

「しかも店の中に入った友達が言うには「店内が華やいでいた」んだってよ。」

「え?なに?美人でもいるの?」

「しかも、一流コックが調理しに来てるんじゃないかっていう噂だぜ。」

「マジで!?!あそこにそんな人雇う余裕あったのか?」

「とにかく、行ってみようぜ。」

「そうだな。」

夏休み（七月下旬～八月末日）（5）（後書き）

リーダーシップって、大事ですよね。

夏休み（七月下旬～八月末日）（6）（前書き）

もう二十話超えてたんですね・・・。。。。。。。

夏休み（七月下旬～八月末日）（6）

庄一が役割分担をした通りに移動してから、十分しか経っていない。それなのに、

「次！特製そば三つに、かき氷四つ！！」

「分かったよ！おじいちゃん！かき氷よろしく！！」

「分かったわ。四つじゃな？」

「そう！」

結構繁盛していた。

庄一と中島君が、声掛けという名目で口コミをしていったので、半信半疑の人たちが最初に入店。

それを迎えるのが清水さん、寺井さん、レイジニアさんの三人（ちなみに、水着ではありません）。

そして、注文された料理を作るのが、僕とこの店の経営者のおじいさんとおばあさん。

それを食べてお客さんが驚き、口コミが本当だという事を理解。

圭のレジが正確かつ手早いので、お客さんの流れが止まる事は無い。

という訳で、開始十分ですんごい繁盛していた。

そして、始まって二時間で食料の在庫がなくなり、店を閉めざるを得なくなり、待っていた人に謝りながら海の家今日の営業は終了した。

店が終了した後、おじいさんとおばあさんに感謝され、僕と圭と庄一はお金はいらないと言ったらますます感謝され、中島君たちには感謝と約束のお金、それと僕達が受け取らなかったお金の何割かを渡して、帰っていった。

それを見送った後、歩きながら、

「疲れたあ。ホテルに戻ったら飯がうまそうだ。」

「これくらいなら、あと六時間ぐらいでも大丈夫かな？」

「……普段の忙しさと比べてる？」

「うん。」

「お前の家庭って一体……。」

と言っている傍ら、

「すごいね、あの三人。」

「そうね。認めざるを得ないわね。」

「本当ですね。まさかガラガラだった店をあそこまで繁盛させるなんて。」

「本当に普通の人なの？」

と言っている人達がいた。

そのまま歩いていたら、ふと中島君が訊いてきた。

「三人はどこに泊まってるの？」

対して圭は、珍しく間髪入れずに答えた。

「四人と同じヒューマニステーション。」

その答えに四人は驚き、僕達は平然としていた。圭が黒曜さんと話していたのってこれの事だったんだ、と理解しながら。

驚きから覚めたのか、清水さんが最初に感想を言った。

「貴方達三人を見ていると、どうにも普通の意味が分からなくなるわ。」

それを聴いた庄一は、

「はっ。普通なんて人によってとり方が違うんだよ。って、連が言ってたぜ。」

何故か僕の言葉を引用していた。ちょっと待ってよ。なんで僕の言葉？ そう思ったけど、他の人たちが何故か納得したように頷いていたので、僕は逃げたくなった。

こんなことをやっていたら、中島君がこう提案してきた。

「ねえ、友達にならない？」

「は？」 「え？」 「…？」 「何いってるの、元？」 「いいわね。」

「そうですね。」

中島君の提案に、僕達は疑問形で、清水さんは言外に否定で、レイ

ジニアさんと寺井さんは肯定した。

中島君がなお続けた。

「だって、学校でも最近よく話すし、今日も手伝ってもらったからさ、友達にならないかなって。」

その言葉に、僕達三人は顔を見合わせ、声をあげて笑った。

その反応に、食いついてきたのはやはりというか清水さんだった。

「なんで笑ってるの？」

「だ、だってよ………」

「…い、今更」

「友達って………」

僕達三人が腹を抱えて笑っているのを不思議に思ったのか、中島君が訊いてきた。

「駄目だった？」

僕達三人は合図も何もしないのに揃って言った。

「「もう友達だと、俺達は思ってるよ。」」

その言葉に中島君は「じゃあ僕の事は元^{はじめ}って呼んでいいからさ、君たちの事は何て呼んだらいい？」と訊いてきた。

「俺は庄一でいい。」

「僕は連でいいよ。」

「…俺は圭。」

この言葉で、元^{はじめ}は

「よろしくね、庄一、連、圭！」

と言って笑った。そして、全員で一緒にホテルへ向かった。

こういうのって、いいよね。

夏休み（七月下旬～八月末日）（6）（後書き）

よく考えると、中学生が店の再建って難題ですね（笑）。

夏休み（七月下旬～八月末日）（7）

ホテルまでの道中。

「え、連って一人で家事を全部やってるの？」

「そうだよ。親が全くしないから困ったものだよ。」

「だからあんなに料理がうまいのね、レンって。」

「ちなみに、家の財産管理とか一人でやってるんだってよ。こいつが一人いりゃあ、家の事は完全に任せられるな。」

「私達と同じ中学生なの……？」

「……連の武勇伝は尽きない。」

「本当にすごいすよね。」

何故か僕の話題で盛り上がっていた。

「ちよっと待って。なんで僕の話題？他の人も良いでしょ？」

「じゃあ、俺の話題でもいくか？自慢じゃないが、人と仲良くなるのには自信があるぜ。」

「……話術も達者。」

「そうか？」

「あんた、それで人の事たぶらかしたりなんて……」

「してねえよ！するわきゃねえだろ！」

「でも体育の時のあの運動神経凄かったよね。ノーバウンドで一塁。」

「あれぐらいなら造作もねえよ。」

「とるのが普段僕達だけど、本気で投げられると痛いんだよね。」

「……最初の頃は一週間くらい痺れた。」

「どんな球を投げるのよ？」

「ただのストレート。ただ球速がね……」

「どのくらいなんですか？」

「……正確に測ってみたが、百四十七キロ。高校生並み。」

「昔親父が野球やってたからな。それで俺も野球選手になろうと思

っていたわけだ。今の夢は違うけどな。」

「本当に、普通の意味が分からなくなってきたわ。」
と、こめかみを抑える久実さん。

あ、僕達、清水さんの事を「久実さん」、寺井さんの事を「堇さん」と呼ぶことにした。「俺の話題はこれくらいか？」

「…次は、俺？」

「まあ、話の順番でいったらそうだけどね。」

「そうね。私達がどこに泊まるのか知っていた理由が、分かるかもしれないわね。」

「……仕方ない。」

久実さんの言葉で圭は観念したようだった。

「……俺は情報収集が趣味。ここに来たのも、似たような理由。ただし、提供者は秘密。守秘事務があるから。ここでは、俺はちよつとした有名人だったりする。」

「情報収集って、どんなものを？」

「……気になるニュースの裏とか、噂の真偽、さすがに国家機密には手を出さない。あとは……個人情報。これらは他の人には内緒。」

「本当に中学生なの？」

「更に、圭は人の気持ちを推測できるからね。想像で言ったその人の感情が合っていたりするんだよ。」

「サイコメトラーですか？」

「…違う。サイコメトラーは対象者に触れて気持ちを知るのに対して、俺は対象者のその時の気持ちを想像するだけ。想像だから、合ってる保証はない。」

「でも、すんなりと納得できるぜ。お前の想像。」

「随分信頼してるのね、あなたたち。」

庄一の言葉に、レイジニアさんがそう言った。だから僕はこう言い返した。

「そう言う皆も元はじめの事を信頼してるじゃん。そこから派生してるのか知らないけど、三人とも仲がいいじゃん。」

僕がそう言うと、久実さんが「違うわ。」と言った。

「違うわ。」

「? そうなの?」

「そうよ。」

「え? でも、ライバルと書いて親友って、よく言うでしょ? そんな感じじゃないの?」

「うっ!」

僕の素直な質問に、久実さんは言葉を詰まらせた。

庄一と圭は、「連の質問攻めって、素だよな。」「……そう。連は天然。」と言っていて、それを聴いた元^{はじめ}たちは、「久実が何も言えなくなってるってすごいね。」「そ、そうですね。」「そ、そうね……」 「? 二人とも、顔が赤いよ? 日にでも焼けた?」 と言っていた。

元^{はじめ}のアレはともかくとして、

「どうしたの、久実さん?」

黙ったままの久実さんに話しかけた。

すると、開き直ったように久実さんが言った。

「そうね。い・ち・お・う、仲は良いわよ、私達。」

「だよね。」

これで、圭の話題が終了。早かったね。

「やっぱり連の話題の方が続くな。」

「…そうだな。苦労話で一日はいける。」

自分たちの話題の終わりがはやかたことを知って、僕の話題が一番続くという二人。

何か釈然としないなあ。

そう思っていたらホテルの前まで来たので、

「今日は楽しかったぜ。」

「…新鮮だった。」

「仲良くなれてよかったよ。」

と僕達^{はじめ}はいい、元^{はじめ}たちは

「僕も君達と仲良くなれてよかったよ。」

「連君。今度料理教えてくれませんか？」

「あ、それなら私もいいかしら？」

「私もいいかしら？料理のレパートリーが少ないから。」

と言った。……どうでもいいけど、どうして僕に料理を教えてもらいたいんだろう？

心の中で首を傾げながら、僕達は別れた。

夏休み（七月下旬～八月末日）（7）（後書き）

これからこの人たちが仲良く（？）やっています。

夏休み（七月下旬～八月末日）（8）

自室。

僕はトランプをしていたら、夕食の話になった。

「そういや、夕飯ってどこで食べるんだ？俺達。」

「そういえばそうだね。」

「……ここか、外、またはホテルの食堂。」

「いつもはどこだ？」

「…ここ。」

「今回は？」

そう僕が訊いた時、丁度よくノックの音がした。

「ここで食べるのか？」

庄一の質問に、圭は頷いて肯定した。

「…開ける。」

そう言って圭はドアを開けに行き、僕と庄一はトランプを片付けていった。

「夕食をお持ちしました。」

そう言って、従業員の人が夕食をテーブルに並べた。

「ありがとうございます。」

「…毎度のことながらありがとう。」

「いつも同じ人なのか？」

圭の言ったことに対して、庄一がツツコミを入れていた。

それを聴いて、その従業員の人が答えた。

「はい。私はこの部屋を担当しております。名前は詩音、と申します。これからよろしく願います。」

詩音、と名乗ったその人は、物腰が柔らかそうな女性だった。しかも、とても綺麗な人で、年齢が想像しづらい。二十代後半と言われれば納得できる顔立ちだし、落ち着いた雰囲気は三十代と言われなくてもまた、納得できる気がする。

「それでは、こちらで全てとなります。何か御用がございました場合、備え付けのボタンを押してください。」

そう言って、詩音さんは部屋を出ていった。

詩音さんが出て行った後、僕達は夕食を食べながら話した。

「しかしよ、偶然って怖いな。遭わないと思っていた元たちと遭遇するんだからな。」

「そうだね。しかも、同じホテルでしょ？ここまで偶然が続くと、明日以降も遭遇しそうじゃない？……この料理、ちょっと味づけが雑じゃない？」

「…それはあり得そう。だから、世の中何が起きるか分からない。……その報告は今日の定例会でさせてもらう。」

「いや、いいよ、別に。僕の個人的な感想だから。」

「お前の個人的感想って、一流コックのダメだしと同義だよな。」

「そうなの？」

「……気付かないのはいつものこと。」

圭がポツリとそんなことを言ったけど、僕は聴かなかったことにした。

「まあいいか。それより、明日からどうする？ここの案内してくれるんだろ？」

「…いいけど、十日あれば大体の所は案内できる。」

「あと二十六日でしょ？十日で案内が終わるんだったら、残りの十六日は？」

「……バイトでも、する？」

圭の一言に、僕達は食事の手を止めた。

「なに？」

庄一が不思議そうに圭に訊いた。

「…やるかやらないかは、二人の自由。」

「そうじゃなくて、バイトなんてできるの？」

そう僕が言うと、圭が納得したらしく、話を進めた。

「…俺の名前を出せば、いくつかのバイトはできる。例えば、料理

店だったりここのコンビニだったり。時給は店側が決めることになるが。」

その言葉に僕と庄一は顔を見合わせたけど、

「いや、いい。」

「結構だよ。バイトは。」

丁重にお断りした。

「…そう？」

「いいとは思うけどよ……。」

「それなら宿題やった方がいいかなあ、って。」

と僕が言ったら、庄一と圭は驚いた。

「どうしたの？」

「そういや、俺も持ってきたんだよ。やる気はなかったけど。」

「……俺も。」

みんな持ってきてるのならさ……………

「残りの十六日は宿題でもやらない？」

「ま、それがいいか。」

「…やらないと成績が下がる。」

ということ、案内が終わったところで宿題をやることとなった。

夏休み（七月下旬～八月末日）（9）

七時になったので、圭は定例会に行き、僕達は部屋で過ごすことにした。

「なあ、」

「なに？」

僕は本を読んでいて、庄一がゲームをしていた時、庄一がふと言ってきた。

「お前って、好きな人いる？」

「え？」

まさかまたその話題が出てくるとは。

「どうして？」

「いやな、最近変な噂があつてな。」
噂？

「それって？」

「圭が言ってたんだけどよ。最近というか、夏休み前までに連の事が好きな人が結構いるんだってよ。」

「えく？」

うっそだく。僕なんてただの少年だよ？圭みたく情報処理が得意なわけじゃないし、庄一みたいに運動神経良くないし、元^{はじめ}みたいに力はないし。

「お前、心当たりがないって顔してるな。」

そんな僕を見て、庄一はため息をついた。

どうかしたのだろうか？

「元^{はじめ}もそうだが、どうして鈍い奴らが多いんだろうな。」

「そう言う庄一だってモテるじゃん。」

「は？」

君もじゃないか。鈍いの。

「僕も噂で聞ってるよ。圭の経由じゃないけど。」

「信憑性に欠けるんだが。」

「いいじゃない。確か……隣のクラスの朝月さん。最近庄一のこと訊いてるらしいんだよね。他の女子からさ。どんな人なのか、とか、好きな食べ物、とか。」

「朝月……？ああ！道端で不良に絡まれてた女子か！でも助けただけだぞ？そんなことあるのか？」

「あるんじゃない？」

これで会話が終了。でも僕には気になることがあった。

「ねえ庄一。」

「あん？」

「どうして僕が好かれるの？庄一は分かるけど。」

「そこかよ。まあいいけどよ。……お前が好かれるところってのは、人柄もそうだけど、家事が得意ってところだな。」

「みんな出来るでしょ？」

「そうだけだな。……何というか、家事スキルが人より優れてるだろ？」

「人並みだと思う。」

「そこで即答かよ。」

僕はそう思うから。

「もういい。つまりだ、誰にでも人懐っこくて家事ができるのが、女子にとって憧れなんだろうな。」

「へえ。」

庄一の結論に、僕の感想はそんな感じだった。

「それって、圭の考えだよな？」

「そうだけだな。」

それで僕達の会話は今度こそ終了。

その後、一人ずつ風呂に入ったら圭が来て、圭も風呂に入った後三人で会話して、それぞれのベッドで寝た。

そんな感じで日にちは過ぎて……………。

「なんだかあったという間だったなあ。」

「…収穫はたくさんあった。」

「結構な頻度で元たちと会ったね。」

「そうだな。」

「…鉢合わせという形が多かった。」

帰りの新幹線の中、僕達はそんなことを言っていた。

「それにしても、元と久美さん。ぎこちない雰囲気だったけど、何かあったのかな？」

「…全体的にぎこちなかった。」

「あいつらに何があったんだろうな？」

「…調べる？」

「それはいいよ。なんとなく触れてはいけない気がするから。」

「俺もだ。さわらぬ神に何とやらだ。」

「…分かった。個人的に調べる。」

「「いや、やめとけよ。」」

これにて僕達の夏休みの大部分が終わった。

夏休み（七月下旬～八月末日）（9）（後書き）

次回、池田家全員集合！

夏休み（七月下旬～八月末日）（10）（前書き）

池田家最後の一人が登場します。

夏休み（七月下旬～八月末日）（10）

家に帰ってきて。

「ただいまー。」

そう言って家の中へ入ると、見慣れない靴が置いてあった。

「誰か来てるのー？」

そう言いながらリビングへ行くと、こんな言葉が返ってきた。

「あ。お帰りー。久し振り、連。」

その言葉と、目撃した人を見て、僕は驚いた。

「え！？な、渚お姉ちゃん！？いつ帰ってきてたの！？」

「うー、連が友達と旅行へ行った次の日。両親から電話があつてさ。『暇？』って。忙しいと言ったら、『助けてー。』と泣きついてきたから仕方なく戻ってきたんだよ。ついでに、しばらく休みを貰ったから、ここでこうしてるってわけ。」

「あ、ごめん。お姉ちゃん。」

「いいってことよ。いつもは連がやっているんだからな。」

と言うお姉ちゃん。

紹介するのを忘れてた。

池田渚。僕のお姉ちゃん、女優。タレント名は『風』。この世界で凄い人気がある女優で、今までで出演した映画は六本、ドラマは十本を超える。そのどれもがDVD化しているので、良く家に送られてくる。……サイン入りで。

ちなみに、結婚はしていない。理由が『あの両親の面倒をみられそうない男がいらないから』だって。確かにそうだね。

僕に姉がいることと、僕の姉の正体を知っているのは庄一と圭だけ。ま、圭が僕の事を調べてきたときに、驚いてポツリとこぼしたのが原因なんだけどね。

「それにしても、」

僕を見て、姉さんが何故か悩んでいた。

「どうしたの？」

「それにしても、連。見ないうちに大きくなったなあ。しかも料理の腕も上がったんだろ？私が両親に飯をつくったら、『連の方が凄い美味しいよ。』って言われてさ、ちょっと悔しかったな。」

「そう？」

久し振りの姉弟きょうだいの会話。家族全員が揃ったのっていいよね（両親は仕事みたいだけど）。

「というわけで。帰ってきて早々で悪いけど、夕飯つくってくれない？」

「えー？僕はお姉ちゃんの料理が食べたいんだけど。」

「私は連の料理が食べたいんだ。つくってくれたっていいじゃん。」
「えー~~~~~。」

姉の理不尽な要求に、僕はささやかな抵抗を試みた。

「冷蔵庫に何が入ってるのか把握してないんだけど。」

「そんなもの良いから。残ってるもので自分の得意料理でも作って。」

「り、理不尽すぎる………………。これが弟という立場か…………！」

しかし、それで反抗するほど僕は子供じゃないので、おとなしく作ることにした。

姉が帰ってきたことが、変な波乱を巻き起こすことを知らずに。

「久し振りだねえ、連。帰ってきて良かったよ！」

「そうね。渚も戻って来たし、久し振りに家族水いらずね。」

「本当においしくなったな！昔もおいしかったが。」
「帰ってきて早々この仕打ち。理不尽だ…………。」

結局、料理をつくることになった僕は、冷蔵庫の中にあるものでつくり、つくり終わったら両親が帰ってきて、今のような状況。

久し振りに家に帰って来たけど、僕ってこういう状況かならないのかな？

と、いつの間にか両親と一緒にビールを飲んでいる姉が、おとなしく食べていた僕にこう訊いてきた。

「そーいや連。」

「なに？」

「連って、彼女いるの？」

その言葉に僕は料理を食べている手を止めた。

「お姉ちゃんは？」

「私はまだだな。まだ二十になったばかりだから、もうちょっとゆつくり選ぶさ。そう言う連はどうなの？ いないの？」

「うん。」

「そう。いないの。」

「うん。」

「分かった。」

何が分かったんだろう？

そう思ったけど、おとなしく食べていった。

両親と姉がビールを飲んでハジケ出したころ。

僕は自分の部屋で色々やっていた。学校の準備、服の片付け、本の整理、僕の財布の状況確認。と言っても、夏休みまだ四日あるんだけどね。

この旅行で結構なお金使ったなあ。そう思いながら、僕はどうやってお金を貯めようか考え出した。

風呂に入った後。僕は自分の部屋、じゃなくて、元姉の部屋に來ていた。

どうしてって？ 僕が訊きたいんだけど。

部屋に入ってまず気付いたことは、部屋が汚いという事だった。

「お姉ちゃん。相変らず部屋が汚いね。この分だとあっちの方も汚いだろうね。」

「うるさいね。自分が分かっていたらいいんだよ。」

「そんなじゃ、彼氏できてもすぐ別れそうだね。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

その言葉に何も言い返せなくなったお姉ちゃん。

僕は簡単に片づけをしながら、要件を訊いた。

「で？僕に何の用？言っとくけど、家の事で手一杯だから。」

お姉ちゃんは頭をかきながらこう言った。

「あゝ、ちょっと相談事があるんだ。だから休みでここに帰ってきたんだ。」

「あっそう。……これ、捨てていい？」

「それはダメだ。……実はな、今度またドラマに出演することに決まったんだ。」

「ていうか、お姉ちゃんの夢ってもう叶ってるだよね。よかったよかった。」

「話を聴く気があるのか？……そのドラマの役が先生役なんだ。で、役作りをしようにも教える生徒がいんじゃないじゃ話にならない。」

「僕にその生徒役を？」

「そう。」

簡単に片付けをやっている間にそんな話をしていた。

僕が生徒役ですか……。暇だからいいんだけどね。そう思いながら、

「いいよ。どうせ暇だから。」

と言ったら、姉ちゃんは笑顔でこう言った。

「そうか！助かる！！」

という訳で、残りの夏休みはお姉ちゃんの役作りの相手をしていました。たまに庄一と圭も

交じってやっていたよ。今年はいつもと違う夏休みで楽しかった。

夏休み（七月下旬～八月末日）（10）（後書き）

感想をお待ちしております。

人物紹介 その二（前書き）

今回は新しい人たちでも。

人物紹介 その二

レイジニア・ゼロ（15）・・・とある事件を引き起こしたネクロマンサー。改心の余地ありというので、元たちと同じクラスに転校してきた。一応外人だが、元たちの言葉は理解できている。例によって美人で、元のが好き。最近はレンに家事について教わろうかどうか思案中らしい。

黒曜（？）・・・・・・情報屋。ヒューマニステーションの雇われ店長。結構圭とは仲がいい。

定例会の場を提供する傍ら、自身も情報屋として出席している。最近圭の友達が面白い人たちだと思って、いろいろと調べているらしい。

詩音（？）・・・・・・ヒューマニステーション三十五階の専属スタッフ。圭以外の客に対しては意外と平静な態度で接していることは、黒曜しか知らない秘密である。そして、詩音自身も知らない。

池田渚（20）・・・・・・タレント名『凧』。世界で有名な大女優で、十五の時にデビュー。それからというもの、池田家には自身が出演したドラマや映画のDVDをサイン入りで送ってくる。モテるが、彼氏なし。一応家事はできるが、部屋の掃除は苦手。

ミネルバさん・・・・・・ロボットで駄菓子屋店員。何を間違ったか男口調の言語プログラムを入力されたまま人間世界に出た。ちなみに、商店街で結構人気がある。

人物紹介 その二（後書き）

・・・これくらい、でしたっけ？

閑話 とある休日 岡田庄一編（前書き）

今回は、岡田庄一の休日。普段彼はどんな休日をおすごししているのでしょうか……？

閑話 とある休日 岡田庄一編

俺主体で書くのは初めてじゃねえか？なんていうメタな発言は置いて。

よっ！俺は岡田庄一。連の親友だ。今日は俺のちよつとした休日を見せてやるぜ。

俺は休みだと午前九時に起きる。なぜなら、休みの日は誰も俺を起こしに来ないからだ。ゆっくり寝られるぜ。いつもなら結構早いんだぜ。

俺は一階へ降りてリビングで朝食を食べ始めた。その時、家には誰もいなかった。きつと仕事に行ってるのだろう。大変だな。

朝食を食べ終え、食器を片づけてから、俺は外に出た。家にじつとしてられない性分だからだ。

しばらく散歩していると、遠くに見覚えのあるやつがいた。よく目を凝らしてみると、どうやら走って逃げているみたいだった。

俺はこれに巻き込まれたら面倒だと直感し、路地裏に素早く隠れ通りをチラ見した。傍から見たら変な奴に見えるんだろうな。

逃げてる奴はだんだんこっちに近づいてきたので、顔がよく見えてきたって……

「元！？また何か面倒なことに巻き込まれてんじゃねえだろうな！？」

元だった。俺はどうするか悩んだが、あいつなら何とかやるだろうと思いつきそのまま隠れることにした。

そして、どうやら足音が遠ざかっていったみたいだ。その時追っている奴らをチラッと見たが、どうもいつもの女子三人組じゃなく、どっかの不良だった。きつと人助けをした見返りだろう。

俺は路地裏から出て、通りをまた散歩しだした。……携帯電話を手に持ちながら。

閑話 とある休日 岡田庄二編（後書き）

短いですが、続きます。

閑話 とある休日 岡田庄一編その2

「はあ、はあ、はあ……」

「もう逃げらんねえぞお、小僧。」

「俺たちの邪魔しやがって、ただじゃおかねえぞ。」

「くっ！」

行き止まりに追い詰められた元と、それを囲む不良たち六人。元は能力を使うかどうか悩んでいたら、

ドカツ！バキッ！

「おいおい。おとなげねえな、あんたら。一人相手に集団かよ。」

「だ、誰だ！？」

「……え？」

反対側からヒーローのように参上してきた庄一がいた。その前には、いましがた殴られたと思われる不良たち二人がのびていた。

「よう元。助けに来たぜ。」

「……どうして？」

俺は不良たちのことを無視して、元と会話した。どうやら、俺がここににいるのが不思議らしい。

そんなことを無視して、俺は話を続けた。

「今度は何やったんだ、一体？」

「え？ いや、あははは……」

それなのに、どうにも気まずそうに答えてくれなかった。

俺が無視したのが気に食わなかったのか不良の一人が、

「無視してんじゃねえ！」

と言って俺に殴り掛かってきた。うわ、突っ込んでくるとかマジありえねえ。

それをひらりと躲すときに、俺はそいつの腹に一発入れた。それだけで、うずくまって動けなくなっていた。弱いな、こいつ。

一方不良の集団（といっても六人だけ）はそんな俺を見て、

「ば、化け物かよ!？」

と言って倒れてる奴らを回収して逃げて行った。その後ろ姿を見ながら、

「これに懲りたら二度と不良やるんじゃねえぞ!」
と言った。

閑話 とある休日 岡田庄二編その2 (後書き)

もう庄二主役でもいいんじゃないや……？

閑話 とある休日 岡田庄二編その3 (前書き)

もう四十話になりました。

閑話 とある休日 岡田庄一編その3

「ありがとう、庄一。」

「いいってことよ。本当は無視するつもりだったからな。」

「何気にひどいこと言ってるじゃない!？」

不良たちが去っていったあと、俺と元は二人で歩いていた。といっても、互いに特に買うものがないため、散歩してる状態なのだが。

「それにしてもよ、どうして追われてたんだ？」

俺は疑問に思っていたことを元に尋ねた。すると、急に元の声のトーンが落ちた。

「不良たちに絡まれていた人が嫌そうだったから助けたんだけどね。能力を普段使わないから何もできなかったんだ。」

「それって、まだあのことを引きずってるのか？」

その言葉に、元は一瞬動きを止めた。

「……たぶんね。久美と堇のおかげでちよとは癒えたけど、まだかな。」

その言葉を聞いた俺は、上を向きながらこう言った。

「人間だれにでも傷はある。お前だけが特別深い傷を持ってるってわけじゃねえんだよ。」

「え？」

まさか俺がそんなことを言うと思わなかったのか、意外という目で元は俺を見てきた。言っちゃワリイかよ。

俺は気にせず続けた。

「傷を持ってないで生きてる奴なんてそうそういねえし。もしそんな奴が居たら、そいつはきつと赤ちゃんだけだ。傷を持つから痛みがわかる。傷を持っても痛みがわからないなら、そいつは人間じゃねえ。」

そこまで言うと、元が俺にこう言った。

「庄一って、すごい考え方してるんだね。」

「………って、連が言ってた。」

「ちよっと損した気分だよ！」

「かくいう連も、小説の引用だって言ってた。」

「いい話が台無しだよ！」

そう言いながら、地団太を踏む元。おい。目立ってるぞ。

俺は仕方ないと思いながら、

「元、空を見ろよ。」

といった。そろそろ首がつかれそうだ。

言われた元は、首をかしげながらも上を向いてくれた。そして、
「うわぁ、広いし綺麗だ。」

まるで初めて見たような感想を言っていた。俺も空を眺めながら、
「いつまでもウジウジしてるんじゃないよ。空なんて雨降ったと思っ
たら晴れたりするだろ？過去のことに縛られるのも結構だが、前を
見て進んだらどうだ？」

と、恥ずかしいセリフをいつの間にか言っていた。連の奴からうつ
ったかな？

その言葉を聞いた元は少し驚きながらも、

「もう逃げないと決めたから大丈夫だよ。それに、一人で背負い込
むつもりなんて今の僕にはほとんど無いからね。」

といった。今更だが、俺たち立ち止まってるから通行人の邪魔なん
だよな。

そう思った俺は、再び歩くことにした。

閑話 とある休日 岡田庄二編その3 (後書き)

続きます。

閑話 とある休日 岡田庄一編その4

歩いていたら、正午になった。結局一緒に歩いていた俺と元は、どこかで昼を食べることにした。

「どこで食べるんだ？」

「庄一は？」

公園のベンチに座りながら、俺たちは昼をどこで食べるか話し合っていた。

「俺は……コンビニで買えばいいかな。金かからねえし。」

「僕もそうしようかな？最近財布が厳しくなってきたから。」

「ふん……じゃ、コンビニ行こうぜ。」

「そうだね。」

これを話し合いと言えるのか少し疑問に思ったが、気にせずコンビニへ行くことにした。

「いらっしやいませー。」

「いらっしや——アウチ！」

店に入るなり、一人おかしな奴が居た。

「この店、大丈夫かな？」

「気にするな。どうせいつものことだ。」

ちなみに、俺たちが来たところはスーパーの近く。本当は俺の家からちよつと遠いのだが、どうせ散歩だ。のんびりするさ。

「ありが——アンデルテ！」

「ありがとうございましたー。」

会計を済ませて店を出るとき、そんな声をかけられた。たまに利用するが、この店ホント大丈夫だろうかと思わずにいられない。

「ま、面白いんだがな。」

「よく来るけどクビにならないのが不思議なんだよね。」

確かに不思議だなと思いつながら、俺たちは公園のベンチに座って昼食を食べた。

食べている途中、誰かが声をかけてきた。

「あら、元に……庄一じゃない。珍しいわね、こんなところにいるなんて。しかもその組み合わせで。」

「ん？」

「あ、久美。どうしたの？」

清水久美だった。久美はその長い髪をかきあげながらこう言った。

「暇だったから散歩してたのよ。それで元と出会えたんだから、私たちは赤い糸で結ばれてるんじゃないかしら？」

その言葉を聞いた元はこう反論した。

「この公園の近くじゃないか、久美の家は。偶然というよりは、僕を見かけたから来たんじゃないの？」

「さすが元ね。正解。」

そうあっさり認めた久美。もうちょっと粘ろうぜ。

そう思いながら昼食を食べていたら、久美が俺に向かってこう言うてきた。

「ちょっとどいてもらえないかしら？」

「まだ座るスペースあるだろ。そっちにしろ。」

「それじゃ私と元が二人きりにならないじゃない。」

なんだこいつ。わがままにもほどがあるだろ。

俺は急いで食べ終え、こういった。

「ふざけんじゃねえぞ。そんなに二人つきりになりたいのなら別な日にしろや。」

「なんですって？」

そう言って、俺と久美はにらみ合いとなった。それを見ている元は緊張してるみたいだった。

そして、何か言う前に声をかけられた。

「あれ？久美さんに元に庄一？どうしたの？こんなところで一触即発な雰囲気醸し出して。」

その声の主を見て俺達は驚いた。

「連？」「連よね？」「お前こそ何をやってるんだ？」

確かに連だった。しかも、その周りにいるのが子供たちばかりだったのだ。そりゃ驚くって。

俺の質問に、連は答えた。

「えっとね、ふらっと散歩に出かけたら見知った主婦の人たちがいてさ。その人たちと話していたら子供たちの面倒を見てくれないかって言われてね。戻ってくるまで面倒を見ることにしたんだ。」

ざっと見た感じ、九人ぐらいいるんじゃないか？そいつらを顔色一つ変えずに一人ひとり面倒を見ていく連。どこまで苦勞人なんだ、お前。

そう思っていたら、おそらく連の光景を見た久美がこう言った。

「……………連を見ると、今の私たちがいかにくだらないことで喧嘩してるのかわかるわね。」

それに便乗して、

「そうだな。俺はあいつの手伝いでもするか。どうせ暇なんだからじゃ、お前らは仲良くやれよ。」

と言って俺はその場を離れ連のところへ行こうとしたら、

「行くわよ、元。」

「え？僕も？」

「そうよ。あたしたちが結婚して子供ができた時の予行練習だと思って、連の手伝いをするわよ。」

「それはいいけど……………僕たちまだ付き合ってすらいないからね！？」

という声とともに一緒についてきた。

意外と友達思いなんだなと思いつつ、俺は子供の世話をしている連に近寄ってこう言った。

「なあ、連。俺達にも手伝えることないか？」

連は子供の世話をしながらこう言った。

「じゃ、庄一は遊びたそうにしてる子供たちの相手。久美さんと元はこの子。」

こいつの指示は本当に的確だから驚くんだよなあ、と思いながら「

分かった。」と言って俺は子供たちと遊んだ。

元と久美は、連が預かったと思われる赤ちゃんの世話を二人でしていた。なるほど。あいつは色々とお膳立てをしてるわけか。仲良くやってるみたいだ。

午後二時になって、子供たちの親が迎えに来た。連は、お世話をしたお札に色々と渡された。

親と一緒に帰る子供たちを見送っていたら、連がまず俺に近づいて、「みんなありがとうね。庄一はこれがいいね？」と言って俺に差し出したものは、お金だった。

「いいのか？お前がもらったものだろ？」

俺はお金を受け取りながら連に言った。おお、すげ。対して、

「いいんだよ。僕も手伝ってもらったんだから。はい、久美さんに元。」

そう言いながら、元と久美にも同じく渡した。

二人はしぶしぶ受け取りながら「ありがとう。」と言った。

で、俺はさりげなく連の手元を見てみたら連はお金を持っていなかった。

「おい。お金は？」

俺がそう訊くと、

「ん？あるよ。ポケットに。ちよつとしたレシピを教えてもらったから別にいいんだ。それじゃ。」

と言って連は帰っていった。

残された俺たちは、

「じゃあな。」

「またね。」

「そうね。」

と言って帰った。楽しかったけどな。

閑話 とある休日 岡田庄二編その4（後書き）

次回、岡田庄二編終わります。

閑話 とある休日 岡田庄一編その5

「ただいまー。」

と言って家に帰ってきたのが午後四時。その時にも両親は帰ってきておらず、俺は洗濯物をこんだ後、自室で寝ることにした。

俺の部屋は、俺から見ればきれいに整理されてるのだが、ほかの奴らからだと言われる。母親から、常日頃から『部屋の掃除をしろ。』と言われるほど。ちなみに、連と圭は俺の家にそんなに来ない。圭の家も同じく。だって連の家が色々都合がいいから。

「これみたら連の奴、絶対に掃除すると言い出しそうだなあ。」
そう言ってため息をつきながら、俺はちよつとした部屋の整理をすることにした。

部屋の掃除をしていたら、いつの間にか母親が帰ってきていた。
あんまり進まなかったがな。

夕飯ができたといわれ、俺は一階へ降り、母親と一緒に夕飯を食べた。親父が遅くまで帰ってこないのは通例なので、我が家の夕飯は二人のみである。

特に会話もなく夕飯は進み、食べ終わったら俺が食器を洗って片づけた。これは小五くらいからやっていることで、今では結構慣れた。

風呂から上がると、親父が帰ってきていた。俺は、「おかえり。」
と言って二階へ上がった。

片付けがままならない部屋で、俺は普通に寝た。親父とどうやって仲直りしようかと思いつながら。

閑話 とある休日 岡田庄二編その5 (後書き)

次回は何かいいでしょうか？閑話？それとも・・・

四 九月上旬のある日

「夏休みが終わってすぐに体育祭か。秋は行事が多くてなんだか楽しいな。」

「体を動かせるからでしょ？僕は多くて気が滅入るよ。」

「：体育祭は来週から三日間。クラス対抗。一人三競技以上に出る。」

「庄一は？」

「俺は今年こそ全部の競技に出るぜ！」

「：庄一が出ると、一位が確定する。」

「多分、競技の出場制限されるんじゃないのかな？」

夏休みが終わって、僕達は来週に行われる体育祭について話していた。

僕達の学校では、学年別クラス対抗の体育祭が行われる。初日に行うのが一年生で、二日目が二年、最終日が僕達三年。最終日だからって、初日と二日目に行かなくてはいいい、という訳ではない。初日も二日目も、僕達が準備の手伝いをしなければならない。最終日は一年と二年生がやってくれるんだけどね。

で、一日しかないのに、競技の数が多い。一日だけだったら四つぐらいなんだろうけど、僕達の所では八個ぐらいある。鬼だよね。それに、毎年毎年競技が変わる、という事が無い。なので、考える必要性が無いという訳だから、その分練習できるんだ。毎年同じだと飽きるんだけどね。

その競技は、百メートル走、障害物競走、パン食い競走、大玉転がし、綱引き、騎馬戦、借り物競走、男女混合リレーの八つ（大玉転がしと騎馬戦と綱引きはクラス全員参加、男女混合リレーはクラス代表）。走るのばかり。

最後に、この体育祭では超能力や魔法などが使用するのを許可されているので、例年怪我人が沢山いる。僕達みたいな普通の人たち

が主だっている。なんでもありってことだね。

「そう考えるとさ、庄一ってすごいよね。」

「なんだ？いきなり。」

「…魔法などが飛び交う中、生身で一位を取る。もはやこの学校の伝説。」

「うんうん。」

「そういうものかあ？」

なんだかわかっていない庄一。ちなみに、昼食の時間。元^{はじめ}たちはどこかで一緒に食べてるんじゃないかな？雰囲気はまだおかしかったけど。

と、そんな僕の考えを知ってか知らずか、庄一が思い出したように切り出した。

「そういや、結局あいつら、ぎこちないままだな。」

弁当を食べながら、圭が便乗して言った。

「……何かハプニングがあったと推測。さらに、学校内でもあの四人のぎこちない雰囲気についてはすでに広まっている。」

「圭のせいじゃないでしょ？」

「……俺は噂を広めはしない。噂の操作と調べるだけ。」

「ま、俺達でどうこう出来やしねえけどな。」

そう庄一が締めて、僕達は弁当を食べることに集中した。

四 九月上旬のある日（後書き）

これから更新が遅れるかもしれません。

あと、新しく投稿します。『考える人』か、『アイドルッ!』のどちらかか、その両方かもしれません。温かい目で見守ってください。

九月上旬のある日（2）

五校時目。

僕達のクラスというか、他のクラスは、クラス会を開いていた。

議題？そんなの『参加する競技決め』しかないよ。

ということで、

「えー、参加したい競技がある人は手を上げて競技名を言ってくださーい。」

議長である委員長こと、久実さん。大変そうだね。

と、一人の生徒が手を上げた。それはもちろん……………

・・・

「俺、全部やるぜ。」

「あんた、それ本気で言ってるの？」

庄一その人である。その本人はというと、

「当たり前だろ。去年は六種目しか出れなかったんだ。全部やりた
い。」

物凄い自信である。ふと思い出したように、堇さんがこう言った。

「そういえば話題になりましたね。何の能力を持たない人が六種目
で一位をとったって。」

「そういえばそうね。あの時は私達がいなかったから分からなかったけど、あんただったの？」

「おう。個人種目しか無くて助かってるぜ。」

そう言いながら胸を張る庄一。その時のクラス内は「ああ、こいつ
はすごかったな。」「魔法で身体強化してもぶっちぎるんだから。」

「借り物競走なんてあつという間に持ってきてきちゃってたよね。」と、
過去の庄一の武勇伝を語っていた。

これを聴いた久実さんは、

「全種目に出るのはいいけど、勝てるの？」

と訊いてきた。それに対して、庄一は心外だと言わんばかりに肩を

すくめ、

「やると言ったら貫くさ。」

と言った。かっこいいね。

それを聴いた董さん、久実さん、レイジニアさん以外の女子は、
なんだか熱っぽく観ていた。

・・・庄一を。

それを聴いた久実さんは、

「できなかったらクラス全員に飯、おごりね。」

容赦なく言った。

「うお！それはきついが絶対負けねえ！！」

対する庄一も、負けじと言った。

一人は決まったので、他の人たちの競技を決めることにした。
で、

「なんでパン食い競走に人が集まってるわけ……？」

と、久実さんが頭を押さえながら言ってるように、パン食い競走に
人が集中して、他の競技にそんなに人がいなかった。

久実さんの疑問を解消するように、圭が手を上げて言った。

「……一年の頃からこの競技の倍率が高い。理由は、単純にパンが
美味しいから。ちなみに、去年は他クラスのパンまで食べて失格に
なった人がいる。」

それを聴いた久実さんは、一瞬僕の事を見てからこう言った。

「じゃ、この中から決めるわよ。くじで。」

その言葉で皆おとなしくなり、志望した人はくじを引いて誰が出場
するか決まった。

あ、僕？僕は障害物競走にしか出ないよ。大玉転がしと騎馬戦と
綱引き以外には。

だって、バーゲンセールやタイムセールの経験を生かすには、ここ
しかないんだもん。でも一位は取れなかったんだよね。

さて、あぶれた人は空いてる競技に移った。仕方ないけどね。

「これで、全員決まったわね。じゃ、来週の体育祭、絶対優勝する

わよ！」

『おお———！！』

久実さんの一言で、クラスは一丸となったのかな？ノリはいいんだけどね。

さてさて、僕は僕でやらないとね。

九月上旬のある日（2）（後書き）

頑張っています。

九月上旬のある日(3)

さて放課後になりました。

「一緒に帰ろうぜ。」

「…庄一。連は無理だと思う。」

「あ、ごめん。庄一。」

「あ、そういえばそうだったな。すまん。じゃ、俺達帰るから。」

「…頑張れ。」

「じゃあね。」

いつもなら三人で帰るんだけど、今回は違う。なぜなら、僕にとって大変面倒なことがあるからだ。

「さて、職員室へ行こう。」

と言って、人がまだいる中僕は職員室へ向かった。

はずなんだけどね……………

「ちょっといいかしら、連。」

「その前にロープをほどいてくれない？」

校舎の裏側。僕は久実さんに拉致られていた。

説明すると……………

職員室へと僕は歩いていった。その時に一本のロープを見つけたので、誰が落としたんだろう？ と思いながら拾ったら、突如としてロープが僕を縛ってここまで連行してきた。しかも、誰も人がいなかった。なので、助けを呼ぶにも無理だった。

で、連行された場所に久実さんがいたからこれは久実さんの仕業だな、と理解できたわけ。

僕の要求に、久実さんは「そうね。逃げる気はなさそうだし。」と言ってロープをほどしてくれた。

僕は、とりあえず久実さんの話を聴かないと引き下がってくれなさ

そうだと思ったので、訊いてみた。

「僕に何か用なの？」

すると、久実さんがこう言ってきた。

「あなた、料理得意よね。」

「多分。」

質問の意図が分からなかったので、僕はそう答えた。分かっていてもそう答えたけどね。

そう答えると、久実さんは「自覚が無いのかしら…？」とぼやいた後、こう言った。

「最近さ、元^{はじめ}とも面と向かうのが出来ないのよ。」

いつも強気なこの人がこんな弱音を吐くなんて。そう思いながら、僕はとりあえず思いついた言葉を言った。

「意識してるからじゃない？」

「うっ！」

僕の指摘で、久実さんが赤面した。可愛いなあ。

でもどうして僕なんだろう？ そう思いながら、僕は尝试してみた。

「もしかして……何とか面と向き合いたいから、お弁当を作って一緒に食べようとしてるの？」

「な、なんで分かったのよ！？」

当てずっぽうで言ったのに、まさか当たるとは。

久実さんもやっぱり恋をしてる人なんだなあと思いながら、話を聴くことにした。

「べ、別に元^{はじめ}のためじゃないわよ！！ただ堇の料理がおいしくなってきたるし、レイジニアだって何かと頑張ってるからよ！」

ツンデレ、ってこの人の事だよね？ なんとなくそんなことを思った。

そんな僕をよそに、久実さんは続けた。

「私だって、色々やってるわよ。料理だって家事だって。元^{はじめ}と一緒にいるのも私の方が長いんだから。」

そういえば、久実さんと元^{はじめ}って幼馴染なんだよね。と今更なことを

思う僕。

「それなのに元^{はじめ}ったら、私の気持ちも知らないであの二人と仲良くしちゃって。それだけならいいけど、董とキスしそうになったし・・・・。私なんてしたこともないのに。」

なるほど。夏休みに起こったのはそれだったのか。と、ぎこちない雰囲気の原因が分かった気がした。

「だから、」

「だから？」

久実さんが言おうとした時に、ちょっと僕は口を出してみた。

「……あの二人に負けたくないのよ！」

ま、分かってはいたけどね。そう思いながら、僕って便利屋か何かを間違われているのではないだろうか？と今更思った。

久実さんの話を聴き終えた僕は、

「だったら二人きりの時にでもせまってみたら？」

なんとなくアドバイスを試してみた。ま、料理を教えるでもよかったんだけどね。

「な、何言ってるのよ!？」

僕の言ったことに、久実さんは赤面しながら慌てて言った。

「なについて、ちょっとだけ大胆になればいいんじゃないかなって・・・・。」

「そ、そんなことできるわけじゃない!!」

ひよっとして、久実さんってウブ？

自分の事を棚に上げて、僕はそう思った。

「大丈夫！一歩踏み出す勇気があればできるって！」

「なによそれ!？」

えー、上手い解決方法のような気がするんだけどなあ。

と、ここで何かに気付いたのか、久実さんが訊いてきた。

「連。あんたさ、もしかして料理を教える気が無いんじゃないの？」

「はっはっはっはー、そんな訳ないよ。」

「だったらどうして私の目を見て言わないの？」

どうしてでしょうね？わかりません。

と、久実さんが何かをあきらめた感じで、

「もういいいわ。あなたの意見を一応参考にするけど、ありがとう、
とは言わないわよ。」

と言って帰っていった。

言ってるじゃん、ありがとうって。

そう思いながら、僕は職員室へと向かって行った。大変だよねえ、
と思いながら。

後日。

「ねえ久実？」

「なに元^{はじめ}？」

「どうして腕を組んで一緒に登校してるの？あ、あの、色々当っ
てるんだけど・・・。」

「どうしてでしょうね？」

「あ！ずるいです久実さん！元君と腕を組みながら歩くなんて！！」

「あなた、抜け駆けしてるんじゃないわよね？」

「いいじゃない、これぐらい。」

登校中、腕を組んで歩く元と久美さんの姿を目撃した葦さんとレイ
ジニアさんによって、いつもの雰囲気に戻った。

僕はというと、

「……………という事があったんだよ。」

「お前も大変だな。家の事と、体育祭の事があるんだから。」

「……無理はするな。」

「ありがとうね。」

「それにしても、あいつら、元に戻ったんだな。」

「…何があったんだ？」

「さあね。」

「知ってるのか？」

「…誰にも言わない。それが俺。」

「聴く気満々だね。でもこればかりは言えないよ。」

「秘密にされると訊きたくなるな。」

「…多少手荒い手段を使ってでも訊きだす。」

「それが友達に対する行動!？」

休み時間になると、僕は二人から逃げ、二人は僕の事を追った。
それを見ていた久実さんは、笑っていたような気がした。

「久実、どうしたの？」

「あの三人は相変わらずだなんて。」

「久実さん！ちよつと元君はじめに近すぎませんか!？」

「ハジメ、あなたからも言ったらどうなの？」

本当に、助かったわよ、連。

元がはじめ大変な思いをしている中、久実はそんなことを思っていた。

九月上旬のある日（3）（後書き）

次回、体育祭の結果とその中で起きたひと騒動をお送りします。

九月上旬のある日（4）

三年の部、体育祭の結果。

僕達のクラスが一位だった。ま、その理由が、庄一が全個人種目で一位をとったから。有言実行とは恐れ入るね。

騎馬戦は僕、圭、庄一、元はじめでつくった。一番上が何故か僕になった。元の能力と、庄一の無尽蔵な体力、そして役に立ったか知らないけど僕の指示で騎馬戦も一位。

お昼休みは、これまた何故か僕が庄一と圭のお弁当までつくることとなった。それを見た庄一と圭の両親は「本当にすみません。」と頭を下げてきた。

元はじめたちはというと、そんな僕を見ながら誰の弁当を食べさせるかで、もめていた。それを見ていたのが、堇さんと久美さんのご両親はじめ。元の両親は仕事で来れなかったんだって。

なんだか仲がよさそうに見えるけど、父親の方は陰悪。雰囲気こそよさそうに見えるけど、実際は互いに娘の自慢しかしていない。大変だね。それとは裏腹に、母親の方は会話も雰囲気も良かった。

僕の両親？来てないよ。あの人たちは仕事で忙しいから。あ、お姉ちゃんも仕事だよ。

で、なんだか元はじめたちの方で僕の話が拳がったらしく、元はじめが僕の手招きしていた。

それで行ってみると、何故か歓迎された。

「君が池田君かい？」

「ハア……。」

どうして僕が呼ばれたのか、全く見当がつかなかった。庄一と圭はおとなしく成り行きをみていた。僕がつくった弁当を食べながら。

酷いね、全く。友達の事を放置かい？

「話には聞いているよ。」

「すみません、誰だか分からないんですけど。」本当は知ってます

けど。

「ふん。普通の奴にも知られていないのか。やっぱり俺の方が上だな。」

「なんだと！じゃあ、お前も話してみろよ！」

「君は私の事を知ってるだろ？」

「いえ。知りません。」嘘です。本当は知ってます。

「お前も知られてないじゃないか！」

「うるさい！」

と、対峙してる父親二人。さて、戻ろうか。

そう思っ僕は戻ろうとしたら、元^{はじめ}に足を捕まれた。

「なに？」

「いいじゃない別に。ちよつとだけでいいからさ。」

「ちよつとは過ぎてるけど……。」

「僕を助けると思ってさ！」

「頑張ってよ。」

と言っ戻ろうとしたら、元^{はじめ}が耳打ちしてこう言ってきた。

（本当に助けてよ！僕だけでこの状況は大変なんだって！！）

（僕を巻き込まないで！僕はそんなに関わりを持っていないんだから！）

（君の話で盛り上がってるんだから、本人の登場してもらいたかったんだよ！それに僕も助かる！）

（何が？）

（ツッコミが足りなかったんだよ。正直僕一人でこのメンツはきついんだ。）

（ふん。）

「二人とも、何こそこそ話してるの？」

^{はじめ}元の話^{はじめ}を聴いた僕は、無視して戻ろうかと思ったら、久実さんに話しかけられた。

終わった…。

そう思っながら、おとなしく座っこの場にいることにした。

「別に。なんでもないよ。」

「そうだね。」

と言ってる僕達二人。

「そうなの？でもごめんね、わざわざ呼んじゃって。」

と、久実さんは言った。僕はもう逃げる事を諦めていたので、

「いいよ。それより、関係ないのにこの場に呼んでくれてありがとう。」

と言った。ちなみに、これは両親がよく誘われた時に言う言葉で、小さかった僕は一緒にいたため憶えていた。

そう言ったら、久実さんがこう言ってきた。

「関係なくはないわよ。あなたの事はよく会話で出てくるもの。」
どういう話をしていれば、僕が話題に上がるのだろうか？

なんとなく思ったけど、別にいいかと思った。

その輪に混ざる感じで、そのまま一言も話さないで食べようと決めたら、いきなり話を振られた。

九月上旬のある日(5) (前書き)

体育祭編、これにて終了。早すぎましたか？

九月上旬のある日(5)

「そういえば、レンの両親は？」

「仕事。」

必要なことだけを言えば大丈夫だろうと思っていたら、

「レンの両親って何をやってるの？」

と訊かれた。レイジニアさんに。そうやっていたら、堇さんが話に加わった。

「随分楽しそうなご両親でしたね。」

僕は、あちゃあ、とものすごいやばい感じがした。

堇さんの言葉に元が固まって、久実さんとレイジニアさんは何かに気付いたみたいだった。

「ねえスマイレ。」

「なんですか？」

まるで分っていない感じで、堇さんはレイジニアさんの質問に耳を傾けた。そしたら、久実さんが訊いてきた。

「どうして連の両親の事を知ってるの？」

その言葉で、自分が言ったことの不味さを理解したようだ。堇さんはテンパって「え！？そ、それは、その、えっと………」としか言わなくなった。

その隙に僕は戻ろうとしたら、今度はまた父親たちに捕まった。

「江田君。」

「池田です。」

「間違えるとは最悪だな。そうだろう？家田君。」

「言いたくありませんが貴方も間違っています。」

この人達ボケてない？

僕は何となく憐れみの視線を送ることにした。

近くでは久実さんとレイジニアさんが、堇さんを詰問していた。

「ねえスマイレ？どうして知っていたの？」

「そうね。遭う機会なんてなかったでしょ？」

「み、道端でばったりと会ったんです！」

「へえ。そうなの？」

「でももしたら、以前レンと同じような弁当の中身だった説明がつかないのだけれど？」

「そ、それは……」

「あの時は有耶無耶になったけど、気になるわね。あの時はどうしてかしら？」

「え、えっと……」

僕は、こっちはこっちでもう駄目だと思った。

元はというと、

「ちょっと待ってください！！どうして僕が！？」

どうも母親方で何やら言われたようだった。

そして、僕の視線に気付いた父親の方は、

「なんでさっきから憐れんでいるんだ？」

「そうだな。」

よくわかってない感じで聴いてきた。

「いえ……」

僕は視線を背けながらそう答えた。

つ、疲れる……………。

元に同情出来た瞬間だった。

そう思っていたら、ついに董さんが言ってしまった。

「あ、あの時は連君の家に行っていました！」

この時の反応。

久実さんとレイジニアさんは「やっぱり……」と言っていて、元は「ごめん、連。」と言っていて、母親の方は「あ、そういえばそんなことがありましたね。」「そうだったんだ。大変だったわね。」と言っていた。問題は父親の方。

僕に最初に話しかけてきた人が怒りに震えていた。

あ、そう言えばこの人、董さんの父親で会社の社長だったよなあ

と思いながら、弁当を手早く片付けて、逃げた。

とっさの行動に庄一と圭を含めて他の人たちの注目を浴びたけど、そんなのは気にしていられない。だって生死を分かっただもの。

そして、

「きくさくまー!!!」

という声と共に、なんだかすごいプレッシャーが全体を包んだ。多分、これが魔法を発動させる前準備なんだろうと思った。

これで皆がパニックを起こして、一斉に逃げた。僕はその逃げ惑っている人達の中で、足を止めた。そして、両親がどうやって業績トップを独占しているのかを思い出した。

『連!!俺また一位取ったぞ!』

『へえ。』

『前々回は私が一位だったのだけだね。』

『そうだったね。』

『なんだ連?嬉しそうじゃない?』

『いや、良く取れるなあゝって思ってるよ。』

『成績が凄い秘訣か!教えてやるぞ!』

『あなた。連が話を聴いていないわよ。』

『聴いてるけど。』

『そうか!なら、教えてやる!それはな、仲良くなることだ!こっちから仲良くなれば自然とあっちも心を開く!方法はなんだったかまわらないぞ!犯罪行為で仲良くななんてできないけどな!』

『へえ。』

『あなた。半信半疑の様よ?』

『ま、いづれ分かるさ。』

.....これが走馬灯じゃないと祈りつつ。

僕は近づいていった。弁当箱を開けながら。

こうやってると、なんだか僕って主人公みたいだね。ふとそう思った。

そして、とうとうプレッシャーを発している父親に近づいてしま

った。何をやっているんだろうね？僕は。

「なんだ？やられに来たのか？」

「いえ、僕死んじゃいますよ。ま、それよりこれ食べて落ち着いて下さいな。」

「む？」

と言って、僕は自分の弁当のおかずを一つ、堇さんの父親に食べさせた。

そうやって食べてる間、逃げ出した人たちは戻ってきていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

理由は、食べてる間にプレッシャーが弱まっていったからだ。ふう。危なかった。

そして、ゴクリという音がした後ちよっただけ間があった。僕は自分の弁当を今まで通り食べているよ。

うーん、ちよっと味づけに失敗したのかな？ちよっただけ薄いや。

と自分の料理に評価していると、周りから「おい、なんであいつ平然としてられるんだ？」

「肝が据わってるのか？それともただのバカか？」「最近思うんだが、連の料理食べた人ってたいい感動するよな。」「：たいいじゃない。全員。」「そうだっけ？」「あれでカテゴリーが『普通』っておかしいわよね。」「一般人に分類できない気がするわね。」

「すごいなあ、連は。」「本当ですね。」「なんだかあいつの顔がにやけて来てるぞ？」「本当ね。」「あら？」とまあいろいろ言われていた。

僕はまぎれもなく一般人です！と主張したかったけど、言う気にはなれなかった。

その間がなくなった時に堇さんの父が言った言葉がまあ、想像通りだよ。庄一と圭も言ってたしね。

「・・・・・・・・・・・・・・・・うまい！！」

それを言った時はそこにすでに怒った顔はなく、感動したような顔をしていた。あゝ良かった。

それを見た人達は、食べ終わって片付けをした僕を見た。その視線を受けながら、僕は感動から戻ってきていない寺井父にこう言った。

「落ち着きましたか？」

その言葉に感動から戻ってきたのか、

「・・・ああ。すまなかったな。取り乱して済まない。」
と言ってきた。対して僕は、

「気にしません。僕の両親より問題がありませんから。」

と言って、自分で地雷をあえて踏んで自分で落ち込んだ。

そんな雰囲気で、昼は終わった。もう思い出したくない・・・。

ちなみに、この騒動は何事もなく流されたけど、噂で「三年生の一般人は普通じゃない人の方が多い。」というのが流れた。僕のせいじゃないんだけどね。

あ。パン食い競走のアンパンをつくったのは僕だよ。だからみんな必死に食べようとしていた。うちのクラスは全員が食べた。だからこの競技、うちのクラスみんな一位だったんだ。

そしてなぜか、アンパンが余ったことによりアンパン争奪戦が発生した。

・・・みんなを巻き込んで。

最初にアンパンをとったのは庄一で、四個ぐらいとっていった。

そして、食べている間に一個を寺井父がとっていた。保護者までも巻き込んだんだよね。

最終的に争奪戦はバトルロワイヤルみたいになって、騒ぎが収まったところには、色々な意味でカオスなことになっていた。南無。

閑話 とある休日 木村圭編（前書き）

三人の中で一番ミステリアスな人、木村圭。彼の休みの過ごし方とは一体・・・？

閑話 とある休日 木村圭編

・・・・・・今回は俺、木村圭の休日を紹介する。といっても、面白いものはないだろうけどな。

午前七時。俺は休みの日でもこの時間に起きる。起きてまずやることは、着替え。次に、パソコンの起動。

パソコンが起動するまで、俺はリビングに下りている。

「おはよう、圭。」

「おはよう。」

「おはよう。」

上から、父、母、自分の順であいさつをして、朝食を食べ始めた。食べている間の会話はほとんどない。そういった意味では、連の家族がある意味うらやましいと思う。

・・・・・・両親のズボラさがなければ。

朝食を食べ終え、俺はすぐさま自分の部屋に戻った。そして、パソコンに届いているメールを一つ一つチェックしていった。それをする理由は、情報屋の人たちからの情報を整理、分別などをするからだ。以前はかなり手間取ったが、今では音楽を聴きながらでもできるようになった。

今日（届いたやつは全部昨日）の分をすべて終わらせたときの時刻は、午前九時。これからの予定を見ると、十時から家の近くの裏路地と書いてあった。

俺はそれがどんな用だったかを思い出し、普段の持ち物を持ってリビングに下りた。

「行ってきます。」

「何してるかわからないけど、気をつけなさいね。」

「分かってる。」

母は専業主婦なので、いつも家にいる。父は結構は会社の部長。

家を出た俺は、集合場所に行った。ちなみに、両親は俺が何をしているのかを知らない。そのうえ、両親は俺が何をしているのか訊いてこない。答える気はないが。

俺は集合場所へ着いた。着いた時間は午前九時半。三十分くらい暇なので、俺はいつものように暇つぶしをすることにした。といっても、簡単なパズルゲームしかやらないが。

閑話 とある休日 木村圭編その2

三十分後。

「やあ、圭。君は律儀だね。感心するよ。」

「・・・楽しいことを見つけたのか？」

「どうしてそう思うんだい？」

「・・・なんとなく。」

待ち合わせ場所に情報屋の一人が来た。

彼の名は柊宙^{つばきあそ}。それ以外の個人情報を知ることが、この業界ではタブーとなっている。見立てでは、年は三十前くらい。顔立ちがいいので、たぶん、ホストとかで情報を収集しているのだろう。

「・・・何の用だ？」

「前に言ったじゃないか。ちょっと面白い情報が耳に入ってきたから、その真偽はともかく君に聞いてほしいって。」

「・・・それで俺がほかの奴らに発信すると。」

「そう。僕たちの取り決めだからしょうがないんだけどね。ま、近いからという理由もあるんだけどね。」

そう言いながら肩をすくめる宙。様になっているな、相変わらず。

「・・・で、その情報は？」

「実はね、本格的に動き出したみたいなんだよ、『フランク스가』が。」

「・・・なに？」

宙の言葉に、俺は耳を疑った。フランクスだと？あれはもう活動していないんじゃないのか？

俺は驚きを隠して訊いた。

「・・・本当か？」

「本格的といっても、まだ活動はそんなにしていないみたい。きつと来年からだろうね。」

「・・・分かった。報告しとく。他には？」

「あとは……君の学校の生徒、中島元といったかな？彼、狙われてるらしいよ。」

「それは報告しなくていい奴だな。ありがとう。」

「どういたしまして。これぐらいかな？……あ。そうそう、池田連君の料理を食べてみたいんだけど。」

「……それは学際のクラス出し物が喫茶店だったら。」

「それだったら食べれるね。ありがとう。これ、いつものだから。じゃ！」

そう言って、宙は路地裏の奥へ行った。そこから自分の場所へ戻るのだろう。

俺は渡された封筒をバックの中へ入れ、路地裏を出て歩き出した。

閑話 とある休日 木村圭編その2（後書き）

補足・・・・フランクスはバンドグループで、六年前に活動を休止。かなり伝説的なバンドで、ファンの中では悲しむ声がたくさんあった。

閑話 とある休日 木村圭編その3 (前書き)

五十話を達成しました！他二作品の更新も頑張りたいと思います。

閑話 とある休日 木村圭編その3

歩くこと二十分。俺は偶然にもある人物と出会った。

「お久しぶりです。木村様。」

「・・・久しぶり、詩音。今はホテルじゃないのだから、様はいらない。後、敬語も。」

詩音だった。いつもののかっこうとは違い、オフのせいか美人度が増してる気がする。

「そう。なら、これでどうです？圭。」

「・・・それで構わない。それにしても、どうしてここに？」

俺は、詩音がここにいる理由がわからず訊いた。

詩音は隠す気がないのか、正直に答えてくれた。

「店長が、『しばらく三十五階に泊まる人がいないから、休んでいいよ。』と言っていたのですから。次に泊まりに来る客が二週間近くあるので、私は実家に戻ってきたというわけです。」

俺は意外と近場に詩音の実家があることに内心驚いた。

「そういう圭はどうしたのです？」

質問に答えたのだからこちらも質問していいよね的な雰囲気醸し出しながら、訊いてきた。

俺も特に隠す必要がないので、

「・・・散歩。ただぶらりと歩いてるだけ。」

と答えた。その前に行っていたことは言う気にはなれなかった。

俺がそう答えたら、

「じゃ、一緒に散歩してくれませんか？久しぶりなので、街並みが変わって戸惑ってしまってます。」

と提案してきた。俺は特にこの後の予定はなかったので、

「・・・分かった。」

と了解した。

色々なところ（といってもそんなに行っていないが）に歩いていき、そのたびに俺はその場所の説明をしていた。ただ、それは新しい場所ぐらいなので、それ以外は普通に会話を楽しんだ。

例えば、

「圭は学校ではどんな生活を送っているのですか？」

「・・・夏休みに一緒にいた友達と勉強したり、遊んだりしている。」

とか、

「圭の好きな食べ物はなんですか？」

「・・・ハンバーグ、焼き肉、刺身など。」

「子供っぽいものがありますね。」

「・・・うるさい。」

とか。

そうしていると、お昼になった。

「どこで食べますか？」

「・・・昔からある店。日食。」

「まだあるんですか、あの店。」

ということ、日食に行くことになった。

閑話 とある休日 木村圭編その3 (後書き)

圭の休日って三人の中で一番のんびりしてそうですね。

閑話 とある休日 木村圭編その4

日食。正式名、日暮食堂。この店は一番歴史が古く、創業百年くらいになる。それくらいなら結構な有名店になってるのだが、とある理由でそんなに有名ではない。値段は、学生でも十分に出せる金額なので、結構行列ができたりする。

俺たちが着いたとき、まだ開店して間もないのに人がたくさんいた。

「・・・並ぶ？」

「いいですよ。」

そうして待つこと十分。俺たちの番が来た。

「いらっしやい。・・・ん？圭か。珍しいな、女連れなんて。」

「・・・大将。知り合い。あと、ふざけで言わないほうがいい。詩音がかわいそう。」

「そんなことないですよ、圭。お久しぶりです、大将。詩音です。」

「おお！詩音ちゃんかい！懐かしいねえ。ま、座って座って。」

とりあえずカウンター席に座ってくれということなので、俺と詩音は座った。そしたら、隣から声をかけられた。

「よう、圭。隣の人は・・・・・・ヒューマニーホテルの従業員だよな？どうしてここに？」

「・・・庄一こそ。」

声をかけてきたのは庄一だった。どうやら一人で来ているらしく、のんびりと食べていた。

「久しぶりにここで食べたいと思ってきたんだよ。そういうお前は？」

「・・・詩音さんと偶然会ってから、行動を共にしている。」

「ケツ。羨ましいこって。」

そう言って庄一は水を一気飲みした。

何か癪に触るようなことでも言ったのだろうか？

そう思ったが、今は注文のほうが先なので、考えないことにした。

俺と詩音は同じものを注文し（この時庄一が「仲好いな、ちくしよう」と言っていた）、料理が来る間は三人で話していた。

「そういえば、もう一人はどこにいます？」

「連のことですか？あいつなら家で昼食を食べてると思いますよ。金がないとかで。」

「・・・外食なんてほぼしない。それに、自分で貯めているお金以外は自分で使わないと決めているから、基本自炊で過ごしている。」
「すごいですね。」

「あいつの武勇伝ならいくらでも話せますよ。なんたって苦労しますから。」

「本当に中学生なんです？」

「・・・俺たちと同じ、中学三年生。」

「健気な子ですね。」

そうこうしていたら、俺たちの料理が運ばれてきた。庄一はすでに料理を食べ終えており、「少し休む」とか言って、水を飲んだりしていた。

食べていたら、大将が突然話しかけてきた。

「圭。池田連の友達なんだろう？」

「・・・なにか？」

この時すでに、庄一は会計を済まして店を出て行った。

なおも続き、

「頼みがあるんだ。ちょっとでもいいから、そいつを店で働かせたいんだ。」

と言ってきた。俺はそのことに疑問を持って訊いた。

「・・・どうして？」

「仕事。」

その一言で、大将が何を言いたのか俺には理解できた。つまり、ちよっとの間店を空けるから、連に店のことを頼みたいということら

しい。

「何日くらい？」

「二日あれば大丈夫だと思うが、休日を二日もつぶしてやってくれるか？」

「・・・たぶん、やらない。」

「だよなあ。ま、一日は休みにすればいいか。とりあえず一日だけでもいい。頼んどいてくれ。」

そんなことを話していたら、詩音が話に混ざってきた。

「どうしたのです？」

「ちよっとした日常会話だよ、なあ？」

「・・・（コクリ）」

そんなやり取りの後、俺たちは昼食を食べ終え、店を後にした。言い忘れていたが、大将は情報屋、その中でもトップクラスの人物である。日食が有名店にならない理由は、大将自らが情報操作をしているからである。その理由が、「地域との交流を大切にしたいからだそうだ。」

閑話 とある休日 木村圭編その5

その後、俺と詩音はまた散歩をしだした。その途中、CDショップに立ち寄ったり、詩音の買い物に付き合ったりした。

そして、この町に一つしかないスーパーへ行くことになった。

「・・・何か買い物でも？」

「ええ。両親に夕飯を作りますので。」

そういう会話の後、スーパーに入った。

そこで買い物の手伝いをしていたら、当然というか偶然というか、連と出会った。

「どうしたの？圭。普段ほとんどこんな時間に来ないのに。って、もしかして、詩音さん？」

「久しぶりです、連君。本当に一人で買い物してるのね。」

「・・・手伝い。」

「ふーん。・・・あ！やばい！さっさと買わないと！長居してたら姉さんに怒られる！じゃ！」

そう言って、連は早歩きでどこかへ行った。その時に、「詩音さん。野菜や肉、魚は商店街のほうが安く買えますよ。」と言った。

連を見送って、

「忙しそうですね。」

「・・・あれが普通。」

「そういえば、さっき連君が何か言ってますでした？」

「・・・商店街での買い物の方が安いと言っていた。」

という会話で、俺たちは商店街へ向かった。だいたい歩いたせいか、足が疲れてきた。

商店街での出来事を省略し（あえて言うなら、連の言った通り結構安く買えた）、帰路についた。というより、詩音を送っていくという意味合いが強かったが。

詩音に礼を言われちよつと照れくさいと思いながらも、俺は自分の家へ帰った。

家に帰ると、母が寝ていた。時刻は午後五時。俺は母を起こす気になれず、自分で夕食を作り、食べ、片づけて、自室へ向かった。パソコンを起動してる間、今日の出来事を日記に書きとめた。しかし、宙の言っていたことは、別なものに書き留めた。

パソコンが起動したとき、母が俺の部屋に来た。

「おかえり。」

「ただいま。夕飯は食べたから。」

「そうなの？ 圭は優しいんだから。じゃ、お母さんとお父さんの分を作ればいいのね？」

「そう。」

そう言ったら、母は部屋を出た。俺は、すぐさまインターネットでいつものサイトに行き、今日の朝やったことをサイトにアップした。そのついでに、宙が言っていたことも報告書としてサイトに書き込んだ。

それがきちんとできたことを確認した俺は、パソコンの電源を切り下へ降りて風呂に入り、父と少し会話して、寝た。寝るときに、今日の出来事はデートというのではないかと考えて、少し寝られなかった。

閑話 とある休日 木村圭編その5 (後書き)

次は多分、第五章かもしれません。

五 十月下旬～十一月中旬（学園祭までの準備～学園祭四日間と後片付け）

学園祭編です。この間に、ちよくちよく閑話を挟みたいと思います。
あと、新キャラ登場します。

五 十月下旬～十一月中旬（学園祭までの準備～学園祭四日間と後片付け）

「えー、来月中旬に行われる学園祭での、クラス内出し物を決めたいと思います。」

九月に行われた体育祭が終わり、テストやらで大変だった十月。

僕は、次の学園祭の出し物について話し合っていた。

「誰かゝ案ありませんか？」

と言っているのは、ご存じ久実さん。何故だかダレていた。

僕は話し合いに耳を傾けている程度で、普通に空を見ていた。今日も空がきれいだなあ。

と、そこで僕は何かがこっちに来てるのに気付いて席を立てしまった。みんなに注目されたのにもかかわらず。

「ど、どうかしたの！？」

と、久実さんが言っていたけど、僕は気にしなかった。いや、気にしていられなかった。

だって・・・・・・・・・・・・・・・・。

「こっちに来てる……………」

『ハア！？』

と、みんなが驚いて窓の方を見た。そして、

『なんか来てる！！』

と言ってみんな廊下の方へ移動してしまった。僕はというと、

「おい！俺らも行くぞ！」

「…逃げないよ。」

「伏せるだけで何とかなるかもしれない。」

「ハア！？何言ってるんだ！死んじまうぞ！！！」

「…無謀！」

「だったら、僕一人だけここにいるよ。」

「…………ああ、もう！俺も残るぜ！」

「…俺も。」

「二人とも……じゃ、今から伏せて!!」

「おう!」「…了解!」

と言って、三人とも窓の下に行き、身をかがめた。

そして、

チュド――――ン!

!!!!!!!!!!

という音がして、僕らの上を通り過ぎて教室に着地した。その時に、机などが教室の外へ出てしまった。

「ゲフツ!ゲフツ!大丈夫か!」

「ゴホッ!ゴホッ!だ、大丈夫。」

「…問題ない。」

と、僕達三人はお互いの無事を確認した。良かった大丈夫みたいだ。

「それにしても、」

と言って、庄一は着地点の方を見た。僕達もつられてみた。

「それにしても、誰だ?こんな事した馬鹿は?」

そうしていたら、着地点から人の声がした。

「あつれ、おかしいな。どこで計算が間違っただろ?ちゃんと出力計算したのに。」

.....

「「出来てねえよ!!」」

僕達は思わずツツコミを入れてしまった。

そしたら、廊下から人が戻ってきた。そして、

「あんた達!!どうして逃げなかったの!」

「そうですよ!危ないじゃないですか!」

「ていうか、誰なの?ここに着地したのは?」

「三人とも、大丈夫?」

と、元^{はじめ}たちが言ってきた。

その声に、庄一がキレた。

「お前ら、能力あるのにどうして逃げたんだよ!!」

その言葉にみんなが黙った。

「使ってればこんな事にはならなかったんじゃないのか!? どうして何もしなかったんだよ!」

「庄一!!」

庄一が怒りをぶつけていた時、僕は庄一に呼びかけた。

「なんだ連! 今俺は…」

「庄一! 君のその言葉は差別だ! 能力があるからって、さっきの状況で判断できた!? 僕達だって伏せることしかできなかったじゃないか! それにまだ子供だ! この状況で逃げたくなる!」

僕の言葉に、庄一ははっとした。気付いてもらえたのだろうか?

「……………すまなかったな、連。ついカッとなって……………」

「僕じゃないよ、庄一。謝る相手は。」

「ああ。」と言って、元^{はじめ}たちに向き直ってからこう言った。

「すまなかった。俺は心の中でお前たちの事を差別していたみたいだ。」

その言葉を受けて、元^{はじめ}たちはバツが悪そうにして言ってきた。

「す、すみません。」

「逃げたことは言い訳できないわね。あんたが謝ることじゃないわ。」

「こうならないために今まで頑張ってきたんだけど……………ごめんね。」

「ごめんなさい。」

さてお互いに謝り終わったので、次に、こんなことをしたのは誰かと思いい、煙が晴れた場所を全員で見たら……………。

ロケットを背負っていた女の子がいた。

「あれ? どうして私の事みんな見てるの?」

その少女は、僕達に見られている訳が分からないのか首をちょこんと傾げた。

僕達は一斉に、

『誰だよ。お前。』

と言っていた。

人騒がせな人だと、僕は思った。

十月下旬～十一月中旬（2）

「はじめまして、私の名前は花音。藤木花音です。今日からこのクラスに転校することになりました。よろしく願いします。」

ぶっ飛ばした机のせいで、先生に叱られてきた藤木さん。あの後、クラス会はどこへやら、真っ先に先生が来て事情を説明し、藤木さんを連行していった。

僕達というと、残っていた机と椅子を並べてみたけど数が足りなくて、校庭にぶっ飛んでいったものは壊れて使い物にならなくなっていた。なので、全員が机と椅子なし、要するに床に座った状態だった。

それからしばらくして、藤木さんが連れられてこの教室へ来て、さっきの自己紹介をした。

その紹介を聞いた一部の男子が、「おい、ロリだ。」「いい……。」と何やらバカなことを話していた。

僕達三人はというと、

「それにしても、よく見てたな。あいつが飛んでくるところ。」

「ああ、それね？単純に、話だけ聞いてて空を見てたら何かがちに近づいてるなあ、って感じだよ。」

「……偶然でもすごい。」

「そうだな。結果的に見たら、お前のおかげで怪我人がいなかったじゃねえか。」

「そうだね。」

「…（コクン）」

固まって話していた。だって座ってるんだもん。

それで先生がこう言ってきた。

「あー、彼女はこれでも天才科学者で発明家だそうだ。仲良くするように。それと、机と椅子は明日には何とか手配するから。あと学

園祭の出し物決めとけよ。」

そのあと、先生は教室を去っていった。え？これで放置？

その代わりに、久実さんが教壇に立ってこう言った。

「さっきのせいで有耶無耶になりそうだったけど、学園祭の出し物を決めたいと思います。意見在りませんか？」

すると、一人の女子生徒が手を挙げた。

「はい、倉持さん。」

倉持さんって、超能力を持っている人だっけ。と、どうでも良い事を考えていた。

「喫茶店でもやりませんか？」

指された倉持さんは、喫茶店をやろうと言った。その言葉を聴いた他の人達は……

「喫茶店か……」「でもいいんじゃないね？」「そうね。楽しそう。」

賛成ばかりだった。でも、この流れだと僕は自然と調理係になりそうな気がする。

「喫茶店ね。ま、無難な所ね。他の意見は？なかったらこれにするけど。」

結局、これしか意見が出なかったので僕は喫茶店になった。

言い忘れてた。

僕達の学校の学園祭は、一般向けに開放されている。開催期間は四日間。クラスの出し物は、もう金をとること前提。そのお金は募金という形で貧しい所へ寄付される。

で、話を戻すけど、喫茶店と決まったはいいいけど、新たな問題が浮上した。

僕達三人と元以外はじめの男子が「コスプレ喫茶やろう」と馬鹿なことを言っはて、頑として譲らなかった。

女子たちは反対したけど、何故か最終的にコスプレ喫茶に決まってしまった。誰かが入れ知恵でもしたのかな？

その次に役割分担。これは久実さんがやる……はずだったのに、何がどう転がったのか庄一にお鉢が回った。

その後がもうスムーズに決まっていた。

調理係のリーダー決めは簡単。一斉に僕の名前を言ったから。

監督も簡単。このまま庄一。

接客係は元、堇^{はじめ}さん、レイジニアさん、久実さんを中心にうちのクラスの綺麗な人とカッコイイ人が選ばれた。あ、転校して間もないけど藤木さんも接客だよ。

教室の内装チームは庄一を中心にやっていくこととなった。

伝票などの会計は、圭を含めて数名。最初人数を聞いた時「少ない？」と思ったけど、圭の事だから大丈夫だろう。

その次にメニュー決め。これが大変。

喫茶店の代表的なメニューを挙げていたら多くなったので、どれにするかで一悶着あった。

最後に店名。あれやこれや言ってる間に授業が終わりそうだったので、庄一が「じゃ、店名は、『喫茶・レイデン』で。」と言って強引に決めた。それでみんなは納得した。

締めの一言に庄一が、

「おら、やるぞみんな！泣き言言わないで必死に働け！以上！」
と言ってみんなにヤル気を出させた。凄い人だ。

十月下旬～十一月中旬(2) (後書き)

庄一のリーダーシップはすごい。

十月下旬～十一月中旬(3)

それから、僕は喫茶店の準備をしだした。

僕は、調理係として選ばれた六人と一緒に圭から出された金額をもとに、決まったメニューの試作品を作っていた。調理室を貸切にして。時々、僕がつくってる間に「池田君って、本当に料理上手いよねえ。」「なんかレベルが違い過ぎて、参考にできないって感じだよねえ。」「俺、あいつに教えてもらおうかな?」「無理無理。教えてもらってもお前じゃ参考にできねえよ。」「なんだと?」とまあ、なんだか物騒な話が聴こえる。正直、みんなで頑張ろう、と言いたい。

ちなみに、接客係の衣装は圭がデントツから取り寄せた。しかも、無料で。

そのことに他の人たちが驚いたけど、本人は気にせず自分の仕事をしていた。

内装は、庄一がその手に詳しそうな人にすべて任せたみたいだ。適材適所だね。

あ、藤木さんはみんなと打ち解けたよ。色々と迷惑かけてるけどね。

で、藤木さんの目下の観察対象は、言わずもがな元^{はじめ}である。

どこへ行くにも元^{はじめ}についていくので、久実さん達があの手この手で藤木さんを引き離している。最初に「花音^{はなね}」と呼んだのは元^{はじめ}だしね。

そうしてるうちに日は過ぎて、ついに文化祭初日を迎えた。

庄一が、みんなに向かってこう言った。

「これから四日間、俺達は商売をする。中学生だからって怠けるなよ! 商売は戦だ! 行くぞ!」

『おお——!!』

こうして、学園祭が始まった。これから、僕達の知らない所で起

こることを知らずに。

「庄一、そのセリフをどこで覚えたの？」

「ちよつとドラマのセリフを言ってみたくてな。」

「：ドラマ「商戦スピリット」から。」

「よく知ってるね。」

「俺も驚きだ……。」「

「：（プイッ）」

十月下旬～十一月中旬（3）（後書き）

次から学祭が始まりますが、閑話を入れるかもしれません。

閑話 とある休日 寺井堇編（前書き）

今回は寺井堇さんのお話でもどうぞ。時系列でいつと、学園祭本番前の休みの日です。

閑話 とある休日 寺井董編

こんにちは。今回はちょっと恥ずかしいのですが、私、寺井董の休みの日の過ごし方を、紹介したいと思います。

私は、休日でも平日でもきまって朝五時には起きます。なぜなら、それが毎日の習慣となっているからです。

朝起きて着替えを自分でし（他人にやってもらうほど、お嬢様ではありません）部屋を出ると、毎日三人のメイドさんがいます。私の専属です。家にいるときはいつも一緒に行動しています。

「おはようございます、お嬢様。」

そう言ってお辞儀を、真ん中の人がしました。

「おはようございます、未来さん。今日もお早いですね。」

私にお辞儀をしてくれたのは、堂本未来さん。この家のメイド長で、年齢は見た目で二十代くらいの人。いつも無表情で無愛想っぽいけど、実は人形や裁縫が大好き。昔一人で寝れないときは、未来さんの部屋で寝たりしていたんですよ。

「お嬢様、いつも早いですね。私まだ眠いんですけ・・・ふあゝあ。」

「ま、真帆。お嬢様の前で盛大にあくびしないの。」

「だって、まだ眠いんだもん。美帆だってあくびしてたじゃん。」

「そ、それは・・・！」

未来さんを挟んで会話をしている二人の少女。あくびをしていた人の名前は松村真帆さんで、それを注意したのが松村美帆さん。

二人は、最近この家で働くことになったメイドさん。同じ名字から分かるとおり、彼女たちは姉妹。それも、双子の姉妹なんです。

お姉ちゃんは美帆さん。気が弱くて引っ込み思案、そして人見知りという欠点はあるものの、大変優秀な人なんです。

妹さんの真帆さんは、お姉さんとは正反対の性格の持ち主です。

でも、仕事をたまにサボって未来さんに怒られます。

私は、そんな三人を見てこう言いました。

「では、いつものようにお願いします。」

それを聞いた三人は、

「」「かしこまりました。」「」

と言って、私の後を付いてきました。

閑話 とある休日 寺井董編（後書き）

次回もこれで行くと思います。

閑話 とある休日 寺井董編その2

「これぐらいで体をお休みになられたほうがいいですよ、お嬢様。」
「そ、そうですね。ちょっと休みますので、朝食の準備をしてきてください。」

「かしこまりました。では美帆と真帆を置いていきますので。」
そう言って、涼しい顔をして未来さんを部屋を出て行きました。

「大丈夫ですか？ お嬢様？」

「毎日大変ですね、魔術の修行だなんて。」

座り込んでしまった私に、美帆さんと真帆さんが駆け寄ってきて、お水とタオルを渡してくれました。言い忘れていましたが、美帆さんと真帆さんは私より一歳年上だそうです。

「ありがとうございます。」

そうお礼を言って、私はタオルで汗を拭いて、水分補給をしました。私たちがいるのは修練場です。朝起きてからは毎日とっていいほどここで、未来さんと修行をしています。

未来さんの実力はトップクラスなので（私の知る限りでは）、私は素直に教えてもらっています。時折、元は未来さんみたいな人が好きなのかなあと思ったりしちゃいます。強くてカッコいいですからね。

そんなわけで（実際の理由は違いますけど）、私は未来さんに師事してるのです。

と、私が休んでいたら、ふと真帆さんが訊いてきました。

「そういえばお嬢様、もうすぐ学園祭ですね。」

「そうですね。私たちのクラスは喫茶店をやるんですよ。」

私がそう言うと、真帆さんが、

「本当！？ お嬢様はどっち側ですか！？ 接客ですか！？ 調理ですか！？」

興奮気味に訊いてきました。しかし時計を見ると七時になりそうだ

ったので、

「それはまたの機会です。今は未来さんたちが作った朝食です。」

といって、私は部屋を出て行きました。正直言うと、真帆さんが訊いてきたとき恥ずかしくて答えられなかったんです。だって、コスプレで接客なんですから。

「ごちそうさまでした。」

私はあの後食堂へ向かい、未来さんが作った朝食を食べました。これからの予定はなかったので、何をしようか悩んでいたら、お母様が来ました。

「おはよう、堇。」

「おはようございます、お母様。」

私のお母様は社長夫人であると同時に、作家でもあります。ペンネームは「水連」で、売れっ子ではありませんが、ファンは多いんですよ。ただ、私のクラスに二人もいるとは思いませんでしたけど。

お母様が椅子に座ったら、ほかのメイドさんが朝食を運んできてくれました。それを食べてるとき、お母様が私に言いました。

「そういえば、今月学園祭ですね。」

「はい。」

「私たちも行きますよ。丁度休みが重なりましたので。」

「そうなんですか。」

「また体育祭のようにならないかればいいのですけれど。」

それを聞いた私は、思わず苦笑してしまいました。あの時は、連君の判断がなかったら大変なことになっていただろうと思いますからね。

お母様が食べている間、私はお母様とお話をしていました。そして食べ終わったら、私は食堂を出ました。

これから何をしようと悩んでいたら、携帯電話が鳴りました。発信者を見ると、『中島元』の文字が。

私は、高鳴る心臓を何とか抑えながら、電話に出ました。

「も、もしもし!？」

『あ、輩?これから何か予定があったりする?』

「まったくないですよ!」

『え?あ、うん。それならいいんだけどさ。』

ちよつと緊張しすぎたみたいですね。元が若干引いてしまっています。

「そ、それで、何かご用ですか?」

落ち着いてから、私は訊きました。

『今からいうところに来てくれないかな?ちよつと大事な話があるんだ。』

その言葉で、私の鼓動は一瞬で、さっきより速くなりました。

だ、大事な話!?も、もしかして・・・こ、告白!?

と思っていたら、

『あ、そうそう。久美たちも行くから。十時には集合ね。』

と言って電話を切られました。その時、一瞬で私のテンションは下がりました。

しかし、これでへこたれてなんかいませんので、私は素直に行くことにしました。

でも、肝心な用件が何なのか判りませんでしたね?

閑話 とある休日 寺井董編その3 (前書き)

はたして、元が呼んだ用とは一体？

閑話 とある休日 寺井董編その3

午前九時四十分。私は元が指定した集合場所へ行きました。そこにいたのは、元と久美と花音さんでした。

私に気づいた元が、手を挙げながらこう言いました。

「おはよう董。大丈夫だった？」

私はさっきのことを思い出しましたが、その仕返しをする気はなかったので、

「今日は用事がなかったので大丈夫です。」

と言いました。その様子を見た久美が、

「元？そろそろ、どういう訳で私たちを呼んだのか言ったらどう？」と訊きました。花音さん不思議に思っていたようでした。

「そうそう。どうして私たちを呼んだの？」

それに対し、

「レイジニアが来てからね。」

と言ってはぐらかしました。最近、元のはぐらかし方がうまくなっている気がするの、気のせいでしょうか？

十時五分。ようやくレイジニアさんが来ました。もちろん、私たちは当然のように文句を言いました。

「遅いじゃない、レイジニア。寝坊でもしたの？」

「まさか。ハジメに起こされなきゃ、私より遅れてくるあなたに言われたくないわ。」

「レイジニアさん。遅かったじゃないですか。五分過ぎてますよ。」

「ちよっと道に迷ってしまったのよ。ここで生活しても、ここら辺にはほとんど来ないから。」

「私のGPS、貸す？」

「結構よ。それでまた迷子になりたくないから。」

私たちの文句をいつもの毒舌で返したレイジニアさん（久美だけ）は、元に向いてから、私たちと同じことを訊いた。

「それで？一体何の用なの？」

それに対して、元はこう答えました。

「さて、みんな揃ったわけだし、行こうか。」

そう言った後、元は歩きだしたので、私たちはあわててついて行きました。

本当に、何の用があるんでしょうか？

「着いたよ。」

歩いて十分。私たちは元が立ち止まった店を見て、驚きました。

「ここって……」

「いわゆるコスプレ衣装を売ってる店よね？」

「最近では貸し出しもやってるんだよ。」

それを聴いた私は、なんでみんな知っているのか不思議でなりませんでした。

と、ここで久美が訊きました。

「どうしてここに用があるわけ？」

すると元は、こう言いました。

「ほら、僕たちのクラス、コスプレ喫茶じゃない？それで衣装を決めることになったじゃん。で、庄一が僕たち以外の注文は訊いたから、お前らは実際に店行って何着るか決めてくれて言われて。この場所は圭が教えてくれたんだよ。なんでも、この店で貸し出しの注文をすると、デントツにある本社から送ってもらえるんだって。」その言葉を聴いて、私たちは庄一君の意図と、圭君の情報網に感謝しました。

そのあと、

「あれ？でも、庄一が『一人ずつ行けよ。間違っても、全員で行くなよ。』って言ってたけど、どうしてだろう？」

といった元に対して、私は（多分ほかの人たちもでしょうけど）ちよっただけ殺意を抱きました。

閑話 とある休日 寺井董編その3 (後書き)

元の鈍感、マジでヤバス(爆)。

閑話 とある休日 寺井董編その4 (前書き)

ページ数自体は少ないのですがね。

閑話 とある休日 寺井董編その4

店に入って、私たちの衣装選びが始まりました。元は、「僕の衣装はもう決まってるらしいから、結構だよ。」と言って店の中を散策するみたいです。

そうしてる間、私たちの中で密かな戦いが始まりました。

それは、「誰が元を誘惑できるか。」という戦いです。もっとも、衣装を選ぶのを手伝ってもらったり、楽しくお話しできるかということもありますが、ここでの課題はいかに衣装で元をときめかせるか、ということです。

ただ、困った事が発生しました。

衣装が全部ディスプレイ表示になっていることです。各コーナーごとに衣装の名前と値段があるのですが、実物ではなく映像なのです。これでは試着してみてもうることができません。

そう思ったので店員さんに聞いたところ、どうも、今着ている服の上に映像を映すという形で、試着ができるようでした。

なので、私はあちこちを見て回っていました。その時に、久美が元を呼んだのを見ました。

「ねえ、これなんてどうかしら？」

彼女は、ネコミミと言われるものとセーラー服を試着していました。元は関心を示しませんでした。それにムツときたのか、

「じゃ、これなんてどうかしら？」

と言って、スーツ姿になりました。といっても、ズボンではなくミニスカートでした。

その恰好を見た元は、顔を赤くしてそっぽを向いていました。その時に花音さんが、

「これどうかな？」

といって、どう見てもいつもと変わらない格好でいました。元は反射的に「いいんじゃないかな!？」と言ってしまいました。悔しい

気持ちでいっぱいになったので、私も真剣に衣装を選んでいきましたが、全く見つかりませんでした。

レイジニアさんも決まったらしく、残るは私だけだったのですがこれといったものが見つからなく、大変困り果てました。そこに元が来て、

「どうしたの、葦？決まってるの？」

と話しかけてきました。私はまた足を引っ張っちゃったなと思いながら、頷きました。

そしたら、

「だったら、これなんてどう？絶対似合うよ。」

と元が選んでくれました。それが、巫女さんの衣装でした。私は嬉しき半分、やるせなさ半分でそれに試着したところ、元がじっと私のほうを見て「ほえ。」と言っていました。

これは私に見とれてるってこと！？と内心で半狂乱になりながら、これに決めました。

衣装を決めた事を庄一君にメールして、私たちは店を出しました。

それから、みなでお昼を食べました。もちろん、日食で、です。

レイジニアさんと花音さんは初めてらしく、楽しみに並んでいました。

そして私たちの番になったので店に入ったら、聞き覚えのある声で出迎えられました。

「いらっしやいませー！」

「あれ？この声……。」「どこかで聴いた様な気が……。」

「どこだろう？」「もしかして。」

「まさか……。」

そう言いながら調理場へ視線を向けると、ある人がいました。それは……、

「「「「レン（君）！？どうしてここに！？」」「」」」

「さっさと座ってよ。他のお客さんの迷惑になってるから。」

連君に注意され、私たちはおとなしく指定された席へ行きました。それにしても、どうして連君がここで働いているのでしょうか？

それはみんなが疑問に思っていたことらしく、

「あれ、レンよね？」「そうね。」「池田君、ここの息子なのかな？」「違うよ。普通の家庭だよ。」

と口々に言っていました。

それはさておき、私たちは注文する料理を決め、店員さんに言いました。それから三十分後。

私たちが頼んだ料理全部が来ました。人ばかりで待たされると思っていたのに、それほど待たされなかったことに、私たちは驚きました。

頼んだ料理を食べ終わった後、みんなで会計を済まし、店を出ました。店が出るまで、連君が休んでいる姿を見ませんでした。

「いや、連があそこで働いてるなんて驚いたね。」

「というより、なんであそこで働いていたのかを不思議に思わないの？」

「元と同じで不思議だね。次は池田君を研究対象にしようかな？」

「それにしても、あいつに休憩時間とかあるのかしら？」

「どうなんでしょう？」

日食からの帰り道、そんなことを話していたら、

「ん？お前ら、日食からの帰りか？」

「・・・連はどうだった？」

庄一君と圭君に会いました。ふたりとも、どうも日食で連君が働いていることを知っているみたいです。

それに反応して、久美がこう言いました。

「そういうあんたたちはどうしてここに来たのかしら？まさか、連をさらに忙しそうにする気？」

対して庄一君は、

「お前たちみたいなことはしねえよ。俺たちは単に手伝いをするために来たんだよ。」

と言いました。圭君も、「……連は有給。俺たちは無給。」と言いました。

そして、店の裏口へ入っていきました。友達思いな人たちだと、今更ながら思いました。

閑話 とある休日 寺井董編その5 (前書き)

六十話突破しました！

閑話 とある休日 寺井董編その5

庄一君たちが日食に入るのを見送った後、私たちはそのまま歩いていきました。が、足取りは重く、ゆっくりとした動きに見えたでしょう。

そこで元がポツリと言いました。

「・・・連には学園祭でも頑張ってもらうんだしね。助けてあげたいね。」

それに反応して、私たちはハツとしました。確かに、学園祭では連君が一番苦勞する立場にあるのですから、それまでの負担を軽くしなければいけないですね。それに、私たちも接客としての仕事が叔母得られるので一石二鳥になりそうです。

そう思つて、私は「助けにいきませんか？」と言つたら、店のほうから「本日はもう閉店しまゝす！」という声がしました。

え？今の私たちの会話はなんだったのでしょうか？

と、みんな呆氣にとられていたら、しばらくして庄一君たちが来ました。

「助かったよ、二人とも。あゝ、これから家でも家事をやらなくちゃ。」

「俺、そんなに働いてないぜ？お前、休みなしで開店からずっと働いてたんだろ？」

「そうだよ？あれくらいなら、いつもよりちょっとつらい程度かな？」

「・・・お前の家での苦勞が目に見えかぶ。それで、お金は？」

「あ。うん。・・・うわ！結構たくさん入ってる！・・・」

つて、みんな、どうしてそこで立ち止まつてるの？」

ちようと封筒の中身を確認した後人影に気づいて前を向いたら、私たちがいたので訊いてみた、っていう感じで連君が訊いてきました。

私たちはちよつと気まづくなりながらも、適当にはぐらかしまし

た。

そして、みんなで話しながら一緒に帰りました。

みんなと別れて一人になった時、前から車が来ました。

「お嬢様。迎えに上がりました。」

「ありがとうございます、源さん。」

執事長兼運転手である源さんが私を迎えに来たので、その車に乗りました。

家につくまで、私は源さんに今日の出来事を少し話しました。源さんは、私の話を楽しそうに聞いてくれました。

家についたら、未来さんたちが出迎えに来てくれました。そして、自室へ戻り一人でのんびりと過ごしていました。途中、元に言われたことを何度か思い出して顔を真っ赤にしましたが、誰も見ていなかったのです、からかわれることはありませんでした。

夕飯の時間になり、私は食堂へ行き、夕飯を食べました。ただ、連君の料理を食べたので、ちょっと物足りないと思いました。

それからは、お風呂に入って、柔軟をして、ベッドに入って寝ました。いつもより楽しく過ごせてよかったと思いました。

閑話 とある休日 寺井董編その5 (後書き)

次回は話をもどそうと思います。

十月下旬～十二月中旬（4）（前書き）

戻ってきました。学園祭初日です。

十月下旬～十一月中旬（4）

学園祭初日。

僕達のクラスの出し物『喫茶・レイデン』は開始して早々、人がたくさん来た。ほとんどがうちのクラスの生徒の保護者だったけど、生徒の兄弟も来ていた。なかでも、相も変わらずの娘バカの父親二人が来ていたので、もう面倒くさかった。接客はしていないけどね、僕。

ちなみに、タイムスケジュールってものがあるんだけど、僕にはそれが無い。それはなぜか。

料理が一番うまいから、だって。酷いね、全く。庄一や圭だって休憩時間あるのに。

というわけで、これから四日間はずっと作る側でどこにも行けないんだ。正直悲しい。

そう考えながら、僕はさっきから料理を作っています。手伝ってもらっているんだけど、最終的には僕がやることになっているので、もう大変。

「次！イチゴパフェにナポリタンを一つずつ！」

と元の声がしたので、僕は、

「了解！」

と言って、他の人たちに指示した。

あ。コスプレ喫茶というわけで、接客係の人はみんなコスプレしています。

元は女装。女子から似合っていると高評価。やるせなさはあるそうだけどね。

久実さんは秘書。これを見た父親が、一瞬意識を失ったらしい。かなり様になってるよ、と言ったら、久実さんは「そうかしら・・・？」と言っていた。

董さんは巫女さん。他のクラスの男子が群れてきたため、寺井父

が体育祭と同じようなことを起こしそうになった。これに関してはもう面倒になっていたけど、料理を急いで作って董さんに運ばせ、寺井母が食べさせて静まった。

そしたら、何故か僕が呼ばれ仕方がないので行ったら、寺井母から「ありがとうございます。」と言われ、名前を訊かれたので答えたら、「このお礼はいずれしましょう。」と言って寺井父と一緒に教室を出て行った。お礼なんていいのに。

レイジニアさんは貴族の娘。外見と雰囲気のおかげで全くおかしくはなかった。元が「深窓の令嬢みたいだ。」と言ったら、恥ずかしそうにしていた。青春っていいですね。

藤木さんは白衣を着て保健室の先生。白衣はいつも着てるからコスプレとは言わないんじゃないかと思ったけど、他の男子が「いい。」と言ったので、何も言わなかった。そして、他のクラスの男子が「ロリっ娘が白衣着てるー!」といて一斉に来た。並ばせたよ?もちろん。

男子は面倒なので省略。だってほとんどタキシードなんだもん。場面を戻そう。

今は調理に集中だ。そう思いながら、注文された料理を作っていく、接客係の人に渡した。その時に、元たちと藤木さんがいなくなっていたので、「どうしたの?」って訊いたら「藤木さんがどこかへ行ったらしい。」と言ってきた。大丈夫かな?と思ったけど、気にしてられないので、考えないことにした。

十月下旬～十一月中旬（4）（後書き）

またちよくちよく入れるかもしれません、閑話。

十月下旬～十一月中旬（5）（前書き）

連の両親が学校行事に登場しました。さてさてどうなることやら。

十月下旬～十一月中旬（5）

お昼時。

僕達のクラスはさらに忙しくなっていた。なぜかという、料理とウェイターの評判が学校全体に流れていたからだ。そのせいで僕の昼食時間が全くとっていいほどないんだ。沢山人が来てくれるのはいいんだけど、僕は空腹状態になりつつあります。し、死ぬ・・・。

で、いつの間にか戻ってきた元たちはどこか焦っていたように、僕は見えた。でも、僕には何もできないので気にしないことにした。こっちが大変だったこともあるけど。

その時に、知ってる声が聴こえた。

「いらっしやいませ！何名様ですか！」

「二人で空いてるところ、ありますか？」

「ではこちらへどうぞー！」

「しかし息子の学園祭に来るなんて初めてだな。」

「そうね。渚に言われたから初めて有休とったものね。」

「そういえば、渚は？」

「明日来るんじゃないかったかしら。あの子も忙しいみたいだから。」

「そうか。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

な、ん、で、あ、の、二人がいるんだ——！！

僕は心の中で絶叫した。でもちゃんと料理は作ってるからね。

そして、料理を作り終わって渡して、次の料理をつくっていたらこんな声が聴こえた。

「お、庄一君じゃないか。タキシードが似合ってるね。」

「こんにちは。珍しいですね、息子の行事に来るなんて。」

「たまには行こうかなって思っていたのよ。」

「って、なんでスーツなんですか？」

「いけないか?」「いけないかしら?」

「いえ、別に……。」

スーツで来てんのかあの二人――!! 思いながらも、僕は料理を作っていた。

それでも、両親の声が聴こえてきて、

「なあ母さん。何頼もうか?」

「そうねえ。じゃ、いつもの頼もうかしら。」

と、かなり無茶な注文をしてきた。これは家庭でつくってるものでいいの? と思ってその続きを聴くことにした。

「すいませーん。」

「あ、はい。ご注文はお決まりでしょうか?」

「えーっと、オムライス二つで。」

「かしこまりました。」

いつものって、喫茶店での注文の奴かよ――――!!

と、僕は心の中でツツコミを入れていた。それでも、他の人の注文の方が先なので、注文順につくっていく、両親の料理の時にちょっとした細工をした。両親なら、多分気付いてくれるだろうと祈りながら。

細工をしたオムライス二つを、ウェイターに渡さず、自分で持つて行った。調理係の人達にちよっと仕事を任せてるよ。このオムライスは、ちよっと自分で渡さないといけないものだったから。

「お待たせ、二人とも。」

と言って、僕は二人分のオムライスを二人の前に置いていった。

「お、連。お前が運んでくるなんて、あっちの方は大丈夫なのか?」

「そうよ。」

「二人が珍しいから、僕も珍しい行動をとってみたんだよ。」

「そうか!」

と、ちよっとだけ話して、僕は戻った。その時に僕は、「頼んだよ。」と言った。

その時に両親は何を言ったか知らないけど、きっと「任せとけ。」

だと思う。それから、両親はオムライスを普通に食べ、会計するときに庄一に「何人か連れてっていい？この学校の事分からなくて。」と言って、元たちを連れていった。庄一はちょっと困った顔をしたけど、すぐさま許可した。助かるね。

ちなみに、僕の両親は普通のサラリーマンとOL。だけど、あの人たちの人心掌握術と、推理力、観察力は一般人とは思えないものがある。何処かでスパイでもやっていたのかと思うぐらいだ。だから、営業成績の一位と二位を入社以来独占し続けられている。大事な取引だと、僕の両親が必ずと言っていいほど参加しているみたいだ。

ま、何が起きてるかは圭に訊くとして、今は集中集中。

十月下旬～十一月中旬（5）（後書き）

両親は両親でいろいろと可笑しいですね（笑）。

十月中旬～十二月下旬(6) (前書き)

一万PV突破しました！ありがとうございます！
これからもよろしくお願いします！

十月中旬～十二月下旬（6）

結果。

藤木さんが元たちと戻ってきたころ（午後二時）には、僕達の店は材料切れで終了していた。

「えー、もう終わってるー。ほとんど活躍してないのにー。」

その光景を見て、藤木さんはそう愚痴をこぼしていた。

それを聴いた庄一は、

「どうしていなかったのか訊きたいところだが、今はそれどころじゃないな。圭、今回の収益は？」

と圭に確認した。それを受けて、圭は何やらリストを取り出してペラペラめくり、あるところで止めてから言った。

「……総利益で十万円くらい。」

その言葉でクラス全体が沸き上がったけど、続く言葉で静かになった。

「…材料費などを引くと、七万くらい。これを、明日の材料費に上乘せすれば、今日のようなことにはならない。」

そう言うと、一人の男子生徒が手を挙げた。

「どうした？」

「明日からどうするんだ？正直、ここまでは思わなかったんだが。」

その言葉に庄一は、唸っていた。

「ああそうだな。明日からの営業方針を考えないといけないんだな。何か意見は？」

庄一はそう言ってみんなから意見を求めたけど、誰も言わないで沈黙していた。

すると、今まで何も言わなかった藤木さんが、

「だったら、営業時間を学園祭が始まって少し経ってからにすれば？そうすれば、私もきつと活躍できそうだし。」

と言って、元の周りを回っていた。

その言葉で全員が納得し、庄一が「それで行くか？」とみんなに意見を求め全員が賛同したため、

「明日から藤木が言った通りに時間をずらす！スケジュールの調整は各自で行え！明日も多分忙しくなるぞ！気合い入れていこうぜ！」と、庄一がみんなに言った。すると、一人の女子生徒が庄一に訊いてきた。

「これからどうすればいいの？」

「終わったから自由だ！……と言いたところだが、明日の食材の搬入時間について話し合いたいから、連。残ってくれ。それと、圭。お前もだ。」

女子生徒の質問に、庄一はそう答えた。僕だけ大変だなあ。

庄一の言葉を皮切りに、みんなは思い思いの場所へ向かって行っただけだ。僕と庄一と圭、それと、なぜか藤木さんと元たちが残っていた。どうしてだろうか？

僕と同じことが気になったのか、庄一が元に訊いた。

「お前らはどうしてここに？残る意味は無いだろ？」

それに対して元が答えようとしたら、代わりにレイジニアさんが答えた。

「確かに意味は無いけど、気になることがあるのよ。だから残ってるわけよ。」

その答えに「ふうん。」と庄一は相づちをして、僕と圭に向けてこう言ってきた。

「連。明日の食材搬入は？圭。材料費の方だが、このままで大丈夫か？」

「うーん。明日の仕込みがいつもより遅くできるけど、今日と同じ時間で。」

「…問題はない。時間がずれるので、今日と同じ量でいける。」
そう僕達が言うと、

「ならこの話は一旦終わり！！俺達も他のクラス観に行こうぜ！」

と、庄一が張り切っていた。そんな感じで僕達三人は教室を出ようとしたら、董さんに止められた。

「待ってくださいませんか？ちょっと訊きたいことがあるんです。連君に。」

「ん？連にか？」「……？」「訊きたいことって？」

董さんが言ったことに対して、僕達の反応はバラバラだった。庄一と圭はなんだか分かっていないようだった。僕はというと、なんとなく分かっていた。

「はい。あのですね……」

と、董さんが訊こうとしたら、

「どうしてレンの両親は、カノンの居場所を調べられたのかしら？私達でも判らなかったのに。」

レイジニアさんが、董さんの言葉を奪うように訊いてきた。

僕はそれに対して何と答えようか悩んでいたら、久実さんがこう言ってきた。

「貴方の両親に訊いても『息子の頼みに応えた、しがないサラリーマンとOLだよ。』と言って帰っていったのよ。」

それを聴いて僕は、それで正しいんだけどなあ、と思った。なので「普通のサラリーマンと普通のOLだよ。確か、宮野商事で二人とも働いてるよ。」

と、正直に言ったんだけど、庄一と圭以外は信じてくれなかった。

「本当に？」

「本当だって。」

レイジニアさんが確かめてくるので、僕は頷いた。すると、藤木さんがどこからか取り出してきたパソコンを眺めていた。そして、

「あ、本当だ。池田君の両親、本当に宮野商事で働いてる。しかも、この人達が商談に出ると成功率が百パーセント！どうしてこんなことが可能なんだろう？気になる。それに、池田君の家事スキルの高さも気になる。フツ。このクラスの人達は不思議がいっぱいだな。エヘヘ。」

と言っていた。

彼女はどこからその情報を持ってきたんだろう？

僕はその時そう思った。

そして、その情報を聴いた元たちは、ますます疑惑の目を向けてきた。

「本当に普通のサラリーマンなんですか？」

「商談成功率百パーセントって、人間業じゃないでしょ？」

「すごいね。」

「本当に一般人なのよね？」

正確には、元以外の女子が疑惑の目を向けてきた。失敬な。僕達の家族は確かに一般とは言い難いだろうけど、普通の人となんら変わりはないからね。

そう言いたかったけど、僕は代わりにこう言った。

「家ではだらしがないんだよ。」

そう言ったら、董さんは納得したようだ。

十月下旬～十一月中旬（7）

まあ、家に泊まったからなんだけどね。それを見た久実さんがこう言った。

「そういえば、董は連の家に行ったことがあるんだっけ？」

「そうですよ。まあ、正確に言うなら家に泊まったのですけどね。」その言葉で皆が固まった。同時に、僕と元は冷や汗が流れた。この汗はなんだろうね？

と、ここで更に董さんは、僕にとって爆弾のような言葉を紡ぎだした。

「凄かったですよ。連君のご両親は。私の事を案内してくれたのに、食事が冷めると言われただけで私の事を置いてくのですから。でもそれまでの間の会話は楽しかったですよ。連君の話題ばかりでしたが、楽しかったです。」

もう、駄目だ、ね・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「さらばだあ！！」「じゃ！！」「きゃっ！！」

「逃がすかあ！！」「……詳しく訊かせろ！」「待ちなさい！」「詳しく話さないよ！」「面白そう。私も混ざる。」

僕と元は、董さんを引っ張って全速力で逃げだした。それを、残りの人たちが追ってきた。

というか僕、一人だけ休憩が無かったんですけどね？でも、いつもくらいしか疲れが残ってないから、大丈夫だろうね。

そう自分に言い聞かせて、元と一緒に逃げていった。

「どうしようか！？」

「とりあえず人混みに紛れよう！」

「あ、あの。そんなに引っ張られると痛いのですけど。」

逃げながら、僕達はこれからについて話し合い、方針が決まったのでそれに従った。

結局、僕達三人がああ五人から逃げられるわけなく（ていうか僕

が真つ先に捕まつた）。捕まつた僕達三人は、四人に囲まれて尋問を受けていた。

「どういふことだ？ 連。」

「…内容によっては逆バンジーをやらす。」

「ハジメ？ どうして嘘をついていたのかしら？」

「堇、体育祭に言っていたことの続きと行こうかしら？」

Year	Number of cases
1990	1
1991	1
1992	1
1993	1
1994	1
1995	1
1996	1
1997	1
1998	1
1999	1
2000	1
2001	1
2002	1
2003	1
2004	1
2005	1
2006	1
2007	1
2008	1
2009	1
2010	1
2011	1
2012	1
2013	1
2014	1
2015	1
2016	1
2017	1
2018	1
2019	1
2020	1
2021	1
2022	1
2023	1
2024	1
2025	1
2026	1
2027	1
2028	1
2029	1
2030	1

こ、怖い……。教室に連行されて周りを囲まれるって、本当に怖い。

ずっと黙ったままの僕達に痺れを切らしたのか、庄一が藤木さんに訊いた。

「なあ藤木。自白剤とかないか？後遺症が残らない奴。」

対して藤木さんは、隅っこでパソコンをいじりながらこう答えた。

「あるけど、持ってきてないよ。今あるのはこのパソコンだけ。」

もしあったら僕達に飲ます気だったな。

その時の庄一の落胆ぶりを見て、僕は確信した。友達にも容赦ないね、全く。

さて、自白剤を飲まされるのも嫌だし、正直に話しますか……の前に、確認だけしようかな。

「そこまで話を聴きたいの？」

「当たり前だ。」 「…愚問。」 「当然よ。」 「どうして隠していたのか気になるからね。」

僕の質問に、みんなはそう答えた。その答えに、僕は観念した。

「分かったよ。何があったのか話すから。」

そう言って、僕はあの時の事を正直に全部話した。ところどころ、堇さんと元が話に混ざりながら。

話が終わって。

「董の料理の味が急においしくなったのって、連のおかげだったのね。」

「堇さんにそんな弱点があったのか……」

「…よく生きていたな、元。」

「よく言ったわ、レン。」

皆がそれぞれ思ったことを言った。褒められるのは嬉しいけど、なんだろう、嫌な予感。

そう思っていたら、庄一と圭が僕の両肩をつかみながらこう言うてきた。

「さてと、」

「…覚悟はいいか？」

「あのね？家に帰ったら帰ったらで僕がきついんだよ？今そんなことしたら、家事が全部滞っちゃうよ？明日学校に来れなくなるよ？」
そう言うてるのにもかかわらず、

「行こうぜ、連。」

「…行こうか。」

二人はやる気満々だった。そして、僕を連れていこうとしたら、先生が来た。

「どうかしたんですか？」

「池田。ちょっと来てもらいたいんだ。悪いが、借りてくぞ。」

と、僕の意味に関係なく、先生は僕の事を連れていった。

残された人達は、

「どうしてあいつが？」

「…さあ？」

「なにかしたのかしら？」

「もしかして、今日のうちのクラスの繁盛ぶりについての話じゃありませんか？」

「そしたら、責任者であるショウイチが呼ばれるんじゃないかしら？」

「そうだよな。」

と話し合っていた。その会話を聴いてたのか知らないが、藤木がポツリと呟いた。

「：明日の営業に影響があるかもしれないよ。池田君抜きになるかもしれない。」

その言葉を聴いた圭が、庄一に訊いた。

「……庄一。そうになったら、どうする？」

「そうになったらって？」

「……連抜きになった場合。」

その言葉で、この場にいた藤木以外の人が動けなくなった。

「ありえなくは、ないな。あいつの料理の腕は中学生とは思えないし、反則だと言われれば反論できない。話の内容次第では、明日の営業方針を考え直さないといけない。」

そう庄一が言うと、他の人達は何も言わなくなった。

そして、連が教室に戻って来た時に、庄一たちが詰め寄ってきた。

「ど、どうしたの!？」

僕は、先生に『迷子になっていたから名前を訊いたら、お前の両親だったんでな。引き取ってもらいたかったんだ。』と言われて、両親を校門前まで送っていただけなんだけど、なんだかみんな険しい。どうかしたのだろうか？

そしたら、庄一が訊いてきた。

「先生がお前を呼んだ用ってなんだ？」

隠しても意味はないので、正直に答えた。

「両親を引き取りに行っただよ。」

『は?』

僕の答えに、隅っこにいた藤木さんまでもがポカンとしていた。

「お前の参加制限じゃなくてか？」

「どうしてそんなことになったのか知らないけど、単純に迷子になって職員室へ行った両親を校門まで送っていただけなんだけど。あ。でもそんな話が拳がったみたいだけど、生徒を一人だけ制限するのはおかしい、という意見があったからそんな事は無いって言うてたよ。」

庄一が訊いてきたので、僕はありのまま話したら、一斉に溜息をつ

かれた。僕のせいじゃないんだけど。
そんなことをしていたら初日が終わってしまった。僕、他のクラス
見てないんだけどなあ。

十月下旬～十二月中旬（7）（後書き）

最後の最後で締まらない、連の両親でした。それと、学園祭初日が終了。二日目の前に閑話でも入れるかもしれません。ご了承ください。

対談 アイドルッ！×考える人×普通の人を送る日常（前書き）

今回はちょっと趣向を変えてみました。

対談 アイドルッ！×考える人×普通の人が送る日常

「さて始まりました。第一回とりあえずクロスさせたら面白いんじゃない？ ラジオ！！イエーイ！」

「なんなの一体？」 「なんなんだ、これ？」 「僕、どうしてここにいるの？」

「ゲストはこの方たち！ 『アイドルッ！』 から、主人公八神つとむ！」

「おいこら。ちゃんと説明しろ。」

「次！」 「無視かよ。」

「『考える人』 から同じく主人公、風間大輝！」

「あ、どうも。」

「最後に、『普通の人を送る日常』 からも主人公、池田連！」

「これはなんなの一体？」

「以上、この三人をゲストとしてお送りします！ ちなみに、DJは私、末吉がやります！」

「いい加減説明しろ。」

ドカツ！ バキッ！ ドオオン！

しばらくお待ちください

「いたた……。これくらってよく生きてるね、あそこの人たち。」

「八神君、だっけ。今日はよろしくね。僕は連でいいよ。」

「だったら俺はつとむでいいぜ、連。」

「じゃ、僕は大輝でいいよ！」

「ふう。気を取り直して。じゃ、早速試してみよう！」

「説明しろ。」 ドゲシッ！ 「グフォッ！」

しばらくお待ちください」

「……というわけ。分かった？」

「なるほど。つまり、」

「単純に思いつきで書きたかったやつなんだね？」

「……ハイ。」

「……ハイ……」

「なあ末吉。さっきから大輝がしゃべらねえんだが、大丈夫なのか？」

「大丈夫大丈夫。単純に考えてるだけだから。」

「それはそれでどうかと思うけど……」

「さあ本当に気を取り直していつてみよう！最初のコーナーは……ズバリ！インタビューコーナーだ！」

「単純に質問が送られていないだけだろ。」

「末吉さん自体、ただの思い付きでこれ書いてるんだからさ。質問コーナーがないのは当たり前だよ。」

「大人だな、連。末吉。お前も見習え。」

「できたらいいですね……」

「遠い目をするな。」

「なるほど！つまりこういうことだったのか！」

「何を考えてたんだろうな、大輝は。」

「知りませんよ。」

「作者だろうが。」

「作者が何でも知ってると思うな！」

「逆ギレするな！」

「ストップ二人とも！今はそんなことしてる場合じゃないでしょ！話を進めなきゃ！」

「連君。君は本当にすごいね。」「そうだな。」「や、やばい。ちよっと涙が……」

「作者が泣き出したため、一時中断します」

「さあ！　いってみよう！」

「切り替え早えな。」「タフだね。」「どうしてだろう？　・・・・・・・・・・はっ！」

「さて、記念すべき第一回の上に最初の質問！　まずは・・・・・・・・・・好きな食べ物？」

「ベタ感マックスじゃねえか。」

「うるさいな。で？　どうなの？　好きな食べ物あるの？」

「誰から訊くんだよ？」

「そうだな。ここはあんまり話さない大輝からいってみよう！」

「え？　僕？　僕は・・・・・・・・・・ハンバーグに、牡蠣に、ケーキに・・・・・・・・・・」

「十分後」

「・・・・・・・・ドリアに、カルボナーラに、キャビアくらいかな？」

「おい末吉。知ってたか？」

「え？　知らなかったけど？」

「キャビアって、高級食材で世界三大珍味だよな？」

「うん。両親が送ってきてくれた時があったんだよ。あれはよかったなあ。」

「「この庶民の敵が！！」」

「えええ！　どうしてみんな一斉に言うの！？」

「ゴホン。じゃ、次はつとむだ！　はい、好きな食べ物は！？」

「俺か。俺はそうだな・・・・・・・・・・あえて挙げるなら、マスターの賄飯か？」

「マスターって、誰？」

「つとむのバイト先の店長だよ。結構ちゃっかりしてる場所あるよね。」

「そうだな。あの野郎、俺が非番の時に来ると割引なしで会計するんだぜ？　ちゃっかりしてるだろ？」

「へえ。でもそれって、その時の契約内容になればやる必要はないんじゃない？」

「まじでかつ！・・・いつきに紹介してもらったバイトだからな。契約内容は詳しくは知らないんだ。」

「そりゃまた。」

「いい人だね。」

「けどな、それ以上に俺が大変な目に遭っているんだぜ？例えば、雪山に何の準備もなしに遭難させられたし、どこか知らない山奥に放置させられて一週間で脱出しろとか・・・」

「これからしばらくはつとむのトラウマ話がされています」

「・・・ほかにもあるぞ？」

「もういいよ！お願いだからやめて！」

「そうそう！話がだいぶずれてきちゃったじゃない！ほら末吉さん！進めて進めて！」

「分かったよ！では次は連！好きな食べ物は何？」

「僕の好きな食べ物はカレー！」

「定番だね、連は。」

「普通すぎるね。」

「放っておいてよ！」

「末吉。その辺にしとけ。連がうずくまってしまった。」

「ごめんね、連。悪気はなかったんだ。」

「いいんだよ、末吉さん。僕はどうせ普通なんだから・・・」

「ああ！連がなんだかねガティブに！」

「どうにかしろよ。作者なんだから。」

「分かったよ。」

「連が戻るまでしばらくお待ちください」

「よっしゃ！これで「はやくしろ。次だ、次。」わかったよ……
……では次！三人の共通点は？」

「「「家事ができる。」」」

「ですよ。」

「ていうか、お前自体は料理そんなにできないだろ？」

「完全に願望だね。」

「人ってどうしてそんなことするんだろ？」

「うるさい！別にいいじゃないか、高望みしても！」

「気を取り直して。次行け、次。」

「うわひどっ！」

「作者が立ち直るまでしばらくお待ちください」

「さあ、次行こうか……………」

「大丈夫？末吉さん？」

「最初っから飛ばしすぎだ。疲れるだけだろ。」

「もうやけっぱちじゃなかった？」

「問題ない！行くよ！質問！一番面倒だと思ってることは！？」

「学校生活。」「両親の世話。」「学校生活。」

「わーお。話的にはアウトの答えいただきましたー！連を除いて。」

「ん？今何か言わなかったか？」

「別に」。さて、理由は何となく想像できるから置いて。次！

「連以外は高校生なんだけど、そこどこどう思ってる？」

「別に？俺は、中学生だろうが高校生だろうが大変なことばかり関わっているからな。どうとも思っていないぜ。」

「僕は中学生のほうがいいなあ。そっちのほうが楽しく遊べたから。」

「僕は……………どうなんだろう？先のことを考えてないから」

なあ。」

「そうなのか？」

「うん。」

「じゃ、最後！将来の夢は？」

「平穏な暮らしがしたい。」「サラリーマンになる。」「世界を放浪したい。」

「切実な答えが一人、まじめな答えが一人？そして、ただの願望が一人？」

「誰だか見当はついたが、それはないんじゃないか？」

「ま、いっか。次のコーナー行ってみよう！」

「「これで終わりじゃないのかよ！？」」

「次のコーナーは……『苦労話を分かち合おう！』です！」

「タイトルだけで内容がわかるな。」

「もうちょっとひねったら？」

「そんなことはどうでもいいから！ささ、張り切って話してみよう！」

「じゃ、誰にする？」

「末吉さんからいいじゃない？僕たちを作る時の苦労話をしてみてよ。」

「私？そうだね……まあ、苦労というわけではないけど、思いついたら忘れないうちに書き留めようとするでしょ？それをそのまま書いてたら、いつの間にか止まらなくなってね。他の作品のやつを考えるのと並行してやってることが、苦労してるところかなあ。」

「そうか。だったら俺のところさっさと進めろ。」

「僕のところもね。」

「分かってるよ。じゃ、次は……大輝！」

「僕！？うーん、僕は……昔のことなんだけどね。」

「ふむふむ。」

「昔、両親が僕を置いて海外に出て行ったところかな。その時は波風の家に世話になっていただけだね。そのころの僕、まだ小さかったからさ、色々と覚えるのに苦労したよ。」

「子供って、普通は連れて行くものじゃねえのか？」

「なんでも、波風が僕と別れるのが嫌だったらしく、それだったらということ、僕を置いて行ったみたいだよ。」

「すごいね、大輝の両親は。」

「じゃ、次はつとむだ！」

「俺か。そうだな……。ああ、あつたぜ。確か、小学生のころだな。いつきの付き添いで言えば聞こえはいいが、実際は俺のことを強引に連れて行ったわけだ。」

「大変だね。」

「それで俺は誰の誕生日だったかしらないで、パーティに連れて行かれた。しかも、俺だけ私服だぜ？ どう考えても目立つわ、なにやら子供はいるけど誰もかれもがドレスやら着てるわで場違いだとすぐにわかったんだ。だから俺はいつきに、家に帰せと言ったら『いいじゃん。別に。』と言われて一蹴された。」

「可哀想だね。」

「それで仕方なく外を眺めてたら、変に金持ち思考のお坊ちゃんが俺のところに来てよ、俺のこと散々変なこと言うんだぜ？俺は気にしなかったけど。ま、その反応に怒ったのか俺のことを殴ろうとしたんだろうな。」

「そういうのって、たいてい男だね。」「そうそう。」

「そしていざ殴りかかろうとしたら、どうやら主催したやつが来たらしくよ。殴るに殴れずそのままそのまゝそのほうに行ったんだ。あの時我慢するのが苦労したなあ。」

「それでどうなったの？」

「うーん。そこらへんは思い出せないな。」

「ま、そんなことはどうでもいいさ！次次！」

「じゃ、僕だね。僕は一杯あるよ。例えば……」

三十分後。

「末吉。てめえ、連に苦勞しかさせてねえのか？」

「もうやめさせようよ。連が変な空気まとい始めたから。」

「そ、そうだね。……つとむ！任せたよ！」

「はあ！？」

「殴れば何とかなるから！」

「……分かったよ。連、元に戻れ。」

ドカッ！

「……いてっ！……あ。ごめんごめん。」

「さて、次は何するんだ？」

「えっとね……大変言いにくいんだけど、終了の時間が近づいてるんだよ。だから、今回はこれまで！」

「「はあ！？」」

「まだ二つしかやってねえぞ！」「そうだよ！」「どうしてさ！」

「色々あったじゃない！色々と！そのせいで時間が足りなくなっ
たんだよ！」

「馬鹿じゃねえか！」

「二回目をやるかどうかは気分次第！あとは、質問が来ればやるか
もしれない！以上！第一回とりあえずクロスさせたら面白いんじゃ
ね？ラジオでしたー！」

「勝手にしめるんじゃねえ！！」

「これから一緒に買い物行かない？近くに安いところあるんだよ。」

「本当！？ちょうど部屋が綺麗すぎて何かほしいなあと思っていた
ところなんだよ！」

「……俺も行っていいいか？」

「いいよ！」「うん！」

「DJは私、末吉！ゲストは池田連！八神つとむ！風間大輝でした
！アディオス！」

対談 アイドルッ！×考える人×普通の人を送る日常（後書き）

これで質問が来れば願ったりかなったりです。

閑話 とある休日 黒曜甚平編（前書き）

ちよつとサブキャラに焦点を当ててみました。

閑話 とある休日 黒曜甚平編

みなさん、お久し振りです。覚えていますか？黒曜甚平です。今回はわたくしの休日を紹介いたしましょう。

わたくしは、毎朝六時には起きます。わたくしは一人暮らしなので、家は一戸建てです。あ、デンタツ内にあります。

起きたあとは、朝食を作り、新聞を取りに行き、新聞を読みながら朝食を食べます。これは習慣となっているのですよ。

食べ終わった後は食器を片づけ、パソコンを起動させます。昔はこの家にも家族がいたのですが、今はいません。理由は秘密ということ。

パソコンが起動したあと、メールをチェックします。圭君に送ったメールに対しての、返信があるかどうかの確認です。

この日はなかったのですが、かわりに変なメールが届いていました。

『どうも、柊です。久しぶりに会えませんか？ちょうどデンタツに私用で来ていますので。』

わたくしはこれを見て、どうしようか悩みました。今日は休みの日なので特に問題はないのですが、相手が柊だということが問題だったからです。

柊宙。わたくしから見れば駆け出しの情報屋なのですが、言葉巧みに相手の情報を探るという業界の取り決めのグレーゾーンを、何のためらいもなくやってのけるというある意味異端な人物だからです。

しかし、わたくしは会うことにしました。どうせ相手側のほうが遅刻するのだろうと思いながら。

「すみません、黒曜さん。僕のメールに答えてくださって。」

「そう思っているのなら、遅刻はしないほうがいいぞ。柊。圭君と会ったときだって遅刻したんだろ？」

「ははは。やっぱり隠し事はできませんか。」

「で、何の用なんだ？」

私がそう訊くと、柊は「場所を変えましょう。」といって移動した。

で、場所を変えた先がなんと海だった。確かにこの季節なら人はいないだろうが……。

柊の真意を量り損ねていると、移動させた本人はこう言った。

「黒曜さん。最近、圭の友達のこと調べているんじゃないですか？」

「……それがどうしたんだ？」

「僕に実害がないからいいんですけどね。それはほどにしたいほうがいいですよ。」

「? どうしてだ？」

私がそう訊くと、柊はためらいながらこう言った。

「そうですね……。確かめていないのですが、ある情報を耳にしたんですよ。」

「情報だと？」

私も常に網を張っているが、柊が確証のない情報を私に話すということは、おそらく私が知らない情報なのだろうと推測し、耳を傾けた。

「実はですね……圭の学校でもう学園祭が始まっているのですよ!」
「……………」

「ああ! 無言で帰らないでください! ちょっとした冗談じゃないですか!」

「で？」

これ以上無駄な話をしたら今度こそ帰るぞオーラを辺りに出しながら、私は先を促した。

柊はそんなオーラを感じ取ったのか、真剣な顔になってこう言った。

「私も偶然聞いた話なんですけどね。圭のクラスメイトに、中島元つて、生徒がいるじゃないですか。」

「ああ、そうだな。そのことがどうしたんだ？」

「その子の能力についての新情報があるんですよ。裏はとれていませんがね。」

「!？」

私は驚いた。圭が私たちに「中島元の情報をくれ。」という頼みをしてから三年が経とうとしている。その間一切進展がなかったからだ。

「……それは、圭君は知っているのか？」

「いえ、知ったのはデンタツに来る間です。仕事で行った場所の人たちの話を聞いていたらそんな情報があったんですよ。」

「それを私に話してどうするんだ？」

「あなたから圭に話してください。私は仕事で忙しいので。」

そう言って、柊は私にその情報を教えてくれた。

その情報とは、『中島元の能力は昔にも存在した。』ということである。それが意味することは私には少ししかわからないが、圭にとっては有益な情報となるだろうと思った。

「柊。ありがとう。」

「いえいえ。これからは遅刻しないように気を付けますよ、黒曜さん。」

私がお礼を言うと、柊はそういつて砂浜を歩いていき、しばらくして消えてしまった。

それを見届けた後、私は柊の情報が本当かどうか確かめるべく、家に帰った。

閑話 とある休日 黒曜甚平編（後書き）

これは・・・ネタバレになりますかね？

十月下旬～十二月中旬（8）（前書き）

二日目です。結構短いです。

十月下旬～十一月中旬（8）

二日目。

言わずもがな、時間をずらしたのにもかかわらず、繁盛ぶりは変わらないというか昨日より賑わっていた。元の両親が、息子の女装姿を見て写真を撮っていた。可哀相に。

藤木さんは、今日は何事もなく教室にいたり宣伝に行ったりした。そして、僕の両親が来た。なぜか、見るからに偉そうな人を連れて来て。

あ、僕は調理係をやっています。休憩なし。いまどきどんな労働条件だよ。

「池田君、どうしてこんな所を商談場所へ指定したんだ？」

その見るからに偉そうな人は、席に座ってから両親に訊いた。

ストップ！なんだかすごい言葉が聴こえた！本当に！？

対して、両親はいつもと変わらぬ口調でこう言った。

「別にどこでやっても良いと思いますよ？家の中でも出来ますし。

肝心なのは参加している人だけだと思いますよ？」

「なるほど。君たちはあくまでここでやりたいわけか。まあいいだろう。」

「アザース。」「ありがとう。」

なんだろう。この竹を割った感じのフランクリーさは。

ちなみに、今このクラスにはまだたくさんのお客さんがいます。

そのうちの一つのテーブルに両親たちが座っているので、周りが静かになっていた。こっちはいつも通りにやっていますけどね。

面倒なので簡略するけど、このあと僕がつくった料理を偉そうな人が食べ、感動というより顔が完全にニヤけて、すぐさま商談が成立した。そして、両親が「連によろしくっ！」って言って連れてきた人と一緒に帰っていった。あとで董さんから聞いた話によると、あの人は結構な偏屈社長で、あそこまで商談があっさり決まる事は

無いんだって。改めて両親の凄さが分かったよ。

それから、学園祭の終了時間まで人が途切れることは無かった。皆が帰って、僕と藤木さんだけになって。

「池田君、大丈夫？」

「あ、藤木さん？まあ何とか……。」

「明日も頑張ろうね。」

「うん。」

そう言った時に、藤木さんの顔が一瞬だけ切ない表情を出していた。けどそれも一瞬の事で、「じゃ、帰るね。」

と言って藤木さんも帰っていった。僕も帰った。

閑話 とある休日 黒曜甚平編その2 (前書き)

閑話↓本編↓閑話という順で今回はお送りしたいと思います。

閑話 とある休日 黒曜甚平編その2

その情報を調べていくうちに、わたくしは別な情報を知りました。中島元が狙われていること、そいつらの目的がその子の能力だということ。そして、そいつらも中島元的能力が、昔存在していたことを知っているということ。

わたくしはこれを今すぐ圭に報告するべきか悩みましたが、証拠を固めていったほうがいいと思い、報告するのをやめました。それで、証拠を固めにまずは柊がその情報を聞いたという場所へ向かいました。

場所は本当にデンタツの近くにある集落だった。そこを訪れた時、入り口近くから人が出てきた。

「だれだ？」

「誰だ、とは私のほうが訊きたいのだがな。君は？」

「私はこの集落の番人だ。ここに何しに来た？」

「『魔法でも超能力でもない能力』。」

私がそう言うと、自らを門番と名乗ったやつはピクツ、と反応した。

「それを調べに来たのか？」

「ああ。」

私が頷くと、そいつは悩んだ後、「そこから動くなよ。」と言って集落へ入ってしまった。

「動くな、か……。」

そう呟きながら、私は言われた通り動かなかった。

自称門番が戻ってきたとき、私の顔を見て驚いた。

「本当に動いていなかったのか？」

「君が言ったのだろう。」

そう私が返すと、そいつは驚いた様子だった。

驚きから戻ってきた後、そいつはこう言った。

「長老から許しが出了。はいれ。」

あまりにも簡潔だったが、特に反対する理由がないのでおとなしく従い、集落へ入った。

閑話 とある休日 黒曜甚平編その3

私は集落の中をしばらく歩きまわったが、人があまりいないことが気がかりだった。しかし、人の気配はした。

ということはどこかに隠れているのだろうかと思っていたら、

「君か。『あの力』を調べに来たのは。」

という声とともに、私の目の前に数人現れた。

突然のことに驚きながらも、私は頷いた。それを見た現れた数人の中の一人がこう言ってきた。

「ふむ。あなたは『あの力』について調べに来たのですね、本当に。」

「さつきから『あの力』といっているが、一体なんだ、それは？」
そう私が訊くと、

「分からねのじゃ。」

真ん中の人がそう答えた。どうやら、長老だろう。

「分からない、とは？」

「言葉通りじゃ。分かることと言えば、その力を持つ者はどうやら『ある意思』から選ばれているらしいとしか言えんのじゃ。」

「ではなぜ選ばれるということがわかるんだ？」

「それは代々受け継がれている、わが書庫にあった本に書かれていますから。」

なぜあるのか、という疑問が出てきたが、何も言わなかった。そのかわり、

「その本を見せてくれないか？」

と言ったら、

「それは無理じゃ。それを許可していいのは、『あの力』に関わりつつも、悪用しようとしないう者のみじゃ。ただし、本人以外とする。」

と返ってきた。

なるほど。私はそのかわりが薄いと思われていたのか。それだったら仕方がないと思いつつ、私は長老たちにお礼を言い、集落を出た。

「なんだ、教えてもらえなかったのか。」

「ああ。どうやら、事情があるみたいだ。」

「じゃあな。」

「ああ。」

最後に門番に挨拶をして、私は家に帰ることにした。

閑話 とある休日 黒曜甚平編その3 (後書き)

あの力の謎はいまだ解明されず・・・・・・・・・・。

十月下旬～十二月中旬（9）（前書き）

昨日は諸事情があつて更新できませんでした。

十月下旬～十一月中旬（9）

三日目。

評判が評判を呼んだのか、売り上げが止まることを知らなかった。それに比例して、忙しかった。慣れてるけどね、僕は。

そして、正午ごろに僕の姉が来た。

「いらっしやいませ！ 何名様ですか？」

いつものように、というか一番近かった元がお客さんを迎えていた。その時に、

「四名だ。あんた、男なのに似合ってるね、その恰好。」

と言って、連れの人と一緒に空いてる席へ行ってしまった。

「へ？」

元は、女装したと一発ではれたことに驚いていた。その声を聴いて、僕はその人が誰だか分かってしまった。他のウェ이터に任せられないと思ったのか、庄一がその席にメニューを置きに行った。

「こちらがメニューになります。どうぞ、ごゆっくり。」

「ん？ あんたは連の友達か。どうだ？ あいつは上手くやってるか？」

「そっちがそうなら別にいいよな。ああ、やってるぜ。あいつのおかげで繁盛してるようなものだ。」

「それ以外にもあるんでしょ？ ……ま、いいや。決まったら呼ぶから。」

「こっちも暇じゃないからそれで構わない。」

と言って、庄一はその場を離れた瞬間、

「ああ。決まったわ。」

と言って料理の名前を挙げていき、庄一が慌てて書き留めていった。姉さん達の料理が出来たので僕はウェ이터に渡そうとしたら、
「連に運ばせろ。」と庄一が言ってきた。仕方がないので、僕はまた運ぶことにした。

「お待たせしました。それでは。」

と言って仕事に戻ろうとしたら、

「やっぱり美味そうだなあ、連。なあ、今大丈夫か？」

姉さんがそう言ってきた。姉さん達と一緒に座ってる人は、僕が知らない人ばかりだった。多分、テレビ（主にドラマ）を見ないからなんだけど。

だって、現に周りの人たちが「あの人って、凧さんに似てない？」

「その周りにいるのって新しくやるドラマの出演者に似てない？」
って言ってるから。

「姉さん。今悪いけど手が離せないんだ。帰ってからでいい？」

「うーん。だったら、終わったらで。」

「僕ずっとここ。四時くらいにならないと終わらない。」

「それなら家で話すわ。」

これで会話終了。これで僕は自分の仕事に戻った。

姉さんの事は料理をつくってる間に訊かれたけど何とかはぐらかした。

藤木さんは、今日も無事で活躍していた。良かった。

三日目が終了し、今回も僕と藤木さんが残っていた。また昨日と同じですか。参ったね。

帰りの支度をしながら、そういや姉さんって何の用があったんだろう？と思っていたら、藤木さんが話しかけてきた。

「昨日も私達一緒だったね。」

「そうだね。」

帰りの支度をしながら、今の体の調子を確認しながら、僕はそう言った。

「これって偶然かな？波長が合っているのかな？」

ぴよんぴよんと、僕の周りを跳ねている藤木さん。それを苦笑しながら、

「偶然だと思うよ。藤木さんは文化祭の前はいつも早かったでしょ？」

と僕は言った。すると、藤木さんは照れた感じでこう言った。

「え？見てたの？あははは。よく見てるね、池田君は。」

「僕だけじゃないよ。」

「え？」

僕の言った言葉に、藤木さんはちよつと驚いていた。人に見られてないと思っていたの？君は。

「多分だけど、元たちも見えてたよ。藤木さんが一人でさっさと帰るところ。だって仲良くしようとしていたもん。元たちが一番ね。」

そう僕が言くと、藤木さんは「そっかあ……。」と言った後、

「あのね、池田君に聴いて欲しいことがあるんだ。」

と言ってきた。その表情は、どこか淋しそうなものだった。

「どうぞ。」

それを気付いた僕は、気付かなかったふりをして話を進めるのを促した。

「私ね、本当は元の事を調べるためにこの学校に来たんだ。でもね、元の事を調べていくにつれて、元の事を段々考えるようになっていったんだよ。」

「それって恋だよね？」

「はう！池田君に断定されちゃった！」

そう言った藤木さんの顔は、真っ赤だった。可愛いなあ、全く。

「でもね」

さっきまで真っ赤だったのが嘘のように、再び表情が元に戻って話が進んだ。

「でもね、学園祭が始まった時にこう言われたの。『中島元を連れていく。』って。その時から私はどうしようか悩んだ。でも、断ったら私が危なくなる。そして、考え出した答えが……元を守る。つまり、抵抗するってことにしたの。」

これで話が終わったみたいだった。僕はというと、今までの流れを整理している傍らで思ったことを口に出していた。

「どうして僕に？」

それに対して、藤木さんはにっこりと笑ってこう言った。

「へへっ。誰でも良かったんだけど、最近池田君が最後まで残ってるから。」

その答えに納得する傍ら、僕は一つ訊きたいことがあった。

「藤木さん。訊いても良い？」

「なに？」

「いつなの？」

その質問に対して、

「あの人たちが行動を開始するのが、学園祭最終日の終わり。だから、私は自分の持てる力で抵抗するの。」

と答えてくれた。僕は、「ありがとう。そしてまた明日。」と言って藤木さんが教室を出て行くまで待って、家に帰った。

十月下旬～十二月中旬（9）（後書き）

閑話か、本編か。
とても悩みます。
質問待ってます。

閑話 とある休日 黒曜甚平編その4 (前書き)

思いつきとは恐ろしいですね……………。

閑話 とある休日 黒曜甚平編その4

私は集落の中をしばらく歩きまわったが、人があまりいないことが気がかりだった。しかし、人の気配はした。

ということはどこかに隠れているのだろうかと思っていたら、

「君か。『あの力』を調べに来たのは。」

という声とともに、私の目の前に数人現れた。

突然のことに驚きながらも、私は頷いた。それを見た現れた数人の中の一人がこう言ってきた。

「ふむ。あなたは『あの力』について調べに来たんですね、本当に。」

「さつきから『あの力』といっているが、一体なんだ、それは？」

そう私が訊くと、

「分からぬのじゃ。」

真ん中の人がそう答えた。どうやら、長老だろう。

「分からない、とは？」

「言葉通りじゃ。分かることと言えば、その力を持つ者はどうやら『ある意思』から選ばれているらしいとしか言えんのじゃ。」

「ではなぜ選ばれるということがわかるんだ？」

「それは代々受け継がれている、わが書庫にあった本に書かれているからだ。」

なぜあるのか、という疑問が出てきたが、何も言わなかった。そのかわり、

「その本を見せてくれないか？」

と言ったら、

「それは無理じゃ。それを許可していいのは、『あの力』に関わりつつも、悪用しようとしないう者のみじゃ。ただし、本人以外とする。」

と返ってきた。

なるほど。私はそのかわりが薄いと見破られていたのか。それだったら仕方がないと思いつつ、私は長老たちにお礼を言い、集落を出た。

「なんだ、教えてもらえなかったのか。」

「ああ。どうやら、事情があるみたいだ。」

「じゃあな。」

「ああ。」

最後に門番に挨拶をして、私は家に帰ることにした。

家に帰ったわたくしは、パソコンを起動させてとあるサイトを見た。そのサイトは、私たち情報屋が普段交流の場として使っているサイトである。

わたくしはパスワードと会員番号を入力して、そのサイトを閲覧した。

この通り、セキュリティを解除していかねばいけませんので大変面倒なのですが、これくらいやらないと誰でも閲覧出来てしまうのです。

わたくしとしては、これ以上にセキュリティを強化しても問題ないと思いますが。

話を戻しましょう。

わたくしはサイトの報告欄をみながら、ふとこんなことを考えました。

ひよっとすると、わたくしたち情報屋でも知ることができない、

『何か』があるのではないかと。

そしてそれは、とんでもない情報なのではないかということ。

十月下旬～十二月中旬（10）（前書き）

今回、新キャラ登場です！

十月下旬～十一月中旬（10）

家に帰って僕を待っていたのは、いつもと変わらぬテンションの両親と、それを眺めながら夕飯をつくっている姉さんと、昼に僕達のクラスに来ていた人だった。

僕は二階に上がって着替え、リビングへ降りた。そしたら、夕飯が並べられていた。

「よっ。おかえり。」「おかえり。」「お帰りなさい。」僕を見た時、一斉にそう言ってきた。ん？一人多いよ？

「姉さん、誰なの？この人。」

僕は、僕のクラスに来ていた人が誰なのか最初に訊いた。そしたら、その人本人が自己紹介してくれた。

「初めまして。私の名前はレミリア。レミリア・ジャンヌって言います。年はあなたと同じ年です。」

と言って、着ていたドレスの端をつまんでどこかの社交界なんかで観る挨拶をしてくれた。様になってるね。

改めてレミリアさんを見てみると、美人だった。髪はレイジニアさんみたいな金髪だけど、目の色が緑色をしていた。それらを含めて、顔立ちは凛としていた。

「おい連。レミリア見てないでさっさと食べろ。」

どうやらマジマジと見ていたようだ。レミリアさんはちょっとだけ顔を赤らめていた。

それを見た僕はちょっと気まづくなったので、おとなしく姉さんに従うことにした。

それで夕飯を食べていたら、姉さんがこう言ってきた。

「連。あの時、私が話したいことがあるって言ったよな。」

「そうだね。」

僕は姉さんがつくった料理を食べながら頷いた。両親は、ビールを片手に料理を食べていて、レミリアさんはそれを見ながら食べてい

た。あれ？これって新鮮だ。

「なに感動してるか知らないけど、話ってるのはレミリアの事よ。」
「え？なに？しばらく泊まらせろって？」

「お前の推理力と観察力は親譲りだな。話がはやくて助かるが。」
「姉さんのその演技力も親譲りだと思うんだけど。」

「そんなことはどうでもいいんだ。ここにしばらく泊まらせる理由だが、今度やるドラマの撮影がこの近くだったからな。それでだ、レミリアは本来ならホテルに泊まるはずだったが、何を思ったのか私の実家に泊まりたいと言い出してな。なし崩し的にこうなったわけだ。ま、撮影は一ヶ月くらいかかるから、それくらいなら大丈夫でしょ？」

うん。もう決定事項になってるね。姉さんの言葉を聴きながら、僕はそう思った。

「父さん達は？」

「『賑やかになりそうだからいいよ。』って言ってたわ。私も出来る限りするから、いい？」

どうやら最終的な決定は僕に任されるようだ。……………ん？

「姉さんさっき、『一ヶ月くらいなら大丈夫でしょ？』って言ってなかったっけ？」

「大丈夫でしょ？」

「それともう決定してることにならない？」

「あ。そうね。」

今更のように気付く姉さん。わざとでしょ？

というわけで、

「レミリア。」

「なんです？ 風さん。」

「しばらくはここで過ごして良いそうだ。」

「ありがとうございます。」

見事レミリアさんがここに居候することになりました。

僕は普通に過ごしてるだけなんだけどなあ。

ま、
なるようになれ
つてことで。

閑話 とある休日

黒曜甚平編その5 (前書き)

今回も短いです。

わたくしが一通りサイトを巡回した後、時計を見たら午後三時でした。一人暮らしなので食事は簡単なのですが、今日は自分で作ったものを食べようと思いつき、買い物へ出かけました。

デンタツで食材を買うところは色々あるが、私がおススメするところはやはり楔商店街だな。あそこは品がいいし、種類も豊富、それに値段が安いのもポイントだ。

こういうコメントをすると、歩き回っていたのか？という質問が出てくるだろうが、実は私はここ出身でね。ここのことなら結構詳しいのだ。

という自慢は置いといて。

私は楔商店街で食材の買い物をしていった。たまに、この商店街の店で貴重な食材が売られていることがあるから、私はほぼ毎日ここにきている。

食材を買い終えた私は、家に帰って夕飯を作り始めた。

夕飯を作り終え、それを食べ終えた後、わたしくは特にやることはなくテレビを見ていました。

そこで、ふと考えだしました。

圭君の友達は、みんな楽しく毎日を過ごしているんだな。とくに、池田連君。あの子はいつも楽しそうだな、と。

わたくしは、テレビを消して風呂に入り、風呂から上がったら寝ました。

その中で、わたくしと私は今日の出来事をそれぞれ話し合っていました。どうも、それぞれ貴重な体験をしたらしく、充実した休日となった。と互いに結論付けました。

閑話 とある休日

黒曜甚平編その5（後書き）

次は誰の閑話を書きましようか？

十月下旬～十二月中旬（11）（前書き）

二万PV突破しました！感想がほしいです。待っています！

十月下旬～十一月中旬（11）

学園祭最終日。

失速することを知らないのか、僕達の喫茶店は繁盛していた。多分、売上げが過去最多だろう（学校内という意味）。

そして学園祭が終わって、僕達は教室にいて打ち上げをした。その時に、元たちと藤木さんがいなかったけど、みんなは気にしなかった。僕達も気にしなかった。

「いや～この学校で過去最高の売上だってよ！嬉しいぜ、全く！」
「…連のおかげ。」

「流石に、みんなのようにはしゃぐ気力はないよ。今は。」

「そういや、元たちは？」

「…藤木さんもない。」

その二人の質問に、僕はベランダから空を眺めながらこう言った。

「今頃、どこかの組織をつぶしてるんじゃない？」

「？」「…？」

僕が言った言葉に、二人は首を傾げたみたいだった。でも圭は調べるから、きつとすべてを知るだろうね。

空を眺めながら、僕はそう思った。

「ただいまあ～。」

打ち上げが終わって家に帰ったら午後七時。靴が一人としてないの、家には誰もいないのだろう。

僕はとりあえず風呂を沸かした後に両親の夕飯だけ作り、本を読んで風呂が沸くのを待ち、風呂に入って自室へ戻り、明日の準備をして寝ることにした。洗濯とかは明日やろうと思いつつながら。

翌日。今日は片付けがあるので登校日。昨日はやく寝たせいか、今日は早く起きた。両親たちが帰ってきたのかを確認すると、僕は洗濯機を回しながら朝食をつくっていった。

朝食をつくり終えて、僕はちよつと一息入れていた。

朝食を一人で食べ、洗濯物を干していたらいつもの時間になったのか、両親が起きた。その後に姉さんとレミリアさんが起きた。

四人が食べている時、僕は二階へ行って制服に着替えていた。着替え終わった時、時間にまだ余裕があったので、僕はリビングで休憩することにした。

リビングに降りてのんびりしようとしたら、

「おい連。食器洗うの手伝って。」

いきなり姉さんの暴言を聴くこととなった。僕は反論しても無意味だと知っているので、何も言わずに手伝うことにした。レミリアさんも一応手伝ってたよ。

それが終わったので今度こそ休憩しようとしたら、

「なあ連！俺のワイシャツってどこだっけ？」「早くしなさい！」

両親（正確には父親）が困っていた。僕がいつもの場所に置いてあるよと言ったら、急いで行ったみたいだった。

やっと休憩できると思ってソファに座ったら、レミリアさんが隣に座った。

「あなた、毎日こんな生活をしているの？」

「まあね。ただ、今日はいつもより早く起きたし、昨日みんなの帰りを待たないで寝ちゃったから。」

と、僕はレミリアさんと話していた。そしたら、姉さんが口を挟んできた。

「お。レミリアから話しかけるなんて初めてじゃないか？ていうか、二人で会話してるところなんて見たことないわね。」

「！？」「そうだね。」

レミリアさんは驚いて、僕は冷静に姉さんと話していた。いや、驚いてるだけなのかな？顔を真っ赤にしている。そんなことを気にせず、僕は姉さんに訊いた。

「姉さん。今日は撮影あるの？」

「うん？一応あるけど、確か午後からだよね？」

「そうですね。それまでは自由時間です。」
そして、少し三人で話していたらいつも登校する時間になりそうだった
ので、僕は鞆を持って学校へ向かった。

十月下旬～十二月中旬（12）（前書き）

学園祭の話は関係なくなりました。

十月下旬～十一月中旬（12）

「さあやるぞ！さっさと終わらせてさっさと帰ろう！」

「「「おおー！ー！ー！」」」

庄一の一言で、僕と圭と元以外の男子はみんなやる気を出していた。女子もやりますからね。

片付けの中で、僕は元と一緒にだったので話しながらやっていた。

「藤木さんもちゃんと戻ってこれたんだ。よかったよかった。」

「ありがとね、連。君の言葉で助けに行くことが出来たよ。」

「お礼なんていらないよ。僕は教えただけで、藤木さんを助けたのは元なんだから。」

「そうかもしれないけどね。あ。花音が最近、連の家庭を調べたいとか言い出していたんだけど……。」「

「元の研究でもおとなしくして欲しいな。」

「それ、久実たちには言わないでよ。最近花音と僕が一緒にいると、ロリコンだとか言ってくるんだから。」

「ははは。大変だね。」

「まったくだよ。」

そうこうしてるうちに、僕達の割り当てられた場所は終わった。他の所はもう少しで終わりそうだったので、僕達はまだ話すことにした。

「そう言えば、連。君、堇のお母さんから何か言われなかった？」

「え？確か……。お礼がどうのこうの、だった気がする。」

「今日か明日にでも来るんじゃないかな？堇がそんなことを言っていたから。」

「家の掃除してないや。」

「あと、なぜだか僕の両親が『池田君を見習いなさい！』って言うてたんだけど、何か心当たりはある？」

「……………なにもないよ？」

「今どうして目を逸らしたの？しかも話を聴いてみたけど、連がだいぶ偉大な人に聴こえたんだけど。一人で家の事をすべてやるとか、家庭内の実質的な大黒柱は連だとか、家計簿をつけているとか。それって、本当？」

「それ位は普通だよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

あれ？元が黙っちゃった。どうしたんだろう？そう思っていたら、

「反抗したいと思わなかったの？」

と訊かれた。反抗：反抗ねえ・・・・・・・・・・・・・・・・。

「ないよ。そんなことしたら今頃家が大変なことになってるよ。」

僕がそう言ったら、元が慰めるような眼で僕の事を見てこう言ってきた。

「これは一回花音に調べてもらった方がいいかもしれない気がするね。」

冗談だね？と言って僕が訊いた時には片付けが終わっていた。

終わったので、僕はいつものように帰ろうとしたら、庄一や圭、元たち（藤木さん含む）までついてきた。大所帯だよ、困ったものだ。

ちなみに、庄一と圭は恒例の打ち上げ、元は「さっきの言葉が本当か確かめたい」、久実さんと藤木さん、レイジニアさんは「どんな家で生活をしているのか気になるから」、堇さんは「お母さんが家に来るかもしれないから」だってさ。僕の家って、特別なものがないにも無いんだけどなあって……あ。忘れてた。今、レミリアさんと姉さんがいる。どうしよう。

十月下旬～十一月中旬（12）（後書き）

次回、ひそかな打ち上げは成功するのか！？

なんて、どこかのアニメの次回予告みたいな感じにしてみました
次回予告です。

ややこしかったですかね？

十月下旬～十一月中旬（13）（前書き）

打ち上げと称したちよつとした騒動。連にそろそろ優しくしたいです
ね。

十月下旬～十一月中旬（13）

「ただいま。」「「「「「お邪魔します。」「「「「「

結局、僕の家までみんなついてきてしまった。その声につられたのか、姉さん達が玄関に来てしまった。そして、姉さんが口を開いた。

「お帰り、連。早かったな……って、なんだこの人数！？見知った二人と女装してたやつは知ってるが、後の人達は誰なの！？」

「落ち着いて！それに、別に問題は無いでしょ？以前両親が会社の同僚を二十人くらい連れて来た時よりは。」

後ろで、「二十人って……。」「……知らなかった。」と、「「「「「ええええ！！！」「「「「「という声が聴こえた。姉さんはいと、

「あれは確か五年前に私が家を出て行くころだったな。……ま、あの時よりはマシだな。」

落ち着きを取り戻していた。姉さんが家を出て行った理由は、女優として仕事があったから。

突飛な両親のかなりの無茶ぶりを経験してきた僕達。たかだか七人では驚きません。

そして、その光景を見ていたレミリアさんは「やっぱり姉弟ね。」と言っていた。

あまり驚いていない庄一と圭は、すぐレミリアさんに視線を移してから、こう言った。

「圭。俺、幻覚でも見えてるのか？エミリーさんが見えるんだが。」

「……幻覚ではない。本物。」

エミリーって、レミリアさんのタレント名かな？素直に僕はそう思った。

当然、元たちもレミリアさんに気付き、結局、僕が一人で尋問を受けることとなった。

なんで、こんな目に……！！

僕の姉とレミリアさんの説明を聴いたみんなの反応は、驚いていたと言えなかった。

もうすぐ昼だという事で人数分の昼食をつくらないといけなくなったから、僕だけで買い出しに行くことになった。今日だけで食費が大変だなあと思いながら。

商店街で昼間から値切りまくって買い出しを終え、家に帰ってきたらみんな思い思いに過ごしていた。久実さんと董さん、藤木さんは姉さんと話しており、レイジニアさんはレミリアさんと話しており、庄一と圭と元はゲームをしていた。おい。

何を言うのも面倒になったので、僕はおとなしく昼食をつくることにした。それに気付いた久実さん達が手伝おうとしてくれたけど、姉さんが「あんたたちにできる事は無いよ。」と言って引き下げさせた。そりゃあ、そうだろうけど。

ちなみに、料理を作っている間、何故か女子の視線が凄かった。キッチンに近いテーブルに女子はみんな座っていたので、僕の事は見える。どうしてなのか気になったけど、気にしないことにした。

考えるのが面倒だったので、料理はみんなと一緒に食べれるものにした。で、つくっている間にまた人が来たみたいだった。姉さんが玄関に行ってくれた。

そして、姉さんが連れてきた人を見て、レミリアさん以外は驚いた。来た人はなんと、董さんのお母さんだった。

「お母さん！どうしてここが分かったのですか！？」

「それはね、前にあなたがここに来たからよ。」

というわけで、一人増えました。なんでも、体育祭と学園祭のお礼がしたかったから、だって。

姉さんとレミリアさんは分からなかったみたいだけど、庄一が説明してくれた。

料理を作り終わったので、僕は皿に料理を移し、二つのテーブルにそれぞれ同じ料理を運んだ。男子がテレビに近い方、女子がキッチンに近い方。見事に固まったね。

食べている間の会話、男子の場合。

「それにしても驚いたよ。連のお姉さんが女優だったなんて。」

「俺はエミリーさんが居た事に驚いたんだが。」

「…同感。」

「僕は堇さんのお母さんが家に来たことに驚いたんだけど。」

「それもそうだけど……………」

「いつからだ？」

「一昨日からだよ。姉さんがしばらく泊まらせたい、って。」

「…………どうして？」

「本人の意思なんだ。」

「詳しく訊いてねえのか？」

「普段話をしないから。」

「それにしても、本当だったね。」

「なにがだ？」「……………」「え？」

「連が一人で家事をやってるの。」

「そんなことか。」「…今更。」「あはは。」

女子の場合。

「それにしても、池田君に会いに来たのに大女優とお会いできるなんて。嬉しい誤算ですね。」

「社長夫人であり、作家であるあなたにお会いできて光栄です。」

「はじめて池田君の料理食べたけど、すごい美味しいね。そこのレストランで食べたら物足りなさを感じそうだね。」

「前にも食べたことあるけど、それよりおいしくなってないかしら？」

「そうね。もしかして、学園祭の調理がほとんど一人だったからじゃないかしら。」

「料理教室を開いたら生徒が沢山来そうですね。」

「あの、皆さん。」

「なに？エミリーさん、でいいかしら？」

「レミリアでいいですよ。」

「そうそう。私の事だって渚でいいんだよ。」

「そう。なに？レミリアさん？」

「皆さんは、超能力とかありますか？」

「私はあるわよ。」 「私は魔術師です。」 「私はネクロマンサーよ。」

「私は普通のか弱い女性だ。」 「私は…普通の人ですね。」 「私は天才科学者だよ。」

「そう言うレミリアは？」

「私は…魔術師なんです。」

「へえ。」 「私と同じですね。」 「そうなの。」 「何回かみたことあるな。」 「そうなんですか。」 「身近に結構いるんだねえ。」

十月下旬～十一月中旬（13）（後書き）

報告です。十月下旬～十一月中旬の話が終わったら、連たちの過去話をしたいと思います。ご期待ください。

十月下旬～十一月中旬（14）

そしている内に食べ終え、姉さんが食器を洗って片付けている間に、僕は自分の部屋に行って家計簿を持って一階へ降りた。

一階へ降りた時。すでに姉さんとレミリアさんは仕事へ行ったらしく、二人の姿はなかった。

「どこ行ってたの？」

「どうせ自分の部屋だろう。」

よくわかってるね、庄一。そう思いながら、僕は空いていた椅子に座ってさっき買ったも食材の領収書を、家計簿に書き留めていった。結構な量を買ったから大変だなあ。

そうやって家計簿をつけていたら、みんなが僕の周りに集まっていた。

僕は、動かしていたシャーペンを止めてこう言った。

「どうかしたの？」

すると、代表してなのか庄一が言った。

「いや、客が来てるのにもいつも通りだなあと思って。」

「暇な時にやらないと、すぐにできなくなるからね。」

僕はそう言って、再び家計簿をつけ出した。うーん。ちょっと出費が多いかな？ 久し振りに赤字になりそうだ。ま、今回は仕方ないかな？

そう思いながら続けていたら、堇さんのお母さんがポツリと漏らした。

「すごいわねえ。私もやったことはあるけど、ここまでマメにやれなかったわ。」

それに反応して、圭が言った。

「…連はこれを十年もやっている。もはや習慣。」

そういえば、前に僕の事調べてたんだっけ。そう思いながら、作業はやめなかった。

家計簿をつけ出してから二分。そんな時間がかからなかったね。

終わったので、ノートを自分の部屋へ戻そうとしたら、みんなに立ち塞がれた。

「どこへ行くの？」

「どこって……自分の部屋だけど？」

当たり前のことを何で聴くのか、僕の事には判らなかった。そして、レイジニアさんがこう言った。

「なら、一緒に行ってもいいかしら？」

「どうして？面白い物なんか一つもないよ？ね、庄一。圭。」

「面白いというか……」「……中学生の部屋じゃない。」

僕が庄一と圭に話を振ると、二人はそんなことを言った。失礼な。単純にものが無いだけだよ。

庄一と圭の話でますます興味を持ったのか、みんなが僕の部屋に行きたいと言いつ出した。断つても面倒なので、仕方なく許可した。本当に面白い物なんてないのに。

二階へあがって、僕の部屋の前に来た。

「ここが僕の部屋だけど、みんないっぺんに入れないよ。」

「入らなくても見えるだろ。」

と、庄一の鋭いツツコミ。そうだけどさ。

そう思いながら僕はドアを開けて部屋の中へ入っていき、いつもの所へ家計簿を置いた。

ドアを開けたままにしておいたので、元たちが入ってきた。

初めに感想を言ったのは、久実さんだった。

「凄いわね。きちんと整理整頓されてるわ。物が散乱していないわね。」

それに続いて、

「この本棚、きちんと整理されています。ちゃんと、どこに何があるのか分かりやすく整理されています。……あ！お母さんの本が置いてあります！」

「あら嬉しいわね。こんな身近にファンがいたなんて。」

「ハジメの部屋とは大違いね。」

「そうだね。僕の部屋が凄い汚い部屋に見えるよ……って何言わせるの！」

「自分で言っただよ。」

「……庄一は見習うべき。」

「うっせ。捨てたくても捨てられないんだよ。」

と口々に言っていた。そして最後の言葉を聴いて、

庄一、それはダメだよ。と、庄一以外がそう思った。

と、ここで堇さんのお母さんがこう言った。

「そういえば、私はあなたにお礼をしにきたんです。それなのに昼食をごちそうしていただいて、ありがとうございます。」

僕は頭をかきながら、堇さんのお母さんを見てこう言った。

「いえ、お礼だなんてそんな。たいしたことはしていませんし。」

「さて、本来はこれまでのお礼をしに来たのですが、今回のも含めて三回のお礼をしないといけませんね。」

あ、スルーされた。堇さんを見ると、「お母さん。私を泊めてくださったのですから、四回ですよ。」「あ、そうですね。」と何やら増やしていた。そんなものが目的じゃないんだけど。

「さて、四回分のお礼をしないといけないのですが……そうですね。全部あなたが決めてくれませんか？」

スルーされたまま、強制的に話を進められた。

四回、か……。意外と多いね。と、なると……。

僕は簡単に四回分を使える方法を思いついたので、本棚からお気に入りの本を四冊とってこう言った。

「これにサイン書いてくれませんか？一冊で一回分。計四回分です。」

すると、堇さんのお母さんが何やら考えた後にこう言った。

「本来ならお断りなのですが、仕方ありません。いいですよ。」

そして、僕が渡した本四冊にサインしてくれた。やったね。

一階へ降りて、僕達はみんなでゲームをした。基本的に庄一、圭、

元、久実さんの四人で、僕達はそれをキッチンに近いテーブルで眺めていた。

三時になった時、みんな帰っていった。みんなの表情を見てみると、どこか満足したみたいだった。僕としても嬉しいけどね。

十月下旬～十一月中旬（15）

夕飯の買い物から帰ってきた後すぐに家計簿をつけ、夕飯をつくっていった。

そして夕飯を作り終え、洗濯物をたたんで自分の分を運んでいった。それが終わったら、テレビを見ることにした。暇なもんでね。テレビを見るのも飽きたので、僕は両親たちを待たずに食べることにした。

僕が食べ終わって食器を片付けていると、両親が帰ってきた。帰ってきて早々に両親は弁当箱を流し台に放り出してきて、僕は何も言わずに弁当箱も洗いだした。

両親が夕食を食べていると、姉さん達が帰ってきた。僕はソファに座って本を読んでいた。

両親と一緒に姉さん達も夕食を食べながら、僕達はみんな今日の出来事を話した。

僕は友達が家に来たことを、姉さん達は仕事のことを話した。途中で、姉さんと両親が僕に愚痴しか言ってこなくなった時、僕は話をほとんど聞き流した。あと、姉さん達につられてなのかレミリアさんも言ってきたけど、それを同じく聞き流したら姉さんに「相談くらい真面目に聴け。」と怒られた。僕には愚痴にしか聴こえなかったんだけどなあ。

夕食を食べ終えた両親たちは、各々適当にやっていた。風呂に入ったり、明日のスケジュールを確認したり、台本読んだり。僕はひとりで後片付け。理不尽だね。

後片付けが終わったら、洗濯機を回してから風呂に入った。僕が最後のいつものことなんだよね。風呂から上がってから自室に戻ろうとしたら、レミリアさんに止められた。

「あの、レン。」

「なに？レミリアさん。」

リビングでは、両親と姉さんが三人で酒盛りをしていた。片付けしてくれるかな？

「レンって、本当に大変なんですね。これを毎日？」

「姉さんが出て行ったあとが大変だったけどね。」

レミリアさんの質問に、僕は苦笑しながら答えた。姉さんが出て行ってからの数週間。僕にとっては仕事のバイトより重労働だった。やったことないけど。学校で寝るのは当たり前。酷い時には学校を休んで寝ていた。病院に行ったら、『その年で過労って、何をすればなるんですか？』と訊かれたこともあった。適当に誤魔化したけどね。

僕がそう答えたら、レミリアさんは驚いてこう言ってきた。

「えっ！？ 渚さんもこんな事をしていたんですか！？」

「うん。といっても、洗濯と料理ぐらいかな。」

「他の事はレンが……？」

「うん。」

僕の答えに、レミリアさんは「すごいね、レン。」と笑って言うてくれた。その笑顔を見て、僕は顔が赤くなった。だって可愛かったんだもん。レミリアさんの笑顔。

そんな僕の顔を見て、レミリアさんも顔が赤くなった。あれ？ どうしてだろう？

レミリアさんの顔が赤くなった理由を考えようとしたけど、それより先にこの気まずい雰囲気は何とかしないといけない、と思った。でも、何を言えがいいのか分からなかったので、

「お、お休み。」

と言って、いそいそと自室へ戻っていった。それを聴いたレミリアさんは、

「あ。は、はい。お休みなさい、レン。」

と言った。まだ話をしたかったのか何か言いたそうだったけど、僕はそのまま自室へ戻って寝ることにした。

十月下旬～十一月中旬（15）（後書き）

次、閑話を書くとしたら誰がいいでしょうか？

十月下旬～十二月中旬（16）（前書き）

レミリアが連のことを好きになった理由の回想から始まります。

十月下旬～十一月中旬（16）

「はう。まだドキドキする。」

連が二階へあがっていったのを見届けた後、レミリアは階段に座って赤くなった頬を両手で押さえていた。

「今でも嘘のようだよ。レンの家にいることが。」

そう言った後、レミリアは深呼吸をした。しながら、思い出していた。

四年前。レミリアは渚と初めて共演した。その時に、渚に「あなたを見てると弟の事を思い出すよ。」と休憩中に話しかけられたことがあった。

『弟、ですか？』

『そう。連、って言うんだけどね。あいつに親の事全部任せてきちゃったんだよ。』

『そうなんですか。』

そこから、渚は休憩時間のほとんどを、連について話した。それは、姉が弟を自慢するようなものだったが、不思議と気にならなかった。撮影が終わり、帰ろうとしてる渚にレミリアはこう言った。

『また共演したら、レン、って人の事をまた話してくれませんか？』それに対して、渚は振り返って笑いながらこう言った。

『いいぜ。そのかわり、あんたも自分のことを話さないよ。』

虚を突かれたレミリアは、呆然と立ち尽くしていた。

それから、共演する度に連の話を聴いた。話を聴いてるうちに、連の事が気になっていった。その理由は、渚の話を聴いてると、連は苦労してるはずなのにいつも楽しそうに過ごしている風にとれるからだ、本人は思っていた。

しかし、そのうち段々と連の事を想像しだし、頭から離れなくなっていた。インタビューで『好きな人は？』と訊かれた時、とっさに『風さんの弟』と言いそうになった。

これが何の感情なのか渚に訊いてみたところ、『恋じゃね?』とあっさり言われた。

そう言われて、嘘だと思う自分がいる反面、納得してる自分がいた。それ以来、連の事が好きになった。

そこまで思い出して、レミリアの顔がまた赤くなった。

「明日も朝と夜は一緒に居られるからその時にいっぱい話そう!」
赤くなりながらもそう決意して、レミリアも寝ることにした。

学園祭の片付けが終わって一週間後。僕達三人はいつもの場所にいた。

「学祭終わったな。」

「それから二日後に、どっかの犯罪組織が壊滅したっていう報道があったんだよね。」

「……これからその話をする。が、その前に」

ん? 圭が僕の事を見る。顔に何かついていたのだろうか?

「……ちよっと実験をする。」

と言って、僕に箱を渡してきた。

なんだろう? と思って箱を開けると、その中から煙が勢いよく噴射してきた。

「うあああ!! ゴホッ! ゴホッ!」

噴射されてからすぐに、僕はその箱を投げた。その箱は煙を噴射しながら壁に激突し、いきなり爆発した。

「……ここでやらないで欲しかった。」

「ゲホッ、ゲホッ! なんだこれ!? 前が見えねえ!」

「庄一! ドア開けてよ!」

「分かった!」

という声と一緒にドアが開く音がして、煙が外へ出て行った。

煙が全部出て行ったあと、僕と庄一は圭に詰め寄った。

「僕に何渡したの!」 「いつもの事だから分かっているつもりだが、ちゃんと説明しろよ!」

僕らの言葉に、圭はいつもの口調でこう言った。

「…連に渡したのは試作品の新作、逃げれる君（仮）。箱を開けると煙が噴射し、箱を何かにぶつけると爆発する音と共に煙が出てくる。これくらいの場所なら二分で周りが見えなくなる。いつものところからの依頼。」

薄々感じていたけどね。そう思っていたら、圭がさらに言った。

「…結果は上々。依頼料を二人に渡しておく。」

そう言っ、圭は僕達に封筒を渡してくれた。これが、僕の自分用のお金の収入源。

僕達は封筒の中身を確認しないで、圭の言葉を待った。

「…分かってる。まずは、発端である藤木花音の転校から。その目的が、元の能力の解明。学園祭の時期に転校してきたのは、単に調整が出来なかっただけらしい。」

ちゃんとスケジュールの調整しようよ。

「…学園祭までの間、元の後を追っていたのはそれが理由。しかし、元は普段能力を使わないため解明できなかった。そして学祭初日。開店直後から花音はいなくなった。それは、仲間からの指示を受けるため。その指示が、学祭最終日に元を誘拐するというものだったらしい。」

そこからは僕も知っている。指示を受けた藤木さんはそれにシヨツクを受けてしばらくどこかをさまよっていた。それを、両親が場所を特定して元たちが迎えに行った。その時に、元をその組織に渡さないと決めたらしい。

「…そして、学祭最終日の夜。花音は一人で組織へ赴き反対した。当然、組織は反逆罪として花音を捕らえたのだが、元たちが組織の場所へ行き、攻撃した。結果、その組織は壊滅。花音は被害者という事で保護。組織の人間は全員逮捕された。これが学祭での一幕。ただ、一つだけ分からないことがある。」

「珍しいな。圭でも分からないことがあるのか。」

「…ああ。元たちがどうして組織の場所を知ったのか。それと、元

私たちはどうして花音がそこにいることを知ったのか。」

と言って、圭は僕の事を見た。

「…知ってるだろ？」

「相変わらずそういう勘は鋭いんだから。僕の話も誰にも言わないでよ。」

そう前置きして、僕は話した。

「学祭三日目が終わった時に、明日の準備とかをし終え帰る準備をしてたら、藤木さんもいてね。その時に話を聞いたのを、最終日の打ち上げ前に元たちに話したんだ。場所も藤木さんから教えてくれたから、ついでに話したんだよ。」

「そうか。だからお前、あの時ああ言ったのか。」

「…ありがとう。これで納得がいった。これ、提供料。」

そう言って、圭はもう一つ封筒を渡してくれた。僕は、それを受け取らないで圭に訊いた。

「でも圭。元的能力ってなんなの？」

「…分からない。けど、昔の文献で似たような能力を使った人がいたらしい。黒曜から聴いたから、これは確かな情報。」

「ってことは、元的能力って遺伝じゃないのか？」

「……分からない。」

庄一の言葉に、圭は首を横に振りながら答えた。

元って本当に不思議だなあ。僕はこのやりとりを見てこう思った。それから、僕達は明日の確認をして家に帰った。

十月下旬～十二月中旬（17）（前書き）

八十話行きました。早く過去編に行きたいので早めに更新しています。

十月下旬～十一月中旬（17）

それから、僕達は明日の確認をして家に帰った。

「ただいまあゝ……って、誰もいないよね。」

家に帰って僕は、みんな仕事でいないことを思い出した。

そして、いつもの事をやった。

その日の夕食は、みんなが一緒だった。ま、僕が待ってたからだけだね。

「珍しいよな。みんなで食べるなんて。」

食べ始めた時に、姉さんがこう言った。それに両親が同意した。

「そうだよな。レミリアさんも入れると初めてじゃないか？」

「違うわよ。レミリアちゃんがここにしばらく泊まることが決定した時もこうだったでしょ？」

そして、食べながら今日の出来事を話し合った。家族団らんっていよねえ。

その時、レミリアさんが僕にこう言ってきた。

「レンの料理って、やっぱりおいしいですね。」

僕は顔を上げて

「そう言ってもらえると嬉しいよ。」

と言ったら、レミリアさんは顔を赤くした。おかしい。笑って言うただけなのに。

「どうかしたの？」

僕が訊くと、レミリアさんは慌ててこう言った。

「べ、別に大丈夫ですよ!？」

それを見た姉さんは、何やらしたり顔だった。どうしてだろうか？そのあとは、何事もなく夕食が進んだ。だけど、レミリアさんの顔が赤くなったままだった。

昨日と同じで、僕一人で後片付けをした。レミリアさんは食べ終わったら自分が使っている部屋（姉さんと相部屋）に走っていき、

姉さんが後を追った。両親は、「もしかして、連のこと……」
「きつとそうでしょうね。」と言っていた。どうしてだろう、凄
い気になる。

それから、僕が寝るまで姉さん達の姿をみなかった。

「なんで私あんなこと言っちゃったんだろう？」

自室のドアに背をもたれかけながらレミリアは言った。その顔はド
ラムや映画の顔ではなく、完全に少女の顔だった。

すると、ドアをノックする音が後ろから聴こえた。レミリアは慌
ててドアから離れた。ドアが開いた先にいたのは、

「どうしたんだ、レミリア？いきなり逃げて。」

「な、渚さん。」

池田渚だった。渚は意地悪い笑みを浮かべながら言った。

「あれか？食事中に連の笑顔を見たからか？」

「~~~~~！！」

「やっぱり。」

図星のせいで顔を真っ赤にしたレミリアを見て、渚はため息をつき
ながら言った。

「レミリア。あいつは今家の事を中心として自分の事は全部後回し
にしてるから、誰に好かれようが絶対断るぞ。」

その言葉に、レミリアはうつむいてしまった。そこへ、さらに渚は
追い打ちをかけた。

「いいか？これは連の姉として忠告よ。諦めなさい。あなたじゃ連
を振り向かせられない。」

その言葉で、レミリアは膝を抱えて泣いてしまった。渚は、今はレ
ミリア一人にした方がいいと思い、部屋を出ようとした。しかし、
泣きながらレミリアが言った言葉に、渚は立ち止った。

「…………ヒック…………でも…………それでも…………私は、あの人の事が好
きです。たとえ…………振り向いてくれなくても、この気持ちを諦めら
れませんか！」

その言葉を聴いた渚は、レミリアに近づいて肩を叩いてこう言った。「そうかい。なら、その気持ち忘れるんじゃないやねえぞ。あいつを振り向かせたいなら、遠くから見守ってるだけじゃ駄目よ。これは姉としてのアドバイスだけど、たまには積極性も大事よ。」

それを聴いて、レミリアは膝を抱えながら顔を上げた。その顔には、涙の跡があった。

「……………分かりましたっ!!」

顔を上げて、レミリアはそう言った。泣いていたことを忘れさせるような笑顔で。

次の日。

僕はいつもの時間に起きた。レミリアさんの事が気になったけど、僕にはどうしようもできないから考えないことにして一階へ降りた。

リビングに降りた僕は、見慣れない光景を目撃した。というか、全く新鮮な光景だった。

「あ。おはようございます、レン。」

その光景とは、レミリアさんがキッチンにいたことだった。人の見るなんて何年振りだろうね。

「おはよう、レミリアさん。……………どうしたの？ 今日仕事があるなら、まだ寝てても良いんじゃないの？」

「レンだって学校があるじゃないですか。」

あれ？ 言い負かされちゃった。そう思ったけど、気にせず五人分の弁当の準備を始めた。下準備は終わってるから調理するだけで終わり。簡単だね。

何事もなく朝食をつくり終え、僕は洗濯機を回しに向かった。昨日はやってなかったからね。

洗濯機を回してる間に、僕はリビングに戻ってレミリアさんと一緒に朝食を食べた。

「それにしても、今日はどうしてこんなに早く？ この時間に起きてるのは主婦と新聞配達の人ぐらいだよ。」

食べながら、僕はレミリアさんに訊いた。すると、レミリアさんはこう答えた。

「ふふっ。内緒です♪」
とてもいい笑顔で。

（続）

人物紹介その3（前書き）

勢いが、勢いがありすぎて・・・。。
すみません。後半滞るかもしれません。

人物紹介その3

堇の両親・・・・父親がある会社の社長で魔術師、母親が小説家で普通の人。父親の方がもう完全にバカ親。救いようがないくらい重症。対して、母親の方はのんびりマイペース・・・・というわけではなく、おっとりしているだけである。夫婦仲は結構良い。

久美の両親・・・・父親が超能力者で警察署勤務、母親が主婦で同じく超能力者。堇の父親と同じで、重度のバカ親。堇の父親とエスカウントすると、必ず双方とも娘の自慢話をするため、母親方と娘方は恥ずかしさで他人のふりをよくする。ちなみに、そういうことがあるのは父親間だけで、母親間だと仲良くおしゃべりしている。

レミリア（15）・・・・渚に頼み込んで連と一緒に暮らしている女優。タレント名『エミリー』。彼女は魔術師であるが、たまにしか使わないのでたまにしか練習していない。連を好きになった理由は渚の話を聴いたから。今は、どうやれば連との距離が縮められるのかを考えている。が、仕事の方に集中しないといけないので、連と一緒にいたいという願いがほとんど叶っていない、ある意味不運な人。

長老・・・・柊が仕事で、黒曜が私用で訪れた集落の長老。常に数人の男を引き連れている。元的能力についてのヒントを知っているみたいだが、あまりにも変わった条件で黒曜たちは訊けなかった。

門番・・・・長老に集落の門番を任された者。多少無謀なところがあるが、根は優しく、親切である。身体能力は高い。

藤木花音（15）・・天才少女。とある組織に所属していた。その組織の目的が、中島元の能力の解明。そのために元の後について回っていたが、その時に元の優しさを知り、組織からの指令と恋心に挟まれたが、自分の気持ちに素直になることにして組織に反抗した。しかし、それによって捕まったが、元たちが救ってくれた。最近、連のことを調べたいという好奇心に駆られているらしい。身長の話は、彼女にはタブーである。

人物紹介その3（後書き）

次は過去編でお会いしましょう。あ、これで終わりませんよ？

過去編（中学一年～二年）（前書き）

ついに過去編が始まります。色々と引っ張りたいと思います。

過去編（中学一年～二年）

十一月のある日。いつもの三人で外を散歩していた時のこと。

「あゝ、結構冷え込んできたな。来月になったら雪でも降るか？」

「：分からないが、降るとしたら十二月中旬以降だと思う。」

「そうだね。でも、このくらいの寒さならまだ耐えられるでしょ？

ほかのところだともものすごく寒くなるところだってあるんだから。」

「そうだな。」……無論。」

そう言いながら歩いていたら、感慨深そうに庄一がつぶやいた。

「もうすぐ高校生か。そういえば、俺と連が初めて会ったのは中一のころだったよな。」

「あゝ、そうだね。僕と庄一は一年のころから同じクラスで、圭は二年生の時からだもんね。」

「：俺は一応二人の中学一年のころも調べていた。だけど、話が聴きたい。」

「俺は、圭がどうして俺達と一緒にいるのか話が聴きたいぜ。」

二人がそう言ってきたので、

「じゃあさ、外は寒いからどこか話ができるところ行かない？」

そう僕が提案したら、頷いてくれた。

というわけで、場所をどうするか話し合った結果、僕の家ということになった。

………どうしていつもこうなるんだろう？

僕の家へ向かう途中、なぜか元たちとぼったり会い、何をするのか訊かれ正直に答えたなら自分たちも行くということで、いつものメンバーで僕の家に向かった。

ただ、元たちは何をしていたのかと訊いたら、「ちょっと話を聴きに。」と言っていた。どうやら、警察署で話を聴いていたのだからね。

「ただいまー。」「「「「「お邪魔します。」」「」「」」」」」」
もはやこの家は人が良く集まる場所となっていた。みんな、ここ好きだね。

僕たちがリビングに行ったら、姉さんとレミリアさんがいた。

「仕事は？」

「今日はなし。だよな？」

「ええ。」

ふうん。そうなんだ。と適当に思いながら、僕たちは椅子とソファにそれぞれ座った。

開口一番は、久美さんだった。

「ねえ、あんたたちの過去を話してくれるんだったわよね？」

それに文句を言うのは、庄一だった。

「俺たち三人だけで話すつもりだったんだがな。」

「……思い出話は花が咲く。」

庄一の後に行った圭の言葉は放っておいて。

「じゃ、話そうか。まずは僕と庄一が初めて会ったときからだね。」

それから、僕は話し始めた。………「………つていうか、いつの間にか姉さんとレミリアさんも聴き手になっていた。まったく困ったものだ。」

四月中旬のある日（入学式の次の日）

僕がこの中学校に入学して二日目。正直まだ緊張している。だって、ほとんどが知らない人だから。

学校に登校し自分の席に着いた僕は、一人で今日の予定を確認していた。他の人はクラスの人たちと話していた。

いいなあと思いつながら予定の確認を終えた僕は、とりあえず校舎の構造と設備の場所を確認していた。そしたら、声をかけられた。

「よう。今何してんの？」

その声に反応して、僕は顔を上げた。そこにいたのは、どこにでもいそうな普通の人ぽかったけど、髪型をオールバックにしていた。

一見してミスマッチのような気がしたけど妙に似合っていたので、僕は感心しながら言った。

「なについて、学校の施設の位置確認と校舎の構造確認。」

それを聴いたオールバックの人は、

「お前、さらっと言ってるがそんなことしねえぞ？」

と驚いていった。そうかな？僕は迷子になりたくないからやってるけど。

「ま、そんなことはどうでもいいか。お前、名前は？」

「自己紹介の時に教えてあげるよ。」

オールバックの人の質問に対して僕はそう答え、始まるまで待った。というか、家の仕事が最近大変になったから疲れが……………。

そのまま、僕の意識はなくなったみたいだった。簡単に言うと、寝てしまった。

僕は、頭を殴られて起きたようだった。あたりを見ると、僕をみ

んな見ていた。黒板を見たら、自己紹介という文字が見えた。

そっか。まだ学校だったのか。そう思いながら、僕は自己紹介をした。

「どうも。池田連です。趣味は読書くらいしかありませんが、一年間よろしくお願いします。」

そして席に座ったら、どうやら僕が最後だったようだ。先生が話をして、これから部活の案内とか施設の案内とかするから移動するぞーという話になった。僕たちはそれにおとなしく従って、最初に学校の施設を見て回った。僕は覚えたから別に問題なかったんだけどね。

それが終わったら僕たちは体育館に行き、部活動の説明会を聴いた。ただ、基本的に魔術師や超能力者に対して勧誘してるのと同じなので、僕はその話の間ずっと寝ていた。

説明会が終わり、僕たちは自分たちの教室に戻った。そして、先生が来るまで思い思いの人と話していて、僕は帰る準備をある程度済まして寝ていた。もうすぐ帰れるからね。

先生が来るちょっと前に、僕は起こされた。起こしたのは、さっき僕に話しかけてきたオールバックの人だった。

「何か用？」

僕は眠たい目を擦りながらその人に訊いた。そしたら、

「お前、部活入るのか？」

と訊かれた。僕は全く入る気がなかったので、

「全然。入る気なんてこれっぽっちもないよ。」

と言ったら、その人は「ふーん。」と言って僕の席を離れていった。別に悲しくはないけどね。

再び寝ようとしたら先生が来たので、僕は寝ることができなかった。

先生が明日の連絡事項とかを言って、その日の学校は終わった。毎日こんなのだったらいいな。

次の日。僕はいつものように昨日の内に下準備をした朝食と昼食を作っていた。そして作り終わったら、洗濯物を干しに行った。それが終わったら、僕は両親と一緒に朝食を食べた。

本当は姉さんがいるんだけど、姉さんは僕が十歳の時に『オーディションに受かったから事務所の近くに引っ越すわ。私がない間、一人で家事をよろしくね。』とか言って出て行った。最初は押し付けたな、とか思ったけど、送られてくるDVDを見てみると実に生き生きとしていたので、頑張っと思ってくるようになった。

朝食を食べ終えた後は一人で食器を片づけて、学校へ向かった。これが毎日繰り返されている。小学生の時は負担がありすぎたのかよく病院に行っていたので、中学生になって間もないけど病院の世話にならないようにと、心の中で歩きながら誓った。

学校について、僕は自分の席に座って今日の授業を確認した。その時に、昨日のオールバックの人が話しかけてきた。

「なあなあ、昨日の『レーコーン』面白かったよな？」

レーコーンとは、最近話題のバラエティ番組のこと。ゲストの人たちと様々なことに挑戦する番組なんだよ。

僕は授業の確認をしながら、

「テレビは見ないんだ。」

と言った。するとその答えに驚いたのか、

「ってことは何？おまえんち、テレビないの？」

と訊いてきた。

「あるよ。ただ忙しいだけ。」

そう答えながら、僕は授業の確認を終えたので寝ようとした。しかし、

「どうしてそんなに忙しいんだ？」

と訊かれた。

僕は若干鬱陶しく感じたので、無視して寝ることにした。それに

しても、どうしてあの人は僕に話しかけてくるんだろう？

中学一年生の授業なんて寝てもたいして問題ないと判断していたので、僕はほとんどの授業を寝ていた。ただ、体育の授業に関しては普通にやっていた。その体育の時間。ペアを組んでキャッチボールの練習だったので、僕は当然のようにあぶれた。なので、僕は先生と一緒に見ていた。

その時、僕はオールバックの人がすごいと思った。

彼が投げるボールは捕る側にはとても捕りやすく、また、ちょっと捕り辛いボールを投げられても難なくキャッチしていた。周りからは、「庄一やっぱすごいな。」「さすがは岡田選手の息子だ。」という声が聞こえた。庄一っていうんだ、あのオールバック。周りの話を聴いていた僕の感想は、そんなものだった。あと、見た限り感じたことは、彼は本気で投げていないくらいだった。どうしてなのか分からなかったけど、別にそんなことはどうでもよかった。ただ、見てるだけなので本気で眠かった。

体育の時間が終わり、昼食の時間（昼休み）になった。

僕は周りが輪になったりして食べているのを見ながら、一人で弁当を食べようとした。そしたら、いつも話しかけてきた彼が来た。

「よう。一緒に食べないか？」

弁当を持ちながら、彼はそういった。僕はそれに無言で対応したらそれを肯定ととらえたのか、彼は他の人の席の椅子に座って、弁当を広げて食べ始めた。

しばらく無言のまま食べていたけど、彼が話しかけてきた。

「なあ池田。」

「なに？」

「お前ってどうしてそんなに淡泊なんだ？」

そう訊かれたとき、僕の箸は止まった。そういう態度をとった覚えはないけど、傍から見ればそう見えるんだなと、その時思った。

少し考えてから、僕は答えた。

「……緊張してるから、かな。」

「そうなのか？」

「多分ね。」

そう言った後、僕は彼に質問した。

「庄一、だっけ？」

「それは名前だな。覚えてなかったのか？……って寝てたもん
な、お前。」

弁当を食べながら、呆れた庄一。うるさい。疲れてるんだからしょうがないじゃない。

「でさ、庄一はどうして体育の時間本気で投げなかったの？」

そう僕が訊くと、庄一は驚いた顔をして、つかんでいたおかずを落としそうになった。

「どうかしたの？」

「いや……気づかれないと思ってたんだが、まさかこんなに早く気づかれるとは思わなくてな。驚いていたんだ。どうしてわかった？」

気になったようで、庄一はどうしてだか僕に訊いてきたので、僕は説明した。

「どうしてって、だって肩を慣らすって感じで投げてたじゃん。それに、」

「それに？」

「楽しそうじゃなかったもん。投げてる時の庄一の顔。」

僕がそう言うと、庄一は啞然としていた。どうも、本人は気づいていなかったようだ。

僕はこれで説明は終わりという感じを出して、弁当を食べていた。

それから一秒にも満たないうちに、庄一が戻ってきたと言いな
がら弁当を食べるのを再開した。

「……お前、一人でいる間ずっと見てたのか？」

対して、なんともないという風に僕は言った。

「ずっと、ってわけじゃないよ。先生と一緒にキャッチボールして
たから。」

「だとしたらなおさらすごいぜ。そんなに見てないのにズバリと言
い当てるんだからな。」

「って、ことは本当なんだ。」

「ああ。体育だと本気になれねえんだ。ていうか、本気出すとほか
の奴らが怪我するんだよ。」

「それは大変だ。」

「だろ？」

そうやって話していたら、いつの間にか僕たちは仲良くなっていた。

過去編（2）（前書き）

三万PV突破！！ひとえに皆様のおかげでございます。

過去編（2）

五月中旬のある日（いつもの日常風景b y家庭科実習）

「よう。元気か、連？……って訊くまでもねえか。」

「……ん？あ、庄一。元気だよ、一応。」

その日の二校時目が終わって、庄一が僕に話しかけてきた。相変わらずのオールバックで。

「ん？どうかしたのか？」

「え？いや、別に。」

「そうか？」

僕の視線に気づいたのか庄一が僕に訊いてきたけど、僕ははぐらかした。どうしていつもオールバックなの？って聞きたかったけど、そこは訊かないことにした。

あ。あの後、というか四月から今までかけて色々とあって、僕と庄一は互いに名前と呼ぶ仲になった。詳しく話してもいいけど、それを語ると長くなるので別の機会にでも。

それで、庄一と話して分かったこと。それは、彼は誰とでも仲良くできるということ。

学校が始まって一カ月。まだまだぎこちない雰囲気はあるけど、小学校から同じ人同士での会話や、ここで新しくできた友達での会話をするときのぎこちなさが消えていた。

対して庄一は、そんなぎこちない雰囲気を持たずに人と接している。結果として友達が多い。対称的に、僕は学校に来てから寝てばかりなので友達が少ない。というか、全くないといっても過言ではない。ま、それほど欲しいとは思っていなかった。僕は気にしなかったけど。

そうやってボーっとしていたら、庄一がこう言ってきた。

「なあ、お前どうしてそこまで眠いんだ？徹夜でもしてるのか？」その言葉にあくびを噛み殺しながら僕は言った。

「徹夜？僕は徹夜なんてほとんどしたことないよ。僕にも色々あるんだ。」

そんな僕を見た庄一は、

「ふーん。ま、野暮なことはきかねえよ。」

と言って次の授業の準備をしに行った。一方僕は、それを見てから授業の準備をして、また寝た。

そんなことが続いたある日。家庭科の実習があるという話を、庄一から聴いた。

「へえー。エプロンづくりなんだ。」

「へえーって。さては寝てたな？」

「うん。」

「お前ってやつは……。」

何やら呆れていたけど、僕は気にせず話の続きを訊いた。

「いつやるの？」

「明日だよ。先週言ってただろうが。……って、寝てたんだっただな。」

フーン、明日か……。

「生地は？」

「は？」

「だから、エプロンの生地だよ。」

僕の訊いた意味がいまいち分かっていないのか、庄一が、

「それって先月に頼んだ奴じゃないのか？確か二週間前に渡されたはずだろう？」

と言ってきた。え？僕、初耳だよ？

驚いた僕の顔を見て、庄一は顔を引きつらせて訊いてきた。

「な、なあ。連。お前もしかして……注文してないのか？」

僕は記憶を探りながら言った。

「どうなんだろう？寝ていたから、記憶が全くと言っていいほどないんだよ。」

「じゃ、先生に訊きに行こうぜ。」

そう提案してきたので、僕は頷いて、放課後に家庭科の先生に訊きに行くことにした。

放課後。僕と庄一は職員室に行き、家庭科の先生のところへ向かった。

「あら？岡田君と……あ！池田君！あなた、明日の実習どうする気ですか！？」

僕たちが先生のところに行って訊こうとしたら、先に先生から言われた。やっぱり買ってなかったんだ。

「あの、先生？僕……やっぱり買っていないかったですか？」

「そうですよ！あなたただ何も注文しなかったもので、どうするのか訊きたかったのですけど、いつも寝ているから訊きづらかったですよ！？」

「すみません……」

僕がそう言うと先生が、このままだと明日の実習に参加できないけど、どうする気？と訊いてきた。なので、

「今日中に自分で買ってきます。」

と言って職員室を後にした。

職員室を出てしばらく歩いていたら、庄一が訊いてきた。

「これからどうするんだ？」

僕は考えてから、

「何言ってるの？買ってくるんだよ、材料。」

と言った。その言葉に庄一は呆れていたけど、「ま、頑張れよ。」

と言って校門前で別れた。

家に帰ってから、僕は自分の財布を持って商店街に向かった。今

日は食料の買い出しではなくエプロンづくりの材料を買いに来たので、いつもの道を行かなかった。

商店街に行く間、僕はエプロンに必要な材料を頭の中で思い出していた。でも、それよりどんなエプロンを作ろうか考えないといけないと思ったので、材料を思い出すのを後回しにして、デザインを考えていった。

商店街に着いて、僕は色々な生地を売っている店に入った。

「いらっしやい。おお！連か！？久し振りだな、いつ以来だ？」

「小学三年生以来じゃないかな？姉さんと一緒に来たのが最後だった気がする。」

「そうか。……ところで、渚のやつ女優やっているんだって？ドラマを見たけど、あいつの演技すごかった。すっかりファンになったぜ。」

「そう。……ところで、エプロンを作る材料を買いに来たんだけど。」

僕がそう言うと、店の人が「そうかそうか。でも、なぜ今更？」と訊いてきた。

家庭科の実習で作るから、と言ったら納得してくれた。

「さて、どれにするんだ？」

そう言って見せてくれたものは、ほとんどが同じ色だった。

「どうして同じ色しかないの？」

と僕が訊くと、

「色はお前さんの好み。ただ、材質がどれも違うんだ。ちなみに、エプロンを作りたいならこれがおススメだ。」

と言って一つの生地を前に出してきた。僕はそういうのにこだわりのないため、その店員さんが言ったものを買った。寸法は、店の人がやってくれた。その分のお金はかからず、生地代だけで済んだ。ふう。

次に、裁縫道具などは家にあるので、僕はボタンを買いことにした。生地を売っている店の隣だから、そんなに手間はかからなかつ

た。

「いらっしゃ・・・連！久しぶり！元気にしてた？」

「あ。千亜妃さん。お久し振りです。一応元気にやっています。」

「最近渚から連絡あるの？」

「いえ。その代わりにDVDが送られてきます。サイン入りで。」

「そうなんだ。」

僕がボタン屋に入ったら、店員さんである遠藤千亜妃さんが応じてくれた。

遠藤千亜妃さんは、このボタン屋の一人娘で姉さんと同期。小・中と同じで、高校も一緒になるのかと思ったら、姉さんが女優になってしまったことに驚いていた一人だ。現在は高校生三年生で、彼氏なし。高校を卒業したら、家の仕事を手伝うとか。

明るくていい人なんだけど、どうして彼氏がないのか本当に不思議。前に訊いたら、私より渚の方が目立ってたから、と苦笑しながら言っていたっけ。

「で？何の用なの？」

「あ、家庭科の実習でエプロンづくりをするのに材料を注文するのを忘れたので・・・」

「だからこうやって買い物をしていると？」

「はい。」

僕がそう言うと、千亜妃さんが笑いながらこう言ってきた。

「やっぱりあなた達、姉弟ね。・・・分かった。どれがいいの？」

そう言ってショーケースを見せてきたので、僕は何個か選んで買った。

帰り際、千亜妃さんに「今度来たら渚の思い出話してあげるわよ！」と言われた。その時の彼女がともうれしそうに見えた。

次の日、実習の時間の少し前。

「え？マジで買ってきたのか？」

「うん。おかげで四千円くらい消えたよ。また待つしかないか。」

「よ、四千……って、待つってどういうことだ？」

「あ、気にしないで。こっちの話だから。」

そう庄一に言ったけど、まだ気になっていたようだった。

そして、授業が始まった。

先生は、僕が本当に買ってきたことに驚き、それから注意事項とやり方を教えていたけど、僕はそれを無視していた。だって、デザインを描いていたから。

先生が、「それではみなさん始めてください。」と言った時、ちようど僕のデザインが完成。すぐさま僕も作り始めた。

他の人たちが縫い合わせに苦戦している中、僕は生地をデザイン通りに切っていく、エプロンのパーツを作っていた。

それを見ていた先生がこっちへ来て、

「池田君。君、そこから作ってるの？」

と訊いてきた。それに対して僕は、

「あとは、生地を切る前に糸を通しておいた針を使って縫うだけです。あ、ボタン留めもやらなきゃ。……というわけで、しばらく話しかけないでください。」

と言って、エプロンづくりを再開させた。ただ、僕のことを見ていたほかの生徒は、「あいつ、自分で買ってきたんだろ？」「それなのに俺達より早くねえか？」「すごい。まるでどこかの仕立て屋さんみたい。」と口々に言っていた。その言葉は聞こえていても、僕は黙々と縫っていた。

先生は僕の雰囲気の話しかけられず——というよりその場にいらること自体耐えられなかったの——その場を離れ、他の生徒の出来栄えを見に行った。

そして授業が終わる五分前に、

「大体の仮縫いは終わったね。次はミシンで……って、もう終わり？ 久し振りに裁縫したからついでに入っちゃったな。」

と、僕は背伸びをしながら言った。ふう。いい気分転換にはなった

ね。

しばらく背伸びをしていたら、ふと周りが僕を見ていることに気が付いた。

「あれ？どうしたの？」

そう僕が訊くと、みんなが作業を止めて僕に寄ってきた。

「な、なにになに！？」

そう言ってる僕を囲んだ後みんなが一斉に、

「「次の家庭科の授業でどうやればうまくなるのか教えて！！」」
と言ってきた。……先生も含めて。

あの、先生？あなた、教師ですよ？どうしてあなたが生徒に教えを乞うているのですか？

そう疑問に思いながら、また、どうしてこうなったか知らないまま、僕は頷いてしまった。

これ、自分のやつ作りながらできるかな？正直に、そう思った。

昼休み。僕と庄一はいつものように弁当を食べていた。そして、当然さっきのことを話していた。

「お前、すげえじゃないか！あの短時間にどうやれば、あそこまで出来るんだ！？」

「庄一、さっきからその話題ばかりだよ。他にないの？」

弁当を食べながらそう言ったら、

「お前がどうしてあそこまで出来るのか、聴くまで話す。」

真顔で庄一にそう言われた。僕にとってそれは、もはや罰ゲームでしかない。

仕方がないので、僕は正直に話すことにした。

「いい？これは他の人には喋らないでね。絶対だよ？」

「分かった。」

「僕があそこまで裁縫ができるのは、家でやってたからなんだ。といっても、最近縫物なんてやってなかったから、腕が落ちたか心配だったんだけど。」

「どうして縫物なんてするんだ？それなら母親がやるんじゃないのか？」

「……………そうなんだけどね。ちょっと訳有りで自分でやってたんだよ。雑巾とか縫ったことあるし、服のほつれとかやったことあるし、カーテンの穴が空いてる所を縫ったりしたし。」

そんなことを言ったら、庄一がポカンとしていた。そんなに驚くようなこと、言ったかな？

その後しばらくは互いに無言で弁当を食べていたけど、庄一がさっきの話の感想を今更ながらに言った。

「……………連ってすごいな。」

その言葉を、僕は苦笑して受け流した。

過去編（3）（前書き）

四万PV突破しました！！ありがとうございます！！

過去編(3)

「……………って、感じかな？ねえ庄一。」

「そうだな。あんときのお前、結構クールだったな。」

「緊張してたんだよ。」

僕と庄一の話が一区切りしたので、皆の方を見た。そしたら、大半の人が呆れており、花音さんとレミリアさんが尊敬というかそういう類の眼差しを向けていた。

最初に口を開いたのは、姉さんだった。

「連。あなたまだあの癖抜けてなかったの？」

「へ？あ、えーっと……………」

姉さんに言われたことに僕が焦っているのを見て、レイジニアさんが訊いてきた。

「ねえレン。あなたのお姉さんが言っていた『あの癖』って何なの？」

それに対して、僕は視線を宙にさまよわせながら、

「あははは。な、何のことだろうね？」

とはぐらかそうとしたら、姉さんが暴露した。

「こいつは知っている人、もしくは仲がいい奴以外に対して結構クールになるんだ。入学式からしばらくの間はな。だから、最初のほうは基本的に誰とも喋らないんだ。」

「ちょ、ちよつと姉さん!？」

「いいだろ？どうせばれるんだから。」

あなたのせいでバレたんですけどね。そう思ったけど、言う気にはなれなかった。それに、周りから「へえー。やっぱり連が言ったとおりだったのか。」「…驚き。」「そんな人いるんだね。」「不思議だね。」「連って、色々ところで苦労してるのね。」「私の時もそうだったのでしょうか？」「私が初めて会った時は、そんな感じしなかったわ。」と言われていたので、諦めるしかなかった。

すると、唯一なにも言わなかった董さんが僕に訊いてきた。

「あの、結局家庭科の授業はどうなったのですか？」

その言葉に僕と庄一は顔を見合わせ、庄一が答えた。

「どうもこうもねえよ。翌週、授業が始まる前にこいつ一人でやりやがってよ、先生が話してる間にミシンで縫い合わせちゃったんだ。先生の話聴きながらミシンの音を聞くって、結構シユールだったな。その後は、説明終了して十分くらいか？それで自分のエプロン作り終わらせてよ。さっさと先生に提出して、おれたちの進行状況とか見て、アドバイスしてたよな？」

そこで僕に振る？そう思ったけど、僕は頷きながら答えた。

「うん。ある程度みんなが出来てきて、僕の仕事終わりがなって思った矢先に、先生が『教えてくれない？』とか言ってきて、結局先生にも教えてたんだよね。」

「あれ？確か次の週のエプロンづくりよ、お前先生やってなかったか？」

「あゝ、そうだったね。前日に職員室に呼ばれてさ、『明日の実習、先生やってくれない？』って言われたんだよ。」

「ふゝん。」

とちよつとした裏話までしていたら、みんなが驚いていた。ま、無理もないかな？

ややあ、って感じで驚きから戻ってきた姉さんがこめかみに手を当てながら、

「・・・連に家を任せた結果がこれか。姉としては嬉しいが、何だろう、複雑な感じがする。」

と言った。みると、他の人もそんな感じだった。ただ、レミリアさんだけが「素敵です！！」と言っていた。褒められるのは悪い気がしないけどね。

しばらくみんな（僕と庄一とレミリアさん以外）は唸っていたけど、気を取り直した風にレイジニアさんが訊いてきた。

「レンとシヨウイチの出会いはいわかったわ。次は…ケイとの出会い

かしら？」

その言葉に待ったをかけたのは、庄一だった。

「いや、その前にさらに面白い思ひ出話があるぞ。」

その言葉に、僕は嫌な予感がした。え？もしかして、あの事言う気じゃないよね？

庄一の言葉に興味を持ったのか、久美さんが訊いてきた。

「それ、面白い？」

それを待ってましたと言わんばかりに庄一のテンションが上がり、

「ああ！結構面白いぜ！！」

と自らハードルを上げた。そんなこと言って、大丈夫なんだろうか？と僕は心配になった。

そんな僕の心配をよそに庄一が言おうとしたら、

「待ってくださいませんか？」

「ん？どうしたんだ？レミリアさん。」

レミリアさんが待ったをかけた。

「その前に訊きたいことがあるんですけど……遠藤千亜妃さんって誰ですか？」

その質問をするレミリアさんは、なぜか久実さん達と同じ雰囲気を持っていた。……彼女はどうしたのだろうか？

質問の意図がわからなかったけど、とりあえず僕は話した。

「その人は、商店街にあるボタン屋さんの一人娘だよ。姉さんと同じ学校に通っていた人で、僕は買い物によく行くから、知り合いみたいな人だよ。」

「本当にそれだけなんですか……？」

まだ何か疑っている……。彼女は何をそんなに気にしてるんだろうか？

僕はなおも不思議に思っている彼女を無視することにして、こう言った。

「そういえば、庄一って料理そんなにできないよね。」

「何言ってやがる。俺は人並みに……………」

「それ本当なのかしら、連？」

庄一が反論しようとしたら、久美さんが食いついてきた。それに答える様に、圭が言った。

「……それは本当。家庭科実習の時、調味料を間違ったりしていた。」

「圭!! それは言うんじゃない!!」

圭が言ったことを、庄一が必死になかったことにしようとしていたので、僕たちは笑った。

それが堪えたのか、庄一がいきなり、

「そういう連だって、人のこと言えないだろ!」
と言った。

「あったつけ？」

「あつたよ!! お前が中一の時、遅刻してきた時あったろ? その時の理由、なんて言ったかた憶えてるか!？」

「……なんだったつけ？」

「『すみません。料理作るので見逃してくださいませんか?』だよ!!」

「……ああ!! 思い出した!! そして忘れたい!!!」

なんて言っていたら、レイジニアさんが止めてくれた。

「そこまでしたらどう? 今度はケイとの出会い話をしてくれないかしら?」

そう言われて僕たちは口論を止めたが、ふと思い出した。

「そういや、連の料理上手がどうして解ったのかって話、したっけ?」

「していないよ。裁縫ができる話はしたけど。」

「掃除はお前ひとりでピカピカにするもんなあ。他の奴らは雑用だろう?」

「何人かには手伝ってもらったよ。」

最初の庄一が言った言葉が気になったのか、

「あの、連君が料理上手だと分かった話って、調理実習の時の話

ですか？」

堇さんがオズオズと訊いてきた。

「そうだな。あの時から連の腕が光ってたよな。」

「特技だけだね。」

そう言って、僕たちはあの時のことを話し始めた。

過去編（４）（前書き）

調理実習・前篇ですかね、たぶん。・・・あ。すみません。
遅れました。

過去編（４）

六月下旬のある日（調理実習の日）

「そーいやよ。」

「なに？」

今は昼食の時間。僕と庄一は、いつもと変わらず二人で食べていた。その時の話題のほとんどが、好きな女子の話（おもに庄一）だったので、あまり盛り上がらなかった。だって、僕はそれどころじゃなかったんだもん。

おもむろに切り出した庄一の言葉に、一応僕は反応した。でも、また好きな人の話でもするのだろうと予想をしていた。けど、今回は違っていた。

「明日、調理実習なんだよな。」
ピクッ。

「ん？どうした、連。箸が止まってるぞ？」

その言葉に僕は焦りながら、

「え。い、いや、なんでもないよ。」

と答えた。それに何かピーンと来たのか、

「お前、また先生の話聴いてなかったろ？」

と庄一が言った。あ、これは隠せないね。そう思ったので、僕は正直に答えることにした。

「うん。寝ていた「威張るな。」……すみません。」

僕の言葉にため息をつく庄一。ひょっとしなくても、呆れられているね、これ。

「……お前、どうしてそんなに寝てるんだよ？テスト大丈夫か？」

ため息をついた後、庄一はそーいいいながら弁当を食べていた。それ

に対して、僕は気にしていない感じで——というより本当に気にしていないんだけど——言った。

「何とかなるでしょ？ 赤点取らなきゃいいだけなんだから。……
……それよりさ、明日の調理実習でつくる料理ってなんなの？」
それを聴いた庄一は、「分かつてはいたけどな。」と言ってから、
教えてくれた。

「明日は親子丼だよ。班は四人または三人なんだけど、お前ひとりだけ寝ていたから、」

「あ、一人で作れてこと？」

「そういうこと。裁縫が得意みたいだが、料理を作るのはどうなんだ？」

庄一が興味津々という風に訊いてきたので、僕は「明日になったら教えるよ。」と言って誤魔化した。

あゝあ。今度は食材買ってこないとなあ。

放課後になって、僕は職員室に来ていた。どうしてなのかっていうと、家庭科の先生が「池田君。放課後職員室へ来てね。」的なことを担任の先生に言ったから。僕としてはさっさと家に帰って明日の買い物をして、家のことをさっさとやりたいんだけどなあ。

「先生、明日のことでしたら一人でやりますので。それと、明日使う食材を買ってきたいので、帰っていいですか？」

「え？ あ、うん。分かつてればいいの。じゃあ明日ね。」

先生が言おうとしたことを全部先回りして言ったのに驚いたのか、あっさり引いてくれた。分かる先生で助かるね。そう思いながら職員室を後にしたら、

「よっ。一緒に帰ろうぜ。」

庄一が待っていた。

どうしてなのかわからなかったけど、僕は「いいよ。」と言って、一緒に帰った。

いつもなら校門前で別れるんだけど、今日はなぜか庄一が僕に
てきた。

「どうしてついてきてるの？方向違うでしょ？」

不思議に思ったので、僕は隣を歩いている庄一に訊いた。そしたら
庄一が、

「たまには遠回りもいいと思ってな。」

と、あまり答えにもなっていない答えを返してきた。

その答えを聴いた僕は、何かあるなと思い試してみることにした。
「家に入れないからね。」

突然僕がそう言ったのに庄一は驚いたけど、

「……分かったよ。」

少し間をおいて返事をした。ふむ。これは僕の家の中以外にも、何
か目的があると見た。となると次に試せそうなものは……

少し考えてから、僕は庄一にこう言った。

「僕がどこで買い物してるのか、知りたいの？」

その言葉に、庄一は少し反応した。それを見て、僕は確信した。

やっぱり。明日の調理実習に使う食材を、どうやって買うのかを
見に来たんだ。でも、どうしてそんなことしようとしたんだろう？
なんて考えてると、

「……連。お前って勘がいいのか？」

「え？」

庄一に突然そういわれて、僕は歩みを止めた。

「どうしてそう思うの？」

念のために訊くと、

「だってさっきからよ、俺がお前と一緒に方向へ帰ろうとしてる目
的を、全部言い当ててるんだぜ？しかもピンポイント。それで勘が
鋭いんじゃないかったら、お前の頭どうなってるんだ？」

庄一がそう言った。そうかな。特に気にしたことなかった。

今更な感じがしたので、僕はどうかたえようか考え、

「勘が鋭いってわけじゃないよ。ただ、前とは違う行動を人がとる場合、そこには何か理由があるって父さんたちが言ってたから。あと、その場合は大抵、ほかの人が関わってくるともね。」
正直に答えることにした。

その答えを聞いた庄一は口を開けたまま、その場を動かなかった。なので、僕は庄一に戻ってくるように言った。

戻ってきた庄一が、僕に向かって疲れた感じで訊いてきた。

「お前の両親って、大学の先生か？しかも、心理学の。」
それに対して僕は首を横に振りながら、

「違うよ。ただのサラリーマンだよ。二人とも、ね。」

と正直に言った。人間、正直がいいよね。……僕はたまに嘘をつくけどね。

それなのに、庄一は信じてくれなかった。

「いや、絶対に違うだろ。」

結局僕の家に着いても、庄一は信じてくれなかった。

僕の家に着いたので、庄一を玄関先に待たせ、僕は自分の部屋へ直行し、財布を持って下へ降り、買い物かごをもつ前に洗濯物をこんで、買い物かごを持って家を出た。

「買い物行くんだな？」

家から出てきた僕を見て、庄一はカバンを頭のほうへ持ってきたが言った。僕は鍵を閉めた後、庄一と一緒に商店街へ向かった。

その道中。二人で歩いていると、ふと庄一がこんなことを言い出した。

「連ってさ、結構有名人なんだな。」

「へ？」

僕は、庄一がどうしてそんなことを言うのか分からなかったので、訊いてみた。

「どうしてそう思うの？」

その質問に答えづらそうにしながらも、

「待ってる間、っていつても、そんなに待っていたわけではないけどよ。通りすがりの人に訊いてみたんだ。『この家の息子さんって、普段どんな子供なんですか。』って。そしたら、返ってきたほとんどの答えが、『すごいまじめで、いい人で、優しくて、頼りがいのある人。』だってよ。お前、この周辺の人たちからすごい人気だぜ。」

庄一はちゃんと答えてくれた。へー、そうなんだ……。

「庄一。」

「なんだ？」

「何人くらいに訊いたの、それ？」

「確か……三人くらいかな？」

僕達は、それから商店街に着くまで一言も喋らなかった。確か親子丼に使う食材は……。

そして、僕たちは商店街に着いた。着いたときに、庄一はこう言った。

「俺、こっち側にほとんど来ないからな。こんなに人だからができるなんて知らなかったぜ。」

それに僕は苦笑しながら、

「庄一の方には商店街があるの？」

と訊いた。それに庄一は「当たり前だ。」と言ってさらに続けた。

「ここだけに商店街があると思うなよ。俺たちの方にもあるぞ。・

・。つっても、俺はあまり行かないから詳しくは知らん。」

ふーん、と思いながら僕は、とりあえず最初に八百屋へ向かうことにした。

「いらっしやい！何にする、連。って、おい。友達なんて初めてじゃないか？」

八百屋のおじさんに、来て早々そんなことを言われた。間違っちゃ

いないし事実だから、僕はそれには何も言わずに、

「玉ねぎ一個と、キャベツ半玉。それと……」

今日買いに来た野菜を羅列していった。それを聴きながら、おじさんは僕が言った野菜を袋に入れていった。

「はいよ。合計五百四十三円。今回はマケないぞ。」

「えゝケチゝ。ま、分かったよ。はい六百円。……これ、僕が貯めてたお金なのに。」

「そんな情に訴えかける作戦でも駄目だ。……ほらよ、お釣り。」

「チェ。……また来るね！」

「ありがとよ！」

庄一は、この光景をじっと見ていた。と同時に、連は普段からこうやって買い物をしているのかと、思った。

肉屋にて。

「よう連！今日はどんな肉買うんだ？あれか、ついにステーキ用の肉か？」

「最近それ熱心に勧めるけど、買えないからね？……今日は親子丼に使う鶏肉買いに来たんだよ。えゝつと、一人前ってどれくらいだっけ？」

「ちっ。まあいいさ。それより鶏肉だったな。百グラムくらいじゃないか？一人前は。」

「多すぎだよ。本職がそんなこと言っているの？」

「冗談だよ。五十グラムありや、何とかなるんじゃないか？」

「じゃ、それくらいで。」

「七十八円くらいだな。」

「ハイ百円。」

「ほれ、お釣り。毎度ありゝ。」

という感じで、買い物が終わった。それを見ている間庄一は、終始考え事をしているようで、黙ったままだった。何を考えているのかは全く分からなかった。

買い物が終わったら、庄一は「なんとなく分かったわ。」と言って帰ってしまった。何を考えたのか不思議だったけど、僕は家に帰って夕食の準備をしないといけないと思い、急いで家に帰った。あ、家計簿もつけなきゃ。

家に帰った僕は、買った食材を袋のまま冷蔵庫にしまい、今日の夕食の準備をした。最近の両親は、いつも七時から九時までの間に帰ってくる。だから、洗濯物をするのに支障をきたさないというよりは、遅くまで待つ必要がない。

夕食を作り、僕の方だけテーブルに寄せ、一人で食べた。それから食器を片づけ、自室へ戻り明日の準備をして、下へ降りて風呂を沸かしていたら、両親が帰ってきた。

夕食をテーブルに並べ、二人が食べている間に僕は、明日の朝食と昼食の下準備を始めた。けど、昼食の時は一人分減らした。だって、調理実習で食べるから。

両親が食べ終え風呂に入ってる間に下準備が完了し、その片づけをやった。それから風呂に入り、自室に戻って寝る前に、両親を強制的に自室へ行かせた。そして、寝た。

過去編（5）（前書き）

実習編・後編です。あと、五万PVを突破いたしました！

過去編（5）

次の日の調理実習。

「では、これから親子丼を作りたいと思います。各班自分たちで決めた役割とスケジュール通りやってください。」

そう言って、先生は生徒の見回りをしました。庄一は男子の四人グループにいて、ワイワイやりながら作っていた。僕はというと、授業中に寝ていたので完全に一人。でも、さびしいと感じていない。みんなやっているから。

さてやりますか。そう思って、僕は洗った玉ねぎと包丁を手に持った。

庄一は、班の人たちと協力して作っている中で連について考えていた。その理由は、昨日の商店街での買い物を見たからだ。

あいつと店の人との距離が近かったことから、あいつはあそこでずっと買い物をしていたと想像できる。それに、値切りを常習犯的にやっていることもかんがみると、どうも主夫みたいなことを家でやっているのではないかとも思えてくる。

その時、包丁がタタタタン！とすごい速さで切っている音が聴こえた。

他の人たちも「誰がやっているんだ？」と思いながら、その音の発信者を見た。そこにいたのは・・・

とりあえず玉ねぎを四分の一に切ったから、残りの四分の三はラップに包んでつと。僕は、使わない玉ねぎをラップに包んでから、使う分の玉ねぎを切っていった。

それが終わったら、すぐさま鶏肉を食べやすい大きさに切って、玉ねぎとは別なところに置いた。そのあとは、家に余っていたかまぼこを三枚くらい切り取って、玉ねぎの近くに置いた。

玉ねぎを切っているときから周囲の視線が集まっている気がするけど、僕はそんなことを気にする必要性を感じなかったので、無視して次の作業へと取り掛かった。

調理実習が始まってから十五分くらいが経った時、僕は調理と片づけを終わらせていた。だって、使わなくなった調理器具を、そのままにしておく必要ないでしょ？それに、家で作る方がもっとハードだし。

僕が作り終わった時、他の人たちは意識を取り戻したように自分たちの作業を再開させた。先生もどこかぼけっとしていたけど、すぐさま僕のところに来た。

そして、僕が食べようとしたら先生がこう言ってきた。

「早いわね、池田君。しかも……見た目もきれいに出来てるね。味はどうなのかしら？」

味見がしたいのだろうか？そう思いながら、僕は先生に「食べますか？」と言って箸を渡した。そしたら先生は、「本当に!？」と言ったと同時に渡した箸を持っていた。はやい……。

そして先生は、僕が作った親子丼を一口食べた。今更だけど、最近両親以外での料理のコメントって、聴いた覚えがなかったなあ。なんて思っていたら、先生が箸を落とした。

僕は先生が落とした箸を拾って「どうですか？」と訊いたら、先生が泣いていた。しかも、割と本気で泣いていた。泣きながら、こんなことを言っていた。

「か、各自……作り終わって……食べ終わって……片づけ終わったら……教室に戻ってください!! うわあああん!!」

そう言って、先生は調理室を出て行ってしまった。あの、先生？料理の味の感想は？ていうか、責任者であるあなたが、どこかへ行って大丈夫なんですか？と色々と言いたかったことはあったけど、先生がいなくなってしまったので、僕は自分で作った料理を一人で食べた。食べながら、まだ味付けの微調整ができないなあ、と思った。

食べ終わって食器も片づけたので、僕はさっさと教室に戻ろうかなと思ったなら、普段絶対に喋らない女子のグループが僕のところに来た。

何か用なのかな？と思っていたら、一人が手を合わせてこう言ってきた。

「池田君！ちよと手伝ってくれないかな！？」

は？なんて内心で思って他の人たちを見てみたら、他の人たちも必至みたいだった。

何かあったのだろうか？そう思った僕は、どうして僕に頼むか訊いてみた。

「どうして僕に？」

「先生がどこかへ行っちゃったから、どうやればうまくできるのか教えてもらいたくて。ね？」

そうなんだ。それで僕に教えてもらいたいと・・・・・・・・・・なるほどね。

僕は心の中でそう思い、おとなしく頷いた。それを見た女子は「やったー！ありがとう！！」と言って僕の両手を握ってブンブン振った。い、痛い。痛いから。

それから、僕はその女子のグループに混ざってというか僕が教えてあげた。

料理ができた時、その女子のグループからお礼を言われ、一緒に食べない？と誘われたけど、僕は丁重に断って教室に戻ろうとした。でも、みんなそれを許してくれなかった。

結局。残りのグループ全部に教えて、みんな食べている間に僕は教室へ戻ることにした。

教室に戻って一人で机に伏していたら、担任の先生が来た。授業はどうしたんですか？

僕以外の誰もいないことを確認して、先生は僕の席に近づいてからこう訊いてきた。

「さっき家庭科の先生が職員室へ戻ってきてな、『授業はどうしたんですか？』って訊いたら、『何も訊かないでください。あと、しばらく学校をお休みします。』と言って荷物を持って帰ってしまった。そこで、暇だった俺が原因の解明をしなきゃいけないんだが………何か知ってるか？」

「先生。どうして僕なんですか？」

僕が顔をあげて訊いたら、先生はあっさりと、

「教室にいたのがお前だけだからだ。」

と言いつつ。つまり、調理実習室へはいっていないんですね。

僕はありのまま言おうか悩んだけど、それを言うと家庭科の先生が可哀想なので、

「急用でも出来たんじゃないですか？」

僕は誤魔化すことにした。

それを聴いた先生は、「ふーん。」と言って教室を出て行った。

それから、授業が終わる五分前の間に、全員戻ってきた。鍵は、ほかの先生が閉めるらしい。

授業が終わって昼になった。僕は昼食をさっきの親子丼としていたので、弁当を出さずに机で寝ていた。そうしていたら、庄一がいつものように弁当を持ってきて、いつものように食べていた。そんなによく食べれるね、庄一。

庄一が食べているのを、ぼくは無視して机に伏していた。いや、だらけるって最高だね。

そうやっていたら、庄一が箸をとめて訊いてきた。

「連。家庭科の先生が突然いなくなっちゃったが、何があったんだ？ お前の親子丼を一口食べた後。」

僕も何があったのか詳しく知らなかったので、

「知らなくい。」

と、机に伏しながら言った。

ただ、予想はつく。おそらく、先生は僕が作った料理を食べて、

何かしらのショックを受けたんだと思う。あまりにも衝撃的だったから、立ち直るまでは学校に来ないのだろうとも予想はつく。

「お前の料理、食べてみたいぜ。」

先生がどうしていきなり帰ってしまったのか、の予想をしていたら、庄一がいきなりそんなことを言ってきたので、

「明日おかずの交換でもする？」

と僕は言った。

過去編（6）（前書き）

これは一応本編の話としています。

過去編(6)

「……………って感じだったな。」

「そうだね。」

初めての調理実習を語り、僕と庄一が背伸びをしていたら、元が言った。

「そういえば家庭科の授業、しばらく自習だったよね。確か、一ヶ月くらい。」

「俺達のクラスは連が教えてくれたぜ。といっても、五大栄養素とか、裁縫の基本とかだけだな。」

そう庄一が言ったから、圭を除いたみんなが驚いた。……………そんなに驚くようなことかな？

だけど、それも一瞬のこと。すぐさま姉さんたち女性陣が、矢継ぎ早に訊いてきた。

「おい連！それが初めて私たち以外に料理を食べさせた時なのか？」

「レン！それからその女子グループとはどうなったのですか！？」

「それから先生どうなったのよ！」

「連君の教え方どうだったのですか！？」

「シヨウイチの班はどうなったのかしら？」

「教えてもらったみんなの味はどうだったの？」

あまりにも一気に訊いてきたので、僕と庄一は慌てて制止させた。

「ストップ！落ち着いて、みんな！！！」

「そうだぜ！いっぺんに喋るな！」

その女性陣の質問に対し、圭はまとめて答えた。

「……渚さんの質問の答えは知らない。レミリアさんの質問は、あれから前より話す程度の仲。久美さんの質問は、一か月後学校に来て実習があるたびに先生役を連に任せるようになった。堇さんの質問は、連の教え方は割とわかりやすく、家庭科の平均点が六点上がったらしい。レイジニアさんの質問は、庄一が皿洗いくらいしかや

らないで終了。花音さんの質問は、仕上がり上々の上に、美味しかったらしい。」

あの、圭？どうしてさっきの姉さん以外の質問をすべて答えられたの？あと、どうして花音さんの質問に答えられることができたの？僕、知らなかったよ。

なんて思っていたら、久美さんが気を取り直してこう言った。

「それはそうと、圭との出会いはどうなったの？」

その言葉を受けても、僕と庄一の話はとどまることは知らず、

「そういや、あれ凄かったよな。ほら体育祭の時。」

「ああ！なぜか僕がパンを作るようになった話ね！！あの時はびっくりしたなあ。職員室に呼ばれて、『池田君。体育祭の時に使うパンを、パン屋さんと一緒に作ってくれない？』って言われたんだよね。」

「そうだったな。俺も、お前から話を聴かなきゃ知らなかったからな。」

「あれは庄一がすごかったでしょ？学園祭での荒らし。」

「俺、そんなことしたっけか？」

「僕に自慢げに言ってきたよね？『学祭の景品付きの出店全部を回って、上位の景品全部獲ってきたんぜ！』って。」

「あゝ。そんなこともあったな。」

「他にはあったっけ？」

「あとは・・・大掃除をするときは必ずお前が指揮を執っていたとか、危うく生徒会に入りそうになったとか・・・。」

「生徒会の話は、勝手に推薦されたんだったよね。庄一が。」

「お前だって推薦されてたじゃないか。他には・・・あ。あれはどうだ？」

「あれ？」

「離任式でなぜか料理を作る羽目になっただろ！！」

「ああ！あれは大変だったよ。僕、全く面識ないのにつくらされたんだから。あと、なぜか食べた人たちが満足そうだったし。」

そうやって話していたら、ついに久美さんがキレた。

「いい加減に圭との出会いについて話さないよ!!」

その言葉に僕たちは委縮し、素直に「……………ハイ。」と言った。その言葉を受けて圭が、

「…ようやく俺の出番。」

とつぶやいた。その言葉には、なんだか懐かしむような感じが含まれていた。

「じゃ、始めっか。俺達と圭の出会いの話を。」

過去編（7）

中学二年生になった四月のある日（始業式が終わった数日後）

僕たちが晴れて進級して、中学二年生になった四月。僕と正一は、クラス分けをしたのにも拘らず同じクラスだった。しかも、ほかに何人かいた。

始業式が終わった次の日。僕たちは自己紹介をしたんだけど、同じクラスになった中島元君がいなかった。理由は、春休みに入る前に自身が起こした暴走事件。詳しいことはわからないけど、きっと何かしらの事情があったんだと思った。

それで自己紹介を聴いてちょっとだけ浮いてそんな人を見つけた。それが、圭だ。なんでそう思ったのかというと、

「……木村圭。よろしく。」

たったこれだけ。何を言っているのか聞き取れたけど、これは明らかに誰とも話さなそうな人だと思った。

自己紹介が終わって、先生の話を聴いて終わり。こんな日が来るたびに思うのが、毎日がこんなのだったらいいのになあ、だ。

帰宅の準備をしていたら、庄一が僕に話しかけてきた。

「一緒に帰ろうぜ。」

「校門前まででしょ？」

「そうだけだな。」

帰る準備ができたので、僕は庄一と一緒に、校門前まで一緒に帰ることにした。ただその時には、無口な彼はいなかった。

それから、いつものように授業が始まってみんな打ち解けてきたある日。

僕は何となく木村君に話しかけてみることにした。

「やあ。」

「……。」

話しかけたのに無言の対応。一瞬めげそうになったけど、なんとか耐えて続行。

「今日は天気がいいね、木村君。」

「…今日は昼ごろから雨が降る。洗濯物に注意。」

「なんだって!!!?」

「…ウソ。」

な、なんだ。嘘か。びっくりしたあゝ。本当に雨が降るのかと――

「…ただし、この町には本当に雨が降る。」

「それは困るよ!!!?」

嘘だと言えば本当。木村君は無口そうに見えて、本当は話し上手なのかもしれない。

なんて思っていたら、庄一が僕たちに近づいてきた。

「お、連に木村か。珍しいっちゃ、珍しいかな?」

「庄一。何か用?」

「…岡田庄一。父親が、魔法などが飛び交う中、一般人として無類の強靱さを発揮して活躍しているプロの野球選手。母親は内職をしながら、家事に勤しんでいる。自身の身体能力も高く、中学生とはいえ一般の大人相手なら、三人同時に勝負を挑まれても勝利できる。夢は父と同じだが、最近は揺らいでいるらしい。……なんでもない。」

庄一の声に反応したら、木村君が庄一の詳しい情報を話してくれた。最後の何でもないに対しては、

「「遅すぎる。」」

二人でツツコンだ。でも、木村君は何の反応も示してくれなかった。何か言おうとしたけど授業が始まりそうだったので、自分たちの席に戻った。

……それにしても、どうして木村君は無口になっているんだろう?

昼食の時間。本当に雨が降っていた。あゝ、洗濯物が。

僕と庄一は去年から変わらず二人で食べようとしたけど、なんとなく木村君のことが気になったので木村君を探してみたら、教室にはいなかった。

結局二人で食べたけど、その時に木村君がどこで食べているのか話していた。

「友達のところかな？」

「いや、違うだろ。俺の友達で木村と同じクラスだったやつがいるんだが、そいつが言うには、あいつは友達とかそういうのに興味がないのか、いつも一人だったってよ。」

「そうなの？じゃ、どこか別の場所で食べているのかな？」

「そうだろうが、どこだ？それは。」

「うゝん。」

それで話がいったん終わり、僕たちは弁当を食べることだけ集中した。そしたら、木村君が戻ってきて自分の席で弁当を食べていた。

それを見た僕たちは、木村君の席の近くの空いてる席に勝手に座り、残っていた弁当をそこで食べ始めた。

僕らの弁当を見た木村君は、

「…池田の料理はおいしい。というわけで、これとそれ、交換して。」

と言ってきた。僕は不思議に思い、

「いいけど。それ、どこで聴いたの？」

って訊いてみたけど、「ありがとう。」と言って僕の話を見無視してトレード開始。それを見た庄一が、

「木村。連がお人好しだから良かったもんだろ。人の話を聴かないで勝手に取るのはどうかと思うぜ。」

と言った。そしたら、木村君が教えてくれた。

「…秘密。」

……答えになっていなかったけど。

ていうか、木村君？話してくれないの？すごい気になるんだけど。なんて思っていたら、木村君が、交換した僕のおかずを食べた。そしてしばしの沈黙の後、

「……本当においしい!!」

と何やら感動していた。その声が結構大きかったので、みんなが僕たちのことを見てきた。うーん、なんだか恥ずかしいなあ。そう僕が思っていると、庄一が苛立っていたのかこんなことを言った。

「木村。まずは静かにしろ。次に、どうしてそんな行動をしたのかの説明しろ。」

庄一の声が聴いたことがなかったので、僕はちよつとビビった。でも木村君は、

「…噂の確認のため。」

座りながらそう言った。噂になっているんだ、そんなこと。なんだか恥ずかしいなあ。そう思いながら、僕は言った。

「ま、これからよろしくね。」

それに対して木村君はちよつと驚いたみたいだけど、すぐさま表情を消していつもの顔になってこう言った。

「…なんとなく俺もそんな気がするから、俺のことは、圭でいい。よろしく、連、庄一。」

それを聴いた庄一は納得がいかない顔をしていたけど、

「まあいいか。よろしくな圭。」

と言って笑った。僕は、これからこの面子で行くんだろうと想像できた。

「………という感じだね。」

「そうだな。」「：懐かしい。」

圭の言うことはもっともだね。あれからもうすぐ三年が経つんだもんね。そう感慨にふけていると、元が手を挙げた。

「どうしたの？」

それに気づいた僕が元に訊いた。そしたら、

「あの。あの頃はゴメン。」

と言った。それに対して僕たち三人は、

「なんでお前が謝っているんだ？」「：元は悪くはない。」「そうそう。気に病むことないよ。」

とそれぞれ言った。だって僕たちは、元がああなった理由を知っているから。

ただ、それを知らなかった姉さんとレミリアさんは、何のこと？的な感じで僕たちを見ていた。

「これで俺たちの出会いの話は終わりだね。意外と過去を振り返ると楽しいもんだな。」

それに気づかない庄一は、ソファから立ち上がって背伸びをしながら言った。

確かにそうだね。特に思い返す必要がなかったからやらなかったけど、こうしてやると楽しい思い出ばかりだね。なんて思っていると、

「確かにそうね。珍しくあんたと意見があったわ。」

久美さんが鼻で笑いながら言った。どうして庄一に対してそんなに喧嘩腰なのか、僕には解らなかった。

それに対して庄一は、

「本当に珍しいな、意見が合うなんてよ。ま、それはどうでもいいや。まだまだ話したいことがあったが、これでお開きにしようぜ。」普段ならすぐに喧嘩に移行するのに、それを流して帰ろうと言いだした。どうかしたのだろうか？そう思わずにはいられなかった。

でも、僕はそれを考えないでみんなに「もうすぐ四時だよ。帰っ

たら？」と言ったら、みんなは「お邪魔しました」と言って帰っていった。

それから、僕はいつものことをして、寝た。ただ、寝る前に姉さんとレミリアさんに、僕は庄一と圭との思い出話をした。

過去編（7）（後書き）

次回から、十二月に入ります。更新スピードは以前より著しく遅くなります。

六 十二月上旬のある日（他愛のない日常）（前書き）

六万行きました！まさかここまで来るとは思いませんでした。

六 十二月上旬のある日（他愛のない日常）

「なあ、最近寒くなったよな。やっぱり、十二月だからか？」

「家ではもう電気ストーブがリビングに置いてあるよ。出したりするの面倒だったけど。」

「……うちはコタツ。」

昼食の時間。僕達はいつものように会話をしながら食べていた。

こんにちは、池田連だよ。自己紹介が面倒だから省略するけどね。庄一と圭の紹介も省略。問題は無いでしょ？

今の季節は分かる通り、冬。うゝ、さむ。

食べていたら、唐突に圭がこう言ってきた。

「…エミリーさんはまだいるのか？」

その言葉に、庄一の箸が止まった。僕は、今までどうして訊いてこなかったのか不思議でならなかった。なので、正直に答えることにした。

「来週には帰るんじゃないかな？ 多分。」

「多分って、どういうことだ？」

僕の言葉に、庄一がツツコンできた。

「だって、姉さんがこれからどうするか知らないし、本人の意味だってあるから。」

「…連はどう思ってる？」

圭。どうしてそこまで訊いてくるの？ そう思ったけど、訊いても圭の事だから答えてくれないだろうと思った。なので、

「別に。残りたいのなら残ればいいし、帰るのなら帰ればいいよ。よく言うでしょ？ 『来る者拒まず去る者追わず。』って。」

と答えた。それを聴いた二人は、何も言わなくなった。

しばらくして、庄一が口を開いた。

「…お前、やっぱり考え方が大人だな。」

「そうかな？ そんなこと思ったことないけど。」

「……それも、いつものこと。」

これで、会話が終了。また三人で黙々と食べる。これを繰り返すのが、僕達三人の昼食。話してばかりじゃ、食べられないからね。

ちよっとしてから、今度は僕から話した。

「ねえ、元たちは？」

「ん？どうせ修羅場がさらに悪化してるんじゃないか？花音さんもいるわけだし。」

あ、藤木さんのことを僕達は最近「花音さん」と呼んでるんだ。理由は話す機会があったらで。

「……今頃元は昼食いらず。」

「いいなあ。」

「どこが？」

「だって昼食つくらなくていいんでしょ？負担が軽くなるじゃん。」

「…その分精神的負担が大きい。」

「あ、そうだね。」

「なんだ、連？料理するのが飽きたのか？」

「別にそういう訳じゃないけどさ。最近だって新しいスープ料理に挑戦してるから楽しいし。」

「…じゃあ、どうして？」

「両親の世話が、ね……………」

「大変だな、お前も。」

「…中学生と思えない苦労の仕方。同情する。」

本当に困ったものだよ、僕の両親は。食べながら、僕はそう思った。

昼食の時間が終わり、午後の授業が始まった。といっても、自習。確か、魔術師専門の授業だったかな。それで元は連れてかれ、久実さんは荒れていた。それでも、最初の頃よりはマシになったんじゃないかな？久実さんの荒れ具合。

「あゝ、暇だなゝ。もう勉強したくねえよ。大体、なんで高校の授業を教わらなきゃいけないんだ。」

「しょうがないでしょ。ここはエスカレーター式なんだから。」

「：俺達は入試免除。そのかわり、高校の授業の先取り。」

「お前ら、今日の授業理解できたか？俺はそんなにできなかったけどな。」

「僕は大体理解出来たかな？」

「：俺は完璧という訳ではないが、全部理解できた。」

「私はあるなの完璧に理解できてるよ。」

「ん？そーいや花音さんって、天才科学者で天才発明家なんだったな。それだったら……って、いつの間に？」

僕達が話していたら、いつの間にか花音さんが話に混ざっていた。

一応授業だから、席を立てて出歩くのはダメなだけだなあ。

そんな僕の気持ちも知らずに、花音さんが言った。

「自習ってやることなくて暇じゃない？だから話し相手が欲しくて歩き回ろうとしたら、丁度君たちが何やら話してたからさ、ここで話をしようと思ったわけ。」

そうですか。と僕は思いながらも、顔には出さずに花音さんも交えて話をすることにした。

「庄一。今までの内容がちょっと難しくなっただけだと思えばいいんだよ。そうすれば理解しやすくなるよ。」

「そうそう。全体的につながってると考えればこんなの簡単だよ。」

「

「そうは言ってもだなあ。具体例が分からねえと何とも。」

「：だったら、今日の放課後に、ここで教える。」

「うげっ！」

庄一が嫌そうな声を出した時、僕と花音さんはクスリと笑った。

「おい、連！笑うなんてひどくね！？」

「だって庄一の声が……。」

「：今のは面白かった。」

「そーだよね。」

「てめえら！」

「静かにしろ！」

庄一が何か言おうとしたら、先生が注意してきた。すみませんでした。

庄一は納得がいかなかったみたいだけど、何も言わなかった。

十二月上旬のある日(2)

そして、放課後。

教室に残っているのは、僕、圭、庄一（拘束した状態）、花音さん、元、久実さん、堇さん、レイジニアさんと、いつものメンバーだった。

「どうして庄一は拘束されてるの？いい気味だけど。」

「んだとこらあ！テメェだってどうしてここにいるんだよ！パトロールとか行かなくていいのかよ！」

「なんであんたがそんなこと知ってるのよ！？……それはおいといて、あんたが拘束されてるのを見たからここにいるのよ。」

「…それは嘘。本当は、今日ここで元を伴って勉強会が行なわれる事を知ったから。」

「相変わらず不思議ね。どこでそんなことを訊いてくるのかしら？」

「本当ですね。」

とまあ、相も変わらぬ世間話はそこまでにしといて。

「そろそろやろうよ。時間がもったいないから。」

という僕の言葉で、みんな黒板に向いた。ちなみに、先生役は花音さんと圭。花音さんは他の人よりちょっとどころじゃない程小さいので、椅子に立っていた。残りの僕達は生徒。（庄一の拘束を外した代わりに、逃げ出そうとすると電流が流れるようにした。）

「……ここで、これが使われるわけ。理解できた？」

と花音さんの優しい解説に、

「分かりやすいわね。」

「そうですね。ちょっと分からないところがあったのですが、これで理解できました。」

「花音さん、教えるの上手だね。」

と、僕と堇さんとレイジニアさんは言い、庄一、久実さん、元は、「うっすらと理解できたわ。」

「元たちだったら力づくで突破しそうだね。」

「したことはあるわ。楽にできたけど。」

「ちよつと、久実。話がずれてるよ。」

結局何が言いたかったんだろう？このやりとりをして、僕はそう思った。

このままでは話が進まないと思ったのか、庄一がまとめてくれた。
「つまりだ。頼みごとでもなんでも、董さんの家に入れることは凄
い事なんだって。」

「へえ。」

そうなんだ。すごいことなんだ。他人事のように、僕は思った。

そんな僕を見て、花音さんと董さん以外の人は呆れていた。どうして呆れているのかなんとなく予想はつくけど、放って置いて話を聴くことにした。

「で、さっきも訊いたけど、頼みごとって？」

「あ、はい。今週の土曜日にお料理を教えてほしいのですけど……
駄目ですか？」

両手を胸の所で合わせて頼んでくる董さん。参ったな、無下に断れない。

僕は少し考えてから、「いいよ。」と承諾して教室を出た。その時に、あれ？豪邸だったらシェフ居るよね？普通はそっちに教えてもらわない？と思ったけど、何か理由があるのだらうと思い、考えるのをやめた。更にその時、一緒に出てきたのか、花音さんが僕と並んでいた。

「僕に何か用？花音さん。」

「連君って頼みごとをよく聴くよね。家の事があるのに、どうして？」

「どうしてって、週末は基本的に、友達が頼んできたのなら断る理由は無いんだ。暇だから。」

「暇だから休むんじゃないの？」

「普段はだらけてるよ。想像もできないだろうけどね。」

「うん。」

「即答されちゃったよ。」苦笑するしかないね。

「でもおかげで分かったよ。」

「なにが？」

「連君はやっぱりお人好しの苦労人だってこと。あゝ、連君の家庭環境が詳しく知りたいなあ。なんとなく、面白そうな気がする。」
「そう言っている花音さんの眼は、キラキラと輝いていた。まるで、新しい研究対象を見つけた時の眼だった。」

「元の観察はいいの？」

「それもするよ？でも、将来でも出来そうだから。」

「すごいね。結婚する気満々だ。ライバル多いのに。」

「私だって負けないもん！」

ふう。何とか話を逸らすことに成功。危なかったあ。このまま僕の家までついてきそうな感じがしたよ。

校門でそのまま別れ、僕は家へと帰った。

「あれ？上手い具合にはぐらかされた？これはますます観察してみたいよ。」

自宅へ着いた時に、花音は思い出したようにつぶやいた。どうやら、逆効果だったようだ。

十二月上旬のある日(3) (前書き)

九十話いつてました。あと、初投稿から一カ月が経っていました。驚きですね。

十二月上旬のある日(3)

帰宅して、まあいつも通りに洗濯物をこんでから夕飯を作り、洗濯物をたたんでいたら両親が帰宅し、たたみ終わって弁当を洗っていたら姉さん達が帰宅した。結局、弁当箱を全部片付け終えたら、みんな食べ終わっていた。

仕方なく一人で夕飯を食べ、終わったら風呂を沸かしにいき、戻ってきたら姉さんとレミリアさんが後片付けをしていた。

「珍しいね、姉さんがやるなんて。」

「姉としてお前ひとりに何でもやらせるかっての。」

「いつもやらせてるじゃん。家事全部。」

そういったら、姉さんが「前はいつも二人で役割分担してたわよね？」と言ってきた。だからどうしたんだよ。と思ったけど、何も言わずに二階へ上がった。レミリアさんに「ご苦勞様。」と言って、一方、

「全くあいつは……って、おいレミリア！血落としそうぞぞ！」

「……はっ！……え！？あ、あわわわ！」

「……大丈夫か？これで。」

渚に言われるまで、レミリアはトリップしていたという。

一階に戻ると、姉さんとレミリアさんが明日の台本の確認らしきものをしていた。僕には分からないから、明日の昼食と朝食に使う料理の下準備をし始めた。両親は、風呂から上がって酒盛り中。

下準備中に、レミリアさんが僕の事を時折見してきた。それを見た姉さんは「仕方ないなあ。」とでも思ったのか、何も言わなかった。視線の意味が解らなかったので、僕は気にしなかった。

下準備が終わった時、いつの間にか姉さん達が風呂から上がっていたので、二人とも寝巻に着替えていた。ただ、レミリアさんの寝巻が昨日までと違かったけど、どうしてだか訊かなかった。そんなこと訊いたら、変態だなんだと言われそうだからね。なので、気付

かないふりをして下準備に使った器具を洗って片付けていった。

風呂から上がってリビングに行ったら、両親と姉さんとレミリアさんでゲームをしていた。普段僕はほとんどゲームをやらない。やる時は、庄一や圭が来た時か、

「おい。連もやろうぜ。」

誘われた時ぐらい。自分ではやらないんだよ。やることがあるからね。

「いいよ。」

と、僕は頷きながらテレビの方へ向かった。

十二月上旬のある日(4)

最初は両親が圧勝してたけど、そのうち僕が縮めていって、最後にはギリギリまで追い詰めたけど、負けた。姉さんやレミリアさんは、何故か最初に負けてしまっていた。

ゲームを片付けて二階へ上がろうとしたら、レミリアさんがついてきた。ちなみに、両親と姉さんは酒盛り中。どんだけ酒飲むんだよ、あんたら。

「レン。」

「なに？」

階段を上りながら、レミリアさんが訊いてきた。レミリアさんが先で、僕が後だよ。

「これ、どうですか？似合っていますか？」

「新しく買ってきたんだよね。うん。似合ってるよ。」

「そうですか。良かったあ。」

僕の言葉に、僕を向いて胸をなで下ろしたレミリアさん。なんだか癒されるね。

「以前のど、どっちが似合っていましたか？」

「うーん：甲乙つけるのは僕には無理かな？こればかりは着てる本人の感性だと思うから。」

「客観的な意見が欲しいんです！」

「そこまで言われるとなあ。……駄目。無理。どっちも似合ってるよ。」

「本当ですか？」

「だって、レミリアさんが綺麗だから。どっちもレミリアさんに合わせてる気がして。」

「き、綺麗ですかっ！！？そ、そそそんなこと、ななないですよ！」

僕の一言に、レミリアさんの顔はゆでだこの様に真っ赤になり、両

手をブンブンと高速で動かしていた。あ、そんなことしたら・・・

「そ、そんなことないです……って、キャッ！」

「うわっ！……あ、危なかった。もう少し強かったら僕まで落ちたよ。大丈夫？」

階段を踏み外したのかレミリアさんが落ちてきたので、僕は何とか彼女を抱きしめる形で支えた。こんな事って本当にあるんだね。お、こわっ。

踏ん張る必要がなくなったので、レミリアさんを一段上の階段のそこへ座らせた。その時の彼女は顔がもう真っ赤で、僕と目を合わせてくれなかった。恥ずかしかったのかな？

仕方がないので、僕はレミリアさんが座っている階段の空いてるスペースを上って自室に行った。自室に入った僕は、今更ながらレミリアさんを抱きしめていたという事実、心臓がドキドキして顔が赤くなった。

時を少し戻して。レミリアは、階段に座ったまま動けなくなっていた。

もちろん、顔は真っ赤で。

今の彼女は声に出せない嬉しさで、頭の中が埋まっていた。

（キャ————！！いい、いいいい今、だ、だだだ抱きしめられた！？レンに！？事故だったけど、だだだだ抱きしめられちゃった！！抱きしめられた時のレン、カッコよかったなあ。）

この時すでにレミリアの顔はウツトリとしていて、傍から見ると危ない人である。

それがなおも続き、

（もしこれで私の事を意識してくれたら……キャ————！！もしそうになったらどうしよう！？うわあ、も、もう、し、しばらくは目を合わせられないよ！！！！）

と思っていたところで、

「なにやってるんだレミリア？こんなところで。」

「!?!? な、渚さん!?!?」

渚が現れた。そして、さっきの顔の原因にピーンときたのか、こう言った。

「ははりん。お前、連に抱き締められてもうどうしようもなく幸せだと思ってるだろう?」

「えっ!?!? どうして分かったんですか!?!?」

「え? 本当だったの?」

まさか当たると思わなかったのか、レミリアの言葉に驚いた渚。しかし驚いたのも一瞬で、すぐにこう言った。

「これで浮かれてちゃ駄目よ。ただの事故だとあいつは思って明日も普通に話しかけてくるかもしれないわ。だから、その時はちゃんと会話できるようにしときなさい。」

「む、むむ無理です!」

「甘えないで頑張りなさい。お休み。」

そう言って、渚は自室へ戻っていった。それを見たレミリアは渚の後ろ姿を見送ってから、

「うううううう。が、頑張らなきゃ! ファイト!」

自分に気合を入れて、渚の後を追った。

七 十二月上旬のある土曜日（前書き）

七万PV突破しました！更新スピードはこんな感じで遅くなっています。よろしくお願いします。

七 十二月上旬のある土曜日

約束の日。

僕は、家の掃除をしていた。僕以外の人は誰もいないから、やるのは僕一人。結構大変だよ。

「ふう。これで終わり、っと。姉さん達の部屋は、自分たちでやってもらおうっと。」

僕と姉さん達の部屋以外は全部やった。自分の部屋は、自分で使っているのでやる事はないし、姉さん達の部屋はプライバシーの問題上、やらない。こればかりは自分たちでやってもらいたいんだけど、多分、やらないだろうなあ。

掃除が終わって時計を見ると約束の時間の五分前だったので、僕は掃除用具を片付け始めた。

掃除用具を片付け終えたと同時にチャイムが鳴ったので、僕は「はーい。」と言って、玄関に向かった。

「おはようございます。連君。」

「おはよう。董さん。」

玄関を開けたら、董さんが立っていた。清楚、という言葉がぴったりの董さんの恰好に、僕は今更ながらに緊張した。

「なにかしていたのですか？」

そんな僕の気持ちも知らずに、董さんが訊いてきた。僕はドキドキしながらこう答えた。

「あ、ちよっと、掃除をね。土曜日は基本的に掃除と買い物以外は何もしないから。」

「あ。そうなんですか。それは大変でしたね。ところで、大丈夫ですよね？」

「え、うん。大丈夫だよ。」ちゃんと戸締りはしといたから問題は

ないしね。

「では、こちらに乗ってくださいませんか？」

「これ、凄い高級車だね？こんな所に止めていい車じゃないよね？」

「いいから乗ってください。」

そういうやりとりがあつて、僕はその車に乗って董さんの家に行くことになった。

車内にて。

「そういえば今更なだけどさ。」

「なんですか？」

僕は、前にふと疑問に思ったことを訊くことにした。

「どうして僕に料理を教えてもらいたかったの？シェフとかいるんでしょ？どうしてその人達に教えてもらおうとしなかったの？」

それに対して、董さんはあたふたとしながらこう答えた。

「え、そ、それは……ちょっと教えてもらえなくて……。」

「え？でも、最近料理のレパートリーが増えた理由を元が訊いたら、シェフの人に教えてもらったって言つてたらしいけど……。」

「……あの、騙してごめんなさい。」

「え？騙す？」

いきなり話が変わったので、僕は訊き返した。そりゃそうだよ。単純に質問してただけなのに騙してごめんって。意味が分からないよ。それが表情に出ていたのか、董さんが説明してくれた。

「連君を私の家に招待する理由です。もちろん、料理を教えてもらいたいんです。でも、今回はちょっと皆さんに秘密にしてもらいたいのです。」

「秘密？もしかして、僕だとばれると大変なことが起こるの？」

「いえ、そういう訳ではないのですが……あ。家が見えてきました。」

まだ最初の方しか説明してもらっていないのに、目的地が見えたら

しい。堇さんが窓を指していたので、僕は窓を覗いてみた。そして、僕の目に飛び込んだ光景がとても衝撃的だった。

なぜなら、家がデカイから。おそらく三階建てなんだろうけど、建物自体の大きさがとてつもなくデカイ。金持ちって見栄っ張りだよね。こういう建物を見ると、本当にそう思う。

それに、敷地が広い。良くこんな土地を見つけたものだ。本気で感心するね。

まあ、そんな考えを置いて。

「お嬢様、玄関に着きました。」

「ありがとうございます。源さん。じゃ、降りましょうか。詳しい話は家に入ってからにしましょう。」

「あ、うん。」

運転していた源さんの言葉で、僕と堇さんは車から降りた。

「では、私は車を置いてきますので。」

僕達が降りたら、源さんは車を発車させた。車もとの場所へ置いてくみたいだ。

車が去っていくのを見送った僕達は、家に向かった。

「そういえば、源さんって誰？ただの運転手じゃない気がするんだけど……。」

玄関を前にして、僕は堇さんにそう訊いた。雰囲気としては、何でもできそうな人のような気がする。例えば、執事長とか。

そんな僕の質問に、堇さんは驚いていた。

「あれ？違かった？」

「いえ。最初に源さんにお会いになる方は、みんな運転手だと思うるので……。」

「じゃあなんなの？」

「源さんはこの家の執事長です。」

「あ。やっぱり？」

「やっぱりって？」

「そんな雰囲気を感じたからさ。」

そうこう言っていると、玄関前に着いた。僕は、その玄関を見て再び緊張した。なんだろう、圧倒される感じがする。

そんな僕をよそに、堇さんは普通にインターフォンをおして、「堇です。私の友達をお連れしました。」と言った。そしたら、玄関の扉が開いて、そして、

「「「おかえりなさいませ。堇お嬢様。」」」

メイドさんと執事が一斉に僕達（と言ってもおそらく堇さんだけ）に向かってお辞儀をした。

しかも、左右から一寸の狂いもなく同時に。

十二月上旬のある土曜日(2) (前書き)

家の中の描写を期待しないでください。

十二月上旬のある土曜日（2）

僕はその光景に圧倒されながらも、メイドと執事の比率を何ともなしに数えていた。

うーん、メイド6に執事4ですか。若干メイドよりなのは、家族構成のせいかな？

そう観察をしていたら、堇さんが僕の事を催促していた。あれ？いつの間に？

そう疑問に思ってたけどどうでも良くなったので、催促されるがままに家の中に入った。

家の中に入って、僕は堇さんに案内されるがまま歩いた。その時に、堇さんの専属メイドさんらしき人三名がついてきた。名前を訊いたところ、無表情で無口そうな人がメイド長で堂本未来さん。年齢は、推測で二十代前半だろうね。

その隣の活発そうな人が、その部下の松村真帆さん。年齢は十代後半くらいかな？

それで真帆さんの隣が、同じく未来さんの部下で松村美帆さん。年齢は真帆さんと同じで十代後半のような気がする。そして、おとなしそうな気がする。

あ、今名前で気づいたけど、真帆さんと美帆さんは双子だ。すごいね。

そんな紹介を終えてしばらく歩いていたら、堇さんが「ここが客間です。先程の詳しい説明はここです。」と言った。

客間に入った僕は、部屋が広いことに驚きを感じなくなっていた。だって両親に連れられていろんな家に行ったことあるもん。どれもここほど広くはなかったけどさ。

僕は、堇さんに勧められるがままソファに座った。結構座り心地良いなあ、これ。やっぱり高級品だからかな？

堇さんは僕の正面に座り、メイドさんたちはその後ろに立ってい

た。ビシッとしてるね。

そんな僕の感想をよそに、董さんは話し始めた。

「それで、家に招待した本当の理由なんですけど……お父さんとお母さんが喧嘩してしまっただけですよ。」

「あのすみません。」この時点ですでに理由が分かった気がする。

「なんですか？」

「もしかして……僕にその仲直りをして欲しいの？」

「そうなんですけど……ちょっと違うんですよ。」

「え？」

何か歯切れの悪い董さんの言葉。一体僕に何をしてもらいたいのだろうか？

すると、董さんの代わりに未来さんが説明してくれた。

「現在、奥様とご主人様はここ一週間近く喧嘩をなさっています。その原因が、あなたにあるのです。」

「え？僕ですか？」

困った。思い当たる節が無い。どうして僕が喧嘩の原因になるんだろう。

さらに説明が続いた。

「そうです。どうも、ご主人と奥様はあなたの事を気に入ったみたいなのです。そこまですら喧嘩にもならなかったのでしょうか、その後が問題なのです。」

あの、それって僕のせいではない気がするのですが……。そう言おうとしたけど、未来さんに口答えするのは僕にはできなかった。代わりに、僕は質問した。

「問題ってなんですか？」

「そうですね。あなたが知らないのは無理ないでしょう。知らないうちに当事者になっていたのですから。」

薄々分かっていたんですね。本当に僕はそう思った。

「問題は、意見が分かれた事です。池田連、あなた様を執事として家で雇うか雇わないかで揉めているのです。」

やっと本題に入ってくれた未来さん。あれ？僕の意味は？そう思っていたら、

「お父様は連君の事を雇うとおっしゃっていました。しかし、お母様は反対してるのです。それは私も分かります。連君の大変さは、よく耳にしていますから。」

堇さんがまた話してくれた。

えーっと、話を整理すると……。

どうやら、僕は堇さんの両親に気に入られているらしい。

それで、僕を執事として雇うかどうかで揉めている、と。

ふーん。なるほどねえ……。

「大体わかったよ。」

「どうもすみません。仲直りしてもらうには連君の意見が――」

「すみません。遺言書を書きたいのですけど、紙とペンありませんか？」

「ちょっと待ってください！！どうして死ぬ前提なんですか！？」

「だって……堇さんのお父さん、魔術師じゃん。無理だよ。僕死んじゃうよ。」

どうすれば生きて帰れるかな？

「大丈夫ですよ！いくらお父様でもこんなことで怒ったりしないはずですか――」

「ん？堇、お客さんか？……って、池田君じゃないか！久し振りだな！」

何と間の悪い事でしょう。堇さんが必死にお父さんの事を言っていたら、ご本人が登場してしまいました。もうこれは他人事のように振る舞うしかないよね。

「久し振りですね。学祭以来ですな。」

「そうだな。妻が私の代わりにお礼をしにいったから、学祭が最後だな。それより、どうしたんだ？君の事はいつか呼ぼうと思っていたのだが、まさか今日来ているとは。」

「ちよっと、堇さんから依頼がありましたね。」

「そうなのか？ま、ゆっくりしていつてくれ。」

「分かりました。」

そんなやりとりで、堇さんのお父さんはどこかへ行った。

うーん。家と外じゃ雰囲気は全く違うね。僕の両親とは大違いだ。

そう思っていたら、堇さんが気を取り直して言おうとしたけど、

「あら、連君じゃないですか？いつぞやはどうも。」

今度は堇さんのお母さんが客間に来た。こうなると堇さんが気の毒になるね。

「お母様、何しに來たのですか？」

僕が挨拶をする前に、堇さんが話を訊いていた（ちよつと怒ってない？）。そうすると、僕って挨拶しづらいよね。

その質問に、お母さんは笑みを絶やさずにこう言った。

「なについて、源さんが元君とは違う男の子を連れてきたと言っていたのですよ？気になって執筆できないわ。ま、見に来てよかったです。それじゃ、連君。ゆっくりしていつて下さいね。」

そして、僕に何も言わせないまま部屋を出て行った。

十二月上旬のある土曜日（3）

僕は、これからどうしようか本気で考えた。だって、どうもこれは僕の意見によって決まりそうだから。そして、僕の意見によって是最悪なことになりそうだから。

そう考えていたら、客間の二つのドアが同時に開いて、客間に入りながら言ってきた。

「「そういえば、連（池田）君に訊きたいことがあったの（んだ）。」」

同時にドアが開いたので、当然鉢合わせという形で互いに顔を見ることになる。その結果、

「「ふん！」」

同時にそっぽを向いた。やっぱり仲がいいね、堇さんの両親。

その光景を見た堇さんは、

「お父様、お母様、お客様の前で露骨にやらないでいただけませんか？」

と、二人に近寄って言った。しかし二人は、

「いや、いくら堇の頼みでもこれは無理だな。」

「そうね。こればかりは無理よ。」

と言って、互いに頑として譲らなかった。

それに耐えきれなかったのか堇さんが、

「だから連君を連れてきたんです！本人の意思が重要だと思ったから！」

その言葉で、未来さんは「お嬢様、成長なされましたね……。」「と言っていて、あまり話さなかった松村姉妹も「かつくいゝ。」「真帆、茶化しちゃ駄目……。」「と言っていた。

そして、堇さんの両親はというと、

「そうか！それで池田君が来ていたのか！」

「確かに、本人に聴けばこれ以上無いくらいにはっきりしますね。」

納得していた。どうしよう、もうこれで逃げられなくなった気がする。その時に、僕の携帯電話が鳴ったので、電話に出ることにした。

「もしもし？」

『よう連。』

「庄一？どうしたの？」

『今、堇さんの家か？』

「うん。そうだけど。」

『そうか。じゃあ、さっさと頼みごと終わらせてきてくれ。いや、終わらして来てください、お願いします。』

「へ？」

庄一は突然何を言ってるのだろうか？電話をしながら、僕はそう思った。その時の僕の周りかというと、堇さんの両親は僕の会話を聴いていて、堇さんはメイドさんたちと話していた。話している内容は聴こえなかったけど、何故か堇さんの顔が赤くなっていた。どうかしたのだろうか？

それに構わず、庄一は話を続けた。

『あ、ワリイ、ワリイ。順を追って説明するか。今日、俺は一人でぶらついてたら圭と出会ってよ。そこから二人で適当に歩いてたら元が追われてたんだよ。それを見た俺達が隠れたら、その場所に元が来たんだよ。』

「偶然が凄い重なったね。」

『そうだな。そこで、仕方なく元が追われていた理由を訊いたんだが、それが自業自得でよ。見放そうとしたんだが、追ってきた奴らに見つかってよ。それで俺達で逃げてるんだよ。』

「それで？どうして僕が？」

『今は何とか撒いたみたいだが、どうやらお前に用があるみたいだぜ。だからお前も来てくれ。そうだな・・・集合場所は学校という事で。』

「えー？……分かったよ。さっさと終わらせて学校へ行けばいいんだね？」

『そういう事だ。じゃ。』

と言って、庄一から電話を切った。やれやれ。休みだったのに今日は面倒なことが立て続けに起こるなあ。そう思いながら携帯電話をしまったら、董さんの両親が僕の事を見ていた。

「なんですか？」

僕はその視線を受けながら董さんの両親を見た。

「いや、池田君はいつも苦労してるんだなと思ってな。」

「これぐらい普通ですよ。一番忙しくて二日ぐらい不眠不休でしたから。」

あの時は連休だったから良かったけど、平日だったらどうなっていた事か……。

と、そのことを思い出していたら、

「「「「「………。」」」」」

あれ？みんな黙っちゃったよ。どうして？

「私でもその年でそんなことをしたことはないのだが……。」

「私でもないです。一体何をしていたのですか？」

と、董さんの両親たちが口々に言っていた。その後ろでは「お嬢様、あの人は同じ学友なのですか？」「そうですけど……。」「すごいね！あの人！」「そう、ですね。未来さんでもそこまでできませんよね？」「出来ることはできますが、池田さまと同じ年齢ではやろうとしません。」と、そんなやりとりがあったみたいだ。

僕はそれらの言葉を聴き流しながら、出来るだけ早く事を終わらせるために言葉を紡いだ。

「あの、僕はこの家の執事になりません。そう言われてうれしいのですが、生憎家の事をしなければいけませんので。それに、僕は基本的に家事を特技としてるので、これでお金を稼ごうとは思っていないんですよ。」

そう言うってから、僕は董さん見てこう言った。

「そういう訳ですから。ありがとうございます、董さん。家に招待してくれて。」

すると、堇さんのお父さんがこう言ってきた。

「そうか……しかし、もったいないな。君ならそれで稼げるだろうに。」

それに対して、堇さんのお母さんはこう言った。

「連君は家事を仕事だと思っていないのですよ。むしろ、習慣としてこなしているだけです。だから、そう言った話には飛びつかないのですよ、あなた。」

まあ、本当の理由は別にあるんですけどね。と、堇さんのお母さんの言葉を聴きながら僕はそう思った。その時に、未来さんが僕の事を見ていてこう言った。

「池田様。何かおっしゃりたい事があるのならどうぞ。」

あれ？どうしてばれたんだろう？ひょっとして顔に出てた？

そんな僕を見て、未来さんは笑いもせずに説明してくれた。

「私はちよつと特殊な魔術師でして。基本的に相手が何か言いたいと思っている時にだけ、私の魔法が発動するのです。」

その説明を受けて、僕は納得した。しかし、それだと隠し事が出来ないのでは？素直に僕はそう思ったけど、話すことにした。

「堇さんの言う事にも一理あるのですけど、本当は別な理由なんですよ。自分の特技でお金を稼ぎたくない理由。」

「そうなの？」

「はい。」

僕の発言に、堇さんはもちろん、客間にいた全員が驚いていた。そして、僕は説明した。

「特技でお金を稼ぎたくない理由は、単純に僕がやりたくないからです。おそらく、他の職に就けなくても。」

その言葉に、なんていうんだろう、皆さん呆れていた。

そうだろうと思ったけどね。そう思いながら、僕はこう言った。

「堇さん。」

「はい、なんですか？」

「これで終わりだよね。」

「ええ。」

「じゃ、学校まで送ってくれない？ いや、学校までじゃなくていいや。それに近い所で目立たないところがいい。」

「え？ あ、はい。分かりました。……源さんと呼んでくれませんか？ 友達をお送りするので。」

「かしこまりました。では、真帆。美帆。貴方達は源さんと呼んできてください。私は二人を案内します。」

「わかりましたー！」「はい！」

一方、堇さんの両親はというと、

「なんだか蚊帳の外だな。」

「そうですね。でも、連君は諦めた方がいいじゃありません？」

「もったいないが、諦めるしかないか。」

「そうした方がいいですよ。」

等と言っていた。良かった、かな？

十二月上旬のある土曜日（4）

未来さんに案内され、僕は堇さんの家を出た。丁度その時に、僕を迎えに来た時とは違う車が来た。どうみても、普通乗用車だった。

「驚きましたか？」

「うん。高級車ばかりじゃないんだね。」

「近くまで行くのに、そういう車だと不便ですから。」

そんなやりとりの後、僕が車に乗ったら堇さんが車窓越しでこう言ってきた。

「今日はありがとうございました。このことは秘密でお願いします。」

「分かってるよ。それより、こちらこそありがとう。家に招待してくれて。結構よかったよ。」

「そう言ってもらえると、嬉しいですね。…あ、今度はお料理教えてくださいませんか？」

「僕が暇だったらね。」

そして、車は出発した。

友達が指定した、集合場所へ。

連を乗せた車が出発した後。

「お嬢様、どうして先程のご学友の方に料理の指導を頼んでいたのですか？ 私達に頼めば、教えますのに。」

未来は堇にそう訊いた。感情に起伏が無いように感じるが、どこことなく拗ねてる感じがした。

「そうなのですけど」

と、言った後に続けようとしたら、

「連君の料理はとてもおいしいのよ、未来。どのくらいかというところ、プロの料理人のプライドがボロボロになるくらいおいしいの。」

堇の母にセリフを奪われた。その言葉を受けて、未来は疑わしい

目をしていった。

「本当なのですか？」

「本当ですよ。ねえ輩？」

「はい。」

連の料理の腕をべた褒めしていた人たちがいたとか。

十二月上旬のある土曜日(5)

「ありがとうございます。」

源さんにそうお礼を言い、僕は集合場所の校門前に来た。そして、車が走り去った方向と同じ方向から、三人の人影が猛ダッシュしてこっちに来てるのが見えた。

その人影はだんだん大きくなっていき、

「ちくしょう！あいつらただの不良だろうが！どうして振り切れねえんだ！？」

「：グループで俺たちの事を搜索していたと推察。だから、そんなに体力を使っていないと考えられる。」

「二人とも！学校の前に人がいるよ！」

「「よっしゃあ！」」

という声と共に、三人が僕の目の前で止まった。その後ろから柄の悪い人たちが追い付いてきた。あれ？この人達、会ったことがある気がする……？

とか思っていたら、庄一曰く不良の人たちが僕たちの事を囲んだ。

(その数二十人)

「ち、ちくしょう。こ、こまでか……。」

と、囲まれた時に庄一は言った。これから殴られることを想像したのだろう。しかし、そうはならなかった。なぜかというと、囲んでいた一人の不良の人が僕の事を見つけたらしく、

「あ、兄貴！？おいお前ら！兄貴がいるぞ！」

と叫んだ。そのセリフに、庄一たちは首をかしげ、僕はこの人達が誰か理解し、囲んでいた人たちは僕の近くに集まって、

「「「お久し振りです！兄貴！」」」

と言った。それに対して、

「あ、久し振りです。それに僕、皆さんより年下なので兄貴はやめてくれませんか？」

と言ったのに、

「何言ってるんですか！年下でも俺達の兄貴には変わりはないんですから。」

「そうっすよ！俺達は兄貴を尊敬してるんすから！」

「「「そうそう！！」」」

相手にしてくれなかった。

この光景を見ていた庄一、圭、元は、

「圭、知ってたか？」

「：知らない。初耳。」

「花音が調べたいと言ってるわけだよ。」

そう言っていた。元。それは怖いよ。その時僕はそう思った。

と、その時不良の一人が僕にこう訊いてきた。

「兄貴、あいつらと知り合いなんですか？」

「そうだよ。一体何があったの？」

僕は肯定してから、何があったのか訊いた。そしたら、別な人が説明してくれた。

「俺達、兄貴の事を探してそこらで会った人に訊いていたんですけど、その時に絡まれていると勘違いされてその奴に邪魔されたんですよ。頭に来てそいつの事追ってたんすよ。」

「違うだろ。あの時、『俺達の邪魔をしてきたのが兄貴。』ってことで探したら、あいつが邪魔してきたから兄貴だと思って追ってたんだろ。」

なるほど。大体の事情は理解できたよ。

「つまり、人違いで追っていたってわけだね。」

「そうっす。」「「「「すんません。」」」」

ハア、まったく・・・。

と、僕が心の中で溜息をついていたら、庄一が訊いてきた。

「あの人たち、何者なんだ？」

僕はこう答えた。

「あの人たちは調理学校の人達だよ。ちなみに、みんな高校生だよ。」

「…どこで会った？」

「えっとね、スーパーまで行く道中で絡まれていた人がいたからさ、何してるの？って言ったら追っかけられて。」

「…それから？」

「逃げていたら追い詰められてさ、殴られそうな雰囲気になったからとっさに料理を作ってあげるから勘弁してって言ったらどうも調理学校の生徒でさ。だったらつくれよという話になって学校まで連行されて、まあ料理をつくって食べさせたら、こうなったんだよ。」

「いつ会ったの？」

「確か…：僕が中学二年の事かな？その時確か、みんな高校一年生くらいだったよね？」

「「「そうっす！！」「」」」

皆、息ピッタリですごいね。と僕が心の中で賞賛を送っていたら、庄一たちは固まってひそひそと話していた。

「（大変なつながりができてるな。）」

「（ねえ、連とプロの料理人だったらどっちがうまいと思う？）」

「（…多分、プロの料理人が少しだけ負ける。これは、あくまで現段階の話。）」

「（と、なると、だ。こっから先の連次第で…）」

「（プロの料理人を遥かに凌ぐかもしれない？）」

「（…可能性はある。）」

？内容は分からないけど、時折僕をみては呆れた視線だったり、羨望の眼差しだったりしていた。良く分からないなあ。

と、僕の周りにいた不良の人たち（調理学校の生徒）が思い出したように、僕に向かって言った。

「「兄貴！俺達はあれから必死に学校で勉強したんす！その成果を見てください！」」

「え？あ、ちょっと…って、待ってえええ！！」

僕が何か言う前に、腕をつかまれ強制連行という形で連れ去られた。話を聴いてよく！

置いてかれた庄一たちは、

「連の後ついていこうぜ。」

「…無理。それより、確実な方法がある。」

「え？それって？」

「…学校の場所を調べて、先回りをする。」

「よっしゃあ！行ってみようぜ！」

「大丈夫かな？」

連がつれていかれた先に先回りすることにした。

十二月上旬のある土曜日（6）

「着いたっすよ、兄貴。」

「ふう。……久し振りだね、ここ。」

僕が着いた場所は、前にこの人達に絡まれた時に連れてこられた調理学校の校門前だった。

それから間もなく、庄一たちが追いついてきた。

「そういえば兄貴。この人達とは知り合いなんすか？」

息切れで倒れている庄一たちを見て、僕を連れてきた人（鈴木さん）が訊いてきた。

「うん。さっきも訊いたよね？その質問。」

そんなやりとりをしながら、倒れている庄一たちを他の人たちが担いで、僕は再び調理学校の敷地内に入った。

「ここが、俺達が普段使っている調理室っす。」

「変わってないねぇここも。」

この集団のリーダー格である鈴木さんが、僕達を調理室へ案内してくれた。と言っても、この人達だけしか使っていないらしい。理由は、落ちこぼれ専用のためにつくられたから、とか。

確かに、去年会った時の料理の腕はかなりひどかった。僕を兄貴と呼ぶようになった後、一度だけそれぞれが作った料理を食べさせてもらった。その時の味は、董さんよりはマシだったとだけ言っておこう。

「俺達は、あれから必死にここで料理を作っていました。今では、学年の成績で全員中間くらいにまで行けました。これも兄貴のおかげっす！」

「いや、みんなが自分で頑張った成果でしょ？僕はきっかけをつくらただけじゃないかな？」

「それでも良いんす！それだけでも恩があるんすから！」

「「イエス！！」「」」

みんな、本当にノリがいいなあ。と、騒いでる集団を見て、僕は思った。

一方、庄一たちはというと。

「大丈夫か？」

「……（フルフル）」

「…む、り。」

一足先に回復した庄一と、未だにぐったりしている圭と元が隅っこでそんな会話をしていた。

「さあ、兄貴！俺達つくりますから、見ていてくださいね！あと、食べた感想を言ってください！」

「あ、うん。分かったよ。」

と言ったら、鈴木さんが

「よっしゃー！全員バラバラの料理だ！俺達がどのくらい成長したか、兄貴に見てもらおうぜ！」

とみんなに言って、返ってきた返事が、

「「「「っしゅー！！」」」」

と、やけに体育会系のノリだった。

一斉に調理し始めて、もう十分が経過した。この時には既に、庄一は立って歩けるくらいまで回復していた。散々走ったのにどういう体してるの？と、真剣に思った。元と圭は、何とか立ち上がるくらいまでは回復した。

「情けねえな、元。能力使えば一発だろうに。」

「それじゃあ意味がないの。能力使ったら結局体力とか使うからね。回復したとしても、また疲れるだけだよ。」

「……庄一の体力が常軌を逸している。」

そんな会話をしているところに、僕は近寄って会話に混ざった。

「二人とも、大丈夫？」

「おいおい。俺への心配はなしか？」

「そういう連はどうして平気な顔をしてるの？」

「……ここまで来るのに軽く十分かった。全速力をキープした状態です。」

「え？僕は普段あの人たちが使っている近道で来たから、そんなに疲れていないよ？」

「俺は無視か？」

「「ずるい!!」」

そんな会話をしていたら、後ろから声をかけられた。

「兄貴。できましたんで、どうぞ。」

そう言っ、一人（坂江さん）が僕に料理を持ってきた。僕は、持ってこられた料理を一口食べて、テーブルに置いた。

「ど、どうですか？」

「……うーん。正直に言うと、まだ味付けが雑だよ。もうちょっと整えないと。それに具にもうちよつと熱を通した方がいいよ。そうすれば食べやすくなる。」

「そ、そうですか！ということは、まだ上達するってわけっすね！ありがとうございますました！」

そう僕に言っ、坂江さんは後片付けをしに戻った。それと入れ替わりになるように、別な人（佐倉丸さん）が来た。

「次、お願いします！」

「分かったよ。」

それから、後の人たち全員の味見をしていった。だって、全部食べたらお腹いっぱいになるんだもん。残った料理は、庄一たちが食べていった。余程お腹がしていたのだろうね。三人ともがつがつ食べていた。

全員の味見が終了して、僕はみんなにこう言っ。

「みんな、本当によく成長したね、と言いたいところだけど、注意されたところをちゃんと直せばまだ良くなるからね。それに、料理の道にゴールは無いんだ。諦めないで頑張ってね。」

そう僕が言ったらみんなが、

「「「了解しました!!」」」」

と言ってくれた。嬉しいね、やっぱり。

ちなみに、庄一たちは「食った、食った。」「：食い過ぎた。」

「動けないね。」と残った料理を三人で全部食べ終えていた。

そして、僕がちょっとしたアドバイスをしていたら、乱入者が現れた。

十二月上旬のある土曜日(6) (後書き)

お久しぶりです。ちょっと忘れてました。これからよろしく願
いします。

十二月上旬のある土曜日(7) (前書き)

気づけばもうすぐ百話。読んでくださる皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。

十二月上旬のある土曜日（7）

「あんた達、なんで部外者を校内に連れて来てるのよ！しかも、どう見ても中学生じゃない！最近おとなしくなったと思ったのに、また問題起こす気！？」

その人は、この学校の制服を着て、長い髪を後ろで留めてポニーテールみたいにしていて、腕の所に『生徒会』と書かれた腕章をつけている、女の人だった。しかも、十人が十人振り返るだろう、綺麗な人だった。

僕は、近くにいた鈴木さんに訊いた。

「あの人は誰？」

それに対し、鈴木さんは歯を食いしばりながらこう言った。

「：あいつはこの学校の生徒会会長、倉敷来夏^{くらしきらいか}。俺たちの事を、何かにつけて退学させようとしてる奴っす。しかも、あいつの料理の腕は学年最高。三年生でさえほとんどの人が勝てないらしかったす。」

「ご丁寧な紹介ありがとうね、鈴木君。」

「何の用だ？一応、許可は貰っているはずだぞ？」

笑って言ってる倉敷さんに対し、挑発してる鈴木さん。さっき自分で言った通り、倉敷さんとは因縁があるようだ。

「そうね。ただ、あんた達がこの子たちを連れてきたのに問題があるのよ。」

「なんだと？」

「あんた達が中学生を連れてきたから、教師側が見て見ぬふりをできなくなったの。」

「なるほど。それであんたがお出ましになったわけか。役職就くと大変だな。」

「そうよ。だから、この子たちは私達が保護するわよ。」

と言って、いつの間にか庄一たちの近くに四人の生徒がいた。庄一

「私たちは、「動けるか?」って、訊いても囲まれてるもんなんあ。」「: まだ無理。」「能力使っても良いけど、基本的に使ったら面倒だからなあ。」「知ってるよ、それくらい。だからこうして見てようぜ。」「どうして?」「: 連の執る行動を見る。」「要するに、成り行き任せってやつだ。」「樂觀してるね。」などと言っていた。囲んでいる人達に聴こえてるよ、君たち。

もうそっちの方は無視して、自分たちの方を考えることにした。

「はん。断るぜ。俺達の客人をはいどうぞ、ってやるわけねえだろ。」

「そう。なら仕方ないわね。だったら、ここはこの学校の伝統に則って、対決しないかしら?」

「: 分かったぜ。こっちは誰でもいいんだな。」

「ええ。こっちは私だから。」

それを聴いた鈴木さんが、僕を交えてみんなで円になった。

「おいどうするんだ、鈴木。あんなこと言って。」

「ワリイ。つい抑えきれなくてな。」

「でも実際どうする。あいつに俺達は、一度でも勝てたことあったか?」

「ないな。あいつが自分で負けを認めた以外に勝ったことなんて、一度もない。」

「じゃあどうするんだ!?」

そうやって話を聴いてるうちに、僕はちよつと倉敷さんの実力が気になった。なので、

「だったら、僕が出てこようか?」

と言ったら、全員が僕の方を見た。

「.....駄目?」

僕がそう言くと、みんながウーンと唸ってからまるで示し合わせたように、こう答えてくれた。

「「「よっしゃ!それでいくぞ!」」」

そう言った後にみんなが元の場所へと移動した。

「決まったのかしら？」

「ああ、決まったぜ。お前の相手は」

「よろしく願いますね？」

「なんで保護する人と勝負しなきゃいけないのよ!？」

「お前が言ったろ? 『誰でもいい。』 って。」

「そうだけど……まあいいわ。たとえば中学生でも容赦はしないから。」

とまあ、相手側の上承も取ったことだし、

「いっちょ頑張りますかあ。」

見下してる人に負けたくないよね。

料理のテーマは『冬にぴったりのスープ』。食材と調理道具はここにあるやつを使うことになっている。

「料理に自信があるようだけど、年の差を思い知らせてあげるわ。」と、自信満々に言う倉敷さん。その言葉に、庄一たちを囲んでる人たちから黄色い声援が聴こえてきた。人気があるんだね、やっぱり。それに対して僕は、いつもの顔でいつもの口調で言った。

「よろしく願います。」

審判として、この学校の先生が数名来ていた。どうも、部外者対生徒という事例が初めてだったらしく、いつの間にかギャラリーがいた。

「頑張れ! 頑張れ!」

と、鈴木君たちが僕に向かって応援していたのを見て、ギャラリーの生徒から「あの子、一体何者?」「中学生だよな?」という声が出た。

先生は時計を見てから、

「始めっ!」

と開始の合図をした。それまでに僕は、料理に使う食材を見繕っていた。

開始の合図と同時に、僕は料理を開始した。こんなのは初めて

なんだけどね。

調理を開始して間もなく。ギャラリィとして見に来た生徒と、審判としてきた先生、さらには相手である倉敷でさえ、目の前の光景に驚きを隠せなかった。倉敷に至っては、あまりの驚き様に調理が全くといって良いほど進んでいなかった。

もはや静寂に包まれたこの中で、一人の生徒がポツリと言った。

「……すごい。本当に中学生？」

そう。連の動きには無駄がなく、その上綺麗に野菜を切ったりしている。それは、この学校の生徒たちにとって、いや、この学校に通う者たちにとって衝撃的なものだった。

その動きは、一流の料理人さえ凌ぐものだった。

ただ、驚いていない人たちがいた。それは、庄一たちと鈴木たちであつた。

「いつ見てもすごいな、連。」

「兄貴、流石っす！」

「……いつも大変だから。」

「何度見ても慣れないんだけど……。」

そして、庄一たちを囲んでいた生徒の一人が庄一たちに訊いてきた。

「ねぇ。あの子、本当に中学生？」

それには、代表して庄一が答えた。

「ああ、そうだ。……言つとくが、この学校には多分、連に勝てる奴は誰もいないぜ。あいつは、あそこの奴らの師匠みたいな立場だからな。」

そう言つて、庄一は鈴木たちを指差した。その当人たちは、そんなことに気付かずに連の応援をしていた。

そして、調理時間終了。連は作り終わった料理を見ながら「まだちょっと調味料の加減がなあ……。」とぼやき、倉敷は一応作り終わっていたので、審査員である先生の前に出した。

両者の料理を見た先生達は、感心の声を上げた。なぜなら、二人

の料理の見栄えがどれもプロの料理人に似ていたからだ。ちなみに、連は作った料理がちよっと不満だったが、顔に出さなかった。

まず、倉敷の料理。反応は当然のように「おいしい。」だった。それに対して倉敷は、お礼を一言述べた。

次は、連の料理。先生達はゆっくりとスープを飲み、しばらく口の中で吟味した。それが長かったのでギャラリーがざわつき始めたら、一人の先生が口を開いた。

「……………悔しいが、一人の料理人として私個人は、負けを認める。」

その言葉を聴いた庄一、圭、元、審査員の先生以外の人は全員、その先生の言葉に耳を疑った。

その先生を皮切りに、次々と他の先生達も同じことを言った。ただし、その言葉を聴きながらも、連の気持ちは不満だった。

先生達の言葉を聴いた倉敷は、

「私とこの子の勝負です！どっちが勝ったんですか！？」

と先生方に詰め寄った。しかし、それは単に認めたくない事実を突きつけられることになる。

「無論、あの子の勝ちだ。どうしてこんな子がこれほどまでの實力を持っているのか分からないが、他の先生達も同じ意見だろう。」

その言葉に鈴木たちは大喜びし、庄一と圭は最初から分かっていたという顔をし、元は「連。君は一度花音に調べてもらいたいよ。」と神妙な顔で呟いていた。

納得がいかない倉敷は、連がつくったスープを飲んだ。そして、

「……………私の負けだわ。」

と力なく言った。

それを聴いた鈴木たちは連を胴上げし始めた。そこに、庄一たちも混ざった。胴上げされてる本人は、「あ、ありが……………って、うわっ！！」と、うろたえていた。

胴上げが終わったら、倉敷さんが僕の所に来た。ちなみに、残っ

た僕と倉敷さんのスープは、ギャラリーの皆さんと先生達が飲んで
います。スープを飲んでる音がするたびに、「うめえ!」「倉敷さ
んもおいしいけど、あの中学生もすごいおいしい!」「っていうか、
あの子のスープ、ほったが落ちるぐらい美味しかったんだけど。」
という声がしている。おいしく飲んでくれるなら、作った甲斐があ
ったって思うよね。

「なんだあ、倉敷さんよお?」

近づいて来た倉敷さんに、鈴木さんがガンをとぼしたけど、無視さ
れた。倉敷さんと僕の距離がだいぶん近づいた時、不意に倉敷さんが
こう言った。

「あなたが、こいつらを更生させたの?」

「うーん。まあ、そうだと思いますよ?」

「・・・・・・ふむ。それならば納得がいくわね。君、名前は?」

「連です。池田連。」

「連か。いい名ね。では連。勝負の結果だが、私の負けよ。しかも、
完膚なきまでに自信を崩されたわ。」

「倉敷さんが料理上手だから、僕も本気で応じたんです。ありがと
うございました。」

そう言ってお辞儀をすると、倉敷さんが両腕をあたふたと動かしな
がら、

「い、いや!私にとって得るものが大きかったから頭をあげて!」
と言った。これを好機と見たのか、

「おーおー珍しいこともあるなあ。生徒会長であろう倉敷がこんな
に動揺してるなんて・・・・グフオっ!」

鈴木君が何か言おうとしたら、思いつきり倉敷さんに殴られた。

倉敷さんって、強いんだね。

その時、周囲にいた全員がそう思ったに違いない。

このままではマズイと思ったのか、倉敷さんがわざとらしく咳払
いをして話を戻した。

「と、ともかく!私の負けという事にしておくわ!次会う時はこの

学校に入学する時ね！」

その言葉に、鈴木君たちと庄一たちと僕は、一斉に首を横に振った。まさかここで揃うとは思わなかったのか、それとも否定されたのに驚いたのか、倉敷さんは僕に訊いてきた。

「え？入学する気はないのかしら？」

僕の代わりに、鈴木君が答えてくれた。

「そうだぜ。兄貴は中高とエスカレーター式の学校に通っているんだ。前に俺達の学校へ来てほしいと言ったら、きっぱりと断れちまったんだぜ。高校はもう決めてるからってよ。」

そういえばそんなことあったなあ、と懐かしんでいたら、倉敷さんは納得がいていない顔をしながら、

「……そう。なら強制はできないわね。勿体無い。でも、うちの学校へ遊びに来るのなら歓迎するわよ。この人達に誘われなくても、自分の意志で来ていいからね。」

と言ってくれた。その時の眼が凄く優しいかったので、僕は反射的に頷いた。

僕の返事をどう取ったのか分からないけど、満足そうに頷いた後、倉敷さんはこの調理場から出て行った。庄一たちを囲んでいた人たちも、倉敷さんを追って出て行った。

僕は、他の人達にばれないように出て行った。鈴木君たちに「ありがとう。」と言って。

帰り道。僕たち四人は歩きながら話していた。

「連、お前どれだけ腕を上げる気だよ。あの倉敷って人、あの学校で上位の料理人だって、まわりの奴が言ってたぞ。」

「本当だよ。毎度のことながら驚かされるよ。」

「……今度、鍋パーティでも、やる？」

「あのねえ。」

三人が言いたいことを言っていたので、僕は黙っていられなかった。「いい？言っとくけど、僕はあの人に勝ったと思ってないからね。」

最初、倉敷さんが僕の動きに目を奪われていたから、何とか勝てたようなものだからね？」

「そうはいつでもよ、お前の料理食べた先生が料理人として負けた、って言ってるんだぜ？そこはどうなんだよ？」

「そこはお世辞じゃないの？ほら、僕中学生だし。」

「……全員が言ったんだぞ？」

「それは、たまたま好みがあったんじゃないの？」

「もうやめよう、庄一、圭。これ以上は言っても無駄だよ。」

と、ため息交じりに言う元。どうしてそんなこと言ったのか分からなかったけど、たいしたことではなさそうだったので、僕は無視して別な話題を話すことにした。

「そういえばさ、もうすぐ冬休みだね。」

「そうだな。今年もいつも通りか？お前らは？」

「……いつもと同じ。家で宿題をやりながら、寝たり遊んだりする。」

「僕もそうかな？今年は姉さんとレミアさんもいるみたいだけど、特に変わるってことは無いだろうからね。そういう庄一は？」

「俺？俺は……そうだな。仲直りしねえとそれどころじゃないんだよな。」

「え？」

庄一の言葉に、僕と圭は庄一の顔を見た。今なんて言ったの？

庄一は僕達の顔を見てハツとした後、元に話を振った。

「元はどうするんだ？家族と旅行か？それともあいつらと何かするのか？」

「え！？ぼ、僕は……決まってるじゃないんだ。いつもは宿題をやっていたら、久実たちが遊びに来るんだけどね。今年は……どうなるか分からないんだよね。」

「ふーん。」

それから話がなくなって、僕達は自然に帰路に就いた。

家に帰った僕を出迎えてくれたのは、

「お、お帰りなさい、レン。」

「もうすぐ四時だぞ、連。どこほつつき歩いてたんだ。洗濯物はやつといたからな。」

私服の姉さんとレミリアさんだった。

僕は仕事が早く終わったのかと考え、だとしたら姉さんが買い物に行ってくればいいじゃないかと思ったけど、それを言うとなにされるか分からないので、

「ただいま。」

と言って、自室へ戻っていった。

戻ってから家用の財布を机から出して、下へ降りた。そしたら、「買い物へ行くんだろ？だったらこれもついでに買ってきてくれ。」と言って姉さんから渡されたメモを見たら、シャンプーなどの日用雑貨だった。しかも、どこの製品と、商品名が事細かく書いてあった。

僕はそれを見て、

「自分で買ってきたよ。」

と言って外に出ようとした。そしたら、姉さんが僕の肩に手を置いてから、

「ほら、私、有名人だろ？買い物なんていったら、それどころじゃなくなるだろ？」

と言ってきた。

「今まで気にした？そんなこと。それに、この町の人は気にしないよ。他の所は知らないけど。あ、あとさ。外に出たくないならネットの通販で買ったなら？そうすれば問題は無いでしょ？」

と僕が反論したら、

「そうね。でも頼んだわよ。」

無茶苦茶なことを言われた。鬼だね、全く。

もう何も言えなくなった僕は、ため息をつきながら、降参という意味で黙って外に出ようとした。そしたら姉さんが、

「あ、そうだ。私これからはここに暮らすから。それと、レミリアもね。だから、レミリアも一緒に買い物に行ったらどう？」

と言ってきた。へえ、姉さん達ここに暮らすんだ。

．．．はい？

なんだって？姉さん達がずっと暮らす？ちよつと待ってよ。ただでさえ両親で大変なのに、その上姉さん達も？

いやいやいや。きつと何かの聴き間違いだ。たぶん．．．．．そう！たぶん「まだしばらく」という意味があるに違いない！

と一人で納得していたら、姉さんが苛立ちを込めた声で、

「いい？これからは私たち家族とレミリアを含めた五人で暮らすからね？わ・か・っ・た？」

と言った。その頃レミリアさんは、顔を赤らめながら何度も頷いていた。

どうしよう、家出したくなったよ。

これから先が全く見えないこの状況で、僕はせめてもの気分転換に買い物に出かけた。

「はあ。」

スーパーへ向かう途中、僕は何度目か知らない溜息をついた。こうしてるから苦労しかないのかな？と、思ってしまった、またため息。どうしよう。これで過労死とかシャレにならないね。と思いながら、僕はスーパーを目指した。向かっている途中、体がだるい気がしたけど気にしなかった。どうせいつもの事だから。

スーパーに入って姉さんが指定してきたものと普段買っているものを買い（レシートは別にしてもらった）、店を出て、商店街へ向かった。商店街で買い物をしているときに、店の人達から「顔色が悪いが大丈夫か？」とか、「風邪でも引いたか？」とか心配された。そんなに顔色が悪いのかな？と、買い物をしているときに僕はそう思った。

買い物が終わりに家に戻って、僕はいつものように買ってきたものを冷蔵庫に入れ、姉さんに頼まれたものを渡し（ついでに徴収もした）、自室へ戻った。その時姉さんから、「お前、さっきより顔色が悪いが大丈夫か？」と言われ、その隣にいたレミリアさんから「レン、大丈夫？」と心配された。ていうか姉さん。さっきから顔色が悪いのを知ってたのなら言ってくれればいいじゃないか。

自室へ戻った時、僕は急に視界がかすんだような気がした。そして、体がふらついた。

え？もしかして……。と思う間もなく、僕は意識を失った。前にもあったね、確か。

「……………」
「……ん？」

気がついた時、僕は寝かされていた。しかも、見知らぬところに。天井しか見れなかったけど、ここがどこだか分かった。でも、

あれ？ここって、病院？でもどうして？

という疑問が頭に浮かんだんだけど、すぐさま氷解した。

そういえば倒れたんだっけ、僕。これで二度目だね。

疑問が氷解したので上半身を起こそうとしたら、体全体に倦怠感がのしかかっているみたいで、体を動かせなかった。

つまらないなあと思っていたら、病室に入ってきた人たちがいた。顔は何か動かせたので人が来た方へ動かしたら、姉さんとレミリアさんが居た。なぜか、二人とも泣きそうな顔をしていた。

「どうしたの？」

僕は二人に訊いた。声は普通に出せるみたいでよかったと思いながら。

そしたら、姉さんが答えてくれた。

「すまなかったな、連。お前に無茶を押し付け過ぎた。さっき医者から聴いたんだが、お前は過労と風邪が同時に来たんだと。しばらく

く安静にしときなさい、だそうだ。」

過労に風邪ね。風邪なら引くかもしれないけど、過労は中学生ではあまりないもんね。僕は二回目だけど（中学生の時のみの換算で）。

そしたら、今まで黙っていたレミリアさんがこう言った。

「すみません、レン。」

「なんで謝るの？」

「だって、レンの顔色が変わっていることが分からなかったんですよ。」

「それだったら僕自身も知らなかったし、他の人達も知らなかったんだから、別に気に病む事は無いよ。それに、体力がない僕が悪いんだから。」

「そんな事は無いですよ！連はいつも顔色一つ変えないで、家事と学校を両立してるじゃないですか！凄い事ですよ！」

そこまで言われるとは思わなかったの、僕は何も言わなかった。

まさかそこまで言うとは思わなかったのか、レミリアさんは顔を赤くしてから何も言わなくなった。

それを見た姉さんは若干呆れながら、

「連。今日はここで安静にしとくよ。明日には退院できるだろうけど、退院したからっていつもと同じことをしないでね。また倒れられても困るから。」

と言って、レミリアさんと一緒に帰っていった。どうも、明日に僕の着替えとかを持ってきてくれるみたいだった。

帰り際、「父さん達にはいっといたから。」と姉さんが言った。

それを聴いた僕は、入院費とかの支払どうしようかなあと考えていた。

連の見舞いから帰る時。

レミリアと渚は一緒に歩いていた。どちらも、表情は暗かった。

歩きながら、レミリアはポツリと言い始めた。

「すみません。私がこれからずっと住むって、言い出したせいで……」

その言葉を受けて、渚は首を横に振りながらこう言った。

「謝るな。私が連の体調を把握していなかったんだ。姉失格だな。

それに、どうやら心労もあったみたいだしな。」

「え？」

レミリアは、渚の言った意味が分からなかった。

「あいつは、私が突然帰って来た時やレミリアが家に住むことが決まった時、それに他にも原因があるらしいが、どうにもストレスと疲労がたまっていたみたいだ。それに気付かなかったのが悔しいな。」

その言葉に、二人は黙ったまま帰路に就いた。

十二月上旬のある土曜日(7) (後書き)

百話記念というものを全く考えていないので、普通に話を続けます。

八 十二月上旬のある日（とある月曜日）（前書き）

百話です。今回の話は・・・ちよつとしたおめでたい話です。

八 十二月上旬のある日（とある月曜日）

領収書

入院費、治療費の合計六万七千円也。

僕が入院した次の日。ま、すぐ退院したんだけどね。
で、すぐに領収書が来て、僕は仕方なく自分の財布で払おうとしたら、レミリアが「いつもお世話になってますので、これくらい払わせて下さい。」と言ってあっさり払ってしまった。

僕、一応払えるんだけどね……。

そう思いながら、僕はレミリアさんと姉さん達と一緒に帰った。

「すみません。迷惑でしたか？」

「うん。正直言うतो。」

「あう！」

「こら、連。代わりに払ってくれたのに、なんという態度だ。謝れ。」

「そうだね。ごめんね、レミリアさん。」

「い、いえ。私が勝手にやったものですから……。」

「さつきはありがとね。家に帰ったらその分返すよ。」

「え！？そ、そんな訳でやったわけではないのですが……。」

そんなことがあって、僕はレミリアさんに領収書分のお金を渡した。

次の日。

「ねえ庄一。」

「なんだ？」

学校へ行ってから、僕は庄一に話しかけた。

「どうやって体力つけたらいいのかな？」

「は？」

僕がそう訊いたら、庄一の目が点になった。どうも事情を把握していないのだろう。そしたら、圭がいつの間にか来て、説明した。

「……一昨日の夕方、過労と風邪で入院。原因は、過度の過労と心労。そのせいでレミリアさんと渚さんに泣きそうになられて自分の体力不足を痛感。だから。」

「圭。君はどこかで見ていたの？それとも、医者の人達から聞いたの？」

「……ここでは話せない。」

僕はこの時ほど、圭が怖いと思った事は無かった。

圭の説明を聴いて、庄一が言った。

「…分かったよ。いいぜ。俺の家に来いよ。今週末でいいな？」

「うん。」

「ただし、俺の部屋は覗くなよ。それだけ約束してくれればいいぜ。」

「

「それ位なら別にいいけど……」

そんなに部屋が汚いのだろうか？僕はすぐさまそう思った。

それを聴きつけたのか、元たちが近寄ってきた。

「どうかしたの、元？」

「ん？久実さんや堇さん、それと」

「……レイジニアさんと花音さん。なにか？」

僕達が、近寄ってきた五人に対してそう訊くと、それぞれが答えた。

「何やら楽しそうにお話をしていたので、何をお話しているのか気になりました。」

「なんか変な話をしていないか、確かめに来たのよ。」

「面白そうだから。」

「気になっただけよ。別に心配はしていないわ。」

「単純に話が気になっただけだよ。」

それぞれの答えを聴いて、僕はふと疑問に思った。

「あれ？元たちって確か職員室へ呼ばれていたんだよね？用事、終わったの？」

それに答えたのは、久実さんだった。

「もちろんよ。それに、もうすぐ一校時目が始まるから、早めに切り上げて戻ってきたのよ。」

大変だなあと思いながら、僕は気にせずこう言って、自分の席に座った。

「それだったら授業の準備しないとね。あと五分で始まるから。」僕の言葉に、全員が慌てて自分の席へ戻った。

昼休みになって。僕達三人はいつも通りの席の状態になった。

そして、話題は当然のように一昨日のことになった。

「なあ、入院したんだろ？その金はどうしたんだよ？」

「僕が払うつもりだったんだけどね、レミリアさんが代わりに払ってくれたんだよ。結局レミリアさんに払ってくれたお金を全部返したけどね。」

おかげで僕のお金がまたなくなっちゃったよ。と肩をすくめながら、僕は弁当を食べた。

そしたら、庄一たちが驚いていた。

「どうしたの？」

「いや、レミリアさん、まだいたんだな。」

「……それより、入院費やらを一人で払う普通の中学生に驚くところ。」

あ。そうだったね。

「でも、僕ほとんどもらったお金を使っていないからそれ位はあったよ？それに、自分用のお金は基本的に節約と称してほとんど使わなかったんだ。だから残っていたんだよ。」

「お前の場合、使う余裕がなかったただけだろ。」

「…そうだな。」

そう言いながら、僕達は弁当を食べていった。

った。理由を訊いたら、「野暮用で。」と、同時に返ってきた。
って、あれ？元だけってのもおかしくない？普段は久実さん達が
一緒にいるのに。

それについて考えて出た結論は、『たまにはそういう事もあるだ
ろう。』だった。ま、別に僕には関係ないだろうしね。

そう結論付けて、僕は家に帰ることにした。

八 十二月上旬のある日（とある月曜日）（後書き）

次回は、前書きの意味が分かるかもしれません。

十二月上旬のある日（とある月曜日）（2）

「ただいま。」

そう言つて、僕は玄関のドアを開けた。そしたら、見覚えのある靴がたたくさん置いてあつた。

僕はどうしてこんなに靴があるのか疑問に思いながら、真っ先に自室へ戻り、私服に着替えて明日の準備をした。

そして明日の準備をし終えたので、リビングに行こうとして部屋を出たら、

「あれ？ 庄一に圭？ どうしたの？ 二人とも制服のままだけど。」

庄一と圭が部屋の前にいた。

「……………」

「い、いやな？ ちょっとお前の家で遊びたくてそのまま来ちまつたんだ。で、お前の姉さん達がいたから、先にお邪魔したわけだ。」

僕が質問したら、圭は黙り庄一は焦った口調で答えた。

……………

何か違和感があるな。

なんとなくそう思ったので、僕はとりあえず訊くことにした。

「ねえ、何隠してるの？」

それに対して圭は黙り、庄一は言葉を詰まらせた。

うん。やっぱり隠してるね。

そう確信した僕は、とりあえずリビングに行こうとした。そして、

「な、なあ連！ 商店街いこうぜ！ 久し振りに駄菓子屋で何か買おうや！」

庄一が唐突に思いついたような声で提案してきた。

それにますます確信を持った僕は、普通にリビングに向かった。その時に庄一と圭から制止の声が聴こえたけど、気にしなかった。

リビングのドアを開けようとしたら、何故か開かなかった。

僕は、とりあえず持っていた鍵（家の中の鍵で閉まるところは全部持っている）で鍵を開け、リビングの中に入った。

そこで見た光景は、

「・・・・・・・・・・・・・・・・何してるの？」

「「「「「「そんな平然と入ってこないで！！」「」「」「」」」」」

おそらくパーティの準備を姉さんと両親、レミリアさんと元たちが頑張っていた。

よく誕生日会とかの内装を、みんなで作っている最中だったようだ。

そして、僕の後ろから来た庄一と圭を見て、姉さん達が文句を言っていた。

「お前ら、連の足止めしとけて言っただろ！」

「無理ですよ！いろんなところでボロが出てたじゃないですか！」

「誰よ、『俺達に任せとけ。』って言ってたのは。」

「：面目ない。」

「ていうか、もとはと言えば元が自宅に誘うの失敗したのが悪いんじゃないじゃねえか！」

「確かにそうだけど！「家の事で忙しい」って言われたらどうにもできないじゃん！」

「もうちょっと粘りなさいよ！」

「最後のバリケードとして鍵を閉めたのだけれど、意味なかったわね。」

「そうだな。良く考えれば、連が家の事を仕切っているからな。鍵を持っていて当然だったな。うっかりだ。はっはっは。」

「あの、それを早く言ってくれませんか？」

「あゝあ。ばれちゃった。」

「一応秘密だったのですけどね。」

さて、一通り文句や愚痴などが聴こえたところで、

「これは一体どういう事？」

僕はみんなに訊いた。

「誕生日？誰の？」

「誰って、お前だよ。お・ま・え！」

一通りみんなの話を聴いてなんとなく分かったけど、僕はまだ不思議だった。

「僕、みんなに誕生日言っただけ？」

「俺と圭は知ってたろうだが。」

「…（コクリ）。」

「私達は家族だから知ってたさ。」

「僕は庄一から聴いた。」

「私は元と庄一が話していたのを聴いたのよ。」

「私もです。」「私も。」「私もだわ。」

「私は渚さんから聴きました。」

そういえば庄一たちは知ってたっけ。僕はみんなの話を聴いて、そう思った。

「僕、思いっきり忘れてたんだけど。」

「そんな感じはしてたけどな。」

僕の言ったことに、庄一はため息交じりでそう言って、他の人達は頷いていた。

でも、そのことに不思議に思ったのか、圭が訊いてきた。

「…どうして忘れてた？」

え？どうしてって…

「家事で忙しかったし、基本的に両親帰ってくるの遅いし、家族の誕生日なんて覚えてないもん。そもそも、誕生日って祝ってもらえるものなの？」

そう僕が言ったら、姉さんと両親以外は驚いていた。

「マジで!？」

「うん。」

庄一の驚き様に若干引きながら、僕はそう答えた。そしたら、

「よし！とりあえずこっち来い！」

と言って、元たちと庄一と圭とレミリアさんが集まっていた。どうやら、何か話し合っているみたいだ。

その間に、僕は両親と姉さん達に近寄った。

「そういえば、私達の誕生日って祝ってくれたっけ？」

「祝ってもらわなかった気がするわ。」

「私もだな。撮影現場で誕生日のサプライズがあった時は本気で驚いた。その時に、他の所では祝うのが普通なんだと思ったわ。」

そうやって話していたところに、僕は混ざった。

「ねえ、父さん達は会社どうしたの？姉さん達は今日仕事あったんじゃないかったの？」

「ん？私達はとりあえず商談成立させて帰ってきたんだ。上司に無理言っただけ。」

「そうね。でも、結構早く帰らせてくれたわよね。」

「ふーん。で、姉さん達は？」

「私達は今日仕事無かったのよ。だから色々と準備してたの。」

「それにしても、今まで祝ってくれなかったのにこういう風の吹き回し？」

「そりゃあ、なあ？」

「普段頑張ってくれてる息子の誕生日だからよ。」

「ま、ぶっちゃけて言うなら、お前の友達の庄一から電話があつたな。『明日連の誕生日なんで誕生日会の会場として貸してくれませんか？』と言ってきたからなんだが。」

「姉さん。そこは嘘でも言わないところだと思ふよ。」

そんな話をしていたら、どうやらあっちの方での話し合いが終わったようで、代表として庄一が僕に向かって言ってきた。

「連。」

「なに？」

「お前、今日は何もするな！！」

「へ？」

突然の事で、僕はどう反応していいのか分からなかった。

どうして庄一に言われなきゃいけないんだろう？とさえ思った。

「どうして？」

「どうしてって、あんな……。」

僕が訊いたら、庄一がどう説明しようか考えていなかったのか、会話がとまった。その時に、

「い、いつもレンがやってくれているのですから、きよ、今日くらいはやらなくても罰は当たらないと思います！！」

と、レミリアさんが言った。その言葉を聴いた僕達は、ポカンとしてレミリアさんの方を向いた。すると、僕の肩を姉さんが叩きながら、

「ま、そういうこった。今日はゆっくりしていいわよ。なんせ、あなたの誕生日なんだから。」

と言った。うーん、と唸りながら考えてから、僕はこう言った。

「……そういえば、僕は皆の誕生日知らないや。それに、みんなの誕生日祝ってないから、気を遣ってくれなくて結構だよ。」

僕がそういうと、みんながずっこけた。何か変なこと言った？僕としては当たり前だったんだけど。

そんな表情をしていたのがまづかったのか、庄一がキレた。

「ああ！！もういい！とりあえずお前、どっかいて時間つぶして来い！！その内に俺らがやっておくから！！さっさと行け！！」

そう言いながら僕をリビングから出そうとしていたので、

「分かったよ！！今日はもう帰らないから！！じゃ！」

と、僕も半ばやけくそで言って自室へ戻り、自分の財布といつものバックを持って、家を出た。

今日は絶対に家に帰らないぞ、と思いながら。

十二月上旬のある日（とある月曜日）（2）（後書き）

はて？どこで雲息を怪しくさせてしまったのでしょうか？まあとりあえず・・・見守ってください。

十二月上旬のある日（とある月曜日）（3）

連が家を出て行った後。

「何やってんのよ、この馬鹿庄一!!」

ゴン!!

「いったあ!？何するんだ久実!!」

「あんたがあんなこと言ったから、連がどこか行っちゃったじゃない!？どうするの!？自分で今日はここへ帰らない、って言ってるのよ!」

「うなもん、ただの強がりだろ!!どうせ戻ってくる!」

「あんたのその根拠のない自信じゃ頼りないわよ!!」

「なんだと!」「なによ!？」

と二人で喧嘩していたり、

「すみません。私があんなこと言ったばかりに……………」

「別にレミリアのせいじゃないよ。あいつが意地を張ってるだけなんだ。それに、私の家は祝い事なんて皆無だったからね。そうだろう?」

「え?」

「正月くらいじゃなかったか?普通に祝ったことあるの。」

「あら、結婚記念日とかあったじゃないですか。……………」
でも、渚や連だけの祝い事なんてやらなかったわね。」

「そういうわけだ。私は仕事である程度祝ってもらったが、あいつは皆無。家事で褒められたことなんて一度もないだろうしな。」

「それで辛くなかったのでしょうか?」

「さあな。あいつのことだ、『自分でやらなきゃ大変なことになる』って認識で毎日やってたんだろうな。……………その責任は、私にもあるのだけだね。」

「渚さん……………」

と何やら結構なことを言っていたりしていた。ただ、それを冷静に見ている人達もいた。

「どうするの？」

「庄一と久美は喧嘩してるし。」

「あそこは何やら雰囲気が悪いし。」

「連君、戻ってくると思いますか？」

「……多分、戻ってこない。あいつはそういう奴。追っかけていこうとしたら、逃げられ、抵抗され、見失い、こっちが迷子になる。」

「最後のは何？」

「……連の方がこの町を詳しく知っている。前に俺がヒントらしきヒントを言わなかったのに、俺がいた場所を言い当てた。」

「すごい。ますます連君の事調べたいなあ。」

「そしたらどうするんです？」

「うーん。どうしたらいいんだろう？」

「……魔法を使えばいい。対象を池田連。範囲をこの町にして。」

「残念ながら、こういった私用では使えないのです。」

「……だったら、」

「何かあるの、圭？」

「……これを使う。」

そう言って、圭はパソコンを取り出した。かなりコンパクトサイズなので、持ち運びに便利。だから、圭はいつも持ち運んでいる。

圭がパソコンを起動させたとき、丁度両親が言った。

「みんな！とりあえず先に準備を終わらせよう！ちよつとしたハプニングがあったが、連がいない今のうちにやろう！……ま、ばれてるけどな。」

「そうよ！この場で喧嘩していても意味は無いわ！だったら何を優先にするか分かってる？さ、準備するわよ！！！」

そう言うってから、連の両親は飾り付けをやり始めた。それを見た渚とレミリアもやり始めた。

その光景を見た元たちは、

「僕達もやろうか？」

「そうですね。」「そうだね。」「そうね。」「∴俺はパソコンをやる。」

と言って、圭以外は作業をやり始めた。

そんな中で喧嘩していた庄一と久美は、自分が場違いだと知り何も言わず再開した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5693x/>

普通の人を送る日常

2011年12月1日16時46分発行